

# 御駒堂遺跡・堂の沢遺跡

—一般国道4号線築館バイパス関連遺跡調査報告書Ⅲ—

平成28年12月

宮城県教育委員会  
国土交通省東北地方整備局



# 御駒堂遺跡・堂の沢遺跡

—一般国道4号線築館バイパス関連遺跡調査報告書Ⅲ—



## 序 文

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災から 6 年が経ちました。復興は、世界と日本全国の協力をいただきながら着実に進んできました。今後ともその歩みを止めることなく進んでいかなければなりません。当教育委員会では、文化庁より示された【東日本大震災からの復旧・復興事業の円滑な推進と埋蔵文化財の両立を図るための埋蔵文化財の取り扱いに係る基本方針】に基づき、発掘調査基準の弾力的運用と発掘調査体制の強化を図っています。具体的には、試掘・確認調査成果などをもとにした事業者との的確な調整、工事による遺構への影響に応じた調査の簡略化、全国から自治法派遣による埋蔵文化財専門職員の応援を得ての調査体制を強化などにより、発掘調査期間の短縮を行っています。今後も、こうした取り組みを続けるとともに、見直しも行いながら調査の早期終了と復興事業の円滑な推進に向けて努力していきたいと考えています。

本書は、一般国道 4 号築館バイパス建設工事に先立って実施した栗原市御駒堂遺跡と堂の沢遺跡の発掘調査報告書です。その実施にあたっては、国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所と十分な協議・調整を重ねてきました。今回の発掘調査により得られた貴重な成果が、広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後になりますが、遺跡の保護に理解を示され、発掘調査に際して多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、地元住民の皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第です。

平成 28 年 12 月

宮城県教育委員会

教育長 高橋 仁



## 例　　言

1. 本書は宮城県教育委員会が行った国道4号線築館バイパス建設工事に伴う御駒堂遺跡と堂の沢遺跡の調査成果をまとめたもので、築館バイパス関連遺跡発掘調査報告書の3冊目にあたる。
2. 調査は宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育文化財保護課が行った。
3. 測量基準点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標X系による。使用した測量基準点は、以下の通りである。

### 【御駒堂遺跡】

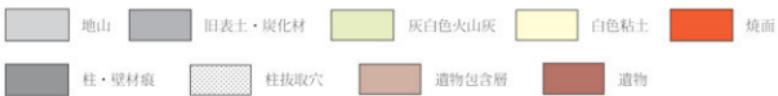
- ・2012年  
MST-12 : X = -139,671.266 Y = 17,925.761 MST-13 : X = -139,607.850 Y = 17,875.679
- ・2013・2014年  
MST-13 : X = -139,607.850 Y = 17,875.679 FTA-2 : X = -139,624.630 Y = 17,869.953  
FTA-3 : X = -139,509.721 Y = 17,830.045
- ・2015年  
TA-4 : X = -139,584.042 Y = 17,855.521 TA-5 : X = -139,508.497 Y = 17,838.283  
TA-6 : X = -139,441.153 Y = 17,854.381

### 【堂の沢遺跡】

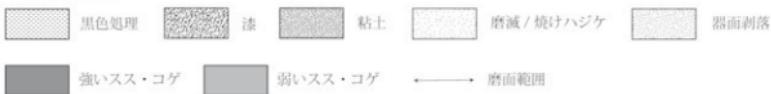
- FTA-9 : X = -139,253.582 Y = 17,651.995 FTA-10 : X = -139,082.989 Y = 17,503.533  
H21-501A : X = -138,981.041 Y = 17,656.799
- 4. 本書の第1図は、国土地理院発行1/25,000地形図「金成」「築館」を複製して使用した。
- 5. 本書の遺構番号は遺構の種別にかかわらず、発掘現場で付されたものをそのまま使用した。また、遺構は種別にしたがって、以下の記号を使用した。  
　　堀跡・柱列跡・土塁跡（S A）、掘立柱建物跡（S B）、溝跡（S D）、井戸跡（S E）、  
　　土坑（S K）、竪穴住居跡（S I）、その他の遺構・遺物包含層（S X）
- 6. 遺構平面図・断面図にはそれぞれスケールを付しているが、縮尺は原則として以下の通りである。  
　　遺跡周辺地形図：1/50,000　調査区位置図：1/10,000、1/2,500、1/1,000  
　　遺構配置図：1/300・1/100（御駒堂遺跡）、1/500（堂の沢遺跡）  
　　遺構ごとの平面図・断面図 1/60（御駒堂遺跡）
- 7. 本文中で使用した「灰白色火山灰」は、915年に降下した十和田a火山灰のことである。
- 8. 本書における土色の記述については、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄 1973）を使用した。
- 9. 遺物図版にはそれぞれスケールを付しているが、縮尺は土器・陶磁器・土製品・石製品が1/3、  
　　鉄製品が1/2、石器・古銭・鉄釘が2/3である。
- 10. 土器の説明では、製作においてロクロを使用しているものを「ロクロ調整」、ロクロを使用していないものを「非ロクロ調整」と表記する。

11. 遺構図や遺物図で示した塗りは、以下の特徴を示している。

【遺構平面図・断面図】



【遺物実測図】



12. 遺物の写真撮影は、株式会社アートプロフィールに委託して行った。

13. 発掘調査および整理、報告書の作成に際し、以下の方々と関係機関から指導や助言をいただいた（五十音順、敬称略、所属は発掘調査時）。

安達訓仁（栗原市教育委員会）、宇部則保（八戸市是川縄文館）、大場亜弥（栗原市教育委員会）、佐川正敏（東北学院大学）、千葉長彦（栗原市教育委員会）、松本太郎（市川市考古博物館）、柳田俊雄（東北大大学）、吉田桂（加美町教育委員会）、吉野武（宮城県多賀城跡調査研究所）  
栗原市教育委員会、宮城県多賀城跡調査研究所

14. 本書の整理や遺構・遺物のトレースは、村田晃一・小野章太郎・中島敦子・古川史佳が行った。
15. 断面図や遺物実測図は、原図をスキャナーでコンピューター取り込み、それを下図として（株）Adobe 製の IllustratorCS6.0 でトレースした。
16. 本書の執筆・編集は調査担当者との協議のち、第三章 C-1 と D-1 を小野章太郎が、他は村田晃一が担当した。
17. 御駒堂遺跡の調査成果は、平成 26 年度宮城県遺跡調査成果報告会や第 28 回東北日本の旧石器文化を語る会でその内容の一端を報告しているが、これと本書の記載内容が異なる場合は、本書が優先する。
18. 火山灰の分析は株式会社火山灰考古学研究所に委託し、その成果は附章に収録した。
19. 発掘調査の記録や整理した資料、出土遺物は宮城県教育委員会が保管している。

# 目 次

第Ⅰ章 調査にいたる経緯	
A. はじめに	1
B. 調査にいたる経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の概要と歴史的環境	
A. 遺跡の位置と地理的環境	2
B. 歴史的環境	2
C. 御駒堂遺跡の調査成果	9
第Ⅲ章 御駒堂遺跡	13
調査要項	14
A. 調査の方法と経過	
1. 調査の方法	15
2. 調査の経過	15
B. 基本層序	19
C. 発見した遺構と遺物	19
1. 旧石器時代から縄文時代	
(1) 調査の方法と経過	21
(2) 基本層序	21
(3) 発見した遺構と遺物	23
(4) 石器集中地点	28
(5) その他の出土石器	33
2. 縄文時代以降	53
3. 縄文時代	
(1) 陥し穴	53
(2) 遺物包含層	62
4. 飛鳥～平安時代	
(1) 積穴住居跡	64
(2) 掘立柱建物跡	112
5. 江戸時代以降	
(1) 掘立柱建物跡	113
(2) 井戸跡	116
(3) 墓跡	119
(4) その他の遺構	121

## D. 総括

1. 旧石器時代から縄文時代	
(1) 遺跡内における石器製作活動	125
(2) 出土石器群の時期	126
(3) 遺跡周辺の旧石器時代石器群	126
(4)まとめ	128
2. 飛鳥～平安時代	
(1) 土器と竪穴住居跡の年代	130
(2) 竪穴住居跡	135
(3) カマド	135
3. 江戸時代以降	137
4. 飛鳥～平安時代の御駒堂遺跡	
(1) 土器	137
(2) 竪穴住居跡の検討	143
(3) カマドの検討	147
(4) 集落の変遷	151
(5) 8世紀前葉の移民集落とその意義	152
(6) 伊治城と周辺集落	154
第IV章 堂の沢遺跡	161
調査要項	162
A. 調査の方法と経過	163
B. 基本層序	166
C. 発見した遺構と遺物	166
第V章 まとめ	168
註	169
引用・参考文献	171
附章 栗原市御駒堂遺跡における火山灰分析（株式会社 火山灰考古学研究所）	177

## 挿 図 目 次

図版 1	遺跡の位置	2
図版 2	御駒堂遺跡、堂の沢遺跡の位置と周辺の古代道路	5
図版 3	御駒堂遺跡と堂の沢遺跡	8
図版 4	移民の住居と土器	10
図版 5	御駒堂・堂の沢・山ノ上遺跡の調査地点	11
図版 6	築館・バイパス関連調査区の位置	16
図版 7	調査区全景と調査風景	17
図版 8	基本順序	20
図版 9	基本層序模式図・断面写真、火山灰分析作業風景	22
図版 10	発掘調査区平面図	24
図版 11	発掘調査区断面図・断面写真	25
図版 12	旧石器調査トレンドの土層断面模式図	25
図版 13	石器出土状況（1）	26
図版 14	石器出土状況（2）	27
図版 15	石器集中地点出土石器実測図	30
図版 16	石器集中地出土石器写真	31
図版 17	調査風景	31
図版 18	その他出土石器実測図	33
図版 19	その他出土石器写真	33
図版 20	発掘調査区全景、石器出土状況	36
図版 21	石器出土状況、発掘調査風景	37
図版 22	石器出土状況	38
図版 23	遺構配置図（1）	39
図版 24	遺構配置図（2）	40
図版 25	遺構配置図（3）	41
図版 26	遺構配置図（4）	42
図版 27	調査区全景（1）	43
図版 28	調査区全景（2）	44
図版 29	C区の検出遺構（1）	45
図版 30	C区の検出遺構（2）	46
図版 31	C区の検出遺構（3）	47
図版 32	C区の検出遺構（4）	48
図版 33	C区の検出遺構（5）	49
図版 34	C区の検出遺構（6）	50
図版 35	C区の検出遺構（7）	51
図版 36	C区の検出遺構（8）	52
図版 37	陥し穴A類（1）	54
図版 38	陥し穴A類（2）	55
図版 39	陥し穴A類（3）	56
図版 40	陥し穴A類（4）	57
図版 41	陥し穴A類（5）	58
図版 42	陥し穴B類	59
図版 43	SK72 土坑出土遺物	60
図版 44	陥し穴C類	61
図版 45	SX16 遺物包含層	62
図版 46	SX16 遺物包含層出土遺物	63
図版 47	SI01 住居跡（1）	65
図版 48	SI01 住居跡（2）	66
図版 49	SI01 住居跡（3）	67
図版 50	SI01 住居跡出土遺物（1）	68
図版 51	SI01 住居跡出土遺物（2）	69
図版 52	SI01 住居跡出土遺物（3）	70
図版 53	SI01 住居跡出土遺物（4）	71
図版 54	SI02 住居跡（1）	73
図版 55	SI02 住居跡（2）	74
図版 56	SI02 住居跡出土遺物	75
図版 57	SI03 住居跡（1）	77
図版 58	SI03 住居跡（2）	78
図版 59	SI03 住居跡（3）	79
図版 60	SI03 住居跡出土遺物（1）	80
図版 61	SI03 住居跡出土遺物（2）	81
図版 62	SI06 住居跡（1）	83
図版 63	SI06 住居跡（2）	84
図版 64	SI06 住居跡（3）	85
図版 65	SI06 住居跡出土遺物（1）	86
図版 66	SI06 住居跡出土遺物（2）	87
図版 67	SI06 住居跡出土遺物（3）	88
図版 68	SI07 住居跡出土遺物	89
図版 69	SI07 住居跡（1）	90
図版 70	SI07 住居跡（2）	91
図版 71	SI11 住居跡出土遺物	92
図版 72	SI11 住居跡	93
図版 73	SI15 住居跡（1）	94
図版 74	SI15 住居跡（2）	95
図版 75	SI15 住居跡出土遺物	96
図版 76	SI50 住居跡（1）	97
図版 77	SI50 住居跡（2）	98
図版 78	SI50 住居跡出土遺物	99
図版 79	SI51 住居跡（1）	100
図版 80	SI51 住居跡（2）	101
図版 81	SI51 住居跡（3）	102
図版 82	SI51 住居跡（4）	103
図版 83	SI51 住居跡出土遺物（1）	104
図版 84	SI51 住居跡出土遺物（2）	105
図版 85	SI51 住居跡出土遺物（3）	106
図版 86	SI51 住居跡出土遺物（4）	107
図版 87	SI51 住居跡出土遺物（5）	108
図版 88	SI51 住居跡出土遺物（6）	109
図版 89	SI51 住居跡出土遺物（7）	110
図版 90	SB18・37 建物跡	112
図版 91	SB08・22 建物跡	114
図版 92	SB19・20・21 建物跡	115
図版 93	SE05・17・71 井戸跡	117
図版 94	SE75・76・99 井戸跡	118
図版 95	SE75 井戸跡出土遺物	119
図版 96	ST35・36・39 葬跡	120
図版 97	ST35・36 葬跡出土遺物	121
図版 98	ST39・44 葬跡出土遺物	122
図版 99	その他の遺構と第1層出土遺物	123
図版 100	SA13 土塁跡とSD14 空堀跡	124
図版 101	周辺遺跡出土の旧石器	129
図版 102	A群土器	131

図版 103	A群土器の類例	132	図版 114	カマドの分類と所属時期	148
図版 104	B群土器	133	図版 115	伊治城周辺集落跡から出土したロクロ土器と文字資料	152
図版 105	B群土器の類例	134	図版 116	8世紀前葉の移民集落	153
図版 106	バイパス調査区のカマドと竪穴住居跡	136	図版 117	8世紀前半の防衛ラインと御駒堂遺跡	153
図版 107	御駒堂遺跡出土土器の変遷（1）－I群	139	図版 118	栗原・桃生郡域で出土した会津型長財譲	155
図版 108	御駒堂遺跡出土土器の変遷（2）－II群	140	図版 119	伊治城跡と外部北東部で密集する竪穴住居跡	157
図版 109	成形段階の台を残す関東系土器師環	141	図版 120	堂の沢遺跡の範囲とトレーニングの位置	163
図版 110	御駒堂遺跡出土土器の変遷（3）－III群	142	図版 121	遠景・トレーニング・基本層序（1）	164
図版 111	駒堂遺跡出土土器の変遷（4）－IV・V群	143	図版 122	遠景・トレーニング・基本層序（2）	165
図版 112	竪穴住居の変遷（1）－I・II群	146	図版 123	検出遺構	167
図版 113	竪穴住居の変遷（2）－III～V群土器期	147			

## 表 目 次

表1	御駒堂遺跡年度別調査面積と主な発見遺構	12	表10	墓跡属性表	122
表2	御駒堂・堂の沢・山ノ上遺跡の調査成果	12	表11	御駒堂遺跡周辺の旧石器時代遺跡一覧	127
表3	石器集中地点の出土石器組成表	28	表12	土器群の併行関係と竪穴住居の年代	138
表4	水流跡で回収した碎片	28	表13	御駒堂遺跡の竪穴住居跡属性表	144
表5-1	出土石器属性表（1）	34	表14	伊治城と周辺集落における竪穴住居の消長	155
表5-2	出土石器属性表（2）	35	表15	伊治城と周辺集落における竪穴住居跡の時期別構成	158
表6	陥し穴属性表	60	表16	伊治城周辺集落の時期別住居数と火災住居	158
表7	竪穴住居跡属性表	111	表17	8世紀中葉から後半の竪穴住居と出土遺物	159
表8	掘立柱建物跡属性表	116	表18	栗原郡に関する古代史年表	160
表9	井戸跡属性表	119			

## 第Ⅰ章 調査にいたる経緯

### A. はじめに

本書は、築館バイパス建設工事にともなう栗原市御駒堂遺跡・堂の沢遺跡の発掘調査報告書である。調査は御駒堂遺跡が平成 21・22・24～27 年度、堂の沢遺跡は平成 25 年度に実施した。宮城県教育委員会が発行する築館バイパス建設工事関連遺跡調査報告書の 3 冊目にあたる。

### B. 調査にいたる経緯

築館バイパス建設工事事業は、栗原市築館の市街地を縦断する国道 4 号線の交通混雑緩和と市街地周辺部の活性化等の理由により、築館赤坂を起点に市街地を東側に迂回して旧志波姫町を通り、築館城生野に至る総延長約 7 km、路線幅 50 m、両側 4 車線の一般国道 4 号築館バイパスの建設工事が立案され、昭和 56 年に都市計画決定された。

平成 14 年 6 月、宮城県教育委員会は国土交通省東北地方建設局仙台河川国道事務所に対し、計画地内に周知の遺跡が存在することと未発見の遺跡が存在する可能性があることから、遺跡の取り扱いについて協議を申し入れ、同年 9 月に遺跡分布調査と試掘調査を実施した。その結果、古代の竪穴住居跡や土器が発見された下萩沢遺跡、中世以降とみられる塚が確認された源光遺跡、古代の土器が散布していた大天馬遺跡と堂の沢遺跡を遺跡台帳に新規登録した。このことを受けて、事業主体の国土交通省東北地方建設局と保存協議を行ったが、計画変更で保存可能な源光遺跡の塚を除いて路線の変更は困難であることから、建設工事前に記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

計画地内の確認調査と本発掘調査は、平成 15・16・19 年に高田山遺跡、源光遺跡、原田遺跡、下萩沢遺跡、平成 21・23 年には大天馬遺跡で順次実施している。御駒堂遺跡は、平成 21・22・24・25 年に国道 398 号線より南の遺跡隣接地を確認調査したところ、一部の範囲が国道の南側まで延びることを確認したため、その部分の本発掘調査を行った。こうした結果、築館バイパスは平成 19 年に赤坂から下萩沢に至る 1.2 km で供用が開始され、さらに平成 25 年には国道 398 号線までの区間 1.3 km が延伸されている。

それより北については、御駒堂遺跡が平成 26・27 年に確認調査と本発掘調査を行って終了している。また、堂の沢遺跡は平成 25 年に確認調査を行い、南側の高い部分で近世以降の水田跡や溝跡などを検出し、北側の低い部分では湿地土壤の中に灰白色火山灰（註 1）が厚く堆積している状況を確認したため、本発掘調査の必要はないとの判断した。さらに、今回の成果より遺跡の範囲は東へ縮小すると考えられたため、市教育委員会とはかって遺跡の範囲変更を行うこととした。その結果、築館バイパスは平成 27 年中に堂の沢遺跡の北 0.7 km まで延伸され、栗原中央大橋に至る市道と接続した。

## 第II章 遺跡の概要と歴史的環境

### A. 遺跡の位置と地理的環境



図版1 遺跡の位置

御駒堂遺跡は、栗原市志波姫堀口字御駒堂に所在する(図版1・2)。市の中心部は、栗原郡で最も大きな町であった旧築館町で、遺跡は市街中心部から北東に約2km離れる。周辺の地形は、奥羽山脈から樹枝状に派生して東に延びる陸前丘陵の一部(築館丘陵)とその麓の迫川低地、両者に挟まれて北東に延びる河岸段丘で構成される。遺跡は迫川低地を望む上位段丘に立地しており、両者の比高差は10~20mである。

御駒堂遺跡の範囲は東西約1,500m、南北約400mと東西に細長く、築館バイパスは西側を南北に縦断する(図版3・5)。発掘調査前の状況は、国道398号線の南が水田で、北は国道に面する部分が宅地となる他は畑地が多く、北縁部のみ山林となっていた。それぞれの標高は水田が30

m前後、畑地や宅地が32m前後、山林が36mほどである。

堂の沢遺跡は、栗原市志波姫堀口字堂の沢に所在する(図版1・2)。遺跡は下位段丘に立地しており、御駒堂遺跡より10mほど低い。築館バイパスは遺跡の西端を南北に縦断する(図版3・5)。発掘調査前の状況は、東へ延びる自然堤防中央部が宅地や畑地で、その縁となる三方は低地へ傾斜しており、水田として利用されていた。標高は21m前後で、周囲の低地より1mほど高い。

### B. 歴史的環境

御駒堂遺跡や堂の沢遺跡で発見された遺構や遺物は、旧石器時代、縄文時代、飛鳥・奈良・平安時代、江戸時代以降のものがある。ここでは、遺跡周辺におけるこれらの時代の歴史的環境について、発掘調査成果を中心に述べる(図版2)。その際、栗原郡の範囲は、現在の栗原市から高清水・瀬峰の両町を除く、築館・一迫・鶯沢・志波姫・若柳・金成・栗駒町および花山村とする(いずれも旧町村名)。また、文中に何度も出てくる教育委員会は教委、多賀城跡調査研究所は多賀研と略することとする。

### 【旧石器時代】

後期旧石器時代の遺跡としては、伊治城跡や淀遺跡（宮城県教委 2001）などがあげられる。前者は、72m<sup>2</sup>の範囲から石器 406 点が出土したこと、全体の 97% が剥片・碎片であること、接合資料が多く認められることから、石器製作の場であったと考えられている（築館町教委 2004）。

### 【縄文・弥生時代】

嘉倉貝塚では縄文時代の住居跡 163 軒、掘立柱建物跡 46 棟、貯蔵穴 119 基、土壙墓 45 基など多数の遺構が確認された。なかでも、前期後葉～中期初頭には半径 32 m の広場を中心に環状集落が形成されたほか、晚期後葉～弥生前期の墓域が確認されるなど大きな成果が上がっている（宮城県教委 2003b、築館町教委 2003）。中期末の集落跡としては鰐沢遺跡や坂戸遺跡があげられ、ともに、同時期の宮城県北部～岩手県南部を中心に分布する斜位土器埋設複式炉をもつ住居跡が確認された（築館町教委 2005、迫町教委 2005）。弥生時代の遺跡は縄文時代に較べて急減するが、宇南遺跡で後期の土器棺墓が発見されている（宮城県教委 1979a）。

### 【古墳時代前期・中期】

前期は、伊治城跡から方形周溝墓や円墳もしくは円形の低墳丘墓とみられる円形周溝、鶴ノ丸遺跡や宇南遺跡では方形周溝墓とともに住居跡が確認された（築館町教委 1994・1995、宮城県教委 1979・1980h）。とくに、伊治城跡では墓域から離れた遺跡北端で、複数の郭から構成される豪族居館が発見された。同時期の居館としては最北の例であり、土師器とともに続縄文土器（北大 I 式）や黒曜石製石器が出土したことから、古墳文化と続縄文文化との交流を示すものと評価されている（高橋 2015）。

また、近年調査された入の沢遺跡は伊治城の南隣にあり、周囲から隔絶した標高 49 m の丘陵頂部を堀と大溝で囲み、その内部に住居群がつくられるという、高い防御性を備えていた。住居跡からは古墳に副葬される銅鏡や鉄製品、装身具、水銀朱などがまとまって出土するものがある一方、焼失したものも多く認められ、古墳文化と続縄文文化との交流と軋轢を示すものとして注目を集めている（村上 2015 a、高橋 2015、東北学院大学アジア流域文化研究所 2015 など）。さらに、近接する大仏古墳群の年代観の見直しや入の沢とほぼ同時期とみられる伊治城の豪族居館との関係など、当時、倭国の北縁を形成した地域の様相を見直す契機ともなった。

中期は、古墳が築館留場遺跡出土の円筒埴輪片として紹介された資料（藤沢 2000）、集落跡としては長者原遺跡で住居跡 3 軒以上、須恵器や石製模造品が出土した例（栗駒町教委 1995）が挙げられるが、集落数は少なく、明確な古墳も確認できないなど、前期に較べて低調である（註 2）。

### 【古墳時代後期～奈良時代前半】

6世紀代の古墳や集落跡の様相は不明である。この時期の古墳は、仙台平野以北で小規模な円墳が散見される程度になることから、栗原郡域の古墳の築造や集落形成はあったとしてもきわめて低調と考えられる。一方、より南に位置する加美町米泉館跡（宮崎町教委 1996）や仙台市大野田古墳群（仙台市教委 2011）では、古墳文化と続縄文文化が折衷した墓が確認されており、両文化の交流は継続するとともに後者の南下傾向が認められる（今泉・藤沢 2006）。こうしたあり方は、古墳が活発に

築造された阿武隈川以南の地とは明確に異なり、6世紀代における畿内政権との政治的関係の有無が、国造制の施行域と蝦夷の居住域を分ける根拠となった可能性が指摘された（今泉 1992）（註3）。

7世紀は前半の集落跡が泉谷館跡（瀬峰町教委 1987）で、末～8世紀初頭の集落跡が本遺跡の自動車道調査区第1群土器段階（宮城県教委 1982）で確認されているが、数は少ない。泉谷館では、在地型カマド（註4）や岩手県南部様式と共に通する在地土師器がある一方、筑波山周辺の茨城・栃木・千葉に類例が求められる関東系土師器（佐藤 2007）や関東型カマドも認められた。

本遺跡の集落跡は、3～4軒の住居で構成された小群が互いに距離を置いて分布する散村状の景観を呈したとみられ、カマドは在地型である。岩手県南部様式と類似する在地土師器に関東系土師器食器が伴っており、その出自は北武藏型暗文环や北武藏型环に代表される新型土師器に求められる（鶴間 2004）。また、両者の関係は、土師器食器のみであることから、限定的な交流であったと考えられる。

8世紀前葉になると遺跡数は増加し、それらは遺構や土師器の様相から以下のように分けられる（註5）。

①：カマド・土師器とも在地型で構成される集落

…木戸遺跡（宮城県教委 1980f）、佐内屋敷遺跡第I a・b群土器段階（宮城県教委 1983）（註6）、原田遺跡 I A群土器段階（宮城県教委 2009a）、観音沢遺跡（宮城県教委 1980j）、五輪C遺跡（宮城県教委 1979b）など

②：関東型カマドを持つ竪穴住居と関東系土師器が主体となる集落

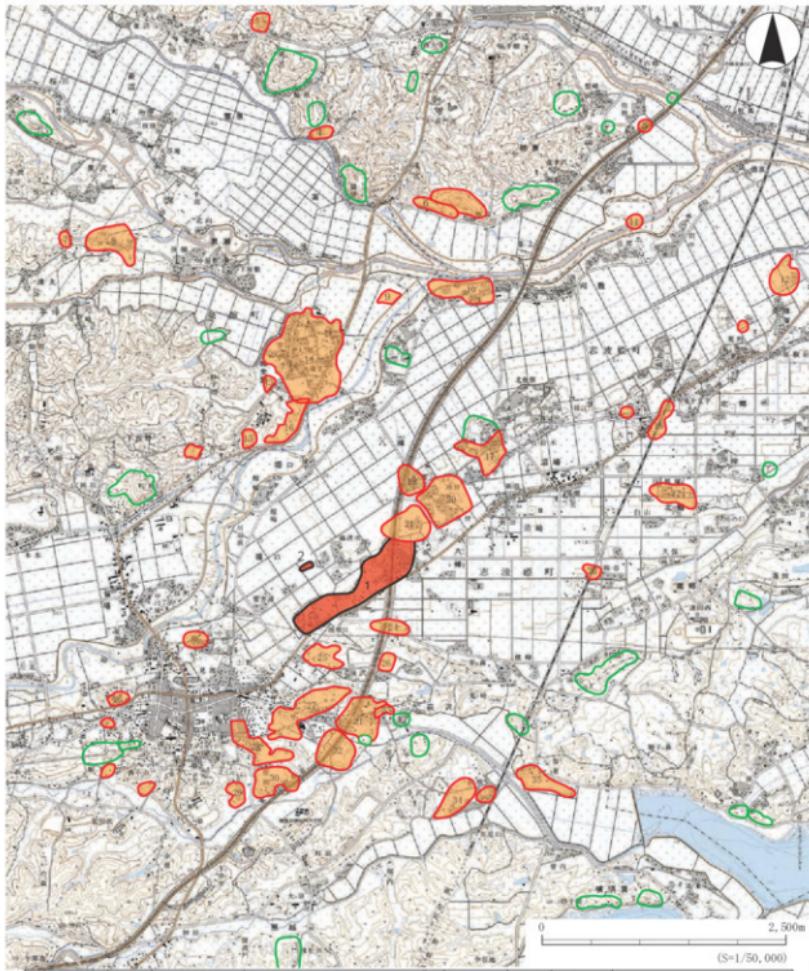
…本遺跡第2群土器段階（宮城県教委 1982）、山ノ上遺跡（宮城県教委 1980g）、長根遺跡（瀬峰町教委 2003）など

③：掘立柱建物と竪穴住居で構成され、関東系土師器が出土する集落。建物は3間以下が多い

…源光遺跡（栗原市教委 2015a）、下萩沢遺跡（栗原市教委 2016）

①類の土師器や住居構成は、本遺跡第1群土器段階と同じで一般集落と考えられる。②類や③類は、現在のところ栗原郡周辺にのみ認められる。②類は上器・カマドとも関東型が主体であること、関東系土師器に南武藏型が伴うこと、③類は同時期の東北南部に例がないものであることから、大化前代まで南との交流がなかった蝦夷の地に対する律令支配の準備として、坂東からの直接的な移住が行われたと考えられる（村田 2009）。特に、本遺跡は東西 1,500 m、南北 400 m の全体に②類集落が形成されることから、多くの人々が移配されたと考えられる。一方、③類は②類集落を統轄した施設とも考えられるが、モデルは何か、②類との共時性や関係性など、検討すべき課題が多い。

7・8世紀代の墳墓は、古墳と横穴墓がある。鳥矢ヶ崎古墳群は、33基の小円墳からなり、そのうち2基の調査が行われた。築造年代は8世紀代とみられ、1号墳の石室が横穴式石室の退化形態であること、2号墳の主体部は、東北北部の「末期古墳」にみられる木棺直葬墳とのかかわりで考えられることから、被葬者である首長層と北上川中流域以北とのつながりが指摘されている（藤沢 2000）。また、2号墳からは副葬品として蔚手刀や銅製鈎帶金具一式などが出土した。鈎帶金具は朝貢によってもたらされており、これら畿内政権との結びつきを示す文物は、地域支配の象徴として利用されたと考えられる（八木 1999）。一方、栗原郡周辺の横穴墓は、造営の最盛期が7世紀末から



地番	遺跡名	立地	種別	時代	地番	遺跡名	立地	種別	時代
1	御陵堂遺跡	段丘	集落	國文・弥生・古墳後・奈良・平安・近世	19	前ノ丸跡	段丘	集落・城館	國文・弥生・古墳前・古代・中世・近世
2	望天小道跡	段丘	集落	古代	20	御門跡	段丘	集落	奈良・平安
3	東御寺跡	丘陵	寺院	平安	21	宇南遺跡	段丘	集落・城館	國文・弥生・古墳前・古代・中世・近世
4	大正櫛穴墓群	丘陵	櫛穴墓	古墳後・奈良	22	福原道跡	段丘	道	奈良
5	佐野道跡	丘陵	集落	國文・弥生・奈良・平安	23	舟形石道跡	段丘	集落	國文・奈良・平安
6	御施櫛穴墓群	丘陵	櫛穴墓	古墳後・奈良	24	日ノ上廻跡	段丘	集落	國文・奈良
7	泉武人道跡	丘陵	集落	奈良・平安	25	人太馬道跡	段丘	集落	奈良・平安
8	長者原道路	丘陵	集落	古墳中・奈良・平安	26	後川道跡	段丘	集落	奈良・平安
9	城下道路	自然堤防	集落	奈良・中世・近世	27	下秋川道跡	丘陵	集落	國文・弥生・奈良・平安
10	町敷道跡	自然堤防	散布地	國文・古代	28	原光道跡	丘陵	集落	國文・奈良・平安
11	町敷道跡	自然堤防	散布地	國文・古代	29	高尾山道跡	丘陵	散布地	國文・古代
12	櫛穴道跡	段丘	集落	弥生・奈良・平安	30	羽根道跡	丘陵	集落	國文・奈良・平安
13	其の内敷道跡	段丘	散布地	國文・古代	31	下平道跡	丘陵	集落	國文・奈良・平安
14	伊の頭跡	段丘	集落・墓	旧石器・古墳前・後・奈良・平安	32	内沟内敷道跡	丘陵	集落	國文・弥生・奈良・平安
15	人吉古墳群	丘陵	墓	古墳後・奈良	33	櫛穴道跡	丘陵	集落	國文・奈良・平安・中世
16	人吉平道跡	丘陵	古墳・櫛穴墓・集落	古墳後・後・奈良・平安・中世・近世	34	御馬田道跡	丘陵・斜面	散布地	國文・古墳・古代
17	淀跡跡	段丘	集落	旧石器・古墳・奈良・平安・中世	35	昌谷貝塚	丘陵	集落・貝塚	國文・弥生・奈良・平安
18	大門跡跡	段丘	集落	國文・奈良・平安・中世	36	菅原道跡	段丘	散布地	古代

図版2 御駒堂遺跡、堂の沢遺跡の位置と周辺の古代遺跡

8世紀前半で、7世紀後半以降に大崎平野以南から2次的に受容された（古川 1996）。このため、栗原周辺の墳墓は北上川中流域以北の「末期古墳」に類する古墳と、大崎平野以南の系譜をひく横穴墓が近接して混在し、時期的に併行して築造された（藤沢 前掲）。

以上のことから、古墳時代後期から奈良時代前半における栗原郡周辺の人々（＝蝦夷）は、墳墓の副葬品や横穴墓から、畿内政権との結びつきや大崎以南の東北南部との交流が一定程度認められるものの、土師器や須恵器、古墳からみて、大崎以南の地域に較べて畿内政権との関係が希薄である一方、北上川中流域以北との結びつきが強かったと考えられる。このため、本地域における建郡を前提とした坂東からの移配は、黒川以北十郡域と異なる方法が採られたが、②・③類集落（＝移民集落）は8世紀中葉になると急減し、城柵が設置されたのは、御駒堂遺跡への大量移配から半世紀近く経った後のこととなった（註7）。

#### 【奈良時代後半】

神護景雲元年（767）に伊治城が造営され、同年もしくは769年にはそれを母体として栗原郡が置かれた。建郡にあたっては、坂東や陸奥南部から強制移住あるいは募集による自主移住が人単位で行われた。移民は柵戸と呼ばれ、城柵の造営・維持、土地の開発やムラの経営にあたり、公民として諸負担を課せられた（註8）。

伊治城は、政府一内郭（曹司域）一外郭からなる三重構造城柵で、全体の2/3を占める外郭北部は多数の竪穴住居が犇めく住居域であった（村田 2004・2016）。また、栗原郡全体でも伊治城創建を前後して集落数が増えており、多くの移民があったと考えられる。その一端が、伊治城跡 SI04 住居跡（多賀研 1978）、SK18 土坑（多賀研 1979）、同表採資料（栗原市 2015b）、原田遺跡 SI31 住居跡（宮城県教委 2009a）から出土した会津型長胴甕（山中 2003）や栗原郡に存在した会津郷で、移民募集政策によって陸奥国会津郡から栗原郡へまとまった移住が行われたことを具体的に示している（註9）。

8世紀後半の集落は、御駒堂・佐内屋敷・原田・下萩沢・長者原・大門・有賀峯・佐野のほか、経ヶ崎・大境山・桃生田前遺跡などで認められ、遺跡数が急増する。集落は①類が主体で基本的な景観は前代と同じであるが、住居は小形化の傾向が進み、それに伴うように住居の壁外に燃焼部が突出し、その先に長い煙道が付くカマドが増える（村田 2004）。原田遺跡や下萩沢遺跡では、掘立柱建物と竪穴住居で構成される集落が認められ、後者では建物が直列に並んで配置に計画性が窺える。また、本段階の集落は火災住居が多く認められ、原田・下萩沢の両遺跡では、伊治公皆麻呂の乱で焼き討ちされた可能性が指摘されている（宮城県教委 2009a・b）。

関東系土師器は姿を消し（註10）、多くの集落で須恵器が一定量出土するようになる。須恵器の增加は、伊治城造営に伴って現地生産が始まったため、本遺跡周辺では瓦陶兼業窯の小迫觀音窯跡や須恵器窯の狐塚窯跡などが知られる。土師器は食膳具を中心に黒川以北十郡以南と共通するものが増える一方、同地域では8世紀前半までに姿を消す伝統器種（高环・広口壺・瓶など）が残る。

栗原建郡後ほどなく、宮城県北部から北の地域は蝦夷の強力な抵抗に遭い、宝亀5年（774）の海道蝦夷の桃生城侵略から弘仁2年（811）まで続く、38年戦争の時代に突入する。その間、宝亀11

年（780）には伊治公皆麻呂の乱が勃発し、伊治城の主要殿舎は焼失した（政序Ⅱ期）。こうした事態を招いた理由は、黒川以北十郡以南に較べて南の地域とのつながりが希薄であった桃生・栗原地域に対し、桃生・伊治2城の造営とそれに伴う大量の柵戸移配といった、律令国家の急激かつ強圧的な拡大政策に対する反発があったと考えられる（註11）。

#### 【平安時代】

伊治城は皆麻呂の乱後再建される（政府Ⅲ期）が、その後大きな改修は行われず、9世紀前葉に廃絶したと考えられる。延暦21年（802）の胆沢城、翌年の志波城と相次ぐ北上盆地の城柵造営によって征夷の前線から遠く離れたことに加え、延暦24年（805）の徳政相論で征夷が中止されたことで、後方支援基地としての伊治城の重要性が低くなったためと考えられる（註12）。

伊治城廃絶後の9・10世紀の集落は、本遺跡のほか佐野・糠塚・宇南・佐内屋敷・長者原・手取・西手取・五輪C・がんげつ・大境山遺跡などで認められる。これらの集落では、8世紀代まで認められた特大型以上の住居が急減し、中・小形住居を中心に構成されるようになる。さらに、カマド位置にも変化が認められる。8世紀代は北壁中央につくられることが多かったが、東壁や中央から偏った位置に付設されるものが増える。また、宮城県内の集落では9世紀以降、掘立柱建物を作り例が増えた（小井川・村田 1994）、栗原郡周辺では大境山遺跡など一部の例にとどまり、他地域に較べて集落への掘立柱建物の普及が進んでいなかったとみられる。

集落や住居構造だけでなく、土師器にも大きな変化が認められる。9世紀前葉のうちに、栗原郡はもとより最北の志波城周辺まで、ロクロ土師器が急速に普及する。これにより、陸奥国内の土師器はほぼ同じ組成・器形となり、前代まで認められた土師器の地域性は薄まるが、桃生・栗原地域では、9世紀以降も煮炊具に非ロクロ土師器が存続し、さらに、量は少ないものの食器が認められて、黒川以北十郡以南とは異なる様相を示した。

#### 【江戸時代】

本遺跡自動車道調査区や城下遺跡、八沢要害遺跡などで、主屋・副屋・雜舎といった複数の建物と井戸や廐棄土坑などで構成される江戸時代以降の屋敷跡が確認されている。このうち、城下遺跡の建物群は幅2～3mの区画溝で方形に囲まれ（栗原市教委 2014）、本遺跡自動車道調査区では山林との境に屋敷跡が発見された（宮城県教委 1982）。3遺跡は、築館宿などの町場から離れていること、建物群が広い範囲に点在し密集しないことから、農民層の屋敷跡と考えられる。中でも、八沢要害遺跡の屋敷跡は中世の小規模館の平場をそのまま引き継ぐ形で屋敷がつくられ、建物規模も大きいことから、主は肝煎と考えられている（宮城県教委 1980k）。



遺跡全景（昭和 51 年度撮影） 右側は東北自動車道関連の発掘調査地

図版 3 御駒堂遺跡と堂の沢遺跡

## C. 御駒堂遺跡の調査成果

本遺跡の発掘調査は、築館バイパスのほか東北自動車道や御駒堂浄水場、個人住宅の建設に伴って実施されている（表1・2）。それぞれの調査成果をまとめると、以下のようなになる。

### 【東北自動車道関係調査】

東北自動車道が遺跡東端付近を南北に縱断し、そこに志波姫PAが併設されることになったため、県教委が1976年と1978年に発掘調査を実施した（図版5）。その結果、古代の竪穴住居跡が41軒、近世以降の掘立柱建物跡11棟のほか、井戸跡や墓群、区画溝跡などが確認された。後者の建物群は3つに分けられ、その一つは井戸を作ら中庭を建物5棟が囲む農家の屋敷、墓群は屋敷墓と指摘されている（宮城県教委 1982）。

古代の竪穴住居跡の年代別軒数は古墳前期が1軒、7世紀末～8世紀初頭が3軒、8世紀前半が22軒、8世紀後半が3軒、9世紀以降が4軒である（註13）。中でも、8世紀前半は関東系土師器と関東型カマドで構成される移民集落であり（図版4）、こうした関東色がストレートに現れた例は黒川以北十都以南に認められないことから、古墳時代中・後期を通して畿内政権との結びつきが弱い地に対する、関東からの直接的な移住を示すものとして注目されている（村田 2000・2009など）。このため、本遺跡の成果は東北だけでなく関東地方の博物館でも紹介されている（東北歴史博物館 2004、横浜市歴史博物館 2002・2007など）。

### 【御駒堂浄水場関係調査】

遺跡西端に建つ御駒堂浄水場が拡張されることになったため、2001・2002年に発掘調査が行われた。調査主体は旧志波姫町教委で、担当は県教委である。自動車道調査地点からは西に900m離れる。調査の結果、古代の竪穴住居跡6軒、井戸跡1基、土器埋設遺構1基などが確認された（志波姫町教委 2005）。精査した住居跡は1軒で、土師器やカマドの特徴は自動車道調査地点の8世紀前葉と共通しており、移民が住んだと考えられたため、同時期の移民集落は東西1,500mの遺跡全体に広がっていた可能性が考えられた。また、井戸跡は灰白色火山灰より古く、古代集落の井戸としては類例が少なく、注目される。

### 【一般開発関係調査 個人住宅関係調査】

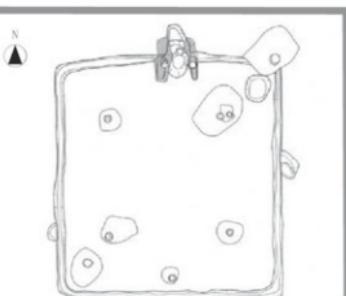
一般開発に関わる調査で、市教委によって2005年以降、毎年行われている。その結果、遺跡西側の3地点で住居跡が1軒ずつ検出され、2013年の南隣接地で行われた調査では、関東型カマドをもつ竪穴住居跡が確認された。このため、遺跡南側の範囲は図版5のように拡大している。

### 【築館バイパス関連調査】

遺跡西側を国道4号線築館バイパスが南北に縱断するため、県教委が2009～2015年に本線部分の発掘調査を実施した（本書で報告）。8世紀前葉の竪穴住居跡を7軒、8世紀中葉～後半の竪穴住居跡を2軒確認しており、関東からの移民集落が遺跡全体に展開していたことが確実となった。また、8世紀中葉～後半の集落としては、類例が少ないロクロ土師器や墨書き土器が出土しており、建郡まも



第29・35号住居跡出土関東系土器（横浜市歴博 2002より）



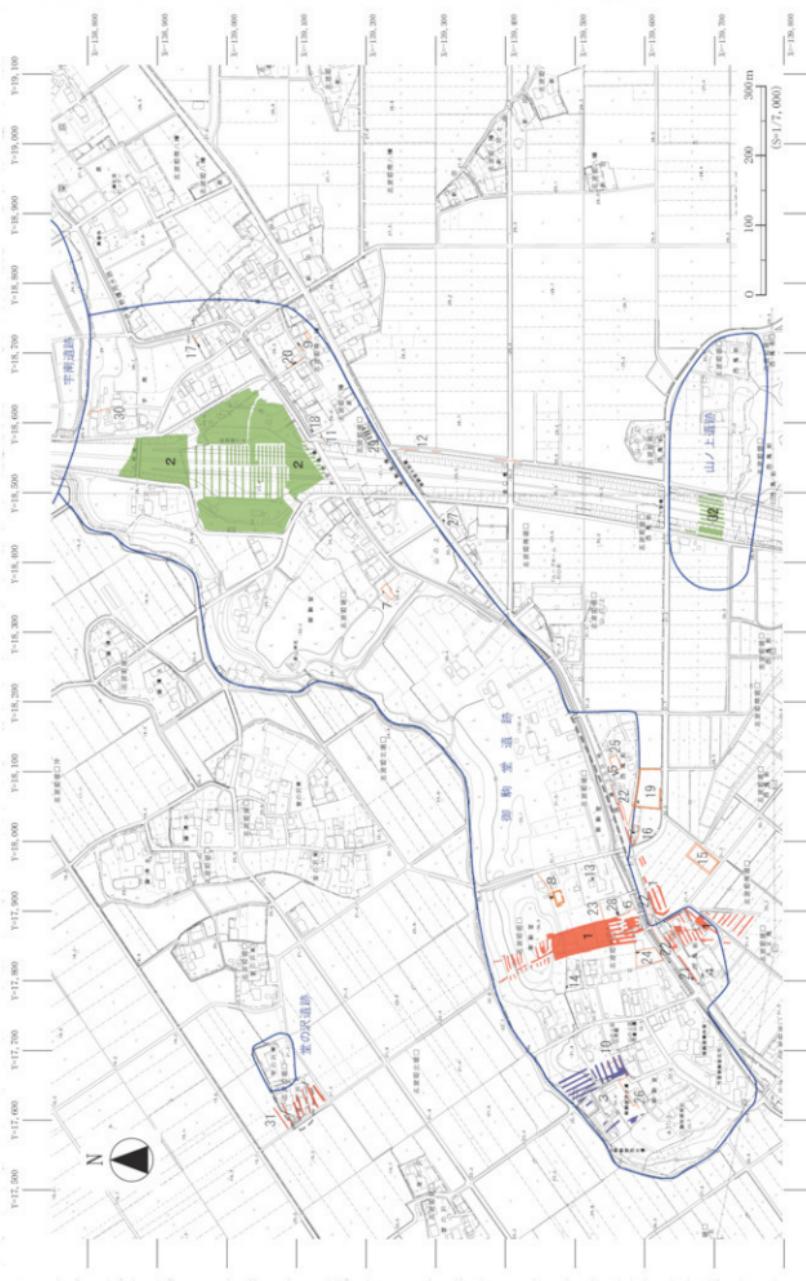
第29号住居跡カマド焚口部模式図（村田 2000より）



第6号住居跡（南から）

第6号住居跡カマド

図版4 移民の住居と土器 第6号住居跡と第29号住居跡



図版5 御駒堂・堂の沢・山ノ上遺跡の調査地点

田中義一著

2

三

23

三

五

140

ない栗原郡の律令支配の一端を知る手がかりが得られた。このほか、旧石器時代から縄文時代にかけての遺物包含層、縄文時代早期とみられる陥し穴群、近世における農民層の屋敷跡等を確認している。

### 御駒堂遺跡

No.	調査年、月、日	調査地点	面積 (m <sup>2</sup> )		調査内容	主な発見遺構	遺物量 (件数)
			対象	調査(本調査分)			
1	2009(H21)5.25~6.3	AIC南隣接地	1,900	300	試掘・確認調査	道場なし	0
2	2010(H22)10.20~10.26	BIC西側	2,000	900	試掘・確認調査	道場なし	0
3	2012(H24)9.4~9.18	AK南側	660	470(470)	記録保存調査、試掘・確認調査	堅穴住居跡1(後半)、近世土塁の溝跡+P・土塁	5
4	2013(H25)11.11~11.28	AK北側	2,446	550(550)	記録保存調査、試掘・確認調査	堅穴住居跡1(後半)、近世土塁の溝跡+P・土塁	3
5	2014(H26)1.21~1.30	CK・DK	7,200	1,800	試掘・確認調査	陥し穴、堅穴住居跡4、獨立柱建物跡、近世以降の井戸跡、土塁	1
6	2014(H26)7.7~10.3	BK・東側・CK・DK	7,650	3,533(2,940)	記録保存調査、試掘・確認調査	堅石器の遺物包含層1、縄文中期の遺物包含層1、階下(21.1m)の堅石器の遺物包含層1、獨立柱建物跡1、近世の鐵柱跡7、井戸跡3、墓跡17など	21
7	2015(H27)4.20~6.2	DK東端	460	460(460)	記録保存調査	縄文時代の陥し穴、堅穴住居跡2(8c前葉と後半)、近世の鐵柱跡1、井戸跡4	6
				14,816	6,633(4,420)		

### 堂の沢遺跡

[2013(H25)11.5~11.14]	3,452	623	試掘・確認調査	近世以降の溝跡+P・土塁・水田跡	0
-----------------------	-------	-----	---------	------------------	---

\*遺物量は発掘調査時のもの

表1 築館バイパス関連 御駒堂遺跡年度別調査面積と主な発見遺構

No.	遺跡名	調査原因	調査主体	調査期間	調査内容	対象面積 (m <sup>2</sup> )	調査面積 (m <sup>2</sup> )	本調査面積 (m <sup>2</sup> )	主な検出遺構	報告書
1	御駒堂遺跡	築館バイパス	宮城県教育委員会	2009(H21)5~2015(H27).5	本	14,800	6,630	6,630	古石器時代の遺物包含層、階下(22.1m)の堅穴住居跡7、獨立柱建物跡7、近世井戸跡17、井戸跡4	本書
2	御駒堂遺跡	東北自動車道	宮城県教育委員会	1976(S51)8~1978(S53).8	本	45,000	36,000	36,000	古代の堅穴住居跡41、獨立柱建物跡11	四城駅1
3	御駒堂遺跡	築館空き水場	玉造町立玉造小学校	2001(H13)3~2002(H14)10	本・確認	1,410	250	250	古代の堅穴住居跡6、土器埋設遺構1、井戸跡1	
4	御駒堂遺跡	合併処理浄化槽	栗原市教育委員会	2009(H21).12	確認		20	20	古代の堅穴住居跡1	
5	御駒堂遺跡	合併処理浄化槽	栗原市教育委員会	2013(H25).11	確認		23.7	23.7	古代の堅穴住居跡1、土塁など	
6	御駒堂遺跡	配管	栗原市教育委員会	2014(H26).9	本		18.2	18.2	古代の堅穴住居跡1	
7	御駒堂遺跡	廻遊物解体・簡易水洗	栗原市教育委員会	2005(H17).7	立食		140	140	土塁・廻遊物あるも不明	
8	御駒堂遺跡	個人住宅	栗原市教育委員会	2005(H17).10	確認		8.5	8.5	近世土塁の→?	
9	御駒堂遺跡	青拾合	栗原市教育委員会	2007(H19).7 2012(H24).5	立食 確認		20 8	20 8	なし なし	
10	御駒堂遺跡	羽曳無院	栗原市教育委員会	2007(H19).10	立食		0.2	0.2	なし	
11	御駒堂遺跡	羽曳無院	栗原市教育委員会	2007(H19).10	立食		0.2	0.2	なし	
12	御駒堂遺跡	水道	栗原市教育委員会	2007(H19).11	立食		50	50	なし	
13	御駒堂遺跡	合併処理浄化槽	栗原市教育委員会	2009(H21).10	確認		16	16	なし	
14	御駒堂遺跡	合併処理浄化槽	栗原市教育委員会	2010(H22).10	確認		6.6	6.6	なし	
15	御駒堂遺跡	個人住宅	栗原市教育委員会	2010(H22).12, 2011(H23).1	立食		192	192	なし	
16	御駒堂遺跡	合併処理浄化槽	栗原市教育委員会	2011(H23).1	確認		6.7	6.7	なし	
17	御駒堂遺跡	合併処理浄化槽、木戸	栗原市教育委員会	2011(H23).2~3	確認・立食		9	9	なし	
18	御駒堂遺跡	合併処理浄化槽	栗原市教育委員会	2011(H23).1	確認		17.6	17.6	なし	
19	御駒堂遺跡	個人住宅	栗原市教育委員会	2011(H23).2.3	立食		205	205	ピット	
20	御駒堂遺跡	合併処理浄化槽	栗原市教育委員会	2012(H24).2.4~5	確認		11	11	なし	
21	御駒堂遺跡	個人住宅	栗原市教育委員会	2011(H23).2.3	立食		22	22	なし	
22	御駒堂遺跡	水道	栗原市教育委員会	2013(H25).2	確認		9	9	なし	
23	御駒堂遺跡	水道	栗原市教育委員会	2013(H25).3	立食		130	130	沈ち込み(カクラン?)	
24	御駒堂遺跡	水道	栗原市教育委員会	2014(H26).2.4~5	立食		33.5	33.5	なし	
25	御駒堂遺跡	個人住宅	栗原市教育委員会	2014(H26).2.4~5	立食		83.4	83.4	沈ち込み	
26	御駒堂遺跡	水道	栗原市教育委員会	2016(H28).3	立食		28	28	なし	
27	御駒堂遺跡	合併処理浄化槽	栗原市教育委員会	2013(H25).5	確認		7.8	7.8	なし	
28	御駒堂遺跡	個人住宅	栗原市教育委員会	2013(H25).8	立食		90	90	なし	
29	御駒堂遺跡	水道	栗原市教育委員会	2014(H26).1~2	立食		70	70	なし	
30	御駒堂遺跡	合併処理浄化槽	栗原市教育委員会	2014(H26).9	確認		22.8	22.8	なし	
31	御駒堂遺跡	個人住宅	栗原市教育委員会	2014(H26).9	確認		35.2	35.2	なし	
32	御駒堂遺跡	水道	栗原市教育委員会	2015(H27).4~5	立食		9	9	なし	
33	御駒堂遺跡	水道	栗原市教育委員会	2015(H27).12	立食		26	26	なし	
34	山ノ上遺跡	合併処理浄化槽	宮城県教育委員会	2013(H25).11~12	立食	2,246	550	550	近世の水田跡	本書
35	山ノ上遺跡	水道	宮城県教育委員会	1975(S50).10~11	立食	4,140	1,340	1,340	古代の堅穴住居跡3	宮城駅69

\*33は回数5に対応

表2 御駒堂遺跡、堂の沢遺跡、山ノ上遺跡の調査成果

第Ⅲ章 おこまどう 御駒堂 遺跡



S101 住居跡（南から）



S101 住居跡出土土器

## 調査要項

遺跡名：御駒堂遺跡（宮城県遺跡登録番号 49014）

遺跡記号：BJ

所在地：宮城県栗原市志波姫堀口御駒堂

発掘対象面積：14,816m<sup>2</sup>（隣接地確認調査分を含む）

発掘面積：6,627m<sup>2</sup>（隣接地確認調査分を含む。本発掘調査面積は4,420m<sup>2</sup>）

調査期間：平成 21 年 5 月 25 日～6 月 3 日

平成 22 年 10 月 20 日～10 月 26 日

平成 24 年 9 月 4 日～9 月 18 日

平成 25 年 11 月 11 日～11 月 28 日、平成 26 年 1 月 21 日～1 月 30 日

平成 26 年 7 月 7 日～10 月 3 日

平成 27 年 4 月 20 日～6 月 2 日

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査員：平成 21 年度：豊村幸宏、尾形祐之、古田和誠

平成 22 年度：初鹿野博之、小野寺淳一、古田和誠

平成 24 年度：古川一明、豊村幸宏、山中信宏、大友邦彦、古田和誠

平成 25 年度：村田晃一、大友邦彦、清水上政憲、長内祐輔、齋藤和機

平成 26 年度：高橋栄一、村田晃一、佐藤則之、小野章太郎、村上裕次、熊谷宏規

長内祐輔、高橋洋彰、高橋透、齋藤和機

平成 27 年度：村田晃一、生田和宏、熊谷宏規

## A. 調査の方法と経過

### 1. 調査の方法

今回の発掘調査は、幅3mのトレンチを設定して確認調査を行い、遺構を検出した部分について調査区を面的に広げるという方法を探った。その際、当地域の古代集落は住居が散村状に点在すること、中には一辺4m以下の小形住居が含まれることから、トレンチ間の距離はできる限り狭くする必要があり、4mを基本とした（図版6）。その結果、確認調査で見落とした竪穴住居は1軒（SI15）に押さえることができた。

遺構断面図は、随時手実測で作成した（縮尺1/20）。平面図は、調査区の近くに設定された工事用の測量原点（世界測地系第X系）を基準とし、（株）CUBIC製発掘調査関連測量専用ソフト「電子平板 遺構くん」と（株）ソキア・トブコン製の自動追尾トータルステーションを用いて作成した。また、遺構の写真撮影は1,200万画素のデジタルカメラを使い、調査面積が広かった平成26年度のみラジコンペリコプターによる航空写真撮影（デジタルカメラと6×7版カメラ）を業者に委託して行った。

### 2. 調査の経過

築館バイパスは遺跡西側を南北に縦断するため、これを横断する国道398号線や市道、地目の境に基づいてA～D区に区分した（図版6・7）。調査概要は以下のとおりである。また、年度毎の調査期間、調査面積、発見遺構については表1にまとめた。

#### ①平成21年度の調査

A区南隣接地で確認調査を行ったが、遺構・遺物は認められなかった。

#### ②平成22年度の調査

B西側区で確認調査を行ったが、遺構・遺物は認められなかった。

#### ③平成24年度の調査

A区南端で確認調査を行ったところ、8世紀前葉の竪穴住居跡を1軒（SI01）確認したことから、住居周辺について本調査を実施した。SI01は、カマドや土器の特徴が関東地方のものと共通しており、同地域から移住した人々の住居と考えられた。また、この場所は遺跡隣接地であったため、範囲の修正を行った。

#### ④平成25年度の調査

A区北側とC区、D区の確認調査を行った。栗原郡域の古代集落は住居が点在すること、中には一辺4m以下の小形住居が含まれることから、トレンチは4m間隔で設定した。その結果、A区で8世紀後半の竪穴住居跡を1軒（SI02）検出したことから、住居周辺について本調査を行った。

C区は中央から北側にかけて、南北に長い5本のトレンチを設定したところ、古代の竪穴住居跡4軒のほか、陥し穴や掘立柱建物跡、井戸跡などを検出したため、この部分について翌年に全面調査す



平成 25 年度の確認調査は C 区全域について行ったが、翌年、その成果に基づいて中央から北側は道路幅に合わせて調査区を設定したため、重複部分では 25 年度のトレンチを表現していない。

図版 6 築館バイパス関連調査区の位置



平成 26 年度調査区全景（南から）中央奥の青いシートは発掘調査中の入之沢遺跡



遺構検出作業 - 平成 27 年度調査



遺構精査（1）- 平成 27 年度調査



遺構精査（2）- 平成 25 年度調査 SI02 住居跡



平成 26 年度調査現地説明会

図版 7 調査区全景と調査風景

ることとした。また、D区は北裾部で併行する土塁と空堀跡を確認したため、一部断ち割りを行ったが、土塁の積土にしまりがなく、空堀が山側につくられているため、近世以降の獣除け施設と考えられた。その他の部分については、木根が非常に多かったことから、それらを避けてトレンチを設定したが、遺構・遺物は認められなかった。

#### ⑤平成 26 年度の調査

C区中央から北側の本発掘調査とC区南側およびB区東側の確認調査を行った。本発掘調査部分では、古代の竪穴住居跡5軒（SI03・06・07・11・15）のほか、陥し穴20基、掘立柱建物跡7棟、井戸跡2基、近世墓17基などを確認した。さらに、C区北西隅付近の第V層から石器が出土したことから、2×2mのグリッドを設定して包含層を調査するとともに、調査区全体に任意のグリッドを設定して他の包含層の有無についても確認を行った。

D区は、昨年度未調査であった区域にトレンチを入れたところ、頂部付近の南斜面で縄文晩期の遺物包含層を確認した。さらに、C区南側の確認調査で古代の竪穴住居跡を1軒（SI50）発見したため、その周囲についても本発掘調査を行った。

調査の結果は、以下のとおりである。

- ・旧石器時代の遺物包含層は、石器製作の場であった。
- ・陥し穴には3種類あり、最も多い平面が円形で底の中央に逆茂木が1本立てられるタイプは、4～10m離れて南北に並んでいた。
- ・6軒の竪穴住居跡は、いずれも8世紀前葉のもので、出土土器やカマドが判明したものの構造をみると、関東地方（特に北武藏）からの直接的な移民のあったことを示している。
- ・8世紀前葉の移民の住居は、過去の調査成果を加えると30軒になり、それらが遺跡内でまんべんなく分布することから、東西1,500m、南北400mの範囲全体に移民集落が形成されたと考えられる。
- ・近世の遺構は、掘立柱建物跡や井戸跡、近世墓の分布から居住域と外側の耕作地、さらに山際の屋敷墓といった農家の景観が復元できる。

8月23日には、現地説明会を実施し、180名の参加があった。さらに、8月28日に志波姫小学校6年生を対象とした校外学習を行っている。参加者は63名であった。

#### ⑥平成 27 年度の調査

C区東側の歩道部分について本発掘調査を実施し、8世紀前葉の竪穴住居跡1軒（前年度のSI03の一部）、8世紀中頃～後半の竪穴住居跡1軒（SI51）、陥し穴2基、井戸跡4基などを発見した。このうち、陥し穴の1基（SK72）より縄文時代早期の土器が出土したことから、陥し穴全体の年代を考える手がかりが得られた。また、SI51からは導入段階のロクロ土師器や同時代の一般集落では少ない墨書き土器、馬が描かれた刻書き土器などが出土しており、当地域における律令支配のあり方を具体的に示すものとして注目される。

## B. 基本層序

御駒堂遺跡の範囲は東西約1,500m、南北約400mと東西に細長く、築館バイパスは西側を南北に縦断する（図版5）。発掘調査前の状況は、国道398号線の南が水田で、北は国道に面する部分が宅地となる他は畑地が多く、北緯の高い部分は山林となっていた。それぞれの標高は水田が30m前後、畑地や宅地が32m前後、山林が36mほどである。

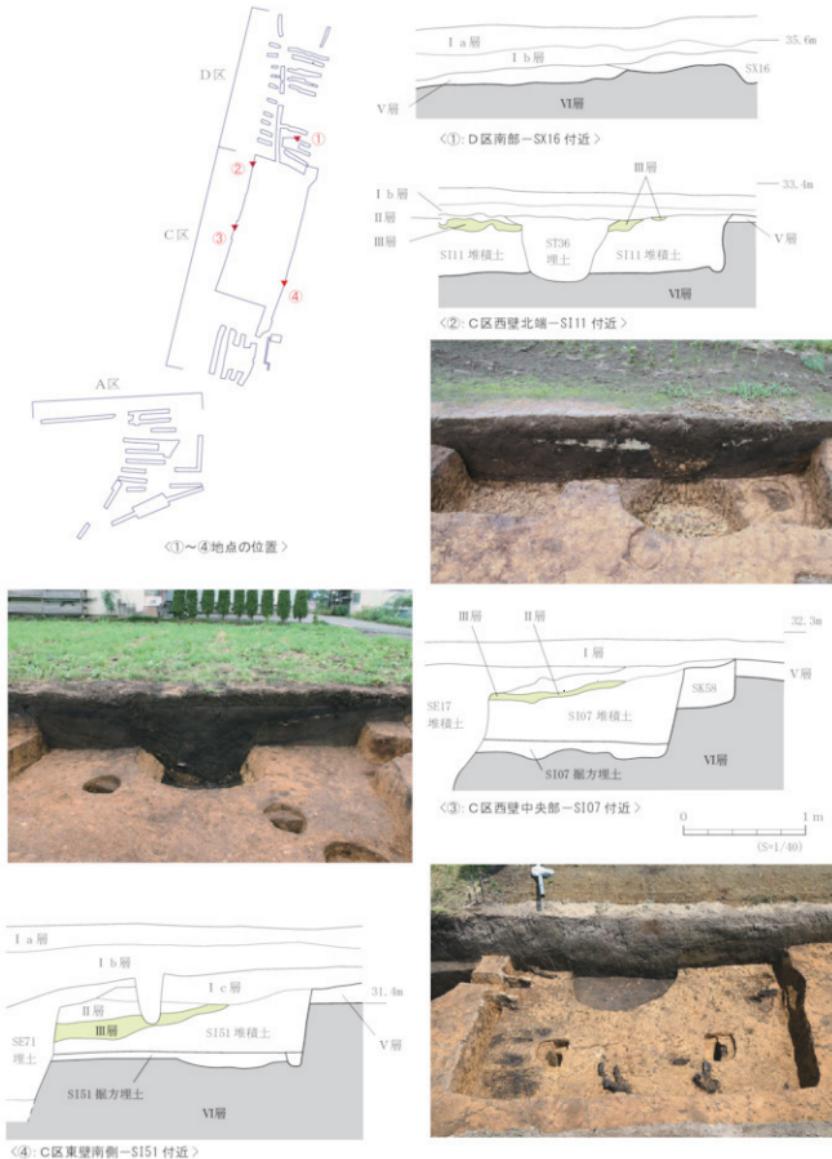
基本層は地点毎に多少異なるものの、ほぼ同じ特徴をもつことから6層（第I～VI層）に大別できる（図版8）。第I層は表土である。第II層は第III層が残存する部分で確認できた自然堆積層で、厚さは10～20cm程である。第III層は10世紀前葉に降下した灰白色火山灰色で、残りの良い部分では1次堆積の上に水成堆積層（2次堆積）が確認できた。第IV層は旧表土で、段丘上の厚さは残りの良いところでも10cmほどであるが、遺跡北端のSA13上墨跡下に良好に残っており、40cm前後認められた。古代の遺構はここから掘り込まれるが、縄文時代の遺構との関係は、第IV層が部分的にしか残らないため不明である。第V層は地山漸移層、第VI層は地山である。両層については、次章で詳述する。

以下各層の特徴を示す。

第I層：表 土	暗褐色（10YR3/4）～黒褐色（10YR3/1）シルト
第II層：自然堆積層	黒色（10YR2/2）粘土～粘土質シルト
	第III層上に堆積
第III層：灰白色火山灰層	灰白（10YR8/2）シルト 残りのよい場所では1次堆積と2次堆積に細分できる
第IV層：旧 表 土	黒褐色（10YR3/1～3/2）シルト
第V層：地山漸移層	暗褐色（10YR3/4）シルト～灰黄褐色（10YR4/2）シルト
第VI層：地 山	黄褐色（10YR5/6）シルト質粘土

## C. 発見した遺構と遺物

発見遺構・遺物と基本層序との関係は、旧石器時代から縄文時代の遺物が第V～VI層に含まれる。一方、縄文時代以降の遺構や遺物は、第IV～VI層で確認した。飛鳥時代より新しい遺構は、第IV層から掘り込まれる。このため、以下の記述は旧石器時代から縄文時代と縄文時代以降に分けて行う。その際、本遺跡の過去の調査については、1976～1978年に実施した東北自動車道調査（宮城県教委1982）を自動車道調査、2001～2002年に実施した旧志波姫町教委調査（志波姫町教委2005）を浄水場調査と呼ぶことにする。



図版8 基本層序

## 1. 旧石器時代から縄文時代

### (1) 調査の方法と経過

平成 26 年度の発掘調査対象範囲の地形は、北側の急斜面部と南側の緩斜面～平坦面に分かれる。このうち本発掘調査を実施した南側（II・III 区）において、II 区北西部の遺構確認面（V 層上面）および竪穴住居跡（SI11）の堆積土からそれぞれ 1 点ずつ縄文時代以前とみられる石器が出土した（図版 18・19）。このため、II 区北西部を中心に縄文時代以前の遺構・遺物の検出を目的とした調査を行った。

調査では 2m × 2m を 1 グリッドとする確認トレンチを石器出土地点に設定した。この地点の調査で VI 層中（図版 9）から石器が出土することを確認したため、石器が出土したトレンチの隣接部分も調査の対象として、順次拡張することとした。また、石器出土層位である VI 層の分布範囲を確認する目的で、斜面と平行または直交するように、それぞれ南北方向、東西方向に一定の間隔でトレンチを設定した（図版 10）。この際に、調査を完了した古代の竪穴住居跡も確認トレンチとして利用し、VI 層以下の上層確認を行った。結果、当該期の遺構として石器集中地点 1 箇所を検出し、53 点の石器が出土した（水洗篩による回収遺物を除く）。これに、先に出土した 2 点を含めると 55 点に上る。また、VI 層の分布は調査区の北半分のみに広がることを確認した（図版 10～12）。

出土したすべての遺物は出土位置を三次元で記録し、また、ある程度の大きさの遺物については出土層位や出土状況を詳細に確認・記録するため、個別の出土状況について写真による記録保存を行った。さらに、石器を取り上げた後の土壤の型（インプリント）についても写真による記録保存を実施した。石器が集中して出土したトレンチでは、一部の土壤を回収し、水洗篩（4mm・2mm・1mm 目）による遺物の回収を行った（表 3）。調査ではすべての土壤を回収することができなかつたことから、回収した土壤はすべて計量し、土壤 1 m<sup>3</sup>あたりの遺物量を算出することで、碎片の分布密度を確認することとした（図版 13）。

平成 27 年度は、前年度の調査結果を踏まえて、VI 層が分布する調査区北側 1/3 の部分でやや密に、残る 2/3 の部分では間隔を広げて確認トレンチを設定し、遺構・遺物および VI 層の分布の確認を行った（図版 10・12）。

なお、2 箇年に及ぶ発掘調査において当該期を対象とした調査面積は約 250m<sup>2</sup>である。

### (2) 基本層序

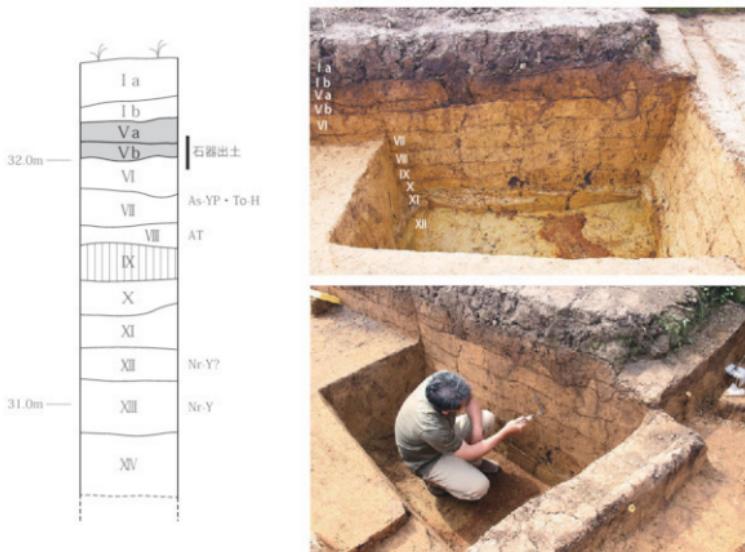
石器集中地点内（II 区 A5 グリッド西壁）で確認した基本層序は以下のとおりである（図版 9）。なお、火山灰の検出および分析については、（株）火山灰考古学研究所に委託した（附章参照）。

第 I 層：表土層。現耕作土層（I a 層）と旧耕作土層（I b 層）に分かれる。

第 V 層：暗褐色粘土質シルト層。この地点では VI 層起源の黄褐色シルト質粘土ブロックを含み、その多寡により、少量を含む層（V a 層）と多量に含む層（V b 層）に分かれる。いわゆる下層（当該地点では VI 層）との漸移層である。この層から石器の出土が確認される。

第 VI 層：黄褐色シルト質粘土層。石器はこの層の上部から最も多く出土する。

第 VII 層：黄褐色粘土質シルト層。VI 層に比べて砂がやや多く混じる。この層から浅間板鼻黄色軽石



層位	土色	土性	特徴	指考
I-a		泥質作土		
I-b		泥質作土		
V-a	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	10YR5-6 黄褐色シルト質粘土 (VII層起源) 和・小ブロック少額	石器出土
V-b	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	10YR5-6 黄褐色シルト質粘土 (VII層起源) 小・中ブロック多額	石器出土
VI				
VII				
VIII				
IX				
X				
XI				
XII				
XIII				Nr-Y?
XIV				Nr-Y
XV				

図版9 基本層序模式図（左）・断面写真（右上）、火山灰分析作業風景（右下）

(As-YP) (註14) と十和田八戸テフラ (To-H) が検出された。

第VII層：明黄褐色シルト質粘土層。この層から始良丹沢火山灰 (AT) が検出された。

第IX層：黄褐色シルト質粘土層。この層は前後の層と比較してややくすんだ色調を呈し、上層で検出されたATとの関係から、いわゆる「暗色帶」(柳田2003) とみられる。

第X層：黄褐色粘土層

第XI層：明黄褐色粘土層。淡黄色火山灰をラミナ状に含む。

第XII層：明黄褐色砂層。スコリアをわずかに含む。

第XIII層：明褐色砂質シルト層。スコリアを含む。火山灰分析の結果、このスコリアは鳴子柳沢テフラ (Nr-Y) に比定されている。上層の第XII層および第XI層で検出した火山灰やスコリアはこの二次堆積物の可能性が考えられる。

### (3) 発見した遺構と遺物

#### ① 遺構の概要

平成 26 年度の本発掘調査区（II 区）北西部で、石器集中地点 1 箇所を検出し、ここから石器が 53 点出土した（表 3）。石器は V a 層から VI 層上部にかけて出土しているが、VI 層から出土した石器が最も多いことや、石器の平面分布では出土層位の偏りが確認されないことから、V a 層や V b 層出土の石器は本来 VI 層上部に包含されていたものとみられ、VI 層が遺物包含層として位置づけられる。また、石器集中地点周辺の土壤の一部を回収し、水洗篩（4mm・2mm・1mm 目）により碎片を 2,717 点回収した（表 4）。これらの他に、縄文時代や古代の遺構確認面や、古代の遺構堆積土から当該石器群に含まれるとみられる剥片が 2 点出土している。

#### ② 遺物包含層の分布状況

石器の本来の出土層位が VI 層上部であることから、この分布範囲を確認する目的で、II 区全域を対象にトレンドを設定し、遺構・遺物の有無の確認とともに土層の確認を行った。図版 12 は II 区全域の南北および東西断面を柱状図で示したものである。南北方向では、西から 9T-10T 間、16T-17T 間、22T-23T 間で VI 層の分布が途切れることを確認した。これより北側ではすべての確認トレンドで VI 層を検出しておらず、東西とともに調査区外へ広がるものとみられる。

#### ③ 出土石器の分類

本発掘調査で出土した当該期の石器は、総数 2,772 点ある。これらのほとんどが水洗篩で回収した碎片で、出土位置を確認・記録できた遺物は 55 点である。これらの石器について、以下の基準で器種分類を行った。

楔形石器：両極打法による剥離面（両極剥離痕）が認められるもののうち、対向する縁辺に二次加工や使用による微小剥離痕が観察されるもの。この石器の特徴として、末端がステップ状となる二次加工面が多く見られ、また、使用による縁辺のつぶれが多く認められる。

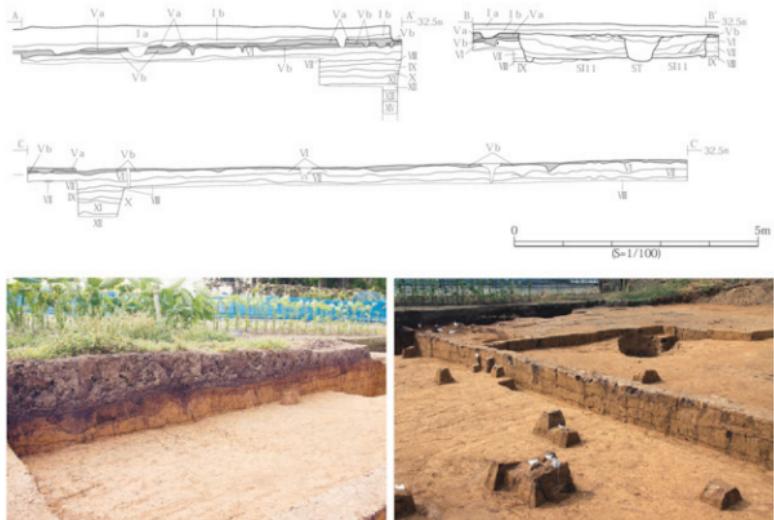
二次加工ある剥片：剥片や石刃の縁辺の一部に二次加工を施したもの。全体の形状は素材となる剥片や石刃の元の形状を大きく変化させることができなく、また、二次加工の位置も不規則であることから、器種として一定の型式を有するものではない。

石刃：長さが幅の概ね 2 倍以上あり、両側辺と平行する稜線をもつ剥片。破損等により長さが幅の 2 倍未満のものについては、元の形状が石刃として認定できるものののみこの器種に分類した。

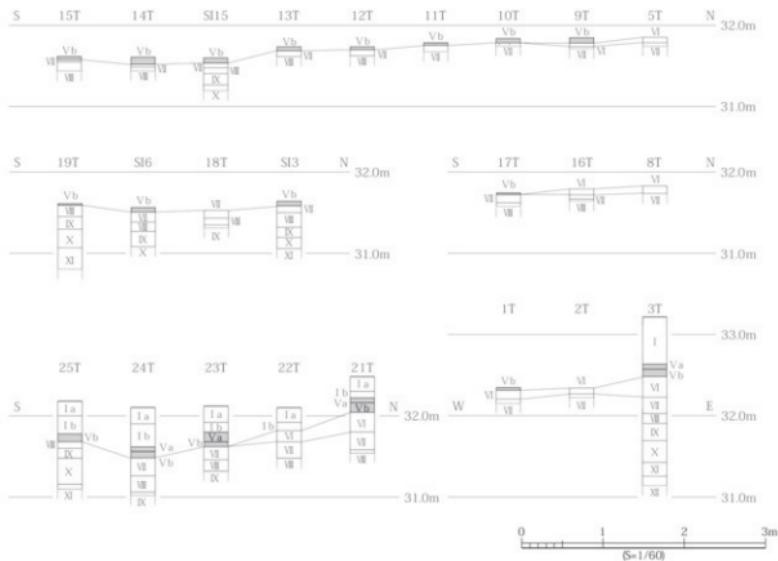
剥片・碎片：石器製作における石材残滓。便宜的に、製作時の目的の有無や内容にかかわらず最終剥離面がポジティブとなるものを剥片、ネガティブとなるものを石核とする。剥片と分



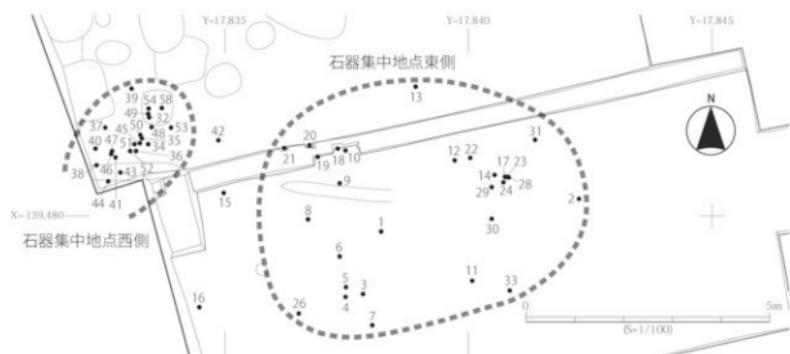
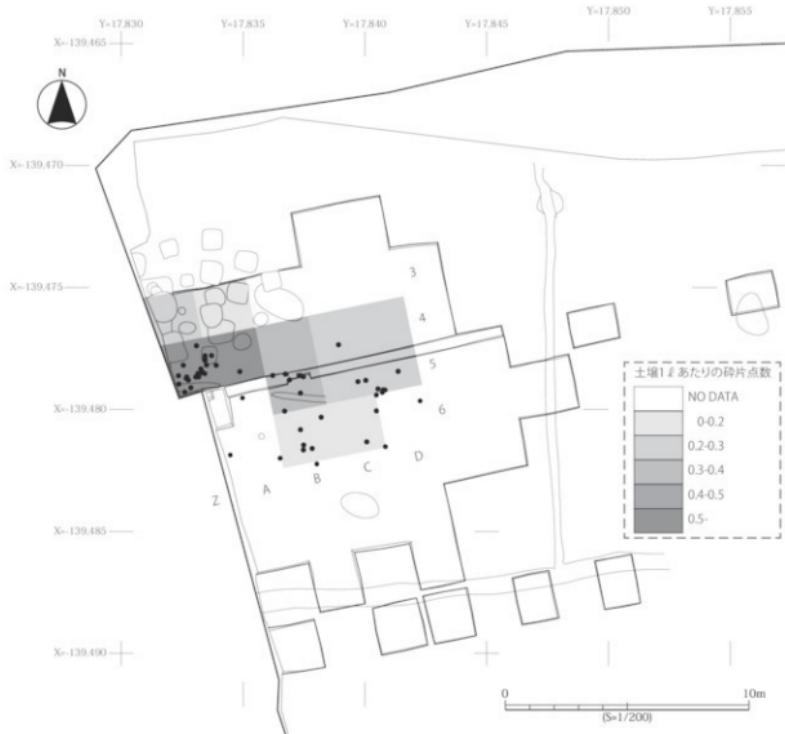
図版 10 発掘調査区平面図



図版 11 発掘調査区断面図（上）・断面写真（左下：南北断面、右下：東西断面）



図版 12 旧石器確認調査トレンチの土層断面模式図



図版13 石器出土状況（1） 上：碎片出土状況 下：遺物集中地点拡大図



図版 14 石器出土状況 (2)

類したものうち、長さと幅がいずれも 2cm 未満となる極小型のものについては碎片として分類した。ただし、破損が見られる碎片のうち、本来の長さまたは幅が 2cm を超えるものと認定できるものについては剥片として分類している。なお、石核の出土は確認されなかった。

以上の分類から、本発掘調査で出土した当該期の石器群 2,772 点の内訳は楔形石器 2 点、二次加工ある剥片 3 点、石刃 4 点、剥片 19 点、碎片 2,744 点（うち水洗篩回収 2,717 点）である。石材は珪質頁岩 50 点、珪質凝灰岩 4 点、玉髓 1 点が認められる。なお、珪質凝灰岩と分類したものについては、色調が珪質頁岩よりやや白色を呈するものの、細粒緻密で剥離面がやや光沢を帯びるといった質感は、珪質頁岩のそれに非常に近似しており、同じ範疇のものとして認識することが可能である。

表3 石器集中地点の出土石器組成表（出土位置を記録した遺物のみ）上：層位別 下：ブロック別

出土層位	楔形石器			二次加工ある剥片			石刃			剥片			鱗片			総計
	珪質頁岩	珪質凝灰岩	計	珪質頁岩	珪質凝灰岩	計	珪質頁岩	珪質凝灰岩	計	珪質頁岩	珪質凝灰岩	計	珪質頁岩	珪質凝灰岩	計	
V層													1	1	1	1
Va層													1	1	2	2
Vb層	1		1			2			2	8	1	9	5	1	6	18
VI層	1		1	3		3	2		2	7	1	8	18		18	32
總計	2		2	3		3	4		4	15	2	17	25	2	27	53

右器ブロック	楔形石器			二次加工ある剥片			石刃			剥片			鱗片			総計
	珪質頁岩	珪質凝灰岩	計	珪質頁岩	珪質凝灰岩	計	珪質頁岩	珪質凝灰岩	計	珪質頁岩	珪質凝灰岩	計	珪質頁岩	珪質凝灰岩	計	
東ブロック	2		2	3		3	3		3	7		7	12	1	13	28
西ブロック							1			8	2	10	13	1	14	25
總計	2		2	3		3	4		4	15	2	17	25	2	27	53

表4 水洗篩で回収した碎片

グリッド	回収土量出土				適物台座出土				層位	点数	体積(㎤)	点数/体積	層位	点数	総計	
	層位	点数	体積(㎤)	点数/体積	層位	点数	体積(㎤)	点数/体積								
Z3	V	14	82.20	0.17					V				14			
	Va	94	300.83	0.31	V	7	101									
	計	108	383.03	0.28	計	7	115									
Z4	V	262	251.86	1.04					Vb				262			
	Vb	491	606.90	0.81	Vb	185	676									
	計	753	858.76	0.88	計	208	961									
A3	V	0	17.49	0.17					Vb				0			
	計	3	17.49	0.17									3			
A4	V	528	391.78	1.35					Vb				528			
	Vb	1	118.93	0.01	Vb	1	2									
	計	449	750.32	0.60	計	1	450									
A5	V	978	1261.03	0.78					Vb				978			
	計	3	3	3									3			
B4	V	7	26.24	0.27					Vb				7			
	Vb	57	152.16	0.37									57			
B5	計	64	178.40	0.36									64			
	Va	13	69.60	0.19					Vb				13			
	Vb	82	132.92	0.62									82			
B6	Va	62	241.36	0.26	Vb	9	71		Vb				62			
	計	157	444.25	0.35	計	9	166						157			
	Va	7	76.96	0.09									7			
C4	Vb	26	89.20	0.29									26			
	計	33	134.67	0.25	Vb	4	38						33			
C5	V	19	17.49	1.09					Vb				19			
	Vb	0	62.96	0.11	Vb	9	16						9			
C6	計	40	229.12	0.17	計	9	49						40			
	V	4	8.75	0.46									4			
D4	Vb	34	134.67	0.25	Vb	4	38						34			
	計	38	143.42	0.26	計	4	42						38			
D5	V	19	17.49	1.09					Vb				19			
	Vb	0	62.96	0.00	Vb	3	3						0			
D6	計	19	80.45	0.24	計	3	22						19			
	Va	3	10.49	0.29									3			
D7	Vb	0	15.74	0.00									0			
	計	28	157.41	0.18	計	3	31						28			
D8	V	24	80.20	0.27								24				
	Vb	0	61.22	0.00								0				
D9	計	24	141.42	0.27								24				
	Va	139	374.29	0.37	Vb	1	140					139				
D10	Vb	109	440.49	0.24	Vb	8	117					109				
	計	248	884.99	0.28	計	9	257						248			
D11	Vb	0	36.73	0.00								0				
	計	0	36.73	0.00									0			
D12	計	2460	4764.28	0.52								257	2717			

## (4) 石器集中地点

II区西北部で検出した石器集中地点は南北約 5.5m ×東西約 10m の範囲に広がり、調査区西壁付近の Z4 グリッドで石器が最も多く出土していることから、さらに西側の調査区外へ延びるものとみられる（図版 13）。また、この北側については古代や近世の遺構掘削による擾乱を著しく受けているため、本来は北側にも広がっていた可能性が考えられる。前項で示した石器総数 2,772 点から、遺構確認面や古代の遺構堆積土から出土した剥片 2 点を除く 2,770 点（うち水洗篩回収 2,717 点）がこれに帰属する。なお、出土位置を記録した遺物（53 点）の石器石材は珪質頁岩 49 点、珪質凝灰岩 4 点である。

## ①石器の出土状況

石器集中地点では南北約 5.5m、東西約 10m の範囲で遺物を確認し、その分布状況から Z4 グリッドを中心広がる。水洗篩により回収した剥片の分布状況もまた、Z4 グリッドを中心とした分布状況を呈する（図版 13）。一方で、器種別の分布状況を見ると、遺物が最も集中する西側ではほとんどが剥片や碎片で構成されるのに対し、やや散漫な分布状況を呈する東側ではトゥールや石刃を含む器種構成となっている（図版 14・15）。石器群全体では出土層位による分布および器種組成の差異は確認できないことから、この分布の差異は時期差によるものではないものとみられる。これらは同一の時期の石器群であると捉えられ、集中地点内における分布の差異は、場の機能の差の可能性として捉えられる。以下に石器集中地点を東西に分けて記述する。

### 【石器集中地点西側】

南北約2m、東西約2mの範囲に石器が特に集中して分布する。石器の集中箇所が調査区西壁付近にあることから、さらに西側の調査区外へ広がるものとみられる。また、北側は古代や近世の遺構により攪乱を受けていることから、北側にも分布が広がる可能性が考えられる。この範囲で出土した石器は25点あり、その内訳は石刃1点、剥片10点、碎片14点である。範囲内では1箇所（Z4・A4グリッド）に石器が集中する傾向が見られる。水洗篩回収の碎片の分布状況（土壌1リットルあたりの点数）もこれに類似し、Z4グリッドやA4グリッドで多く分布している。

### 【石器集中地点東側】

南北約5m、東西約6.5mの範囲に石器が分布する。この範囲で出土した石器は28点あり、その内訳は楔形石器2点、二次加工ある剥片3点、石刃3点、剥片7点、碎片13点である。範囲内では3箇所で若干の集中が認められるが、全体としては散漫な分布状況を呈する。水洗篩回収の碎片の分布状況（土壌1リットルあたりの点数）は、西側に近いところで多く分布し、そこから離れるにつれて少なくなる傾向が見られる。

## ②出土石器

石器集中地点で出土した石器は、トゥールが少なく、その種類も少ないという特徴があげられる。また、トゥール以外では、ほとんどが調整剥片や碎片であり、石刃などの目的剥片が少ない点も特徴的である。個々の石器に残されたさまざまな痕跡のうち特筆すべきものとして、被熱の痕跡があるものが15点あり、その割合が大きい点があげられる。以下に、器種別に概要を述べる。

### 〔楔形石器〕

2点あり、Vb層およびVI層からそれぞれ1点ずつ出土している。石材はすべて珪質頁岩である。S04（図版15-1、16-1）は、器体の平面および断面形が凸レンズ状を呈する。両端の刃部の幅は狭く、短い線状を呈する。S06（図版15-2、16-2）は、器体の平面形が台形、断面形が逆三角形を呈するいわゆる「楔」の形状をもつ。ステップ状の微小剥離痕が観察される端部は、片方が平坦、残りの片方が線状を呈する。

### 〔二次加工ある剥片〕

3点あり、すべてVI層から出土している。石材はすべて珪質頁岩である。S05（図版15-3、16-3）は上下両端が破損しているが、石刃の一辺に二次加工を施したものとみられる。S08（図版15-4、16-4）は極小型の剥片の一辺に二次加工を施している。S11（図版15-5、16-7）は石刃の一辺の打面部から末端部にかけて二次加工を施している。加工の方向は打面部が腹面から、末端側が背面からとなっており、途中で方向を変えている。素材となる石刃は打面および背面に自然面を大きく残し、平面形がやや不整で、断面形が厚みをもつ形状であるため、ナイフ形石器とよばれるものとは素材選



图版 15 石器集中地点出土 石器实测图



図版 16 石器集中地点出土 石器写真



図版 17 調査風景（南から）

扱において差異が認められる。

#### [石刃]

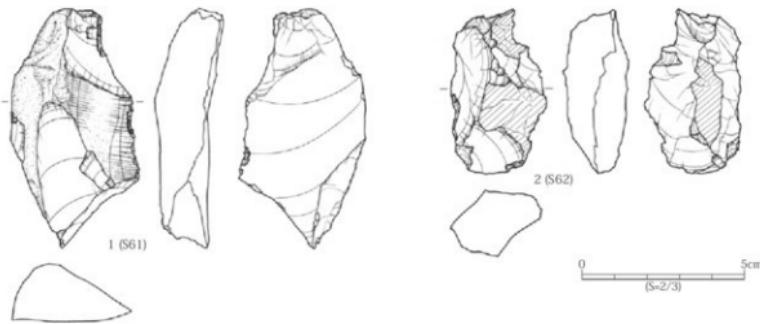
4点あり、Vb層から2点、VI層から2点出土している。石材はすべて珪質頁岩である。S33（図版15-6、16-8）は打面がやや小さく、細身で薄手の形状である。器体が腹面側に反り、両側辺も湾曲したやや歪な形状を呈する。背面には自然面や石核素材面が残る。S15（図版15-7、16-9）は打面部のみの残存であるが、両側辺が平行し歪みの少ない形状を呈する。打面はやや大きく厚みをもつ。S24（図版15-8、16-5）は中間部のみの破片である。S28（図版15-9、16-6）は末端部のみの残存であるが、両側辺が歪み、厚みをもつ形状を呈する。背面には石核素材面を大きく残している。また、熱を受けた痕跡が確認される。

#### [剥片・碎片]

剥片は17点あり、Vb層から9点、VI層から8点出土している。碎片は出土位置を記録したものが27点あり、V層（細分できなかったもの）から1点、Va層から2点、Vb層から6点、VI層から18点出土した。石材は、剥片が珪質頁岩15点、珪質凝灰岩2点で、碎片が珪質頁岩25点、珪質凝灰岩2点である。S10（図版15-10、16-11）およびS41（図版15-11、16-10）、S53（図版15-12、16-12）、S44（図版15-13、16-13）は頭部調整に伴って剥離された剥片や碎片とみられる。S31（図版15-14、16-14）およびS03（図版15-15、16-16）、S09（図版15-16、16-15）は打面調整（再生）に伴って剥離された剥片とみられ、S31では打面に頭部調整痕が残されている。S17（図版15-18、16-18）およびS01（図版15-20、16-17）、S16（図版15-17、16-20）は作業面調整による剥片であり、自然面や石核素材面を残す。なお、S01では微小剥離痕が観察される。S02（図版15-19、16-22）は幅のやや広い剥片である。背面は、末端部にわずかに自然面を残すのみで、目的剥片剥離面および調整面のみで構成される。S49（図版15-21、16-21）は熱を受けた痕跡が背面および腹面の両面で広く認められる。S46（図版15-22、16-19）は幅広の剥片で、背面に石核の素材面を大きく残す。

### (5) その他の出土石器

B5 グリッドの遺構確認面（V層に相当）で珪質頁岩製の剥片 1 点（S61、図版 18-1、19-1）、SI11 住居跡の堆積土から玉髓性の剥片 1 点（S62、図版 18-2、19-2）が出土している。S61 は石器集中地点と同様の良質な珪質頁岩を利用していることから、この石器群に帰属させることが可能である。S62 は石器集中地点の石器群では見られない石材を利用しているが、石器集中地点と重複する住居跡から出土していることから、S61 と同様に帰属するものとみられる。



図版 18 その他出土石器 実測図



図版 19 その他出土石器 写真

表 5-1 出土石器属性表 (1)

登録番号	石種	類型	調査区	道構	層位	石材	法量			残存	被熱	変形	自然面	付着物	刃石・剥片類・二次加工ある剝片のみ	剥離角	最大幅位置	
							長 (mm)	幅 (mm)	最大厚 (mm)									
S01	砂岩	作業面調整	B6	東	Vb	柱貫孔	28.8	17.3	9.7	4.27	未端部	0	0	0	0	-	C	
S02	砂岩	-	D6	東	VI	柱貫孔	35.7	29.8	5.8	4.29	柱貫孔	0	0	1	0	119	B	
S03	砂岩	打面調整	B6	東	Vb	柱貫孔	26.0	18.1	4.1	1.09	未端部	0	0	1	0	91	B	
S04	裸岩右端	-	B6	東	Vb	柱貫孔	24.7	10.8	8.3	1.39	変形	0	0	0	0	-	-	
S05	二次加工ある剝片	-	B6	東	VI	柱貫孔	18.6	11.4	4.1	0.67	中間部	0	0	0	0	-	B	
S06	裸岩右端	-	B6	東	VI	柱貫孔	28.1	20.5	4.4	3.06	変形	0	0	0	0	-	-	
S07	砂岩	内側	B7	東	Vb	柱貫孔	31.0	8.2	4.7	0.90	変形	0	0	0	0	113	C	
S08	二次加工ある剝片	-	B5	東	VI	柱貫孔	18.7	12.8	2.2	0.38	変形	0	0	0	0	127	B	
S09	砂岩	打面調整	B5	東	Vb	柱貫孔	21.6	17.6	5.9	1.66	未端部	0	0	0	0	95	B	
S10	砂岩	頭部調整	B5	東	VI	柱貫孔	16.8	10.4	2.1	0.32	変形	0	0	0	0	111	B	
S11	二次加工ある剝片	C6	東	VI	柱貫孔	67.7	32.7	17.3	32.08	打面部	0	0	1	0	111	A		
S12	砂岩	-	C5	東	VI	柱貫孔	18.0	9.4	2.7	0.19	打面部	0	0	0	0	-	Ce	
S13	砂岩	-	C4	東	VI	柱貫孔	12.4	15.0	2.8	0.30	打面部	0	0	0	0	-	C	
S14	砂岩	頭部調整	D5	東	VI	柱貫孔	15.3	8.7	1.7	0.19	変形	1	0	0	0	120	B	
S15	石刃	A5	西	Vb	柱貫孔	33.3	20.3	7.9	5.13	未端部	0	0	0	0	88	B		
S16	砂岩	作業面調整	A6	西	VI	柱貫孔	26.5	23.7	6.4	2.70	変形	0	0	1	0	86	B	
S17	砂岩	作業面調整	D5	西	VI	柱貫孔	25.4	17.7	5.4	2.53	未端部	0	0	1	0	93	B	
S18	砂岩	-	B5	東	VI	柱貫孔	5.9	6.9	1.6	0.06	打面部	1	0	0	0	-	C	
S19	砂岩	頭部調整	B5	東	VI	柱貫孔	8.5	4.8	1.7	1.33	変形	0	0	0	0	96	A	
S20	砂岩	頭部調整	B5	東	VI	柱貫孔	16.5	7.2	1.9	0.17	変形	0	0	0	0	106	Ce	
S21	砂岩	-	B5	東	VI	柱貫孔	13.9	12.5	3.1	0.35	打面部	1	0	0	0	-	C	
S22	砂岩	頭部調整	C5	東	VI	柱貫孔	11.3	5.8	1.1	0.08	変形	0	0	0	0	100	B	
S23	砂岩	頭部調整	D5	東	Vb	柱貫孔	13.5	6.6	1.5	0.13	変形	0	0	0	0	133	A	
S24	石刃	-	D5	東	Vb	柱貫孔	17.0	13.7	2.8	0.59	中間部	0	0	0	0	-	B	
S25	欠番	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
S26	砂岩	-	A6	東	VI	柱貫孔	11.6	8.6	3.0	0.35	未端部	0	0	1	0	-	C	
S27	礫	-	A5	東	Vb	柱貫孔(表面灰化)	-	-	-	0.63	礫片	0	-	-	-	-	-	
S28	石刃	-	D5	東	VI	柱貫孔	24.3	10.2	6.7	1.18	未端部	1	0	0	0	-	C	
S29	砂岩	-	D6	東	Vb	柱貫孔(表面灰化)	10.3	10.8	3.5	0.36	打面部	1	0	1	0	-	B	
S30	砂岩	-	C6	東	Vb	柱貫孔	5.6	4.7	0.9	0.01	打面部	1	0	0	0	-	C	
S31	砂岩	打面調整	D5	東	VI	柱貫孔	17.2	17.5	3.9	1.17	未端部	0	0	0	0	83	B	
S32	砂岩	頭部調整	Z4	西	Vb	柱貫孔	9.2	2.7	1.5	0.06	変形	1	0	0	0	92	B	
S33	石刃	-	C6	西	VI	柱貫孔	60.5	19.1	5.3	6.67	未端部	0	0	1	0	98	B	
S34	砂岩	-	Z4	西	V	柱貫孔	8.6	10.4	2.2	0.10	打面部	1	0	0	0	-	Ce	
S35	砂岩	-	Z4	西	Vb	柱貫孔	11.8	17.3	3.6	0.38	未端部	1	0	0	0	-	C	
S36	砂岩	-	Z4	西	Vb	柱貫孔	10.5	9.5	2.8	0.18	打面部	0	1	0	0	-	B	
S37	砂岩	-	Z4	西	Vb	柱貫孔	21.0	20.0	2.3	0.86	未端部	1	0	0	0	-	B	
S38	砂岩	頭部調整	Z4	西	Va	柱貫孔(表面灰化)	12.2	7.6	2.1	0.16	変形	0	0	0	0	111	B	
S39	砂岩	-	Z4	西	Va	柱貫孔	5.9	5.4	1.0	0.01	打面部	0	0	0	0	-	B	
S40	砂岩	頭部調整	Z4	西	Vb	柱貫孔	7.4	13.1	1.9	0.15	変形	0	0	0	0	98	B	
S41	砂岩	頭部調整	Z4	西	VI	柱貫孔	20.3	18.1	5.8	1.89	変形	0	0	0	0	113	C	
S42	砂岩	-	A4	西	VI	柱貫孔	6.2	6.2	1.8	0.10	打面部	0	0	1	0	-	B	
S43	砂岩	頭部調整	Z4	西	VI	柱貫孔	8.0	7.0	1.5	0.08	中間部	1	0	0	0	-	B	
S44	砂岩	頭部調整	Z4	西	VI	柱貫孔(表面灰化)	31.6	15.4	7.3	2.01	変形	0	0	0	0	114	A	
S45	砂岩	-	Z4	西	VI	柱貫孔	11.5	10.2	3.6	0.29	打面部	1	0	0	0	-	B	
S46	砂岩	-	Z4	西	VI	柱貫孔	23.5	35.7	5.4	2.79	未端部	1	0	0	1	102	A	
S47	砂岩	打面調整	Z4	西	VI	柱貫孔	17.1	11.2	2.3	0.33	未端部	0	0	0	0	93	B	
S48	砂岩	-	Z4	西	VI	柱貫孔	15.6	10.9	2.3	0.36	打面部	1	0	0	0	-	B	
S49	砂岩	-	Z4	西	VI	柱貫孔	32.4	23.1	6.0	3.54	打面部	1	0	0	0	-	B	
S50	砂岩	-	Z4	西	Vb	柱貫孔	18.8	17.5	3.3	0.36	打面部	0	0	0	0	-	B	
S51	砂岩	-	Z4	西	VI	柱貫孔	13.9	9.9	4.0	0.47	変形	1	0	0	0	96	B	
S52	砂岩	頭部調整	Z4	西	VI	柱貫孔	8.9	5.0	0.7	0.01	打面部	1	0	0	0	100	B	
S53	砂岩	頭部調整	A4	西	Vb	柱貫孔(表面灰化)	13.9	17.7	2.3	0.44	変形	0	0	0	0	76	C	
S54	砂岩	-	Z4	西	VI	柱貫孔	11.2	4.8	3.1	0.10	打面部	1	0	0	0	-	B	
S55	欠番	-	Z3	西	VI	柱貫孔	-	-	-	0.01	礫片	0	-	-	-	-	-	
S56	欠番	-	Z4	西	VI	鞍山岩(表面灰化)	-	-	-	0.24	礫片	0	-	-	-	-	-	
S57	欠番	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
S58	砂岩	-	A4	西	VI	柱貫孔	14.9	11.6	2.7	0.28	未端部	1	0	0	0	-	C	
S59	欠番	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
S60	欠番	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
S61	砂岩	-	B5	-	確認面	柱貫孔	73.2	40.1	17.2	46.04	未端部	0	0	1	0	100	B	
S62	砂岩	-	-	-	SH1	3.5	玉髓	49.4	29.9	21.2	26.54	変形	0	0	1	0	80	B

## [石器属性基準]

被熱・変形・自然面・付着物・跡跡面：1あり 2なし

最大幅位置：A: 両面部 B: 中間部 C: 未端部 Xe: それぞれの端部

背面模様（頭部調整・自然面・要素面・ボジ面）：1: 同方向 (枚数) 0: なし

背面模様（剝離面）：背面の剥離方向に対して：同: 同方向 橫: 橫方向 逆: 逆方向 0: なし

背面模様（その他の）：0: なし

打点位置：半面を正面に見て Le 左端 L 左側 M: 中間 R: 右側 Re: 右端

バグブ形状：S: フルバグ H: ヒンジ S: ステップ D: 剥く発達 F: 発達しない

末端形状：F: フリーアー H: ビンジ S: ワーラーバッセ

斜めの位置：腹面を正面に見て P: 打面側 R: 右側 M: 右側 L: 左側 ■: 記号番号は枚数を表す。

表 5-2 出土石器属性表 (2)

頭部 調整	石刀・調片類・二次加工ある調片のみ							備考	実測値	写真回数	登録番号								
	背面構成	自然面	木材面	ボジ面	剥離面	その他	幅 (mm)	厚 (mm)	形状	打面 打点 位置	バルブ 形状	末端 形状	微小 剥離痕	折れの 位置					
-	0	1	1	横	0	-	-	-	-	O	I	P	-	15-20	16-17	S01			
1	1	0	0	同様	0	11.6	3.4	凹状	R	S	F	O	L	-	15-19	16-22	S02		
1	0	0	0	同様	0	5.2	1.7	平田	L	S	-	O	D	-	15-15	16-16	S03		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	15-1	16-1	S04		
-	0	0	0	同	0	-	-	-	-	-	-	-	-	0	PD	-	15-3	16-3	S05
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	15-2	16-2	S06		
0	0	3	1	0	0	3.6	1.8	点状	Re	S	両端	O	O	-	-	-	15-7	-	S07
1	0	0	0	同	0	2.7	0.9	点状	M	D	O	O	O	-	15-4	16-4	S08		
1	0	0	0	同様	0	-	-	平田	-	S	-	O	PD	-	15-16	16-15	S09		
1	0	0	0	同様	0	4.4	0.6	彫状	M	D	F	O	O	-	15-10	16-11	S10		
1	1	0	0	同	0	18.8	13.7	自然面	L	S	F	O	O	-	15-5	16-7	S11		
0	2	0	0	同	0	-	-	-	-	O	O	O	-	-	-	15-12	-	S12	
0	1	1	0	0	0	-	-	-	-	F	O	PP	-	-	-	15-13	-	S13	
1	0	1	0	同	0	2.9	1.1	彫状	L	D	H	O	O	-	-	-	15-14	-	S14
1	0	0	0	同	0	14.7	7.1	山型	L	D	O	D	-	-	15-7	16-9	S15		
1	1	0	0	同様	0	6.7	0.8	彫状	M	D	S	O	O	-	15-17	16-20	S16		
0	1	0	0	同	0	6.7	2.7	凸状	R	D	-	O	D	-	15-18	16-18	S17		
-	0	1	1	0	0	-	-	-	-	S	F	O	P	-	-	-	15-19	-	S18
1	0	0	0	同	0	2.8	0.9	彫状	Le	D	S	O	O	-	-	-	15-19	-	S19
1	0	0	0	同様	0	1.3	0.5	点状	Re	D	O	O	O	-	-	-	15-20	-	S20
-	0	1	1	同	0	-	-	-	-	D	F	O	P	-	-	-	15-21	-	S21
1	0	0	0	同様	0	1.3	0.5	点状	M	D	-	O	O	未端ガザリ	-	-	15-22	-	S22
1	0	0	0	同様	0	5.2	1.9	平田	M	F	H	O	O	-	-	-	15-23	-	S23
-	0	0	0	同	0	-	-	-	-	-	O	PD	-	-	-	15-24	-	S24	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	15-25	-	S25
-	1	0	0	0	0	-	-	-	-	F	O	PLL	摩滅面	-	-	-	15-26	-	S26
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	15-27	-	S27
-	0	1	0	同	0	-	-	-	-	-	O	PD	-	-	-	15-28	-	S28	
-	1	1	0	同	0	-	-	-	-	F	O	P	-	-	-	15-29	-	S29	
-	0	1	0	0	0	-	-	-	-	S	F	O	P	-	-	-	15-30	-	S30
0	0	0	0	同	0	10.5	3.7	凸状	R	S	-	O	D	-	15-14	16-14	S31		
1	0	0	0	同	0	3.3	1.0	平田	M	S	F	O	O	-	-	-	15-32	-	S32
0	1	1	0	同	0	9.6	4.4	山型	M	D	O	DD	-	-	15-6	16-8	S33		
0	0	1	1	0	0	-	-	-	-	O	O	P	-	-	-	15-34	-	S34	
-	0	1	0	同	0	-	-	-	-	F	O	PP	-	-	-	15-35	-	S35	
0	0	0	0	同	0	-	-	-	-	F	O	P	多刃削的擦	-	-	15-36	-	S36	
-	0	1	1	同	0	-	-	-	-	F	O	PLD	-	-	-	15-37	-	S37	
1	0	0	0	同	0	1.0	1.3	点状	M	D	F	O	O	-	-	-	15-38	-	S38
-	0	0	0	同	0	-	-	-	-	H	O	P	-	-	-	15-39	-	S39	
1	0	0	0	同	0	4.1	1.4	平田	Le	S	H	O	O	-	-	-	15-40	-	S40
1	0	0	0	同	0	11.9	4.0	平田	L	D	F	O	O	-	15-11	16-10	S41		
-	1	0	0	0	0	-	-	-	-	F	O	O	P	粗粒部分の擦片	-	-	15-42	-	S42
-	0	0	0	同様	0	-	-	-	-	-	-	-	PPD	-	-	15-43	-	S43	
1	0	0	0	同	0	11.5	4.5	凸状	R	F	F	O	O	-	15-13	16-13	S44		
0	2	1	0	0	0	-	-	-	-	D	O	P	-	-	-	15-45	-	S45	
0	0	1	0	横	0	6.2	1.5	平田	M	S	-	O	D	-	15-22	16-19	S46		
0	0	0	0	同様	0	7.8	2.6	調整	-	-	O	D	-	-	-	15-47	-	S47	
-	0	1	0	0	0	-	-	-	-	F	O	PR	-	-	-	15-48	-	S48	
-	0	1	0	0	0	-	-	-	-	F	O	P	15-21	16-21	S49				
-	0	1	0	同	0	-	-	-	-	F	O	P	-	-	-	15-50	-	S50	
0	0	0	0	横	0	9.5	1.3	彫状	M	F	O	O	O	-	-	15-51	-	S51	
1	0	0	0	同様	0	-	-	-	-	F	O	P	-	-	-	15-52	-	S52	
1	0	0	0	同	0	15.0	3.6	山型	M	D	F	O	O	-	15-12	16-12	S53		
-	0	0	0	同様	0	-	-	-	-	F	O	P	-	-	-	15-54	-	S54	
-	0	2	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	15-55	-	S55	
-	0	2	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	15-56	-	S56	
-	0	1	1	同	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	15-57	-	S57	
-	0	1	1	同	0	-	-	-	-	S	O	PL	-	-	-	15-58	-	S58	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	15-59	-	S59	
0	1	0	0	同様	0	17.0	8.3	自然面	L	D	-	O	DD	-	18-1	19-1	S61		
0	1	1	1	同	0	20.1	11.5	自然面	-	D	F	O	P	-	18-2	19-2	S62		



1. 発掘調査区全景（北から）



2. 石器出土状況（北西から）

図版 20 発掘調査区全景、石器出土状況



石器出土状況（南東から）



石器出土状況（東から）



調査風景（北から）



調査風景（南から）



石刃（33）出土状況（上）  
同インプリント（下）



剥片（49）出土状況（上）  
同インプリント（下）



剥片（1）出土状況（上）  
同インプリント（下）

図版 21 石器出土状況、発掘調査風景



剥片（2）出土状況（上）  
同インプリント（下）

模形石器（6）出土状況（上）  
同インプリント（下）

剥片（3）出土状況（上）  
同インプリント（下）

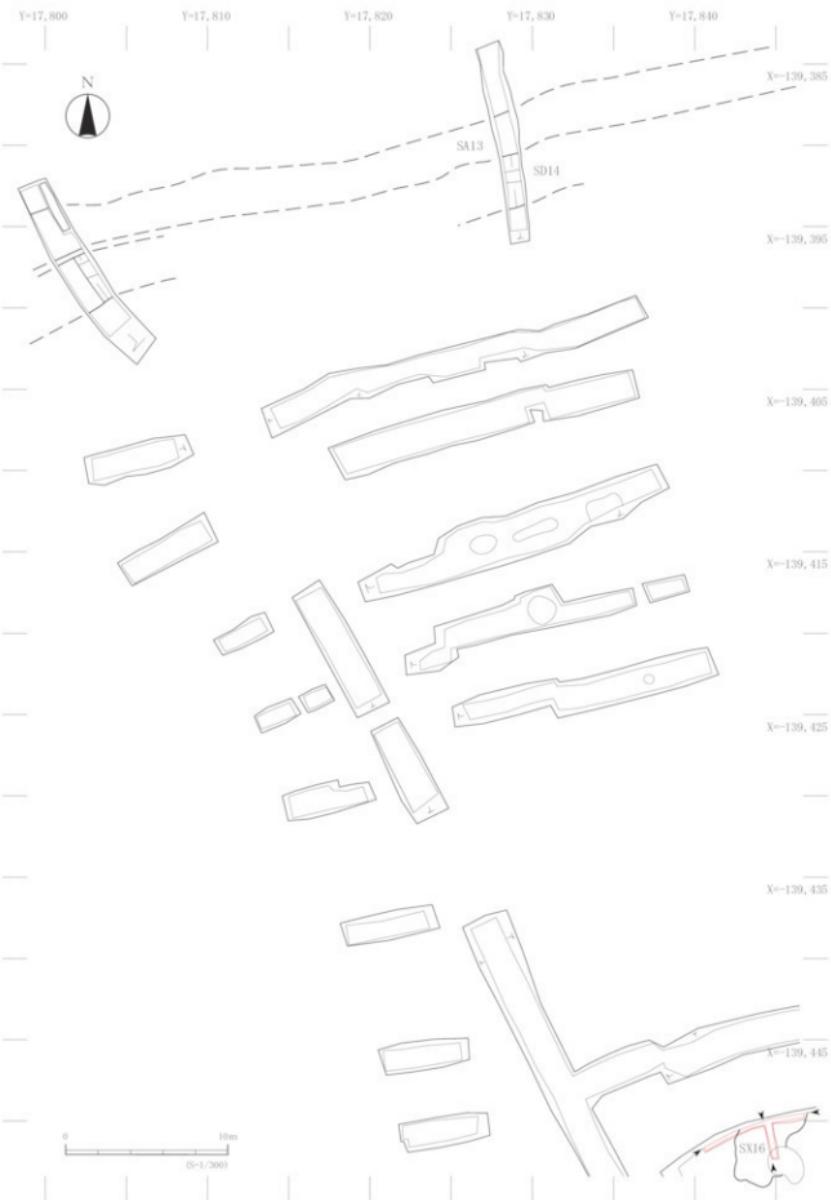


剥片（21）出土状況（上）  
同インプリント（下）

剥片（12）出土状況（上）  
同インプリント（下）

剥片（13）出土状況（上）  
同インプリント（下）

図版 22 石器出土状況



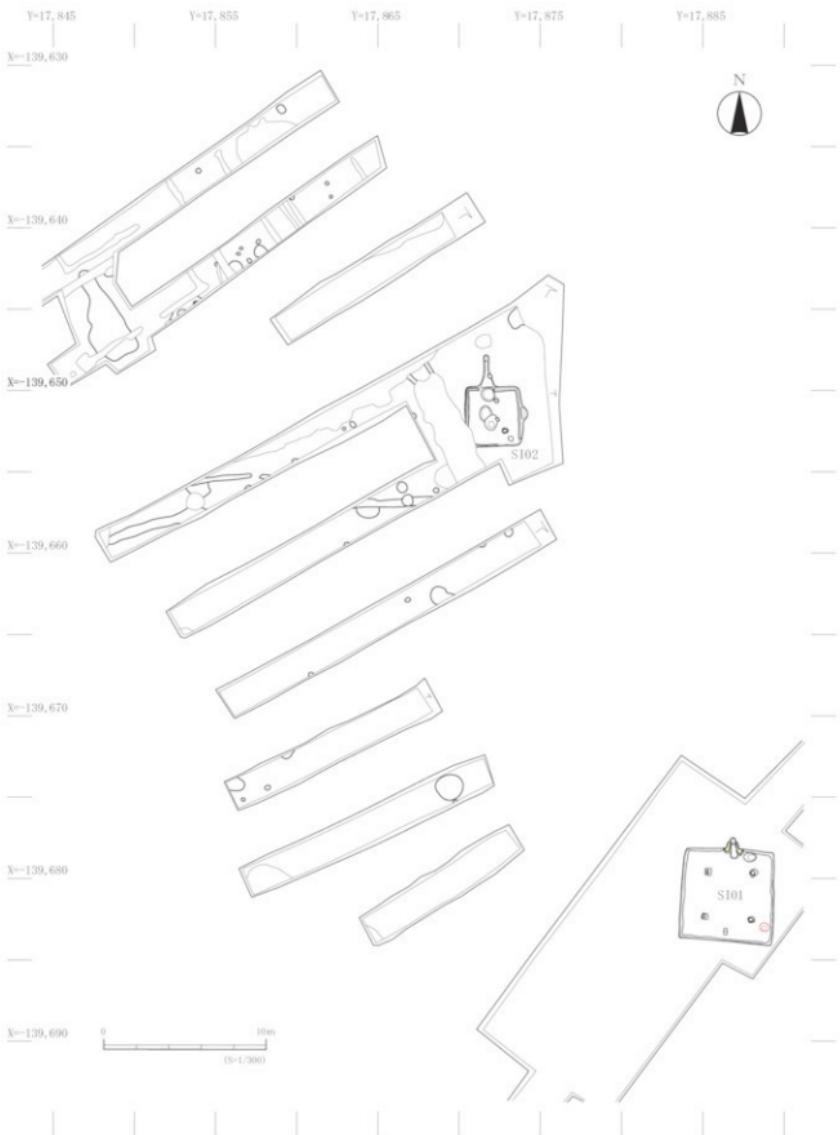
図版23 遺構配置図(1)



図版24 遺構配置図(2)



図版25 遺構配置図(3)



図版26 遺構配置図(4)



平成 26 年度調査区全景（北から）



平成 26 年度調査区全景（南西から）

図版 27 調査区全景（1）

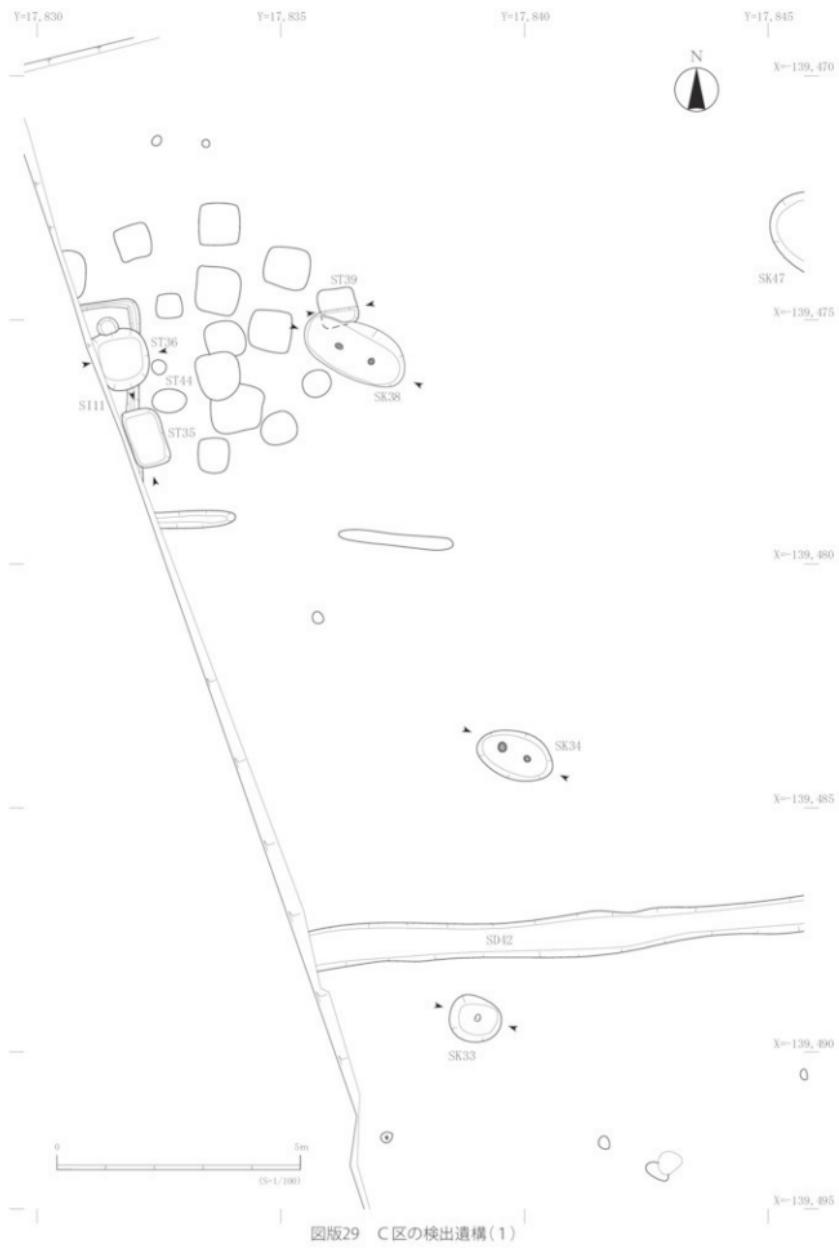


平成 26 年度調査区全景（上から）

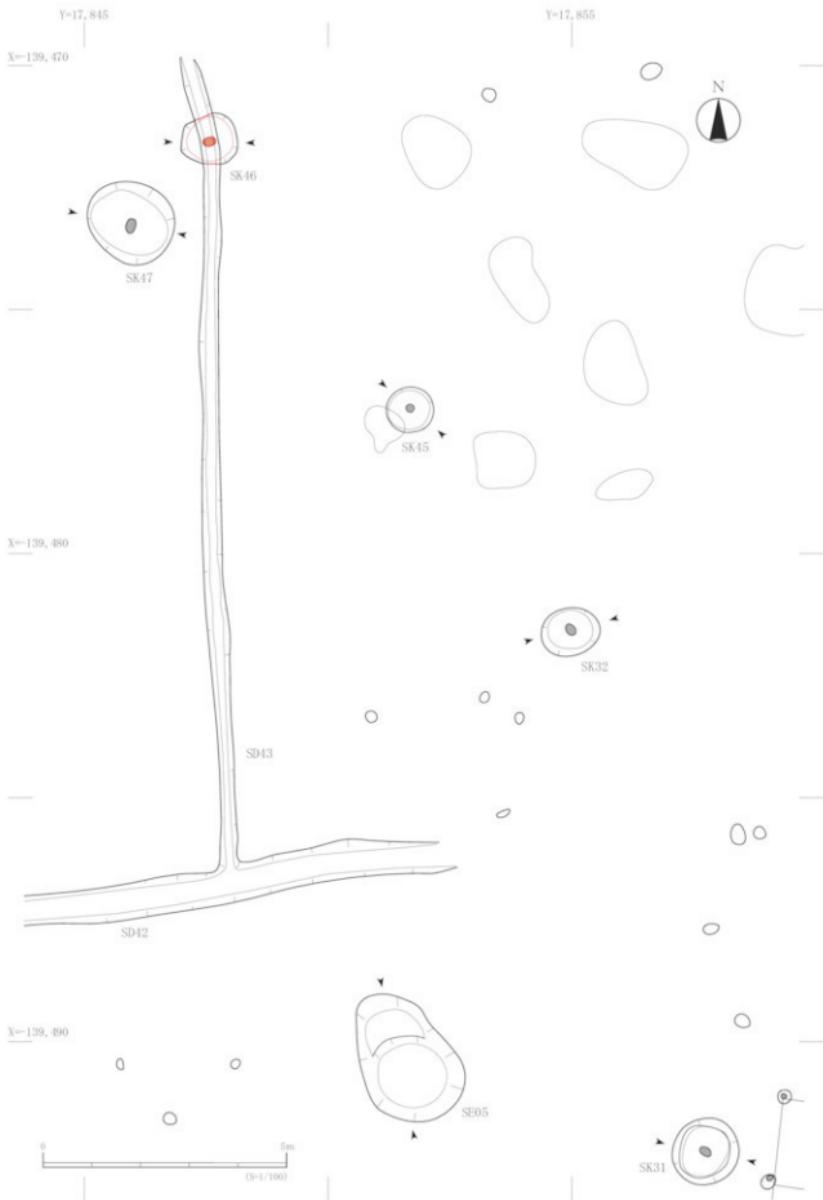


平成 26 年度調査区中央～南の稜出造構（北から）

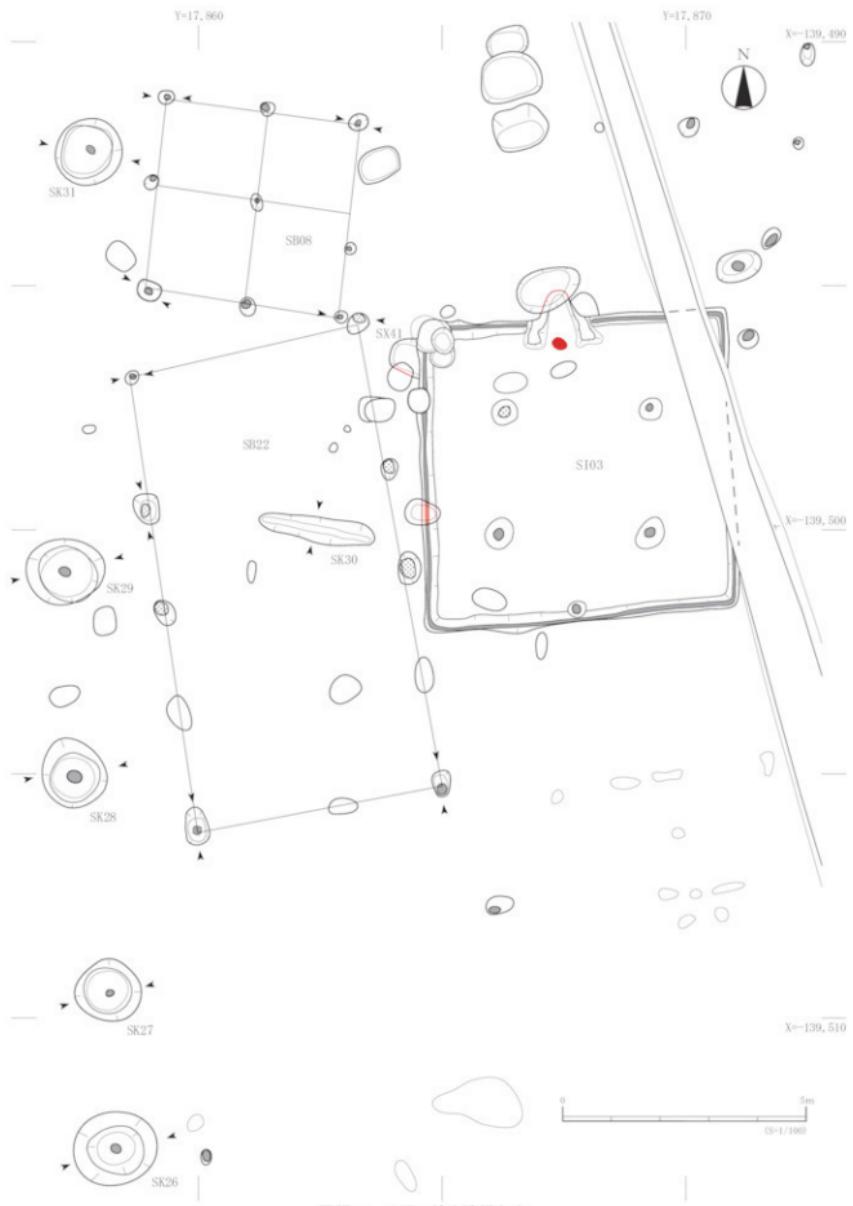
図版 28 調査区全景（2）



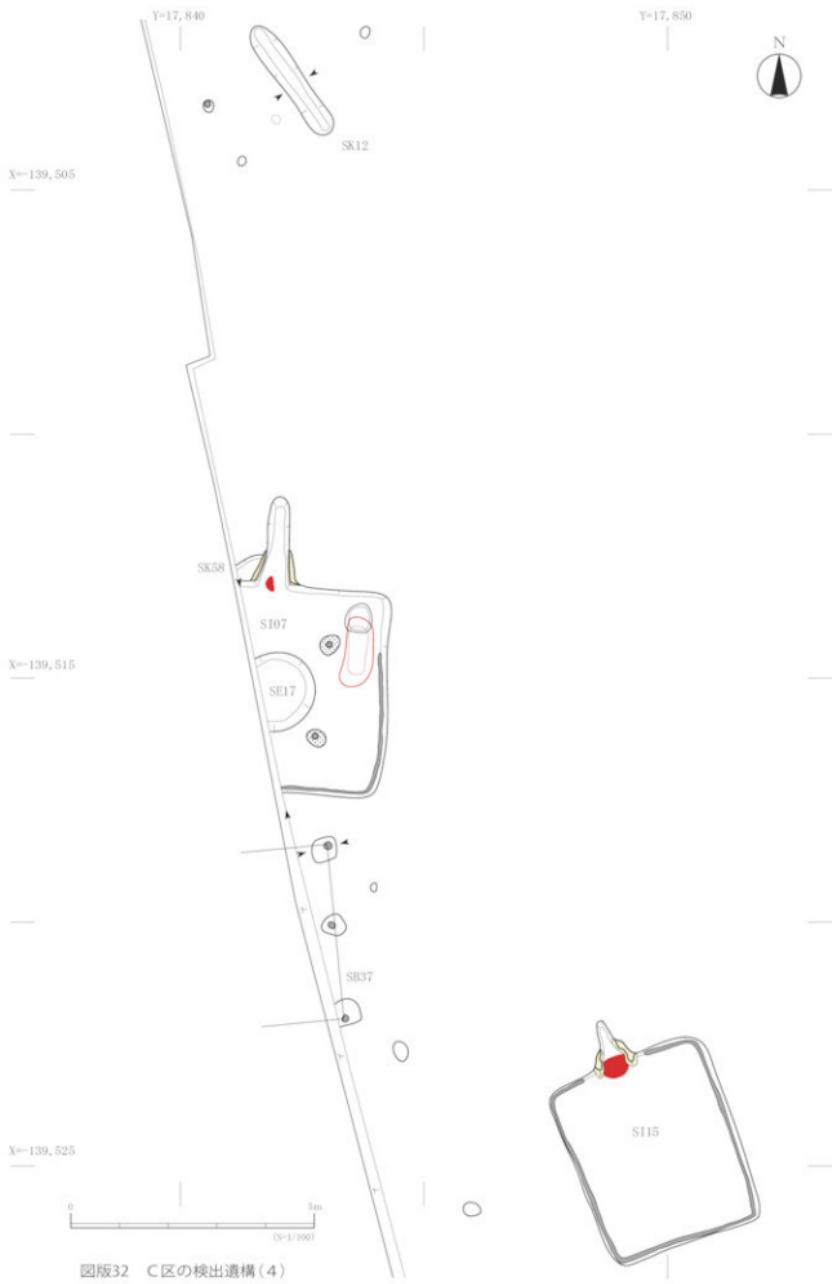
図版29 C区の検出遺構(1)



図版30 C区の検出遺構(2)



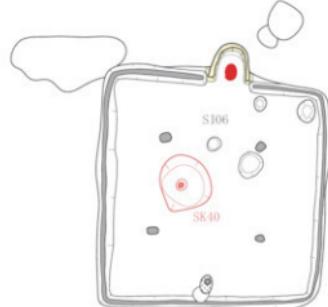
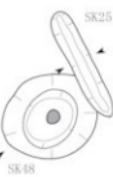
図版31 C区の検出遺構(3)



図版32 C区の検出遺構(4)

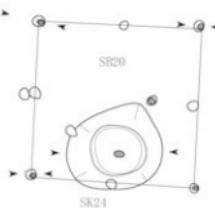
Y=17, 855

Y=17, 865

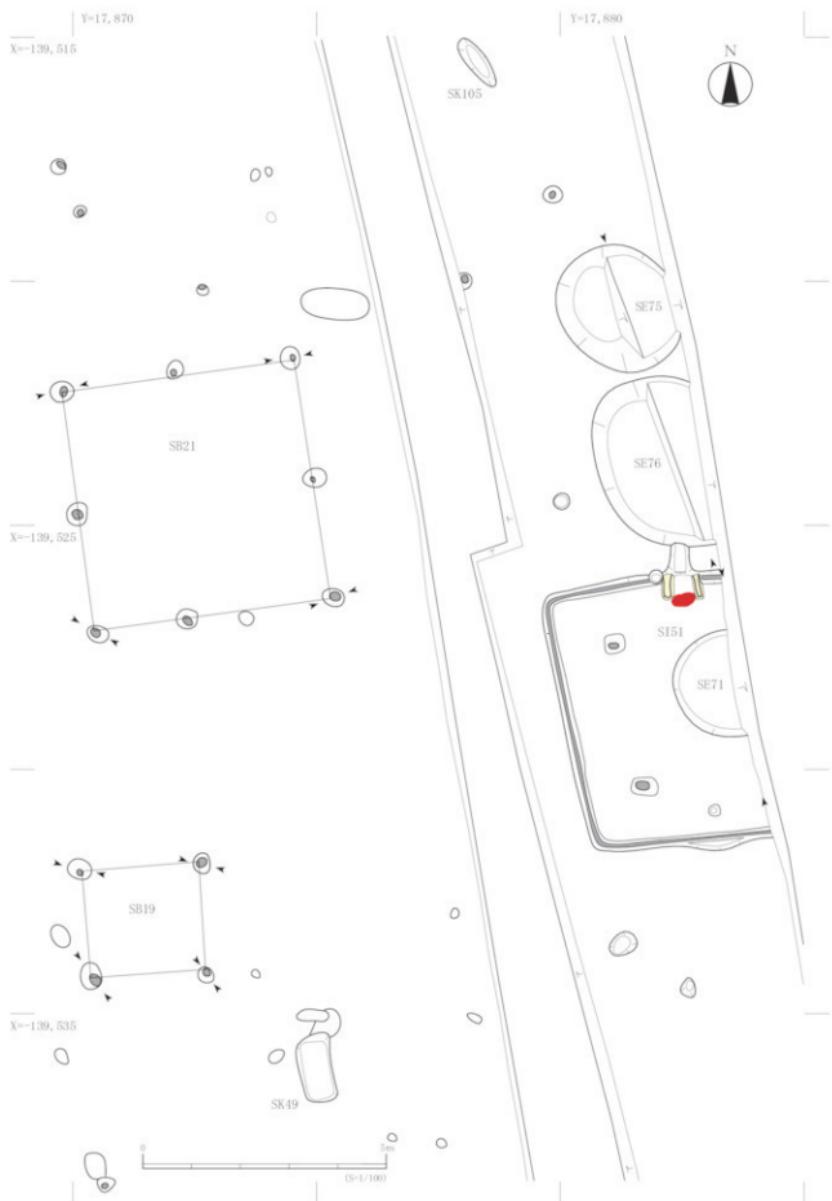


X=-139, 529

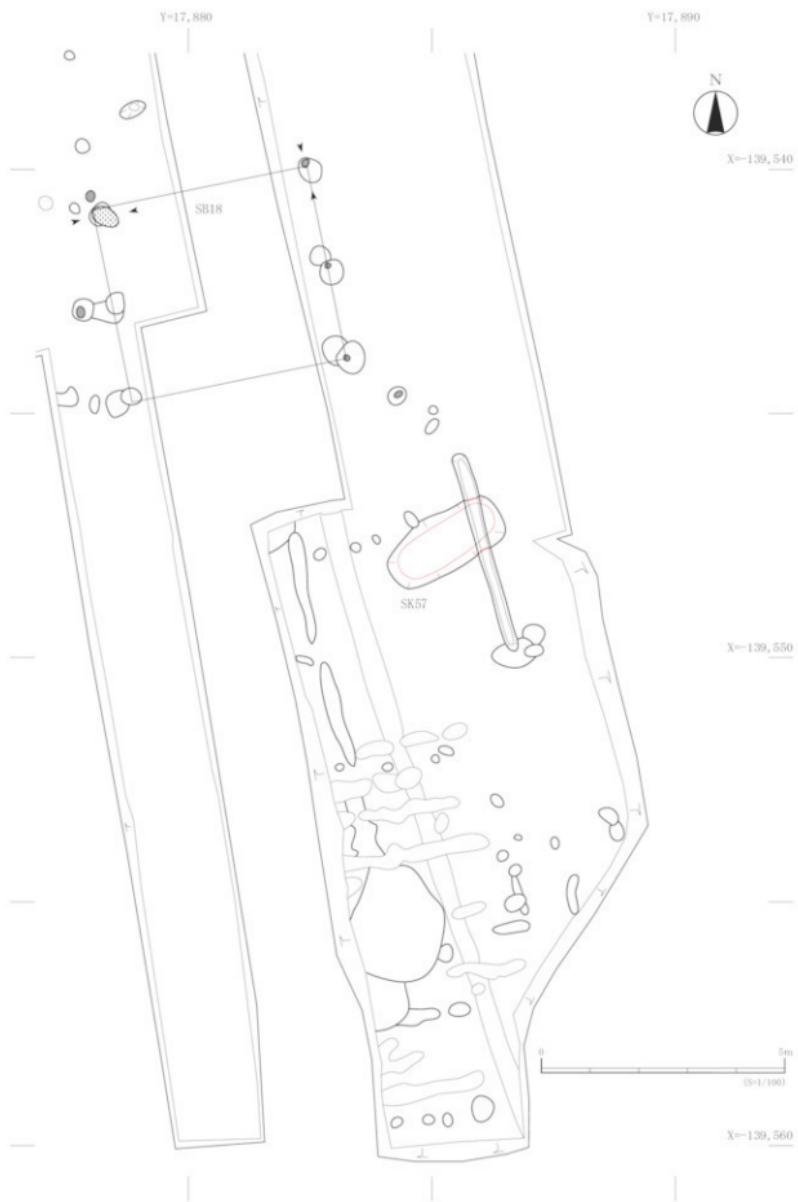
X=-139, 530



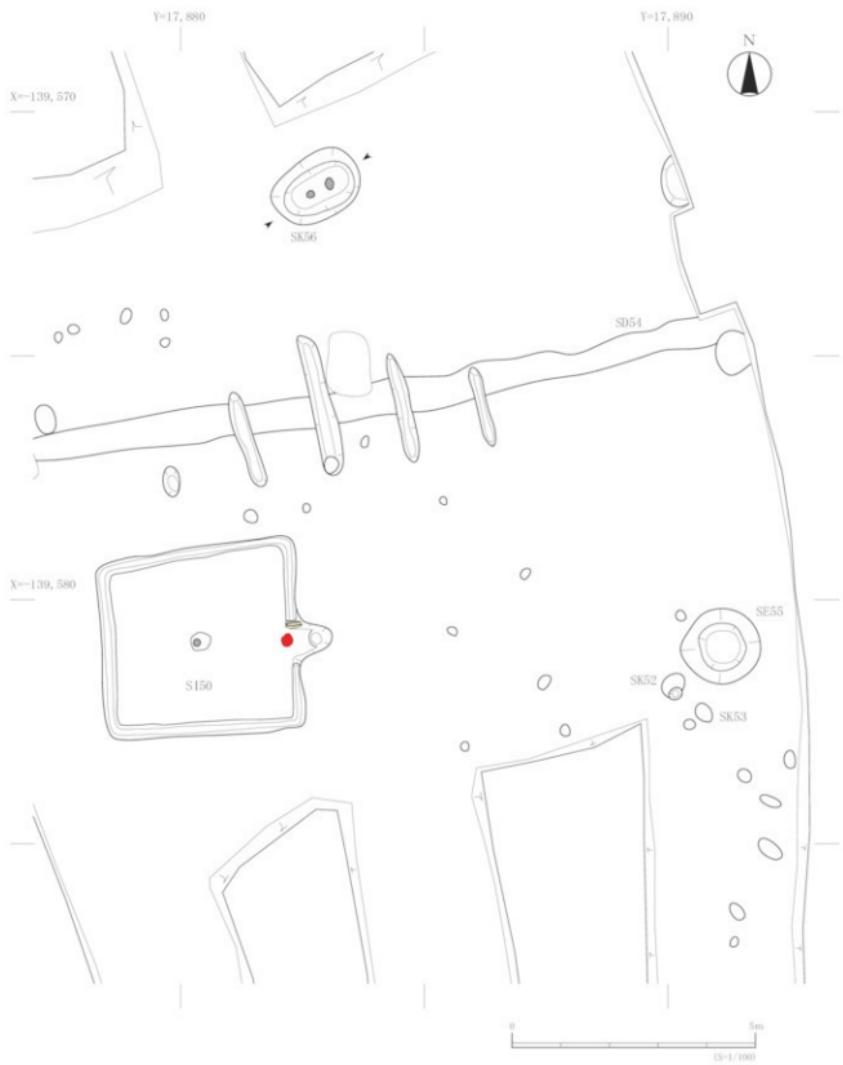
図版33 C区の検出遺構(5)



図版34 C区の検出遺構(6)



図版35 C区の検出遺構(7)



図版36 C区の検出遺構(8)

## 2. 縄文時代以降

これまでの本遺跡の発掘調査成果から、遺構の年代は縄文時代、飛鳥～平安時代、江戸時代に大別できる。縄文時代の遺構は、C区で確認した陥し穴群とD区の遺物包含層であり、飛鳥時代～平安時代の遺構は、A区とC区で確認した竪穴住居跡とC区の掘立柱建物跡である。江戸時代より新しい遺構は、A・C・D区で確認した。主なものとして、A・C区の掘立柱建物跡、井戸跡、墓跡、溝跡、小溝状遺構群、D区の土壙と空堀があげられる（図版23～26）。以下、時代別に記述を行う。

## 3. 縄文時代

### (1) 陥し穴

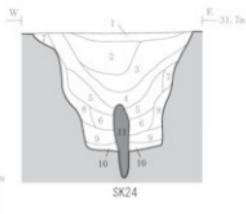
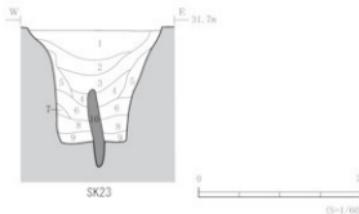
縄文時代の陥し穴はC区で22基確認しており、形態からA：平面が円形で底中央に逆茂木が1本立てられるもの、B：平面が楕円形で穴底の長軸に合わせて逆茂木が2本立てられるもの、C：平面が溝状に細長いもの、いわゆるTピットの3タイプに分けられる。類型別の数は、A類が14基、B類が5基、C類が3基で、A類が最も多い。

陥し穴は、類型毎に規模や逆茂木の太さに共通点が多い。他遺構との重複が少なく、遺物はわずかに出土したのみである。このため、遺構毎の記述は行わず、概要を述べることとし、個々のデータは表6にまとめた。

#### 【A類】（図版37～41）

平面が円形で底中央に逆茂木が1本立てられるものである（SK23・24・26～29・31～33・40・45～48）。SK33を除いて、C区北端の山際から調査区中央を4～10m離れて南北に並んでいた。他遺構と重複する例が少なく、SK24とSK40はそれぞれSB20建物跡、SI06住居跡より古い。

規模は確認面の直径が1.1～2.0mで、深さは0.9～1.5m、断面形は箱形が多い（14基中10基）。逆茂木は径が8～20cmで、掘方はないことから、片方の先端を尖らせて底面中央に打ち込んだ後、穴側の露出した先端を尖らせて使用したと考えられる。



No.	土色	土性	混入物など	参考
1	黒褐色(10YR2/3)	シルト		
2	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	炭化物を含む	
3	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト		
4	灰黒褐色(10YR4/2)	粘土		
5	灰~黄褐色(10YR4/3)	砂質シルト		
6	灰~黄褐色(10YR5/4)	粘土		埋蔵底土
7	灰~黄褐色(10YR6/4)	粘土		
8	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト		
9	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	炭化物を含む	
10	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト		枯れ跡

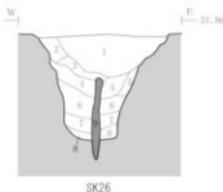
No.	土色	土性	混入物など	参考
1	黒褐色(10YR2/3)	粘土質シルト		
2	褐色(10YR4/4)	粘土質シルト		
3	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト		
4	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト		
5	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト		
6	黒褐色(10YR2/3)	粘土質シルト		
7	灰~黄褐色(10YR4/3)	粘土質シルト	塊状ブロックを含む	
8	灰~黄褐色(10YR4/3)	粘土質シルト	塊状ブロックを多層に含む	埋蔵底土
9	褐褐色(10YR3/3)	粘土質シルト		
10	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト		
11	黒褐色(10YR3/2)	シルト		枯れ跡



SK23 完掘写真（北から）



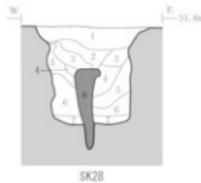
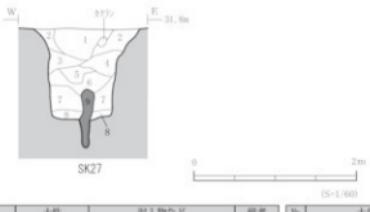
SK24 完掘写真（北から）



SK26 完掘写真（北から）

No.	土色	土性	混入物など	参考
1	灰~黄褐色(10YR4/3)	シルト質粘土	塊状化粘土小ブロックを含む	
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト質粘土		
3	黒褐色(10YR3/1)	シルト質粘土		
4	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土		
5	褐褐色(10YR3/3)	シルト質粘土		
6	シルト質粘土		塊状化粘土・小・ブロックを含む	
7	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	塊状化粘土小ブロックを多く含む	
8	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	塊状化粘土小ブロックを含む	
9	褐褐色(10YR3/3)	シルト質粘土	塊状化粘土小ブロックを含む	枯れ跡

図版 37 陥し穴A類 (1)－SK23・24・26



#	土色	土性	埋入物など	備考
1	にぶい 黒褐色(10YR4/3)	シルト質粘土	黒褐色粘土小ブロックを含む	
2	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト		
3	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	地山ブロックを少し含む	
4	黒褐色(10YR2/2)	シルト質粘土	地山ブロックを少し含む	
5	黒褐色(10YR2/3)	粘土質シルト		
6	黒褐色(10YR3/3)	シルト質粘土	黒褐色シルト質粘土ブロックを含む	
7	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを多く含む	
8	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを含む	
9	黒褐色(10YR3/3)	シルト質粘土		軽油跡

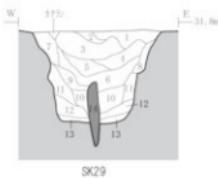
#	土色	土性	埋入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土		
2	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト		
3	黒褐色(10YR3/1)	シルト質粘土		
4	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土		
5	黒褐色(10YR3/3)	シルト質粘土	地山小ブロックを含む	
6	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを多く含む	
7	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを含む	
8	黒褐色(10YR3/3)	シルト質粘土	地山小ブロックを含む	軽油跡



SK27 完掘写真（北から）



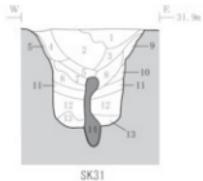
SK28 完掘写真（南から）



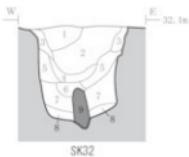
SK29 完掘写真（南から）

#	土色	土性	埋入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト		
2	黒褐色(10YR2/1)	粘土質シルト		
3	にぶい 黒褐色(10YR4/3)	シルト質粘土	地山粒を少量含む	
4	黒褐色(10YR2/2)	シルト質粘土		
5	灰褐色(10YR4/2)	シルト質粘土		
6	黒褐色(10YR3/1)	シルト質粘土		
7	黒褐色(10YR3/1)	シルト質粘土	黒褐色粘土小ブロックを含む	
8	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを少量含む	
9	黒褐色(10YR3/3)	シルト質粘土		
10	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土		
11	黒褐色(10YR3/3)	シルト質粘土	地山小ブロックを含む	
12	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを多く含む	
13	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを含む	
14	黒褐色(10YR3/3)	シルト質粘土		軽油跡

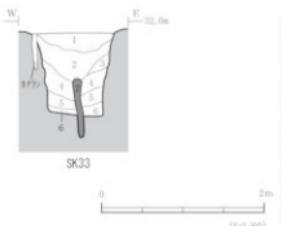
図版 38 陥し穴A類 (2) -SK27・28・29



番号	土色	土性	混入物など	参考
1	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト		
2	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト質粘土	黒褐色粘土小ブロックを含む	
3	黒褐色(10YR2/2)	シルト質粘土		
4	黒褐色(10YR3/1)	シルト質粘土	黒褐色粘土小ブロックを含む	
5	黒褐色(10YR3/1)	シルト質粘土		
6	暗褐色(10YR3/3)	シルト質粘土		
7	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロック少く含む	
8	黒褐色(10YR2/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを多く含む	
9	暗褐色(10YR3/3)	シルト質粘土		
10	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土		
11	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト質粘土		
12	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを多く含む	
13	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを含む	
14	暗褐色(10YR3/3)	シルト質粘土	地山小ブロックを含む	初期跡



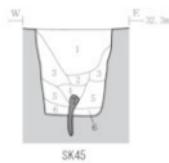
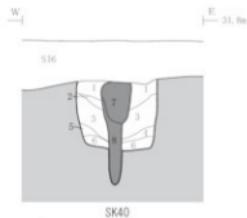
番号	土色	土性	混入物など	参考
1	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト		
2	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト質粘土	黒褐色粘土小ブロック含む	
3	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	地山小ブロックを少し含む	
4	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	黒褐色シルトブロックを含む	
5	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	黒褐色シルトブロックを含む	
6	黒褐色(10YR2/3)	粘土質シルト		
7	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを多く含む	
8	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを含む	
9	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト質粘土	地山小ブロックを多く含む	初期跡



番号	土色	土性	混入物など	参考
1	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト		
2	黒色(10YR2/1)	粘土質シルト	地山小ブロックを少く含む	
3	暗褐色(10YR3/4)	シルト質粘土	黒褐色粘土小ブロックを多く含む	
4	暗褐色(10YR3/3)	シルト質粘土	地山小ブロックを含む	
5	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを多く含む	
6	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを含む	
7	暗褐色(10YR3/3)	シルト質粘土	地山小ブロックを含む	初期跡



図版 39 陥し穴A類 (3) –SK31・32・33



No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト		
2	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト		
3	黒褐色(10YR2/3)	粘土質シルト	地山ブロックを含む	
4	黒褐色(10YR2/3)	粘土質シルト	地山ブロックを多く含む	
5	黒褐色(10YR2/3)	粘土質シルト		
6	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト		
7	暗褐色(10YR3/3)	シルト		机面跡
8	黒褐色(10YR2/3)	シルト		

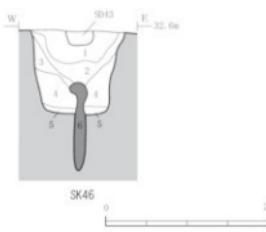
No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒色(10YR2/1)	粘土質シルト	地山小ブロックを少量含む	
2	黒褐色(10YK3/1)	シルト質粘土		
3	暗褐色(10YK3/4)	粘土質シルト	地山小ブロックを多く含む	
4	暗褐色(10YK3/3)	粘土質シルト		
5	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを多く含む	
6	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを少量含む	
7	暗褐色(10YR3/3)	シルト質粘土		E0808



SK40 断面写真（南から）



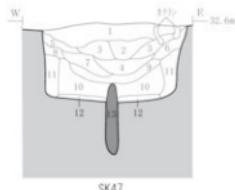
SK45 完掘写真（南から）



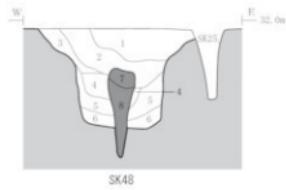
SK46 完掘写真（西から）

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒色(10YR2/1)	粘土質シルト		
2	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	地山ブロックを少し含む	
3	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	地山ブロックを多く含む	
4	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを多く含む	
5	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土		
6	暗褐色(10YR3/3)	シルト質粘土	机面跡	

図版40 陥し穴A類(4)-SK40・45・46



SK47



SK48

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10VR2/2)	粘土質シルト	黒褐色シルトブロックを含む	
2	黒褐色(10VR2/2)	粘土質シルト		
3	黒褐色(10VR2/3)	粘土質シルト		
4	黒褐色(10VR2/2)	粘土質シルト		
5	黒褐色(10VR2/3)	粘土質シルト	暗褐色粘土ブロックを含む	
6	褐色(10YR4/4)	粘土質シルト	暗褐色シルトブロックを少し含む	
7	黒褐色(10VR2/2)	粘土質シルト		
8	褐色(10YR3/3)	粘土質シルト		
9	褐色(10YR3/3)	粘土質シルト		
10	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山ブロックを多く含む	
11	褐色(10YR4/6)	粘土質シルト		
12	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土		
13	褐色(10YR3/3)	シルト質粘土		柱坑跡



SK47 完掘写真（南から）

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト		
2	にい・黒褐色(10YR4/3)	シルト質粘土	黒褐色粘土ブロックを含む	
3	黒褐色(10YR3/1)	シルト質粘土	黒褐色粘土ブロックを含む	
4	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土		
5	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを多く含む	
6	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを含む	
7	黒褐色(10YR3/3)	シルト質粘土		柱坑跡
8	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土		



SK48 完掘写真（北から）

図版 41 陥し穴A類 (5)－SK47・48

### 【B類】(図版 42)

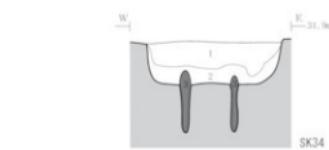
平面が梢円形で、穴底の長軸に合わせて逆茂木が2本立てられるものである(SK34・38・56・57・72)。C区北部に3基、南部に2基認められ、広い範囲に散在する。他遺構と重複するのは1例のみで、SK38はST39墓跡より古い。

規模は確認面の長径が1.6～2.5mで、深さは0.5～0.9m、断面形は箱形である。逆茂木は径が10～20cmで、掘方はないことから、片方の先端を尖らせて底面中央に打ち込んだ後、穴側の露出した先端を尖らせて使用したと考えられる。

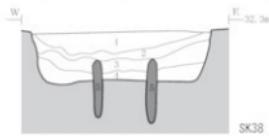
SK72の底面から、縄文時代早期末の梨木畠式土器が出土した(図版 42・43)。陥し穴からの遺物の出土はきわめて少ないとから、その年代を考える上で貴重な発見となった。

### 【C類】(図版 44)

平面形が細長い溝状となるもので、Tピットとも呼ばれる(SK12・25・30)。C区中央に3基散在する。規模は確認面の長径が2.4～2.6m、短径0.5～0.6m、深さは0.7～0.9mあり、断面形



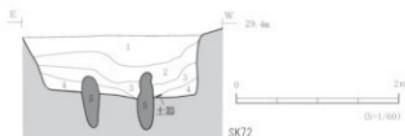
No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒色(10VR2/1)	粘土質シルト		
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト		
3	暗褐色(10YR3/3)	シルト	軽油跡	



No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒色(10VR2/1)	シルト質粘土	黒褐色粘土ブロック含む	
2	暗褐色(10YR3/3)	シルト質粘土	地山ブロックを少し含む	
3	黒褐色(10YR2/3)	シルト質粘土	地山ブロック含む	
4	黒褐色(10YR2/3)	粘土	地山ブロックを含む	
5	暗褐色(10YR3/3)	シルト質粘土	軽油跡	



SK38 完掘写真（南西から）



SK72 写真（北東から）



SK34 完掘写真（南西から）



No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR2/1)	シルト		
2	暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)	シルト		
3	暗褐色(10YR2/3)	シルト		
4	オリーブ褐色(2.5Y4/3)	シルト		
5	オリーブ褐色(2.5Y4/6)	シルト		
6	黄褐色(2.5Y5/3)	粘土質シルト		
7	灰黄色(2.5Y6/2)	粘土		軽油跡



SK56 完掘写真（北から）

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト		
2	暗褐色(10YR3/2)	シルト		
3	灰褐色(10YR4/2)	シルト		
4	灰褐色(10YR4/2)	シルト		
5	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土		軽油跡



SK72 織文土器出土状況写真（南から）

図版 42 陥し穴B類—SK34・38・56・72



図版43 SK72 土坑出土遺物

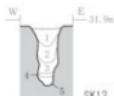
遺構No	分類	平面形	断面形	幅員(m)	深さ(m)	杭直径(cm)			堆積土の状況	備考	回収箇	
						数	直径	長さ			平面	断面
SK12	C	長楕円形	扁斗形	2.6×0.5	0.7	>	—	—	自然堆積		32	44
SK23	A	不規則形	上が開く扁形	1.7×1.7	1.4	1	15	95	自然堆積		33	37
SK24	A	不規則形	上が開く扁形	2.0×1.7	1.5	1	15	90	自然堆積	下平は径1.00m	33	37
SK25	C	長楕円形	扁斗形	2.4×0.5	0.9	>	—	—	自然堆積	SK48より新しい	33	44
SK26	A	円形	上が開く扁形	1.7×1.5	1.3	1	10	102	自然堆積	下平は径0.70m	31	37
SK27	A	円形	扁形	1.3×1.2	1.1	1	15	74	自然堆積		31	38
SK28	A	不規則形	扁形	1.5×1.3	1.2	1	16	150	自然堆積		31	38
SK29	A	不規則形	扁形	1.6×1.4	1.1	1	16	79	自然堆積		31	38
SK30	C	長楕円形	扁斗形	2.4×0.6	0.9	>	—	—	自然堆積		31	44
SK31	A	円形	扁形	1.4×1.4	1.2	1	20	85	自然堆積		31	39
SK32	A	円形	扁形	1.2×1.0	1.2	1	16	50	自然堆積		30	39
SK33	A	円形	扁形	1.1×0.9	1.0	1	8	74	自然堆積		29	39
SK34	B	楕円形	(浅い)扁形	1.6×1.0	0.5	2	10/14	70/76	自然堆積		29	42
SK38	B	楕円形	(深い)扁形	2.2×1.1	0.6	2	10/16	70/80	自然堆積		29	42
SK40	A	不規則形	扁形	1.2×1.0	1.4	1	16	127	自然堆積	SK6より古く、SK6で上平は壊される	33	40
SK45	A	円形	扁形	1.1×1.1	1.1	1	10	70	自然堆積		30	40
SK46	A	円形	扁形	1.1×1.0	1.0	1	16	108	自然堆積		30	40
SK47	A	楕円形	扁形	1.8×1.6	0.9	1	15	75	自然堆積		30	41
SK48	A	不規則形	上が開く扁形	1.9×1.8	1.2	1	15	107	自然堆積	SK25より古い、下平は径1.00m	33	41
SK56	B	楕円形	扁形	1.9×1.3	0.9	2	15/15	60/60	自然堆積		36	42
SK71	B	楕円形	扁形	2.5×1.2	0.8	2	10/10?	7?	自然堆積		35	—
SK72	B	楕円形	扁形	2.2×1.2	0.9	2	20	70	自然堆積	底面から圓文早期末、梨木頭式土器出土	24	42

\*A類の機械路は2木であるため、●●と表記した

\*A類の断面は円筒形、削るする過程で、上平が壊れて開く

\*A・B類の机は上下とも丸く、底から30~70cm打ち込んだ後、上を美らせている

表6 陥し穴属性表

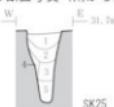


SK12

No.	土色	土性	混入物など	参考
1	黒褐色(10YR2/1)	シルト		
2	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	地山ブロックを含む	
3	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	地山小ブロックを多く含む	
4	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト		
5	灰黄褐色(10YR1/2)	粘土質シルト	地山小ブロックを多く含む	



SK12 断面写真（南から）



SK25

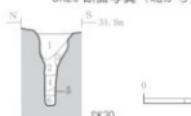


SK12 断面写真（南東から）

No.	土色	土性	混入物など	参考
1	黒褐色(10YK2/2)	シルト		
2	黒褐色(10YK2/3)	シルト		
3	暗褐色(10YR3/2)	シルト		
4	にごい-黄褐色(10YR5/4)	粘土質シルト		壁面風化
5	褐色(10YR4/4)	粘土質シルト		



SK25 断面写真（北から）



2m

0

(3-1/600)



SK25 断面写真（北西から）

No.	土色	土性	混入物など	参考
1	黒色(10YR2/1)	粘土質シルト		
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを含む	
3	灰褐色(10YR4/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを多く含む	
4	褐色(10YR4/4)	シルト質粘土	黒褐色シルト小ブロックを含む	
5	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト		
6	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト		



SK30 断面写真（西から）



SK30 完掘写真（西から）

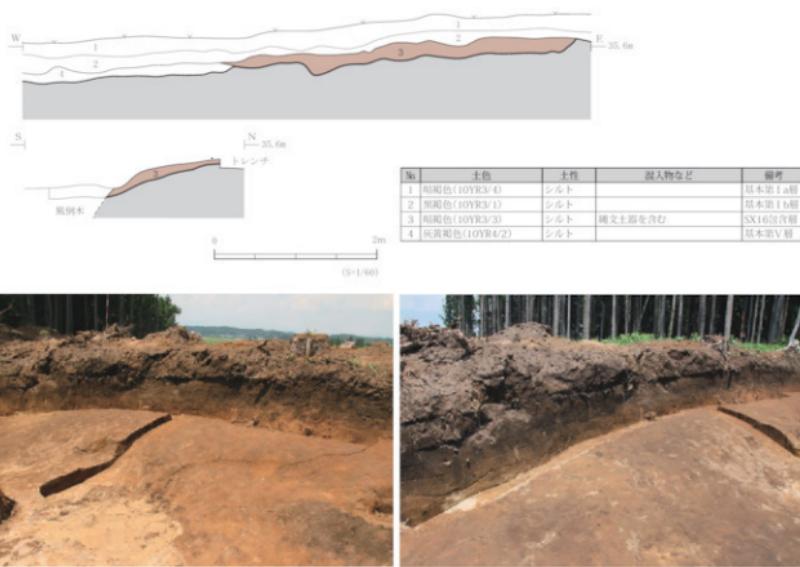
図版 44 陥し穴C類—SK12・25・30

は漏斗形である。

## (2) 遺物包含層

### 【SX16 遺物包含層】(図版 45)

D区頂部付近の南斜面で確認した遺物包含層で、範囲は東西 4.6 m、南北 4.0 m、厚さは 20cm 前後である。堆積土から縄文土器浅鉢が 2 個体出土した。文様がわかるものは、4 単位の山形突起が付き、平行沈線が施されている(図版 46)。縄文晩期後葉の大洞 A～A' 式期に位置づけられる。



図版 45 SX16 遺物包含層



編號	器別	器種	口徑	底徑	高	殘存	特徵		登錄
							形制	說明	
1	同文土器	鉢	(36.0)	11.0	(23.0)	4/5	山形突起(4單位),平行沈痕。口斜部及口緣內面有沈痕。L.R.圖文		136

圖版 46 SX16 遺物包含層出土遺物

## 4. 飛鳥～平安時代

竪穴住居跡を9軒、掘立柱建物跡を1棟確認した。住居跡の年代は8世紀前葉が7軒(SI01・03・06・07・11・15・50)、8世紀中葉～後半が2軒(SI02・51)である。前者はA区とC区に点的に分布するが、C区中央部のSI06・07・15は7～8m間隔で他の住居より近い関係にある。一方、後者はA区東端とC区南東部に1軒ずつ認められる。

自動車道調査区や浄水場調査区を参考にすると、8世紀前葉の住居は3～4軒を一つの単位として遺跡全体に分布する。8世紀中葉～後半は遺跡東端の自動車道調査区と西側のバイパス調査区で認められたが、前代に較べて住居数は著しく少ない。3～4軒単位でブロックを構成するとみられる。

SB37建物跡は、出土遺物から年代を特定できないが、江戸時代以降の掘立柱建物とは平面形や柱穴規模、埋土が異なる点から古代の建物跡と判断した。その場合、本遺跡の古代の遺構には飛鳥時代～平安時代のものがあること、周辺の集落跡でも掘立柱建物の年代が7世紀まで遡る可能性が指摘されていることから(栗原市教委2015a・2016)、飛鳥時代～平安時代のいずれかとみておきたい。

### (1) 竪穴住居跡

【SI01住居跡】(図版47～49)

〔位置・検出面〕A区南端の第VI層で確認した。

〔重複関係〕なし。

〔規模・平面形〕東西5.7m、南北5.6mほどの方形である。

〔方向〕東辺で測るとN2°Eである。

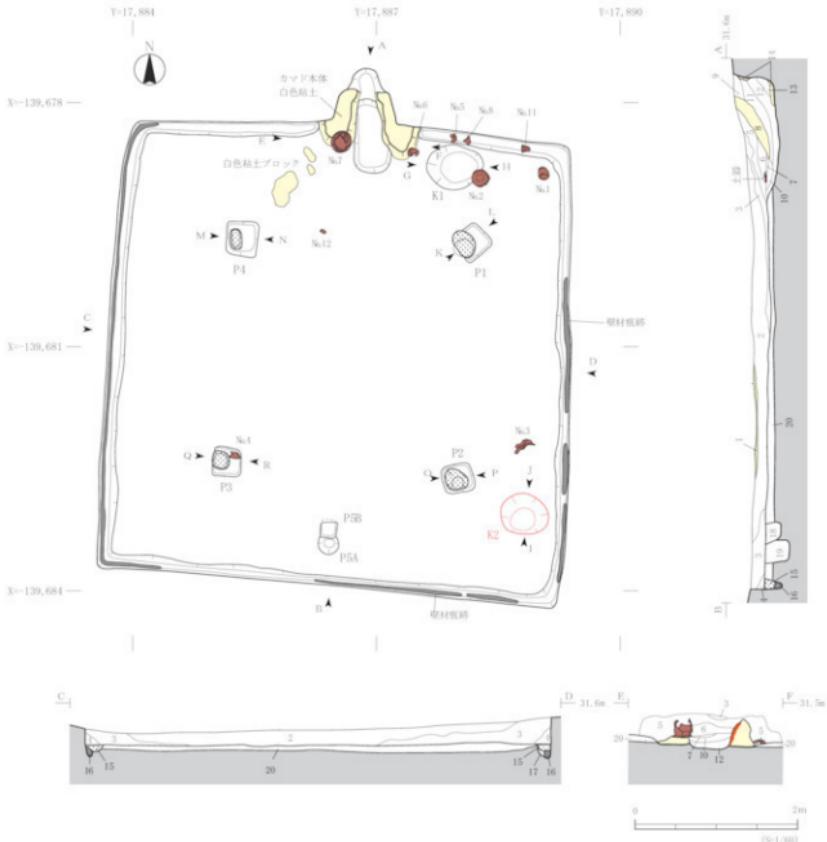
〔堆積土〕カマド部分を除く堆積土は大別4層に分けられた。1～3層はカマド破壊に伴う埋土の上に位置しており、層相からみて自然堆積と考えられる。1層は灰白色火山灰層で、その降下時には住居跡中央が窪んだ状態であったことを示している。

〔壁〕壁は急に立ち上り、壁高は最も残りのよい東辺中央で34cmある。

〔床面〕掘方埋土(黒褐色粘土質シルト)を床とする。

〔柱穴〕主柱穴は、床面の対角線上で4個確認した(P1～P4)。すべての柱穴で柱抜取穴を確認しているが、柱痕跡は25×14cmほどの長方形とみられる。掘方は一辺が33cm～42cmの隅丸方形で、埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。

〔カマド〕北壁中央部に付設された。本体は北壁を掘り込んで住居外側に突出し、その奥に短い煙道が付く。側壁や天井部は白色粘土で構築しており、左側壁の前端は土師器長胴甕を倒位に据えて焚口の補強を行っている(図版48)。一方、右側壁の前端には補強した甕が認められないこと、カマド左手前の床面上に本体構築材の白色粘土ブロックが認められることから、住居廃絶時に右側壁を中心にカマドを破壊していると考えられる。燃焼部内の堆積土は天井崩落土より下が本体破壊に伴う埋土と機能時の堆積土、上層は自然堆積土と考えられる。



番号	土色	土性	調入物など	備考
1	黒色(10YR2/1)	シルト	灰白色丸小土ブロックを少量含む	大別1種
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山粘土含む	大別2種
3	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	地山小プロックを含む	大別3種
4	黒褐色(10YR2/3)	粘土質シルト	地山小プロックを含む	大別4種
5	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	地山粘土含む、白色粘土小ブロックを少量含む	
6	黒褐色(10YR2/3)	粘土質シルト	地山粘土白色粘土ブロックを少額含む	赤空王上層
7	黒褐色(10YR2/3)	シルト質粘土	地土料-炭化物を含む	
8	にごり黄褐色(10YR6/3)	シルト質粘土	白色粘土-土体	カマド天井川源流
9	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地土料-炭化物を含む	
10	暗褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	地土料-炭化物粘土を多く含む	赤空王下層
11	暗褐色(10YR2/3)	粘土質シルト	地土料-炭化物粘土を含む	
12	明褐色(5YR6/6)	シルト質粘土	地土料-炭化物粘土を量多く含む、地山粘土を含む	カマド下層地堆積土
13	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	地土料-炭化物粘土を多く含む	
14	にごり黄褐色(10YR6/3)	シルト質粘土	白色粘土-土体	本体or赤空源流
15	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	地山小プロックを含む	壁根抜取層
16	暗褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	壁根面	
17	暗褐色(10YR4/2)	粘土質シルト	地山小プロックを含む	壁根堆方土
18	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	地山小プロックを含む	PSA壁根充穴土
19	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	木炭土等多量に含む、堅くしまる	瓶方土
20	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト		

図版 47 SI01 住居跡（1）



全 景（南から）



カマド（南から）



カマド焚口側壁断面（南から）

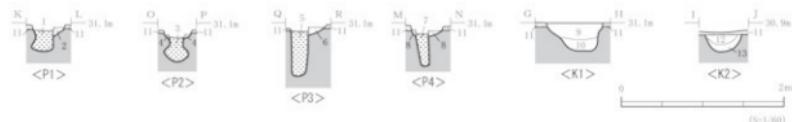


カマド断面（東から）



完掘後（南から）

図版 48 SI01 住居跡（2）



No.	土色	土性	副入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを含む	P1H抜取穴
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山ブロックを多く含む	P1埋土
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを含む	P2H抜取穴
4	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山ブロックを多く含む	P2埋土
5	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを含む	P3H抜取穴
6	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山ブロックを多く含む	P3埋土
7	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを含む	P4H抜取穴

No.	土色	土性	副入物など	備考
8	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山ブロックを多く含む	P4埋土
9	灰褐色(10YR4/3)	粘土質シルト	地山粘土質ブロック・地土砂を含む	K1埋土
10	黄褐色(10YR5/6)	シルト質粘土	灰褐色粘土ブロックを多く含む	P4埋土
11	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	地山砂を多量に含む、擦ぐじまる	P4埋土
12	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	地山ブロックを多量に含む	K2埋土
13	黄褐色(10YR5/6)	シルト質粘土		



P1 断面（南東から）



P2 断面（南から）



P3 完掘後（南から）



P4 完掘後（南から）

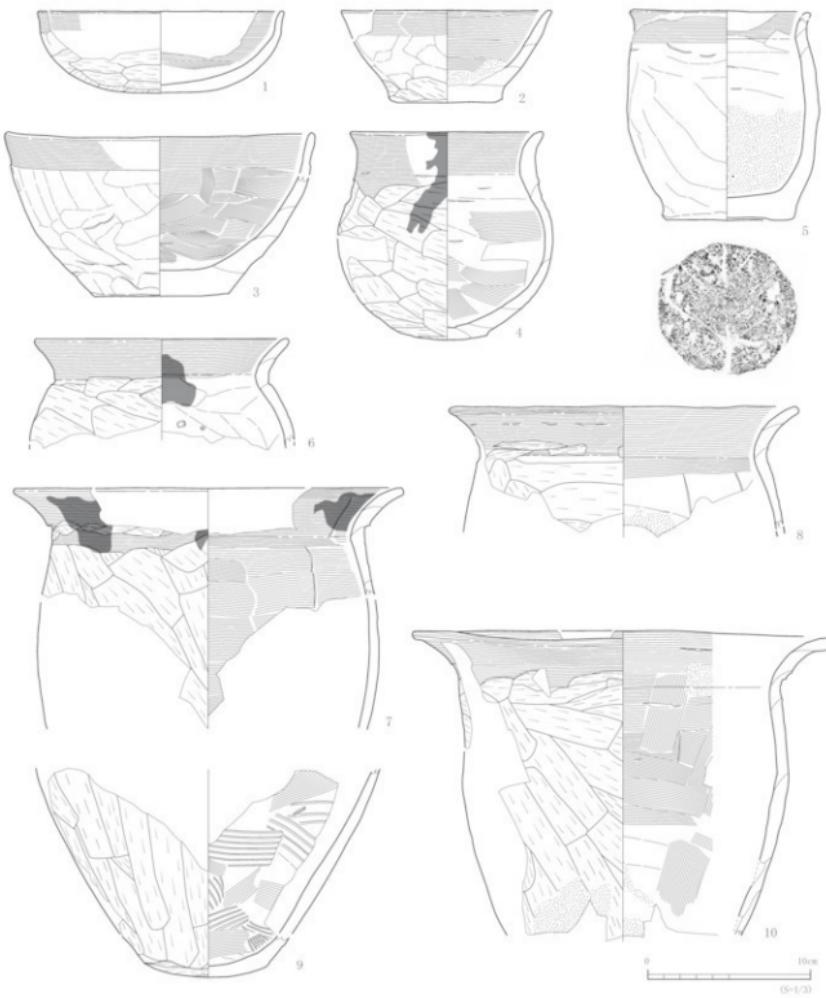


P5 断面（西から）



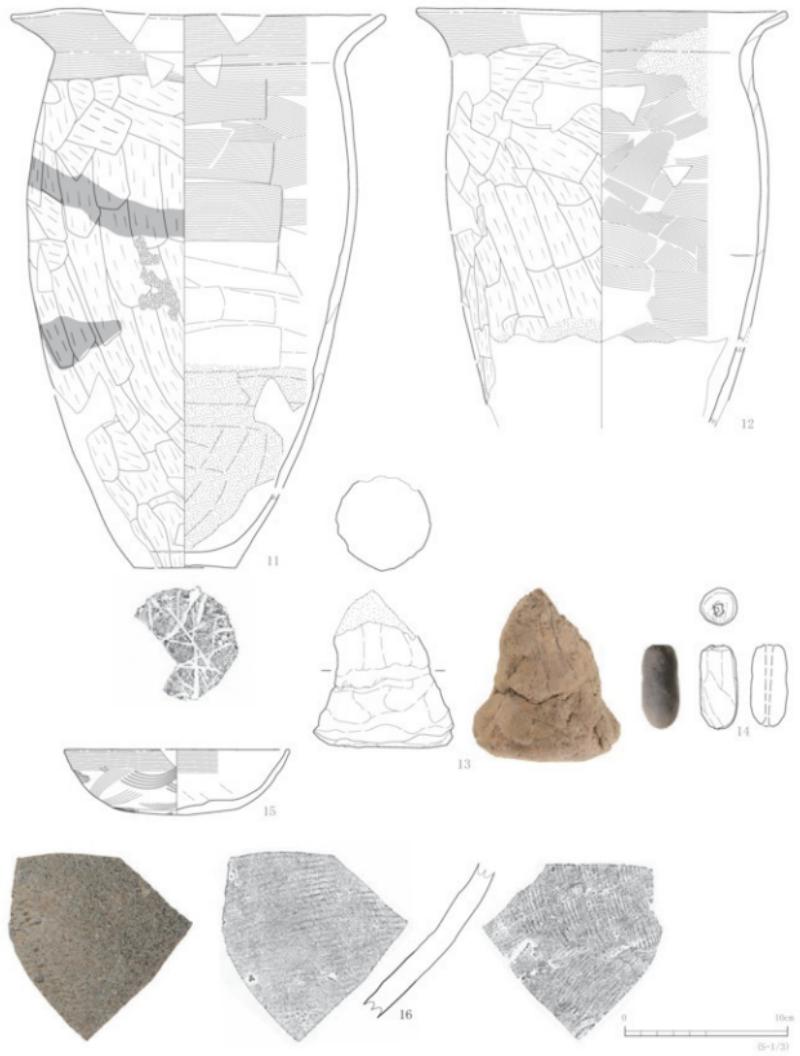
K1 断面（南から）

図版 49 SI01 住居跡（3）



No.	種別	器種	層位	口径	底径	高さ	残存	特徴	寸法(cm)
1	土師器	坪	(床面直上)	(15.0)	—	(5.0)	—	外:ヨコナデーナデケズリ 内:ナデ, 開束系土師器	17
2	土師器	ミニチャム	カマド・右壁(No.6)	12.8	6.6	5.6	1/2	外:ヨコナデ・ケズリ・ヨコナデ 内:ナデ	11
3	土師器	鉢	(床面)No.2)	(18.8)	8.3	10.1	2/3	外:ナデ・ヨコナデ 内:ナデ底部ヘラケズリ, 製作時に長軸腰を鋸に転化	2
4	土師器	小形甕	壁材瓦取溝(No.8)	(12.0)	—	(12.7)	1/3	外:ヨコナデケズリ 内:ナデ・ヨコナデ, 開束系土師器, 外面にふきこぼれ	14
5	土師器	小形甕	(床面)No.1)	(11.0)	8.0	(12.4)	ほぼ完形	外:ナデ・ヨコナデ 内:ヨコナデ・ナデ, 底部木型痕	1
6	土師器	小形甕	的壁穴2層	(15.4)	—	—	1/8	外:ヨコナデケズリ 内:ナデ・ヨコナデ, 開束系土師器, 内面に裂物底	13
7	土師器	長胴甕	(床面直上)No.4)	(23.4)	—	—	1/5	外:ヨコナデケズリ 内:ナデ・ヨコナデ, 開束系土師器, 口縁内面に又突脛	7
8	土師器	長胴甕	床面	(21.0)	—	—	1/8	外:ヨコナデケズリ 内:ナデ・ヨコナデ, 開束系土師器	3
9	土師器	長胴甕	床面直上	—	—	—	1/8	内:タズリ 内:ナデ・ハゲメーナデ, 開束系土師器	8
10	土師器	長胴甕	床面直上	25.5	—	—	1/3	外:ヨコナデケズリ 内:ヨコナデ・ナデ, 開束系土師器	4

図版 50 S101 住跡出土遺物 (1)



図版 51 SI01 居住跡出土遺物 (2)

番号	種別	器種	部位	口径	底径	器高	残存	特徴		(法量:cm)
								外:ヨコナデ・ケヌリ 内:ナデ・ヘラナデ	木製底、脚部外面に粘土付着、束縛系土器	
11	土器器	長脚甕	カマド丸壁(367)	22.8	6.5	39.9	1/2			12
12	土器器	長脚甕	床面直上(224)	—	—	—	1/3	外:ヨコナデ・ケヌリ 内:ナデ・ヘラナデ	木製底	6
13	土器器	支脚	壁材抜取溝(3611)	—	8.4	—	3/4	体部ナデ	底部:木製前・粘土付着	13
14	土器器	土鍋	床面直上(3612)	—	—	—	完形	厚:2.3 高:5.1 直径:0.7 ナヂ仕上げ		9
15	土器器	坪	側面壁上	13.6	—	(3.5)	1/3	外:ヨコナデ・ハサメ(体部造孔跡) ナデ	内:ナデ底土に金雲母	18
16	石器器	鉢	側面壁上	—	—	—	丸底	外:平行タコト 内:同心円アーチ貝・ナデ		19



17



18

10cm

(3×1/3)

No.	種別	器種	部位	口径	底径	高さ	残存	特徴	
								外	内
17	陶器部	両台付	堆積土	13.2	(4.7)	1/3	外:ロクロナデ 底:内側へラケズリ	29	
18	陶器部	口	堆積土	9.4	—	—	内:ロクロナデ 底:内側へラケズリ→ロクロナデ 内:ロクロナデ 底:内側へラケズリ→ロクロナデ	16	



2



18



17



5



3



10

図版 52 SI01 住居跡出土遺物（3）



図版 53 SI01 住居跡出土遺物（4）

〔周溝・壁材痕跡〕周溝はカマド部分を除いて全周し、壁材の抜取痕が認められる。北辺を除く各辺では、抜取穴の下で幅 10cm ほどの壁材痕を確認した。掘方は幅 15 ~ 20cm、深さは 20 ~ 25cm である。

〔貯藏穴〕カマド右脇にある（K1）。長軸 70cm、短軸 54cm の梢円形で、深さは 36cm、断面形は不整な逆台形である。堆積土は 2 層に分けられるが、人為的に埋戻されている。

〔その他の施設〕南辺中央の壁際から 25cm 内側で柱穴（P5）を確認した。新旧 2 時期あり、A 期は径 25cm の円形で、全体が柱抜取穴とみられる。B 期は一辺が 24cm の隅丸方形で、柱痕跡は確認していない。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。カマド反対側の南壁中央にあること、断面形が壁に向けて傾くことから、入口の梯子を固定した穴（入口ピット）と考えられる。

また、住居南東隅の掘方埋土下から土坑を検出した（K2）。長軸 57cm、短軸 48cm の梢円形で、深さは 24cm あり、断面形は逆台形である。堆積土は 2 層に分けられるが、人為的に埋戻されている。

〔出土遺物〕床面から土師器鉢・小形甕・長胴甕、K1 から土師器中形甕、P2 柱抜取穴から土師器甕、周溝壁材抜取痕から土師器小形広口壺・長胴甕や円筒状の土製支脚、床面直上から土師器壺・長胴甕・

広口壺や土鉢、カマド堆積土から土師器甕、住居堆積土から土師器甕・甕、須恵器高台甕・壺・甕などほか、カマド焚口左壁の補強材として土師器長胴甕、掘方埋土から土師器甕・甕が出土した（図版 50～53）。土師器はいずれも非クロコ調整である。

【SI02 住居跡】（図版 54・55）

〔位置・検出面〕 A区東部の第VI層で確認した。

〔規模・平面形〕 東西 3.6 m、南北 3.7 m ほどの隅丸方形である。

〔方向〕 東辺で測ると N 1°W である。

〔堆積土〕 カマド部分を除く堆積土は大別 3 層に分けられた。いずれも自然堆積と考えられる。1 層は灰白色火山灰層で、その下には住居跡中央が窪んだ状態であったことがわかる。

〔壁〕 壁は急に立ち上り、深さは最も残りのよい中央部で 33cm ある。

〔床面〕 掘方埋土（第VI層ブロック主体、黒褐色シルトを含む）を床とする。

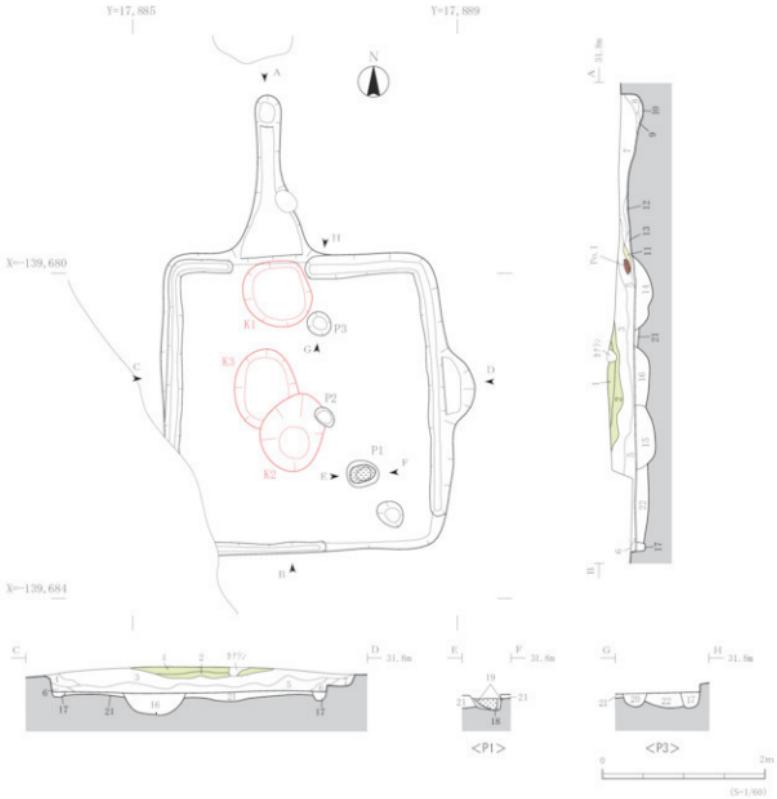
〔柱穴〕 住居北側中央（P3）と南東部（P1）でピットを確認したが柱位置に規則性がないことから、主柱穴ではないとみられる。P1 は、柱抜取穴の下で径 12cm の柱痕跡を確認した。掘方は一辺が 30cm～40cm の隅丸方形で、埋土は第VI層ブロックを多く含む灰黄褐色シルトである。

〔カマド〕 北壁中央部に付設された。本体は北壁を掘り込んで住居外側に突出し、その奥に長さ 1.4 m、幅 0.2 m の細長い煙道が取りつく。燃焼部の側壁に顕著な焼面がなく、堆積土に下面が焼けた白色粘土ブロックが認められること、その上から口縁部を上にした土師器甕が出土したことから、カマド本体は白色粘土で、住居の廃絶時に破壊されたと考えられる（図版 55）。

〔周溝・壁材痕跡〕 周溝はカマドと南東隅を除いて全周する。幅 8cm 前後、深さは 12cm ほどで、壁材の抜取痕と考えられる。

〔その他の施設〕 埋め戻された土坑を 3 基確認した。K2・3 は住居中央にあり、長径が 0.9 m、深さが 0.2～0.3 m ほどで、K2 が新しい。K1 は径 0.8 m、深さ 0.3 m あり、カマド燃焼部手前で認められる。また、東壁中央部は 0.3 m ほど外に張り出し、ステップ状になっていることから、住居の出入口にかかる施設とみられる。

〔出土遺物〕 カマド堆積土や住居堆積土から出土したが、量はごくわずかであり、住居廃絶時に土器を別な場所に移したか廃棄したと考えられる（図版 56）。土師器はいずれも非クロコ調整である。住居中央の 3 層から一括して出土した土師器長胴甕（2）は、カマドに装着されていたものが破壊時に取り外されたと考えられる。また、11 層上面から出土した土師器甕は、前述のとおり壊したカマド天井の上に正位に置かれていた（1）。



番号	土色	土性	混入物など	備考
1	灰白色(10YR8/1)	シルト	灰白色火山灰の水成堆積	大別1層、基本等高線
2	灰白色(10YR8/1)	シルト	灰白色火山灰	大別1層、基本等高線
3	黒褐色(10YR2/1)	シルト	炭化物を含む	
4	黒褐色(10YR2/3)	シルト	火山小粒を含む	大別2層
5	黒褐色(10YR2/2)	シルト	火山小ブロックを含む	大別3層、適地3層
6	黒褐色(10YR2/2)	シルト	火山小ブロックを多く含む	大別3層
7	灰褐色(10YR4/2)	シルト	火山小ブロックを多く含む	
8	黒褐色(10YR2/3)	シルト	火山小ブロックを多く含む	
9	黒褐色(10YR2/3)	シルト	砂土・炭化物を多く含む、機能時の堆積層	埋造堆積土
10	黄褐色(10Y5/6)	粘土	埋造風土	
11	灰褐色(10Y5/2)	シルト	下部が焼けている	カマド大丹崩風土
12	黒褐色(10Y3/2)	シルト	炭化物を多く含む	埋造堆積土
13	褐色(7.5Y6/4)	シルト	砂土・炭化物を多く含む	カマド機能時堆積土
14	黒褐色(10YR2/3)	シルト	K1埋土	
15	黒褐色(10YR2/3)	シルト	火山(大・小)ブロックを含む	K2埋土
16	黒褐色(10YR2/2)	シルト	火山小ブロックを含む	K3埋土
17	灰褐色(10YR4/2)	シルト	火山ブロックを含む	同埋土
18	黒褐色(10Y3/1)	シルト	黒褐色炭化物を含む	P1斜面段六
19	灰褐色(10YR4/2)	シルト	火山ブロックを多く含む	P1埋土
20	黒褐色(5YR3/1)	粘土質シルト	火山ブロック・埋土・炭化物を含む	P3埋土
21	黒褐色(10Y4/4)	粘土質シルト	黒褐色シルトを含む	偏方埋土
22	黒褐色(10YR2/2)	シルト	火山ブロックを含む	

図版 54 SI02 住居跡 (1)



全 景 (南から)



全 景 (南東から)



全 景 (東から)



カマド 11 層上面の上に置かれた土師器片 (東から)



灰白色火山灰の堆積状況 (南東から)



灰白色火山灰の堆積状況 (北東から)



KI 断面 (東から)



完堀後 (南東から)

図版 55 SI02 住居跡 (2)



図版 56 S102 住居跡出土遺物

番号	種別	器種	層位	口径	底径	高さ	残存	特徴		目録
								(cm)	(cm)	
1	土師器	片	カマド11層(Pn.1)	15.3 (6.4)	9.6	27.3	外:ヨコナデ・ケズリ 内:ヒザハ・モリ・ミガキ・黒色斑理			51
2	土師器	長軸墻	ベルト3層一括	(16.8)	11.0	26.7	1/2	内:ヨコナデ・ケズリ・ミガキ 内:ナデ・ヨコナデ		52
3	鉄製品	刀子	c-3層	—	—	—	一部	幅2.6 長7.4 前大厚:1.5		53

【SI03 住居跡】(図版 57 ~ 59)

〔位置・検出面〕C区北東部の第VI層で確認した。

〔重複関係〕SX41より新しく、SP59より古い。

〔規模・平面形〕東西 6.4 m、南北 6.3 m ほどの方形である。

〔方向〕西辺で測ると N 2°W である。

〔堆積土〕カマド部分を除く堆積土は大別 3 層に分けられた。いずれも自然堆積である。

〔壁〕壁は急に立ち上り、壁高は最も残りのよい西辺中央で 36cm ある。

〔床面〕掘方埋土（第V層ブロック主体）を床とする。

〔柱穴〕主柱穴は、床面の対角線上で 4 個確認した（P1 ~ P 4）。柱痕跡は径 12 ~ 20cm の円形で、すべての柱穴で柱抜取穴を確認した。掘方は一辺もしくは長径が 50cm ~ 70cm の隅丸方形、もしくは楕円形である。埋土は地山ブロックを多く含む褐色シルトである。

〔カマド〕北壁中央部に付設された。本体は北壁を 0.6 m 挖り込んで住居外側に突出し、その奥に短い煙道が付く。側壁や天井部は白色粘土で構築しており、焚口左壁は補強材として土師器中形甕が倒位に据えられている。燃焼部内の堆積土は 4 層に分けられるが、いずれも自然堆積と考えられる。また、棒状の土製支脚が燃焼部左寄りから出土した（図版 59）。

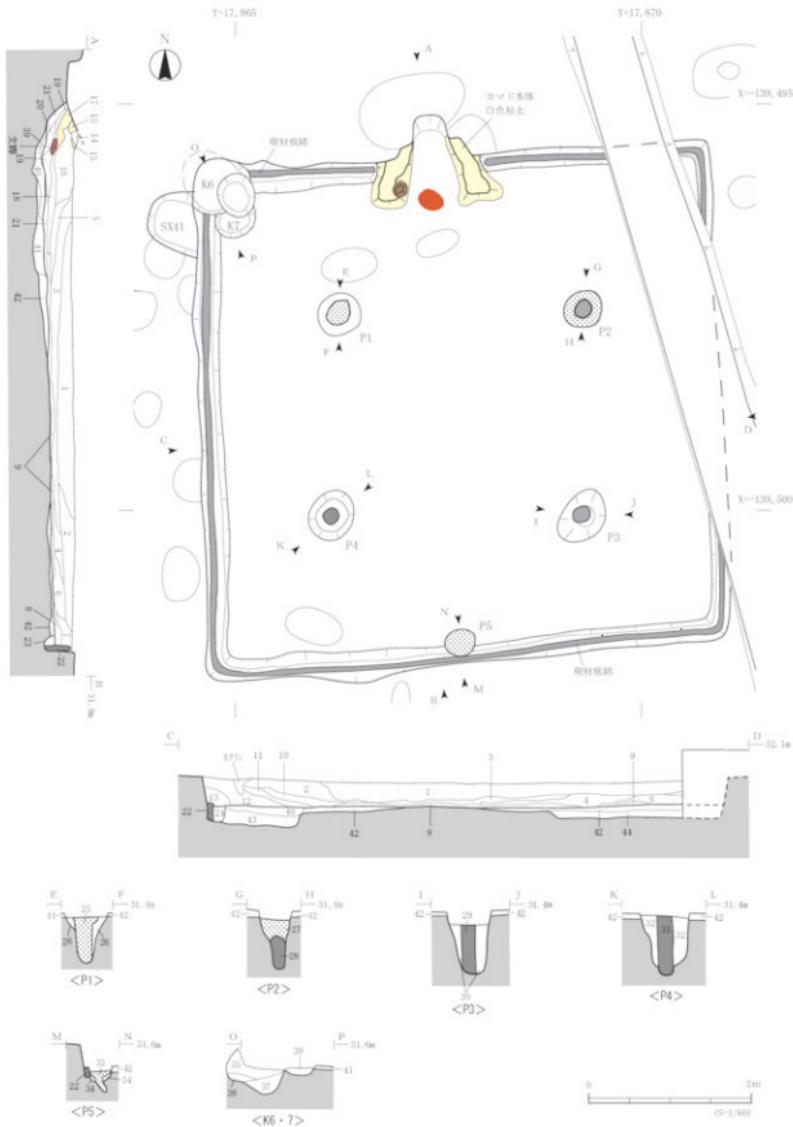
〔周溝・壁材痕跡〕周溝はカマド部分を除いて全周し、壁材の抜取痕が認められる。北辺を除く各辺では、抜取穴の下で幅 3 ~ 8 cm、深さ 14 ~ 22cm の壁材痕を確認した。掘方は幅 20cm 前後、深さは 15cm ほどである。

〔貯蔵穴〕認められない。

〔その他の施設〕南辺中央の壁内側で柱穴（P5）を確認した。柱は抜き取られている。埋土は第VI層ブロックを含む黒褐色シルトである。カマド反対側の南壁中央にあること、柱抜取穴の断面形が壁に向けて傾くことから、入口の梯子を固定した穴（入口ピット）と考えられる。

また、住居北西隅で壁を抉る土坑を検出した（K6）。壁材痕跡より新しい。

〔出土遺物〕床面から土師器壺・中形甕・長胴甕、カマド内から土製支脚、堆積土から土師器壺・甕、須恵器甕、掘方埋土から土師器壺・甕などが出土した（図版 60・61）。また、3 はカマド焚口左壁の補強材として倒位に据えられていた（図版 59）。土師器はいずれも非クロクロ調整である。



図版 57 SI03 住居跡 (1)



全 景（上から）

№	土色	土性	埋入物など	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山粒・小ブロックを含む	大別1層、遺物1組
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山粒を多く含む	
3	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山粒を多く含む	
4	黒褐色(10YR2/3)	シルト		
5	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山粒を多く含む	大別1層、遺物2組
6	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山粒や均質に多く含む	
7	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山粒を多く含む	
8	黒褐色(10YR2/2)	シルト		
9	暗褐色(10YR3/4)	シルト		大別3層、遺物未洗
10	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山粒を多く含む	
11	黒褐色(10YR2/2)	シルト		大別2層、遺物2組
12	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山粒を含む	
13	暗褐色(10YR3/2)	シルト	地山小ブロックを多く含む	
14	暗褐色(10YR3/4)	シルト		
15	灰ふじ 黄褐色(10YR5/4)	シルト	倒壁、天井礎漢土、16より少しおい	
16	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山粒を多く含む	カマド堆積土
17	灰ふじ 黄褐色(10YR5/4)	シルト	倒壁、天井礎漢土、16より少しおい	
18	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山粒・小ブロックを均質に多く含む	大別2層、遺物2組
19	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山小ブロックを含む、地土を多く含む	
20	赤褐色(5YR4/6)	粘土	粘土ブロック主体	カマド堆積土
21	黒褐色(10YR2/2)	シルト		
22	黒褐色(10YR2/3)	シルト		埋材痕跡
23	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山ブロックを多く含む	埋材痕方理土
24	黄褐色(10YR5/6)	粘土	地山ブロック主体	

№	土色	土性	埋入物など	備考	№	土色	土性	埋入物など	備考
25	黒褐色(10YR3/4)	シルト	P1柱抜取穴		35	黒褐色(10YR2/3)	シルト		
26	褐色(10YR4/6)	粘土	白色粘土を少量含む	P1埋土	36	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山小ブロックを多く含む	K6堆積土
27	黒褐色(10YR3/4)	シルト	P24柱抜取穴		37	褐色(10YR4/6)	シルト		
28	褐色(10YR4/4)	?	地山ブロック主体	P24柱R6	38	暗褐色(10YR2/3)	シルト		K7堆積土
29	黒褐色(10YR2/3)	シルト	P34柱抜跡		39	黒褐色(10YR2/3)	シルト頁岩土		
30	褐色(10YR4/4)	シルト	地山粒を多個に含む	P34埋土	40	褐色(10YR4/6)	粘土		カマド廻方理土
31	黒褐色(10YR2/3)	シルト	P44痕跡		41	暗褐色(10YR5/6)	粘土		
32	褐色(10YR4/6)	粘土	白色粘土を少量含む	P49埋土	42	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロックを多く含む	掘力埋土
33	黒褐色(10YR2/2)	粘質シルト	地山粒を多個に含む	P55柱抜穴	43	褐色(10YR4/6)	粘土	地山ブロックを多く含む	
34	褐色(10YR4/4)	粘土	P55埋土		44	暗褐色(10YR5/6)	粘土	地山ブロックを多く含む	

図版 58 SI03 住居跡（2）



全景（南から）



ベルト断面（西から）



カマド（南から）



カマド断面（西から）



カマド左侧壁と支脚出土状況（南東から）



カマド左側の遺物出土状況（西南から）



北壁際の遺物出土状況（南西から）



完堀後（南から）

図版 59 SI03 住居跡（3）



図版 60 SI03 住居跡出土遺物（1）

名	種別	器種	層位	口径	底径	器高	残高	特徴	寸法(cm)
1	土師器	杯	灰面	(12.8)	—	3.9	1/6	外:ヨコナデ・ケズリ 内:ミガキ	106
2	土師器	長脚杯	灰面(Pu.1)	(21.4)	—	—	1/6	外:ヨコナデ・ケズリ 内:ヨコナデ・テ・窓位のナテ, 開束系土師器	103
3	土師器	中形壺	カマド瓦型(Pu.5)	16.4	6.8	19.0	定期	瓶底に段 瓶:ヨコナデ・浅手・ミガキ 内:ハケメ・ヨコナデ・ミガキ	105
4	土師器	長脚壺	灰面(Pu.3)	(24.0)	—	—	1/4	瓶:ハケメ・ヨコナデ・ミガキ 内:ハケメ・ナダ・ヨコナデ, 口縁部断面が四角, 東北北部系土師器	107
5	土師器	長脚壺	灰面(Pu.2)	(21.0)	—	—	1/6	瓶:ヨコナデ・ケズリ 内:ハナデ・ナデ・ヨコナデ, 開束系土師器, 脚部に筋手付着	104
6	土師器	長脚壺	7 線(Pu.7)	—	8.4	—	1/6	瓶:ヨコナデ・ハケメ・ケズリ 内:ナデ・ヘラナ, 瓶部木要痕	102



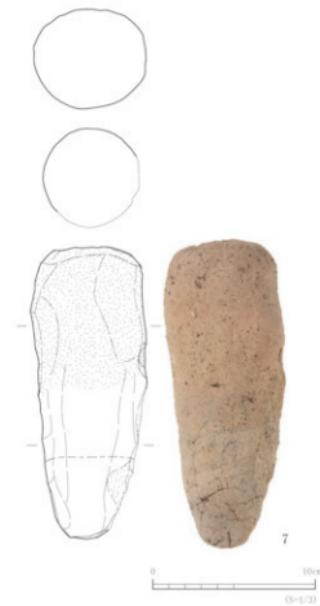
3



5



4



7

編	種別	面積	層位	口径	底径	高さ	残存	特徴	目録
7	土器片	文部	19層(Po.6)	-	-	17.9	完形	最大径:6.8 ナメ仕上げ	101

図版 61 SI03 住居跡出土遺物（2）

【SI06 住居跡】(図版 62 ~ 64)

〔位置・検出面〕 C区中央部の第V層で確認した火災住居である。

〔重複関係〕 SK40 土坑より新しい。

〔規模・平面形〕 東西 4.7 m、南北 4.9 m ほどの方形である。

〔方向〕 西辺で測ると N 2° E である。

〔堆積土〕 カマド機能時を除く堆積土は大別 7 層に分けられた。3 層は人為的な埋土、4 ~ 7 層は火災に伴う層（火災層）である。本住居は火災後埋め戻され（3 層）、その後窪んだ中央部は流入土（2 層）の上に灰白色火山灰が堆積した（1 層）。

〔壁〕 壁は急に立ち上り、壁高は最も残りのよい西辺中央で 42cm ある。

〔床面と天井構築材の出土状況〕 挖方埋土（第VI層ブロック主体、第V層を含む）を床とする。その上は部分的に弱い焼面が認められ、全体を火災に伴う炭化物層（大別 7 層）が覆う。また、7 層上面や 5 層中から炭化材と焼土ブロックが多量に出土した（図版 63）。前者は主柱を結ぶ線に対して放射状に延びることから垂木、後者は屋根葺土と考えられる。

〔柱穴〕 主柱穴は、床面の対角線上で 4 個確認した（P1 ~ P4）。それぞれで一辺 15 ~ 20cm の方形痕跡が認められた。堆積土に焼土や炭化物を多く含むことから、柱抜取痕と考えられる。掘方は一辺が 30 ~ 60cm の不整形である。埋土は第VI層ブロックを多く含む褐色シルトで、黒褐色シルトを含む。掘方は床の下で確認したことから、柱を立てた後、床が貼られたと考えられる。

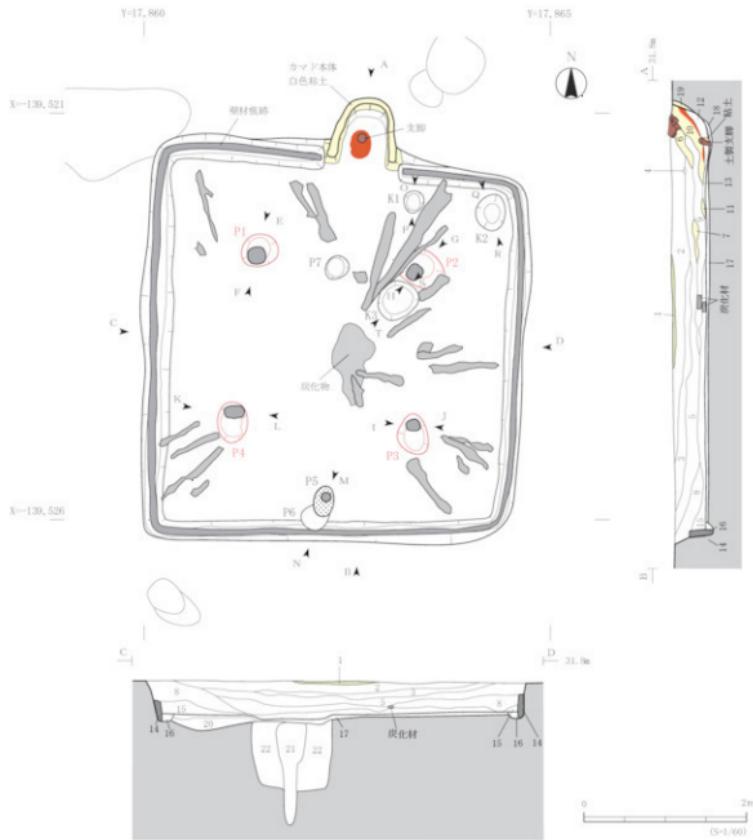
〔カマド〕 北壁中央部に付設された。本体は北壁を 0.8 m ほど掘り込んで住居外に突出し、その内側に幅 10 ~ 15cm の白色粘土を貼り付けて構築している。煙道が認められること、奥壁が外に向いて傾斜することから、煙道はそのまま上方に延びたと考えられる。4 层（本体崩壊土）上面から横位で出土した土師器長胴甕は、もともと装着されていた長胴甕を外したのち、横位に置き直すという、カマド廃絶祭祀に伴うものと考えられる。また、円筒状の土製支脚が燃焼部中央に据えられていた（図版 63）。

〔周溝・壁材痕跡〕 周溝はカマド部分を除いて全周する。幅 6 cm ほどの壁材は炭化しており、床から 10 ~ 20cm 立ち上がる。掘方は幅 20cm、深さは 10cm ほどである。

〔貯蔵穴〕 カマド右側の住居北東隅にある（K2）。径 45cm ほどの窪んだ円形で、深さは 25cm、底は中央が低く壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は 2 層に分けられ、上層から土師器甕が一括で出土している。住居廃絶に際して土器とともに埋め戻されたと考えられる。

〔その他の施設〕 南辺中央の壁材に接して柱穴を 2 個を確認した。重複しており壁材に接する P6 が古く、内側の P5 が新しい。P6 は径 30cm の円形で、全体が柱抜取穴とみられる。P5 は一辺が 25cm の方形で柱抜取穴がつき、柱痕跡は径 10cm ほどである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。カマド反対側の南壁中央にあることから、入口の梯子を固定した穴（入口ピット）と考えられる。

また、北東主柱（P2）の南側で土坑を検出した（K3）。径 50cm ほどの円形で、深さは 15cm ほどで、壁は急に立ち上がる。火災層に覆われていることから、住居の廃絶前に埋め戻されたと考えられる。



番号	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	灰白色大巾板を含む	人別1層
2	黒褐色(10YR2/3)	シルト	炭化物・植土粒を含む	人別2層, 遺物1層
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山小(ロッカ)多く含む, 炭化物を含む	人別2層, 遺物2層
4	褐色(10YR5/1)	粘土質シルト		人別2層
5	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物・土を含む	人別3層, 遺物3層
6	褐色(10YR5/1)	粘土質シルト	上面から土御甕が一括出土	人別4層, カマド天井崩落土
7	褐色(10YR5/1)	粘土質シルト		
8	褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物粒・植土粒を含む	人別5層, 遺物4層
9	褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物粒・植土粒を多く含む	
10	褐色(10YR5/1)	粘土質シルト		人別6層, カマド天井崩落土, 遺物5層
11	褐色(10YR5/1)	粘土質シルト		
12	黒褐色(7.5YR2/2)	シルト	炭化物粒・植土粒を多量に含む 炭化物層	カマド最終段階の堆積土, 遺物6層
13				カマド機造時の堆積層
14	黒褐色(10YR2/2)	シルト		壁材痕跡
15	黒褐色(10YR2/1)	シルト	炭化材・植土ブロック(土葺き瓦類)を多く含む	人別7層, 大別の堆積層
16	褐色(10YR3/3)	シルト	地山(ロッカ)を多く含む	壁材配置層
17	にごり褐色(10YR7/2)	粘土	白色陶器プロックを多く含む, 黒褐色シルトを含む	羽床
18	にごり赤褐色(5YR4/4)	シルト	にごり・黒褐色シルト・プロック, 炭化物を含む	カマド本体掘立構造土
19	にごり褐色(10YR7/2)	粘土	カマド本体・煙道構造土	天井・側壁構造土
20	褐褐色(10YR3/3)	シルト		側壁土

\*21はSI04の芯木軸, Z214SK40半植土

図版62 SI06住居跡（1）



全 景 (真上から)



灰白色火山灰の堆積状況 (南から)



炭化材棲出状況 (北東から)

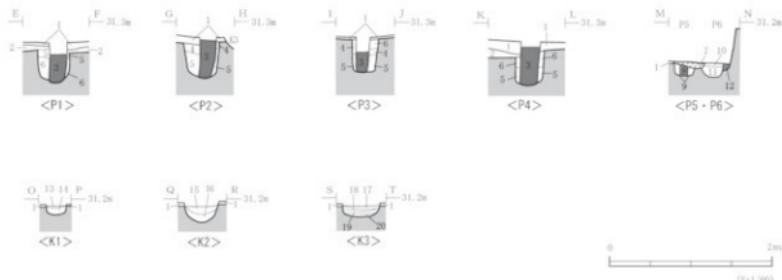


カマド断面 (南東から)



カマド (南東から)

図版 63 SI06 住居跡 (2)



No.	土色	土性	調入物など	番号
1	にふく・黄褐色(10YR5/4)	粘土	地山ブロック1枚、空くしまる	P1床
2	にふく・黄褐色(10YR5/4)	粘土	黒褐色シルトを含む	側方理土
3	黒褐色(7.5YR2/2)	シルト	燒土・炭化物を含む	柱頭跡
4	にふく・黄褐色(10YR5/4)	シルト		
5	褐色(10YR4/4)	シルト		
6	褐色(10YR4/4)	シルト	黒褐色シルトを含む	
7	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山ブロックを含む	P5柱根穴
8	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを含む	P5柱頭跡
9	にふく・黄褐色(10YR5/4)	粘土	黒褐色シルトを含む	P6埋土
10	黒色(10YR2/1)	シルト		

No.	土色	土性	調入物など	番号
11	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山砂を含む	
12	黒褐色(10YR2/2)	シルト		壁材痕跡
13	黒褐色(10YR2/3)	シルト	炭化物・焼土を多く含む	K1堆・大火鉢
14	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物・焼土を含む	K1堆・燒土
15	黒褐色(10YR2/3)	シルト	土跡濃度が一様出土	K2堆・燒土
16	黒褐色(10YR2/2)	シルト		
17	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山にロック・炭化物・焼土を含む	K3堆・大火鉢
18	黒褐色(10YR3/2)	シルト		
19	にふく・黄褐色(10YR5/4)	粘土	18朝を含む	
20	黒褐色(10YR3/2)	シルト		



P1 断面（西から）



P3 断面（南から）

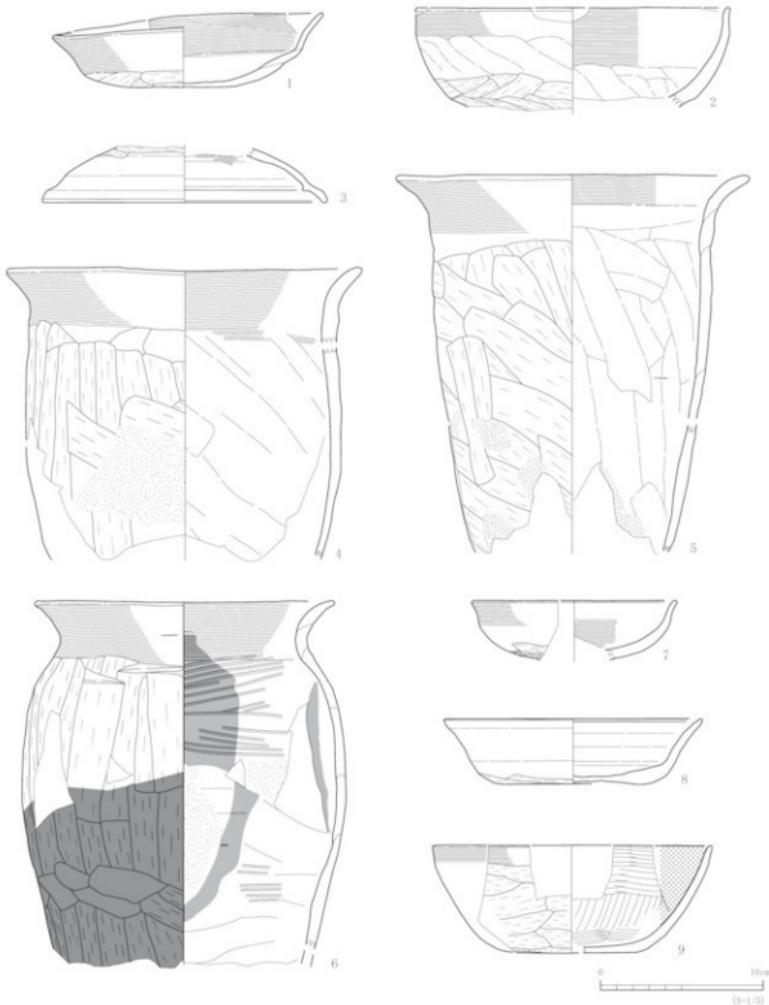


P4 断面（南から）



K1 断面（西から）

図版 64 SI06 住居跡（3）



図版 65 SI06 住居跡出土遺物 (1)

No.	種類	基種	層位	口径	底径	高さ	残存	特徴		参考
								外:ヨコナデ→ケズリナデ 内:ナデ→ヨコナデ 開束系土師器 鋸状	内:ヨコナデ→ケズリナデ 内:ナデ→ヨコナデ 開束系土師器	
1	土師器	环	カマド6層	16.3 (6.5)	4.5	2/3	—	外:ヨコナデ→ケズリナデ 内:ナデ→ヨコナデ 開束系土師器 鋸状	内:ヨコナデ→ケズリナデ 内:ナデ→ヨコナデ 開束系土師器	125
2	土師器	环	床面	(19.0)	—	1/3	—	外:ヨコナデ→ナデ→ケズリ 内:ナデ→ヨコナデ 開束系土師器	内:ナデ→ヨコナデ→ケズリ	118
3	土師器	环	床面	(17.4)	—	3/3	1/4	外:ヨコナデ→ヨロケケズリ 内:ヨコナデ→ヨコナデ	内:ヨコナデ→ヨロケケズリ	108
4	土師器	环	カマド6層	21.4	—	—	1/4	外:ナデ→ヨコナデ→ケズリ 内:ヨコナデ→ナナメナデ 開束系土師器 カマド施設隣接	内:ヨコナデ→ナナメナデ→ケズリ	126
5	土師器	長脚環	カマド前(b-1層)	(21.2)	—	—	1/4	外:ヨコナデ→ケズリナデ 内:ナデ→ヨコナデ 開束系土師器	内:ナデ→ヨコナデ→ケズリ	110
6	土師器	長脚環	K-2堆	(18.1)	—	—	1/4	外:ナデ→ケズリ 内:ハナメナデ→ヨコナデ 開束系土師器 内面に黒色付着物	内:ナデ→ケズリ	128
7	土師器	环	c-4層	(12.4)	—	—	1/6	外:ヨコナデ→ケズリ 内:ナデ	内:ヨコナデ→ケズリ	120
8	土師器	环	b-5・6層	(15.8) (8.8)	3.9 6.6	3/3	—	外:ヨコナデ→ハラ切り→斜ちケズリ 内:ヨコナデ→ハラ切りに沈殿	内:ミガキ→黑色修理(再焼成のため 黒色がとぶ)	117
9	土師器	环	c-4層	(17.2)	(8.0)	6.6	—	外:ヨコナデ→ケズリ 内:ミガキ→黑色修理(再焼成のため 黒色がとぶ)	内:ミガキ→黑色修理(再焼成のため 黒色がとぶ)	121



図版 66 SI06 住居跡出土遺物 (2)

集	種別	器種	部位	口径	底径	高さ	残存	特徴		登録
								(法量:cm)		
10	土器部	小型壺	d-3層	(6.2)	—	—	1/6	外:ケズリ→ヨコナデ 内:ナデ・口附添マツツ	124	
11	土器部	小型壺	c-4層	—	—	—	一部	外:ケズリ 内:ナデ・ヘラナデ	119	
12	土器部	長胴壺	b-5.6層	(20.2)	—	—	1/8	外:ヨコナデ・ナデ・ケズリ 内:ヨコナデ・ナデ	114	
13	土器部	長胴壺	b-3層	(21.0)	—	—	1/6	外:ヨコナデ→ケズリ 内:ヨコナデ・ナデ・閉東系土師器	111	
14	土器部	長胴壺	b-5.6層	(20.6)	—	—	1/8	外:ヨコナデ→ナデ・ケズリ 内:ヨコナデ・ナデ	115	
15	土製品	支撑	カマド燃焼部	(15.8)	—	—	一部	最大厚3.7cm 残存高19.4cm 助ナデ成形	127	
16	石製品	砥石	c-床面	(17.2)	—	—	完形	長:17.6cm 幅:15.3cm 厚:3.1cm 重量:3400g 説明	122	



1



8



13



4



5



6

图版 67 SI06 住居跡出土遺物 (3)

〔出土遺物〕床面から土師器环・小形甕・長胴甕や須恵器蓋、砥石、カマド内から土師器环や支脚、カマド前から長胴甕、K2 から土師器長胴甕、住居堆積土から土師器环・塊・小形広口壺・長胴甕、須恵器环などが出土している（図版 65～67）。土師器はいずれも非クロコ調整である。

【SI07 住居跡】（図版 69・70）

〔位置・検出面〕C 区中央部西端の第V 層で確認した。住居東半を調査した。

〔重複関係〕SK58 土坑より新しい。

〔規模・平面形〕東西 3.3 m 以上、南北 4.2 m の方形で、カマドの位置からみて東西は 4.5 m ほどとみられる。

〔方向〕東辺で測ると N 5° E である。

〔堆積上〕カマド部分を除く堆積土は大別 5 層に分けられた。1～4 層は自然堆積層、5 層は生活層である。また、2 層は灰白色火山灰層で、その降下時には住居跡中央が埋んだ状態であったことがわかる。

〔壁〕壁は急に立ち上り、深さは最も残りのよい北壁部分で 60cm ある。

〔床面〕掘方埋土（黒褐色シルト主体、第V・VI 層ブロックを含む）を床とする。

〔柱穴〕主柱穴は住居北東部の P1、南東部の P2 であり、未調査部分に想定される 2 個を含めた 4 個が主柱穴と考えられる。P1・2 とも柱抜取穴の下で径 15cm の柱痕跡を確認した。掘方は径が 20cm ～ 30cm の楕円形で、埋土は第VI 層ブロックを多く含む灰黄褐色シルトである。

〔カマド〕北壁中央部に付設された。本体は北壁を 0.6 m 挖り込んで住居外側に突出し、その奥に長さ 1.2 m、幅 0.5 m の細長い煙道が取りつく。本体は地山を削出し、その上に白色粘土を積んでいる。また、棒状の土製支脚が燃焼部左よりから出土した（図版 69・70）。支脚や焼面の位置から、本体は住居内まで延びていたと考えられる。さらに、煙道部は崩落した白色粘土ブロックが認められるところから、半地下式であったことがわかる。

〔壁材痕跡〕壁材痕跡はカマド部分を除いて全周するとみられる。幅 10cm 前後、深さは 10～25cm である。掘方が認められないことから、壁材は住居掘方を埋め戻しながら立てられたと考えられる。

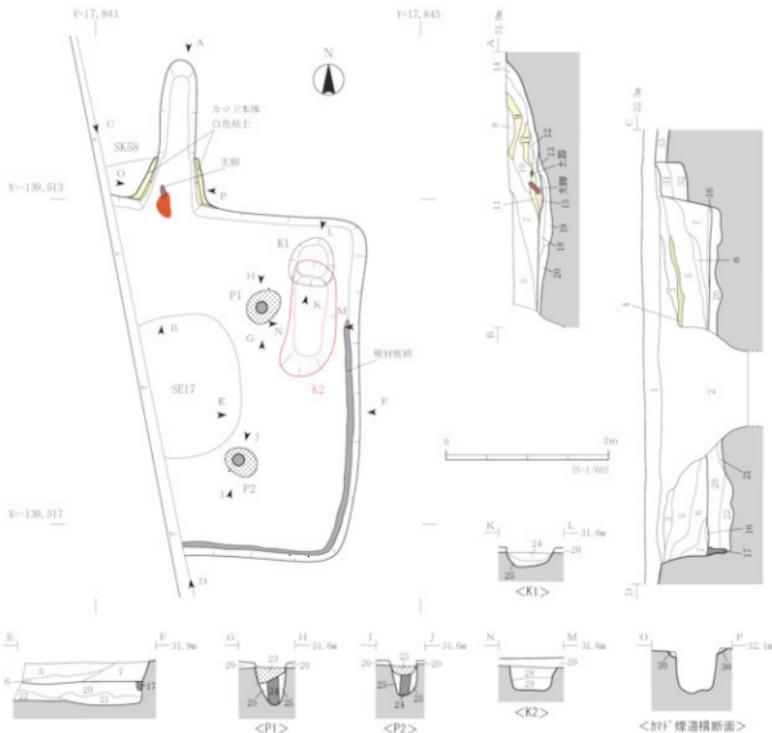
〔貯蔵穴〕カマド右脇にある（K1）。径 60cm ほどの歪んだ楕円形で、深さは 24cm、断面形は不整な逆台形である。堆積土は 2 層に分けられる。

〔その他の施設〕K2 は K1 の南側にある床下土坑で、長径は 0.9 m、深さは 0.3 m ほどである。堆積土は 2 層に分けられるが、いずれも人為的に埋め戻されている。



編	種別	層位	断面・特徴	寸法(cm)
1	土製	カマド燃焼部	直徑: (14.7) 厚: 15.9, 扁ナデ	129

図版 68 SI07 住居跡出土遺物



№	土色	土性	調査人物など	備考
1	角褐色(10YR3/3)	シルト		基本第Ⅰ層
2	角褐色(10YR2/2)	シルト		SK17堆積土
3	黒色(2.5Y1/1)	シルト		大男1層、基本第Ⅱ層
4	角褐色(10YR8/1)	シルト		大男2層、基本第Ⅲ層
5	角褐色(10YR3/2)	シルト		大男3層
6	角褐色(10YR3/3)	シルト		
7	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物・地山ブロックを多く含む	大男4層
8	黒色(10YR2/1)	シルト		カマド堆積土
9	角褐色(2.5Y5/2)	粘土質シルト		カマド天井崩落土
10	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	地山ブロックを含む	カマド堆積土
11	角褐色(2.5Y7/1)	粘土	下層は焼けが著しい	カマド天井崩落土
12	角褐色(10YR3/3)	シルト		カマド堆積土
13	角褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロック・炭化物を含む	カマド堆積土
14	角褐色(10YR3/1)	シルト	地山ブロックを含む	カマド堆積土
15	仁三・赤褐色(5YR4/4)	シルト	焼土	
16	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロックを多く含む	大男5層、牛筋層
17	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山ブロックを含む	壁材堆積
18	角褐色(10YR2/2)	シルト	地山ブロックを含む	カマド底石理土
19	黄褐色(2.5Y3/4)	シルト	地山ブロックを含む	
20	黒褐色(2.5Y3/2)	シルト	地山ブロックを多く含む	削(6)
21	ナガード褐色(2.5Y4/6)	砂質シルト	地山ブロックを多く含む	前方理土
22	黄褐色(2.5Y3/6)	砂質シルト	地山ブロックを多く含む	
23	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	地山ブロックを含む	斜窓取穴
24	角褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを含む	斜窓
25	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロックを含む	斜窓・斜方理土
26	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山ブロックを少し含む	K1堆積土
27	仁三・黃褐色(10YR5/4)	シルト	地山ブロックを多く含む	K2(床下土)理土
28	黒褐色(2.5Y3/2)	砂質シルト	地山ブロックを多く含む	
29	灰褐黄色(2.5Y4/2)	粘土質シルト	地山ブロックを少し含む	
30	仁三・黃褐色(2.5YW4)	粘土	カマド白色土	埋造天井土
31	黒褐色(10YR3/1)	シルト		SK58堆積土
32	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山ブロックを含む	
33	角褐色(10YR3/4)	シルト		基本第V層

図版 69 SI07 住居跡 (1)



全景（南から）



完掘後（南東から）



東西断面（南から）



壁材痕断面（南から）



カマド（南東から）



カマド（南から）



P1 断面（東から）



K1 断面（東から）

図版 70 SI07 住居跡（2）

〔出土遺物〕カマド燃焼部から土製支脚(図版68)、堆積土から非ロクロ調整の土師器壺・甕、須恵器壺・甕、掘方埋土から土師器甕が少量出土した。

【SI11 住居跡】(図版72)

〔位置・検出面〕C区中央部北西端の第V層で確認した。調査したのは住居全体からみて東壁周辺の一部である。

〔重複関係〕ST36 墓跡より古い。

〔規模・平面形〕東西0.7m以上、南北3.9mほどの隅丸方形である。

〔方向〕東辺で測るとN2°Eである。

〔堆積土〕堆積土は大別4層に分けられた。いずれも自然堆積である。また、2層は灰白色火山灰層で、その降下時には住居跡中央が窪んだ状態であったことがわかる。

〔壁〕壁は急に立ち上り、深さは最も残りのよい南壁周辺で40cmほどある。

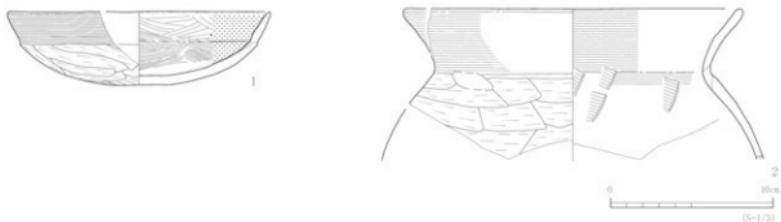
〔床面〕掘方埋土(黒褐色or褐色シルト主体、第V・VI層ブロックを含む)を床とする。

〔カマド〕北壁周辺の4層に焼土や炭化物が多く含まれることから、カマドは北壁に設けられたと考えられる。

〔周溝・壁材痕跡〕周溝はカマド部分を除いて全周するとみられる。幅、深さとも20cmほどで、人为的に埋め戻されていることから、壁材の抜取痕と考えられる。

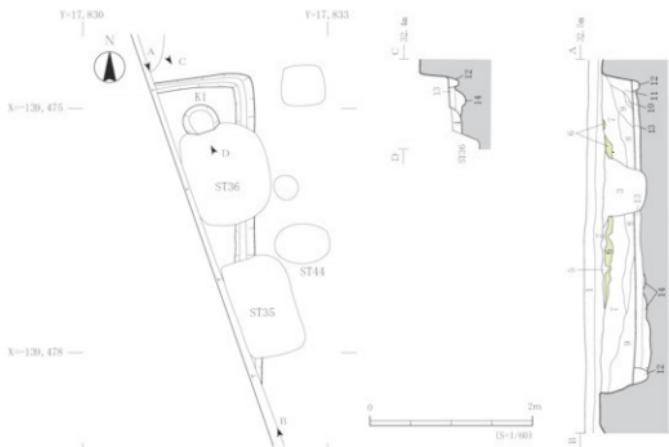
〔貯蔵穴〕K1は径40cmほどの歪んだ円形で、深さは20cm、断面形は皿形の土坑である。カマドが北壁に想定されることから、その右につくられた貯蔵穴とみられる。

〔出土遺物〕3層から非ロクロ調整の土師器壺・甕・広口壺などが少量出土した(図版71)。



番	種別	器種	層位	口径	底径	高さ	残存	特徴	(尺度:cm)	登録
1	土師器	甕	8切	(16.0)	—	(4.5)	1/4	外:ヨコナデ→ケズリ 内:ミガキ→黒色處理、有段丸底	130	130
2	土師器	広口壺	8切	(20.6)	—	—	1/8	外:ヨコナデ→ケズリ 内:ヨコナデ→ハラナギ、開口系土師器	131	131

図版71 SI11 住居跡出土遺物



番号	土色	土性	鉱物など	備考
1	褐褐色(10YR3/3)	シルト		基木第Ⅰa層
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト		基木第Ⅰb層
3				S.T.36埋土
4	褐褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロックを多量に含む	K1地土
5	黒褐色(10YR2/2)	シルト		大別1層、基本第Ⅱ層
6	灰白色(10YR8/2)	シルト	灰白色地山灰	大別2層、基本第Ⅲ層
7	褐褐色(10YR2/3)	シルト		大別3層
8	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山ブロックを少額含む	
9	褐褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロックをやや多く含む	
10	黒褐色(10YR2/3)	シルト	炭化物點を多く含む	大別4層
11	褐褐色(7.5YR4/4)	シルト	炭化物點を少し、地山ブロックを多量に含む	
12	黄褐色(10YR5/3)	粘土質シルト	地山ブロックを多量に含む	削溝埋土
13	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	地山ブロックを多量に含む	削方埋土
14	褐褐色(10YR4/4)	粘土質シルト	地山ブロックを多量に含む	



完掘写真（北から）



完掘後写真（北から）



南北断面写真（東から）



K1断面写真（東から）

図版 72 Si11 住居跡

【SI15 住居跡】(図版 73・74)

〔位置・検出面〕 C 区中央部西端付近の第 V 層で確認した。

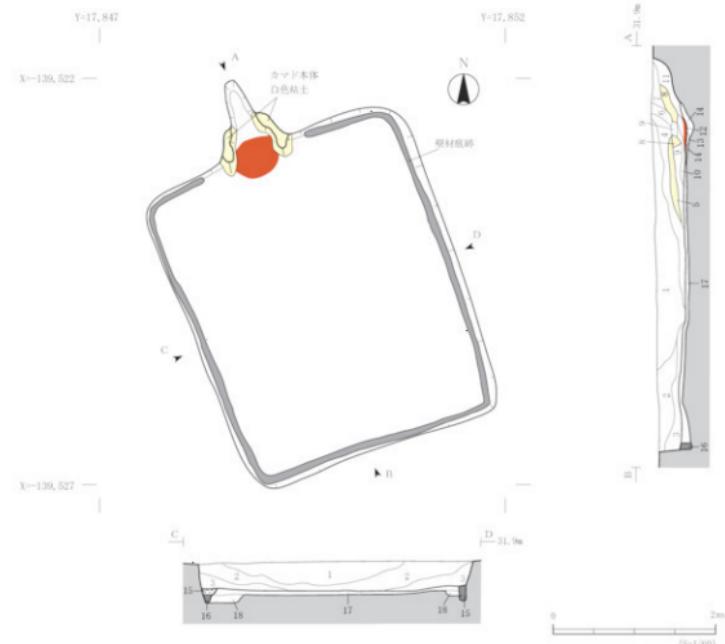
〔規模・平面形〕 東西 3.4 m、南北 4.0 m ほどの長方形である。

〔方向〕 西辺で測ると N 23°W である。

〔堆積土〕 カマド部分を除く堆積土は大別 3 層に分けられた。いずれも自然堆積である。

〔壁〕 壁は急に立ち上り、深さは最も残りのよい北壁部分で 40cm ある。

〔床面〕 挖方埋土（灰黄褐色粘土質シルト）を床とする。



№	土色	土性	調査物など	備考
1	灰色(10YR2/1)	シルト		人糞 1 層
2	黒褐色(10YR2/3)	シルト		人糞 2 層
3	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山土を多く含む	人糞 3 層
4	黒褐色(10YR2/2)	シルト	白色粘土ブロックを含む	カマド灰・壁面灰土
5	灰白色(10YR7/1)	粘土	黒褐色シルトを少し含む	
6	暗オーラブ褐色(2.5Y3/3)	シルト	地山ブロックを多く含む	
7	灰白色(10YR7/1)	粘土	地山を含む	カマド内埋積土
8	灰白色(10YR7/1)	粘土	下部が焼けている	天井・壁面灰土
9	灰褐色(10YR3/2)	シルト	燒土ブロックと炭化物を含む	カマド下埋積土
10	灰褐色(10YR3/4)	シルト	燒土ブロックと炭化物を多く含む	
11	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	地山ブロックを含む	壁面内埋積土
12	赤褐色(5YR4/6)	シルト		カマド側面時の埋積土
13	赤・黄褐色(10YR4/3)	シルト		
14	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト		カマド側面埋土
15	オリーブ褐色(2.5Y4/6)	シルト		壁材抜取穴
16	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	地山土を含む	壁材痕跡
17	灰黄褐色(10YR4/2)	粘土質シルト		削床
18	黄褐色(2.5Y5/3)	シルト		掘方理土

図版 73 SI15 住居跡 (1)



全 墓（南から）



南北断面（南東から）



カマド断面（南東から）



カマド（南西から）



カマド完掘後（南から）

図版 74 SI15 住居跡（2）



図版 75 SI15 住居跡出土遺物

〔カマド〕北壁中央部に付設された。カマドは北壁を0.4m掘り込んで住居外側に突出し、そこから住居内にかけて白色粘土で構築された。その奥に長さ0.5m、幅0.3mの短い煙道が取りつく。

〔周溝・壁材痕跡〕周溝はカマド部分を除いて全周する。このうち南辺と西辺で幅10cm、深さ20cmの壁材痕跡が、西・北・東の3辺では壁材抜取穴が認められた。掘方が認められないことから、壁材は住居掘方を埋め戻しながら立てられたと考えられる。

〔柱穴・貯蔵穴・その他の施設〕いずれも認められなかった。

〔出土遺物〕カマド手前の3層から棒状の土製支脚(2)、2層から非口クロ調整の土師器環(1)などが少量出土した(図版75)。

#### 【SI50 住居跡】(図版76・77)

〔位置・検出面〕C区南東部の第V層で確認した。

〔規模・平面形〕東西4.1m、南北は東壁が4.0m、西壁が3.6mの方形である。

〔方向〕西辺で測るとN 23°Wである。

〔堆積土〕カマド部分を除く堆積土は大別4層に分けられた。いずれも自然堆積である。また、1層は灰白色火山灰層で、その降下時には住居跡中央が窪んだ状態であったことがわかる。

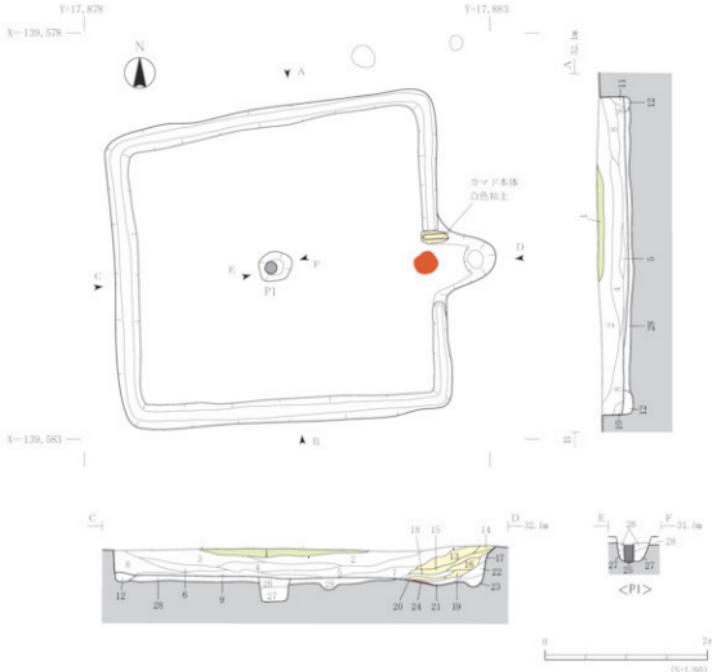
〔壁〕壁は急に立ち上り、深さは最も残りのよい北壁部分で40cmある。

〔床面〕掘方埋土(灰黄褐色粘土質シルト)を床とする。

〔柱穴〕住居中央で主柱穴を1個確認した(P1)。柱痕跡は径15cmの柱痕跡を確認した。掘方は径が40cmほどの円形で、埋土は第VI層ブロックを多く含む灰黄褐色シルトや黄褐色シルトである。

〔カマド〕北壁中央部に付設された。カマドは北壁を0.7m掘り込んで住居外側に突出し、その手前から住居内にかけて白色粘土で構築され、煙道は突出部の奥壁付近がピット状に窪んでおり、そこから上方に延びる短煙道と考えられる。

〔周溝・壁材痕跡〕周溝はカマド部分を除いて全周する。幅15~20cm、深さ15cmほどで、埋め戻されていることから壁材抜取穴と考えられる。



番号	土色	土性	調入物など	備考
1	灰白色(10YR8/2)	シルト	灰白色火山灰	大明1層、基本剖面
2	褐褐色(10YR6/3)	シルト		
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物を含む	大明2層
4	黒褐色(10YR2/2)	シルト		
5	黒褐色(10YR2/3)	シルト	燒土粒・炭化物を含む	
6	黒色(10YR2/4)	シルト		
7	褐褐色(10YR3/3)	シルト	燒土粒・炭化物を含む	大明3層
8	黒褐色(10YR3/2)	シルト	燒土粒を含む	
9	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを多く含む	大明4層
10	黄褐色(10YR4/4)	粘土	灰褐色土を含む	大明4層、壁面底土
11	褐褐色(10YR3/3)	シルト		大明4層
12	灰褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロックを多く含む	面埋理土
13	灰褐色(10YR4/2)	シルト質粘土		カマド天井・地壁底土
14	灰褐色(10YR4/2)	シルト		カマド側壁底土
15	灰褐色(10YR4/2)	シルト	燒土・炭化物を含む	カマド天井・側壁底土
16	灰褐色(10YR4/2)	シルト質粘土		
17	黑褐色(10YR3/2)	シルト	燒土・炭化物を含む	
18	褐褐色(7.5YR2/2)	シルト	燒土・炭化物を多量に含む	
19	灰褐色(10YR3/2)	シルト質粘土		
20	灰褐色(7.5YR4/2)	シルト	燒土・炭化物を多量に含む	カマド天井・側壁底土
21	灰褐色(10YR4/2)	シルト	燒土粒・炭化物を多く含む	カマド内埴土
22	灰褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロック・炭化物を多く含む	
23	灰褐色(10YR4/2)	シルト		
24	赤褐色(5YR4/6)	シルト		カマド焼成時の焼面
25	灰褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロックを含む	P1斜面跡
26	灰褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロックを多量に含む	P1埋土
27	黄褐色(10YR5/6)	粘土	地山ブロック体・褐褐色シルトを含む	
28	灰褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロックを多量に含む・カマド前を焼いてしまなし	掘方埋土

図版 76 S150 住居跡 (1)



全 景（西から）



灰白色火山灰堆積状況（南から）



ベルト断面（南西から）



カマド断面（南西から）



カマド完掘（南西から）

図版 77 SI50 住居跡（2）



図版 78 SI50 住居跡出土遺物

〔貯藏穴・その他の施設〕 いずれも認められなかった。

〔出土遺物〕 南壁際の床面から土師器壺と鉄鏟7本が出土した（1・3）。ほかに、床面やカマド崩壊土から土師器甕、3層から土師器甕・広口壺（2）、2層から土師器壺・甕・広口壺、掘方埋土から土師器甕が出土した（図版78）。土師器はいずれも非クロコ調整である。

#### 【SI51 住居跡】（図版79～82）

〔位置・検出面〕 C区中央部東端の第V層で確認した火災住居で、西半部を調査した。

〔重複関係〕 SE71・76 戸跡より古い。

〔規模・平面形〕 東西3.7m以上、南北5.6mの方形で、カマドや入口ピットの位置からみて東西は5.8mほどとみられる。

〔方向〕 西辺で測るとN 11°Wである。

〔堆積土〕 堆積土は大別して5層に分けられた。3層は人為的な埋土、4層は火災に伴う層（火災層）、5層は生活層である。本住居は火災後埋め戻され（3層）、その後窪んだ中央部には流入土（2層）の上に灰白色火山灰が堆積した（1層）。

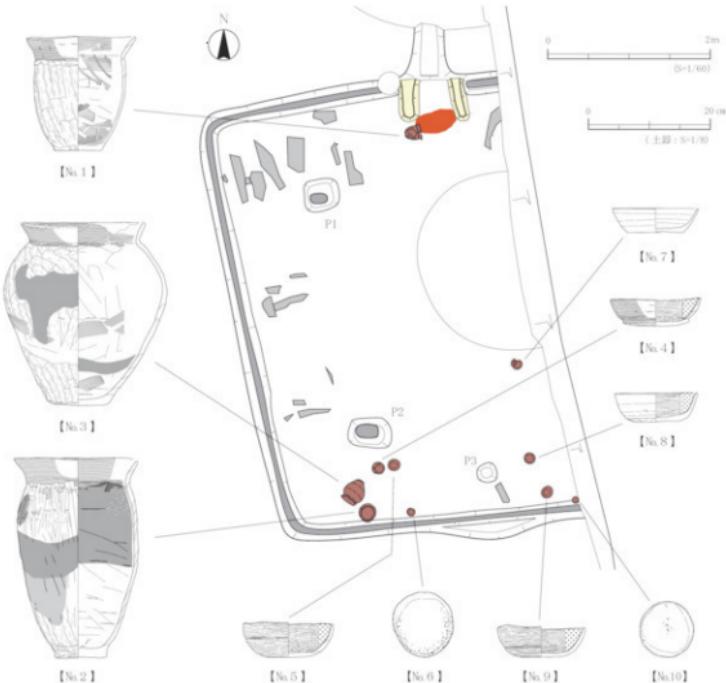
〔壁〕 壁は急に立ち上り、壁高は最も残りのよい西辺中央で52cmある。

〔床面と天井構築材の出土状況〕 掘方埋土（第V・VI層ブロック主体、黒褐色シルトを含む）を床とする。その上は生活層（5層）をはさんで、全体を火災に伴う焼土・炭化物層（4層）が覆う。4層中からは炭化材と焼土ブロックが多量に出土した（図版82）。前者は主柱を結ぶ線に対して放射状に延びることから垂木、後者は屋根葺土と考えられる。



#	土色	土性	調査物など	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト		基本第I層
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト		基本第Ib層
3				SE71土
4	暗褐色(10YR3/3)	シルト		近傍の旧土木工事
5	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト		大型1種、遺物1種、基本第II層
6	灰白色・黄褐色(10YR7/2)	シルト	灰白色火山灰	大型2種、遺物2種、基本第III層
7	黒褐色(10YR2/3)	シルト	他土質化物を多く含む	大型3種、遺物2種、火災後の土木
8	暗褐色(10YR3/3)	シルト	他土質化物・地山小ブロックを多く含む	大型3種、遺物4種、火災後の土木
9	黒褐色(10YR3/2)	シルト	他土質化物を含む	大型3種、火災後の土木
10			白色火山ブロック+暗褐色粘土ブロック	大型4種、本体隙縫隙土
11	黒褐色(10YR3/2)	シルト	他土質化物を含む	堆積隙縫土
12	黒褐色(10YR2/2)	シルト	他土質化物を含む	
13	灰白色・黃褐色(10YR5/4)	粘土	地山ブロック(土造垣材)と本体土	
14	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロック+地山ブロック(土造垣材)、炭化物多く含む	大型4種、遺物5種、火災層
15	黒褐色(10YR2/1)	シルト	炭化物を多く含む	
16	黒褐色(10YR2/1)	シルト	炭化物を多く含む	大型4種、遺物5種、初期火災層
17	灰白色・黃褐色(10YR5/4)	粘土質シルト		
18	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山小ブロックや炭化物を含む	大型5種、カマド隙縫土
19	黒褐色(10YR2/2)	シルト		大型5種、遺物5種、生活層
#	土色	土性	調査物など	備考
20	灰白色(10YR5/4)	粘土質シルト	地山シルトを少し含む 壁面材	壁面土質
21	黒褐色(10YR2/3)	シルト		壁面板岩上
22	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	地山や炭化物を多く含む	P1・2層版岩
23	灰褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロックを多く含む	P1・2層版岩土
24	灰褐色(10YR4/3)	シルト	地山ブロックを多く含む	P1・2層版岩土
25	灰褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロックを多く含む	基本第V層

図版79 SIS151住居跡(1)



図版80 S151住居跡(2) 一遺物出土状況一

〔柱穴〕主柱穴は西側で2個確認した(P1・2)ことから、対角線上に4個配置されたと考えられる。柱痕跡の径は15~20cm、掘方は一辺が35~55cmの方形で、埋土は第V層と第VI層のブロックを主体とする。

〔カマド〕北壁にあり、主柱穴や後述する入口ピットの位置からみて、中央に付設されたと考えられる。本体は住居内にあり、白色粘土でつくられた。規模は幅が焚口部で0.8m、住居壁際で0.7m、奥行きが0.6mほどである。焚口付近の壁内側や底面、本体手前の床面は強く焼けており、燃焼部と煙道部の間には25cmの段差がある。煙道は幅が0.4m、長さは0.6m以上あり、底面は水平である。また、燃焼部奥壁に近い本体崩壊土の上から、口縁部を上にした环形のミニチュア土器が出土した(図版82)。本住居は火災に遭っていることから、火災後に行われた廃絶祭祀に伴うものと考えられる。

〔周溝・壁材痕跡〕周溝はカマド部分を除いて全周するとみられる。壁材は幅が10cmほどで、床から2~6cm立ち上がる。掘方は幅15~20cm、深さは10~25cmで、南壁に較べて北壁部の規模が大きい。

〔貯藏穴〕確認できなかった。

〔その他の施設〕カマド対面の南壁付近で柱穴を1個確認した(P3)。P3は南壁から30cm離れており、



全 景（西から）



全 景（南西から）

図版 81 SI51 住居跡（3）



全 景（南から）



全 景（北西から）



東西ベルト断面（北西から）



カマド（南西から）



カマド 10 層上面土器出土状況（南西から）



P1 断面（南から）



南壁付近の床面造物出土状況（北西から）



床面№4、5 出土状況（南東から） 手前が№5

図版 82 SI51 住居跡（4）

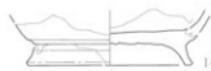


編號	種別	器種	期位	口径	底径	高さ	残高	特徵	備註
1	土器器	坪	(床面Po.4)	14.8	10.6	4.5	完形	外:ヨコナデ+ケズリ→削削(入) 内:ミガキ→黑色磨擦, 有段平底	204
2	土器器	坪	c-5削	(15.2)	—	(5.0)	1/3	外:ヨコナデ+ケズリ→静止系切り 内:ミガキ→黑色磨擦, 有段平底	217
3	土器器	坪	c-5削	13.3	(9.3)	3.8	1/2	外:ヨコナデ+ケズリ→静止系切り 内:ミガキ→黑色磨擦, 有段平底	215
4	土器器	坪	(床面Po.9)	14.4	6.0	5.4	完形	外:ケズリ+ナデ→ミガキ 内:ミガキ→黑色磨擦, 有段平底, 再磨化	206
5	土器器	坪	c-4削床	(13.8)	6.0	(5.4)	1/3	外:ケズリ+ナデ→ミガキ 内:ミガキ→黑色磨擦, 有段平底, 再磨化	226
6	土器器	坪	c-5削+括	(13.4)	6.0	4.9	1/3	外:ケズリ→ミガキ 内:ミガキ→黑色磨擦, 有段平底, 再磨化	214
7	土器器	坪	(床面Po.5)	14.7	6.0	5.8	断面完形	外:ナデ+ケズリ→ミガキ 内:ミガキ→黑色磨擦, 体部に削り線, 平底	205
8	土器器	坪	c床面	(12.5)	(8.6)	(4.3)	1/3	外:ナデ+ヨコナデ→底部ケズリ 内:ミガキ→黑色磨擦, 有段平底	213
9	土器器	坪	c床面	(13.8)	8.0	4.5	2/3	外:ナデ+ケズリ→ミガキ→ハラ書き 内:ミガキ→黑色磨擦, 平底, 底部へつき	227
10	土器器	ミニニコア	10周上面	12.3	5.0	5.6	断面完形	跡形, 外:ヨコナデ+ケズリ 内:ナデ+ミガキ→黑色磨擦, 底部木炭板, カマド廢焼粘土	234
11	土器器	碗	カマド前	(14.4)	(7.0)	7.4	1/4	外:ヨコナデ+ケズリ 内:ミガキ→黑色磨擦, 底部木炭板, 再磨化	232
12	土器器	坪	(床Po.8)	13.6	(7.1)	4.7	完形	外:ヨコナデ+ヘラ→ケズリ→削削(入) 内:ミガキ→黑色磨擦	207

図版 83 SI51 住居跡出土遺物（1）



13



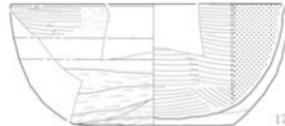
14



15



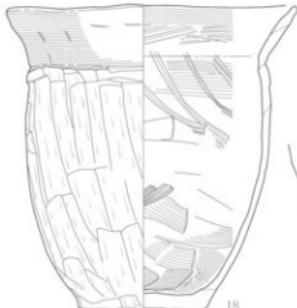
16



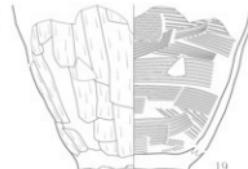
17



0  
10cm  
(S=1/3)



18



19



20

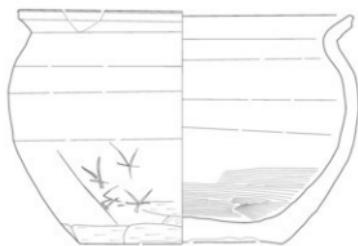
%	種別	器種	部位	口径	底径	高さ	残存	特徴	寸法(cm)
13	土器部	环	床	14.0	9.2	(3.9)	はぼ完形	外:ロクロナデ→ヘラ切→墨書き 老 内:ロクロナデ, 錦形	208
14	土器部	高台环	c-5周	—	(10.2)	—	1/4	外:ヘラ切→高台接合→ナデ 内:ロクロナデ	216
15	土器部	碗	b-3周	(15.0)	(7.2)	6.8	1/2	外:ケズリ→ヨコナデ→ミガキ→黒色処理、内:ミガキ→黒色処理	229
16	土器部	碗	b-4周	(14.4)	(9.0)	—	1/4	外:ケズリ 内:ミガキ→黒色処理、内:ロクロナデ	225
17	土器部	碗	c-4周上面	(17.1)	(9.8)	7.5	2/5	外:ロクロナデ→ケズリ→ミガキ 内:ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	228
18	土器部	中形瓶	床面(Po.1)	17.6	8.0	18.7	はぼ完形	外:ハケメ→ヨコナデ→ケズリ 内:ナデ→ヘラナデ→ハケメ→ヨコナデ、底面木質板、瓶部分に段	201
19	土器部	云輪甕	カマド前	—	6.8	—	1/6	外:ケズリ 内:ハケメ	233
20	土器部	云輪甕	床(Po.3)	20.0	8.6	32.8	はぼ完形	外:ケズリ→ヨコナデ→ナデ→ミガキ 内:ヨコナデ→ヘラナデ、木質板、カマド張着板、スヌ明瞭	202

図版 84 S151 住居跡出土遺物（2）



図版 85 SI51 住居跡出土遺物（3）

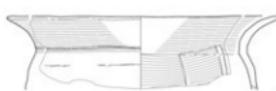
施	種別	器種	層位	口径	底径	高さ	残存	特徴	寸法(cm)
21	土器器	広口壺	床面(Po.2)	20.0	10.2	30.0	ほぼ完形	外:ヨコナデ→ケズリ→一部ナデ 内:ナデ→ヘラナデ→ヨコナデ、底部ケズリ	203



22



(縮尺任意)



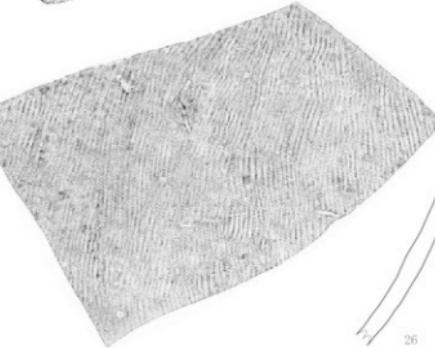
23



24



25



26



施	種別	器種	部位	口径	底径	高さ	残存	特徴		図解
								ほぼ完形	外:クロナデ・手持ケベリ→ハラ書き「大人」(逆位) 内:クロナデ・ナデ	
22	須恵器	鉢	c.底面	20.4	12.5	14.3	ほぼ完形	外:クロナデ・手持ケベリ→ハラ書き「大人」(逆位) 内:クロナデ・ナデ	21.1	22
23	土師器	小鉢	a.5層	(16.6)	—	—	1/8	外:ヨコナデ・ナデ 内:ヘラナデ→ヨコナデ、頭部に段、浅腹	22.1	23
24	土師器	小鉢	c.5層	—	(7.0)	—	1/4	外:ケズリ→ミガキ 内:ナデ	22.8	24
25	須恵器	盤	a.5層	—	—	—	一部	外:平行タタキ 内:同心円アテ具	22.2	25
26	須恵器	盤	a.5層	—	—	—	一部	外:平行タタキ 内:無文アテ具・同心円アテ具・ナデ	22.3	26

図版 86 SIS1 住居跡出土遺物 (4)



編號	種類	器種	層位	尺寸					特徵	存
				口徑	底徑	器高	殘存	重量		
27	石製品	圓盤	床(Pn6)	10.5	9.7	6.5	完形	重量:978g		存
28	石製品	圓盤	床(Pn10)	9.1	8.9	2.5	完形	重量:195.9g		存
29	石製品	硯石	a-4層	5.4	3.7	2.1	完形	重量:49.7g		存
30	石製品	硯石	c-5層	6.2	5.2	3.9	完形	重量:149.1g		存
31	石製品	硯石	c-5層	6.0	5.3	3.2	完形	重量:23.2g		存

圖版 87 S151 住居跡出土遺物（5）



図版 88 S151 住居跡出土遺物（6）



15



13



18



20



22



(5层出土炭化材 缩尺任意)

图版 89 SI51 住居跡出土遺物 (7)

柱痕跡は径8cm、掘方は径25cmほどの円形である。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。カマド反対側の壁近くあることから、入口の梯子を固定した穴（入口ピット）と考えられる。

〔出土遺物〕床面から土師器環・広口壺・中形甕・長胴甕・須恵器鉢・砥石・磨石・円盤状石製品、カマド内から土師器環・甕・カマド前から土師器環・塊・小形甕・4層から土師器環・小形甕・甕・須恵器環・高台环・甕・磨石・3層から土師器環・塊・甕・1層から土師器甕・掘方埋土から土師器甕と刀子などが出土した(図版83~89)。

床面からの図示遺物の出土状況は、カマド側の北半部は土師器塊（11）と中形甌（18）のみで、他は南半に偏っており、特に壁際からは8点出土している。こうした状況は、同時期の集落跡で不慮の火災で焼失した原田遺跡SI30住居跡（宮城県教委2009a）が、カマド周辺から多量の土器が出土したあり方と異なることから、北半部の道具類は動かされたか持ち出されたと考えられる。

土師器食器は古墳時代以来の伝統的な有段环に加え、無段环と新たに登場したロクロ土師器(12・17)が共伴する。このうち、有段环は底部の丸味がとれて平底状になり、段は下に降りるか、ミガキで消されて痕跡的になるものが多い。これに対して、須恵器食器の数は著しく少ない。また、文字資料として墨書きは「丈」が土師器环底部(1)、「老」が須恵器环底部(13)、刻書きは「子」(横位)が土師器环体部(12)、「大大大口」(倒位)が須恵器鉢胴下部(22)に認められる。さらに、底部にヘラで靴などを装着された馬が描かれた土師器环(9)が出土した。

\*広頸は広口瓶、小瓶は小形瓶、中瓶は中形瓶、長瓶は長胴瓶の略である。

表7 竪穴住居跡属性表

## (2) 掘立柱建物跡

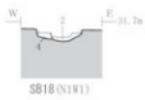
### 【SB37 建物跡】(図版 32・90)

C 区中央部西端の SI07 住居跡南側で確認した南北 2 間の掘立柱建物跡である。後述する江戸時代以降の掘立柱建物とは、柱穴規模や埋土が異なり、平面形が方形となる点から古代の建物跡と判断した。

柱穴は 3 個検出し、2 箇所で径 16cm の柱痕跡、1 箇所で柱抜取穴を確認した。建物規模は東妻が総長 3.6 m、柱間寸法は北から 1.7・1.9 m とみられ、方向は N 6°W である。柱穴は一辺 0.4～0.6 m の方形で、深さ 0.5 m、埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトや黄褐色シルトである。遺物は出土していない。

## 5. 江戸時代以降

江戸時代以降のものとしては掘立柱建物跡 7 棟（建替えを含む）、井戸跡 7 基、墓 17 基を検出した。掘立柱建物跡や井戸跡の多くは、C 区中央から東側にするものが多く、墓はそれから離れた C 区北西隅の D 区との境に集中していた。こうした例は、自動車道調査区でも確認されている。建物・小屋（雑舎）・井戸で構成された農家が点在し、周りの遺構がない部分は畑などの耕作域となり、山際に屋敷墓がつくられた姿が想定できる。



SB18



SB18 (N1E1)



SB37



No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト		SB18B1柱跡
2	黒褐色(10YR3/1)	シルト		SB18B1柱抜取穴
3	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山ブロックを多く含む	SB18B1柱埋土
4	褐褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロックを多く含む	



SB18 (S1W1) 断面写真 (南から)



SB37 (N1E1) 断面写真 (南から)

図版 90 SB18・37 建物跡

### (1) 掘立柱建物跡

#### 【SB08 建物跡】(図版 31・91)

C 区北東部の SI03 住居跡北側で確認した  $2 \times 2$  間の総柱掘立柱建物跡である。柱穴は 8 個検出し、6 箇所で径 15cm 前後の柱痕跡、2 箇所で柱抜取穴を確認した。建物規模は東西が北側柱列で総長 4.0 m、柱間寸法は西から 2.1・1.9 m で、南北が西側柱列で総長 4.0 m、柱間寸法は北から 1.7・2.3 m、方向は西側柱列で測ると N 6° E である。柱穴は径 0.3 ~ 0.4 m の歪んだ円形で、深さ 0.3 ~ 0.4 m、埋土は黒褐色粘土質シルトである。

#### 【SB18A・B 建物跡】(図版 35・90)

C 区中央部の SI51 住居跡南側で確認した  $2 \times 2$  間の東西棟掘立柱建物跡である。1 度建替えられている(A → B)。柱穴は 8 個で構成されるが、確認できたのは B 建物跡が 6 個、A 建物跡は 4 個である。B 建物跡は 1 箇所で径 15cm 前後の柱痕跡、2 箇所で柱抜取穴を確認した。建物規模は桁行が北側柱列で総長 4.5 m、梁行は西妻で総長 3.9 m、柱間寸法は北から 1.9・2.0 m とみられ、方向は西側柱列で測ると N 11° W である。柱穴は径 0.4 ~ 0.6 m の歪んだ円形で、深さ 0.1 ~ 0.3 m、埋土は黒褐色シルトである。A 建物は梁行や方向が同じであるが、桁行は 1 m 長い。埋土は暗褐色シルトである。

#### 【SB19 建物跡】(図版 34・92)

C 区中央部の SI06 住居跡南東で確認した  $1 \times 1$  間の東西棟掘立柱建物跡である。柱穴は 4 個検出し、3 個で径 15cm 前後の柱痕跡、1 箇所で柱抜取穴を確認した。建物規模は桁行が北側柱列で 2.5 m、梁行は東妻で 2.2 m、方向は東側柱列で測ると N 2° W である。柱穴は径 0.3 ~ 0.5 m の円形もしくは楕円形で、深さ 0.5 ~ 0.7 m、埋土は黒色や黒褐色のシルトが多い。

#### 【SB20 建物跡】(図版 33・92)

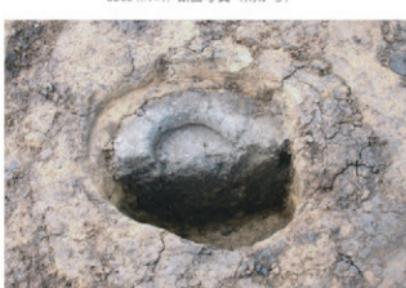
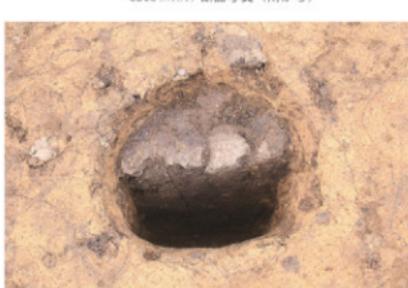
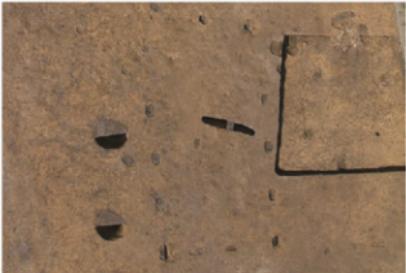
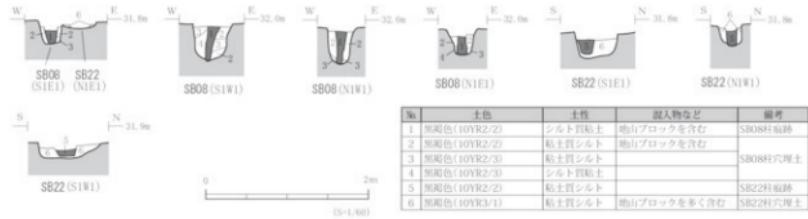
C 区中央部の SI06 住居跡南側で確認した  $2 \times 2$  間の掘立柱建物跡である。SK24 土坑より新しい。柱穴は 8 個検出し、4 箇所で径 12cm 前後の柱痕跡を確認した。建物規模は東西が北側柱列で総長 3.3 m、柱間寸法は西から 1.7・1.6 m、梁行は東妻で総長 3.3 m、柱間寸法は北から 1.7・1.6 m とみられ、方向は西側柱列で測ると N 3° E である。柱穴は径 0.2 ~ 0.3 m の歪んだ円形で、深さ 0.3 m、埋土は黒褐色や暗褐色のシルトである。

#### 【SB21 建物跡】(図版 34・92)

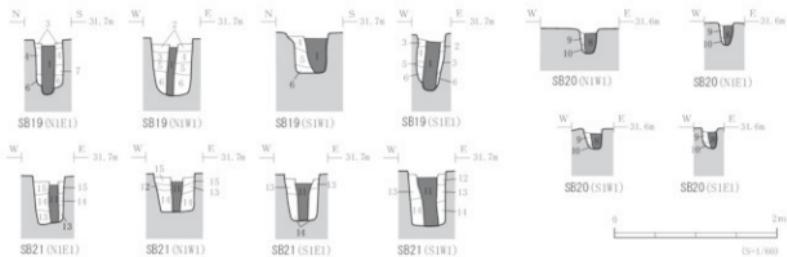
C 区中央部の SI06 住居跡南東で確認した南北 2 間、東西は北側が 2 間、南側が 3 間の掘立柱建物跡である。柱穴は 9 個検出し、8 箇所で径 15cm 前後の柱痕跡、1 箇所で柱抜取穴を確認した。建物規模は東西が北側で総長 4.9 m、柱間寸法は西から 2.4・2.5 m、南側は総長が同じで、柱間寸法は西から 1.9・3.0 m (2 間分) である。南北は東側柱列で総長 4.9 m、柱間寸法は北から 2.5・2.4 m で、方向は東側柱列で測ると N 9° W である。柱穴は径 0.4 ~ 0.5 m の歪んだ円形で、深さ 0.5 ~ 0.6 m、埋土は黒褐色や暗褐色のシルトである。本建物は 3 間となる南側が入口と考えられる。

#### 【SB22 建物跡】(図版 31・91)

C 区北東部の SI03 住居跡西側で確認した  $4 \times 2$  間の南北棟掘立柱建物跡である。柱穴は 11 個検出し、3 箇所で径 12cm 前後の柱痕跡、5 箇所で柱抜取穴を確認した。建物規模は桁行が西側柱列で



図版 91 SB08・22 建物跡



No.	土色	土性	混入物など	参考
1	黒褐色(10YR2/3)	シルト		SB19柱洞跡
2	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山ブロックを含む	
3	褐色(10YR4/4)	シルト	黒褐色シルトを含む	
4	黒褐色(10YR3/2)	シルト		
5	黒褐色(10YR2/3)	シルト		SB19柱穴理土
6	黒褐色(10YR2/3)	シルト		
7	褐色(10YR2/1)	シルト		
8	黒褐色(10YR2/2)	シルト		SB20柱洞跡
9	黒褐色(10YR2/3)	シルト		SB20柱穴理土
10	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロックを多く含む	
11	褐色(10YR2/1)	シルト		SB21柱洞跡
12	暗褐色(10YR2/2)	シルト		
13	褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロックを多く含む	
14	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山小ブロックを含む	SB21柱穴理土
15	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山ブロックを含む	



SB19・20 全景写真（上から）



SB19(SIE1) 断面写真（西から）



SB19(SIWI) 断面写真（西から）



SB21 全景写真（上から）



SB21(NIE1) 断面写真（南から）

図版 92 SB19・20・21 建物跡

建物名	建物面積 柱行・梁行	棟方向	平面図幅			建物の方向 角度/既定柱列	柱直線 (cm)	柱穴幅方 幅( cm )/平面形	備考	回数/ % 平面/ 断面	
			柱行( m )	既定柱列/柱間寸法( m )	梁行( m )						
SB08	2 × 2	—	4.0 西	1.7+2.3	4.0 北	2.1+1.9	N6°E 西	15 30~60	円形	31 91	
SB18	2 × 2	東西	4.5 北	?	(3.9) 西	(1.9+2.0)	N11°W 西	15 40~60	円形	建替え(A→B), 既存建物の柱行は1m長い	35 90
SB19	1 × 1	東西	2.5 南	—	2.2 東	—	N2°W 東	15 30~50	楕円形, 円形	34 92	
SB20	2 × 2	東西	(3.3) 北	(1.7+1.6)	(3.3) 東	(1.7+1.6)	N3°E 西	12 20~30	円形	33 92	
SB21	2 × 2	—	4.9 北	2.4+2.5	4.9 東	2.5+2.4	N9°W 東	15 40~50	円形	南側は3間→人口	34 92
SB22	4 × 2	南北	9.4 西	2.8+2.0+4.6(2間)	5.1 西	2.9+2.1	N9°W 西	12 40~70	楕円形	31 91	
SB07	2 × 1~? 東西?	3.6 東	—	1.7+1.9	—	—	N6°W 東	16 40~60	方形	古代の建物	32 90

\*:( )内の値は既定値

柱間寸法は、東西方向のもの(東西から南北方向は北から順に書いた)

柱棟方向がわからない建物の規格は、柱行にデータを記した

表8 挖立柱建物跡属性表

総長9.4 m、柱間寸法は北から 2.8・2.0・4.6 m（2間分）で、梁行は南妻で総長 5.1 m、柱間寸法は西から 2.9・2.1 m とみられる。方向は西側柱列で測ると N 9°W である。柱穴は長径 0.6 ~ 0.7 m、短径 0.4 m の楕円形で、深さ 0.1 ~ 0.3 m、埋土は黒褐色粘土質シルトである。

## (2) 井戸跡

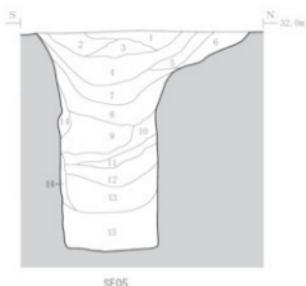
井戸跡は、C区で7基確認した。いずれも素掘で、北部中央に1基(SE05)、中央部東側に4基(SE17・75・76・99)、中央部西側に1基(SE17)、南東隅付近に1基(SE55)分布する。完掘したのはSE05のみである。このため、SE05は個別に、他の6基は一括して概要を述べることとし、個々の属性は表9にまとめた（図版93・94）。

SE17・55・71・75・76・99の平面形は円形で、規模は上部の径が 1.0 ~ 3.6 m で、半数は 2.0 m 前後である。断面形は漏斗形 (SE17・55・75) と箱形 (SE99) があるが、SE71・76については掘り下げが浅いため不明である。堆積土は、自然堆積で、特に下部は壁の崩落土が顕著となるもの (SE17・75)、人為的に埋め戻された後、上部に自然堆積が認められるもの (SE55・71・76)、人為堆積であるもの (SE99) に分けられる。このうち、隣り合う SE75・76 は、前者が自然堆積、後者は人為堆積であることから、SE75 の掘削で生じた土を、使わなくなった SE76 の埋め戻しに利用したと考えられる。

遺物は少なく、SE75の堆積土から染付皿・壺・陶器片口・鉢・擂鉢・砥石などが出土したのみである（図版95）。

### 【SE05 井戸跡】（図版30・93）

C区北部中央で確認した素掘の井戸である。上部の平面形は 2.9 × 2.0 m の楕円形であるが、1 m ほど下がった位置から下は径 1.1 m の円形になる。この変換部に対応して断面形は、北側上部がステップを作り出しながら開いており、井戸構築時の足場になったと考えられる。深さは 2.7 m ほどである。



SE05

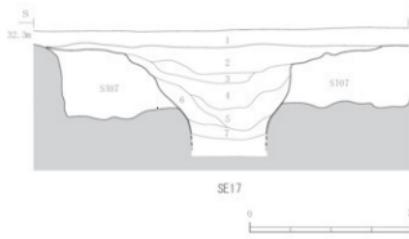


SE05 完掘写真（東から）

#	土色	土性	混入物など	備考
1	黒色(10R2/1)	シルト		
2	灰褐色(10W5/2)	シルト	白色砂を多く含む 自然堆積	
3	黒褐色(10W3/2)	シルト	白色粘土ブロックを少し含む	
4	黒褐色(10W3/1)	シルト		
5	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	地山ブロックを含む	
6	黒褐色(2.5Y2/1)	シルト	地山ブロックを含む	
7	黒褐色(2.5Y2/1)	シルト		
8	黄褐色(2.5Y4/1)	シルト	地山ブロックを多く含む	人為堆積
9	黒色(10R2/1)	シルト	地山ブロックを多く含む	
10	褐褐色(10W3/4)	シルト		
11	黒褐色(10W3/2)	シルト	地山ブロックを多く含む	
12	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	地山ブロックと14層を含む	
13	黄褐色(2.5Y4/1)	粘土	地山ブロックを少し含む	
14	褐色(10W4/6)	シルト		壁面洗浄
15	褐褐色(10W4/1)	粘土	白色砂筋を全体に含む	自然堆積

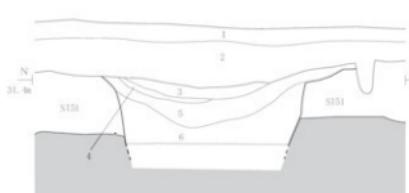


SE17 完掘写真（東から）



SE17

#	土色	土性	混入物など	備考
1	褐褐色(10YR3/3)	シルト		基本第1a層
2	褐褐色(10YR2/2)	シルト		
3	褐褐色(2.5Y3/1)	シルト	地山ブロックを含む	
4	褐褐色(10YR3/1)	シルト		
5	褐褐色(10YR2/3)	シルト	地山ブロック・礫を多く含む	
6	褐褐色(2.5Y3/2)	シルト	地山ブロックを多く含む	
7	黒オリーブ褐色(2.5Y3/3)	シルト	黒褐色シルトブロックを含む	



SE71

#	土色	土性	混入物など	備考
1	褐褐色(10YR3/3)	シルト		基本第1a層
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト		基本第1b層
3	褐褐色(10YR3/3)	シルト		
4	褐褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロックを多く含む	
5	褐褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロックを含む	人為堆積
6	褐褐色(10YR3/3)	シルト	地山小ブロックを含む	

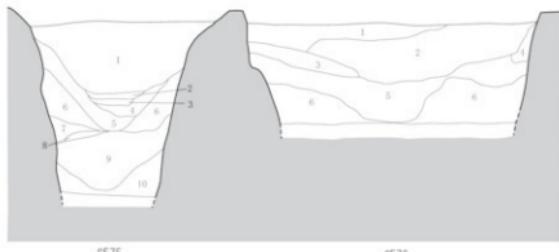


SE71 断面写真（西から）

図版 93 SE05・17・71 井戸跡

N

S 33.0m



SE75

SE76

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	褐灰色(10YR4/1)	粘土質シルト		
2	褐灰色(10YR4/1)	砂質シルト	地山小ブロックを多く含む	
3	褐灰色(10YR4/1)	砂質シルト		
4	明黄褐色(10YR7/6)	砂質シルト		堅密風土
5	褐灰色(10YR4/1)	砂質シルト		
6	明黄褐色(10YR7/6)	砂質シルト	地山中・小ブロックを多く含む	
7	褐灰色(10YR4/1)	砂質シルト		
8	明黄褐色(10YR7/6)	粘土質シルト		堅密風土
9	褐灰色(10YR4/1)	シルト	地山ブロックを少し含む	
10	明黄褐色(10YR7/6)	シルト質粘土		堅密風土

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	明灰色(10YR4/1)	粘土質シルト	地山小ブロックを含む	自然堆積
2	明灰色(10YR4/1)	粘土質シルト	地山ブロックを多く含む	
3	黒褐色(10YK3/1)	粘土質シルト		
4	にじ・黒褐色(10R6/4)	砂質シルト	地山ブロックを含む	人為堆積
5	黒褐色(10YK3/1)	粘土質シルト	地山中・小ブロックを多く含む	
6	明灰色(10YR4/1)	砂質シルト	地山ブロックを多く含む	



SE75 断面写真（西から）



SE76 断面写真（西から）

W

E 32.0m



SE99

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山ブロックを含む	
2	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山ブロックを多く含む	人為堆積



SE99 断面写真（南から）

図版 94 SE75・76・99 井戸跡



図版 95 SE75 井戸跡出土遺物

遺構名	構造	層別	器種・特徴			日付	年	種別	層位	器種・特徴			日付	
			平面形	断面形	規模(m)					堆積土の状況	主な出土遺物	参考		
SE05	素面 円形	1層	高台径:(6.2)	—	2.9×2.0	SI11	2.7	人為堆積	—	—	—	—	30 93	
SE17	素面 円形	1層	高台径:(8.4)	残存高:2.4	SI11	1.1~	人為堆積	—	—	—	—	SI07→SE17, 犀未確認	32 93	
SE55	素面 円形	1層	高台径:(4.0)	底部に「大明寧製」	SI11	1.0~	人為堆積	—	—	—	—	—	SI51→SE71, 犀未確認	36 —
SE71	素面 円形	1層	高台径:(4.0)	底部に「大明寧製」	SI11	0.8~	人為堆積	—	—	—	—	—	SI51→SE71, 犀未確認	34 93
SE75	素面 円形	1層	高台径:(2.7)	—	2.7×2.7	SI11	2.1~	人為堆積	—	—	—	—	SI07→SE76, 犀未確認	34 94
SE76	素面 円形	1層	高台径:(2.7)	—	2.7×2.7	SI11	1.2~	人為堆積	—	—	—	—	SI51→SE76, 犀未確認	34 94
SE99	素面 円形	1層	高台径:(2.7)	—	2.7×2.7	SI11	1.2~	人為堆積	—	—	—	—	SI44確認	24 94

表 9 井戸跡属性表

### (3) 墓跡

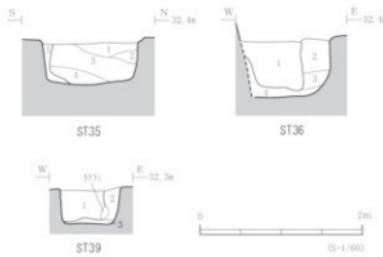
C 区北西隅で 17 基確認した。山林との境に集中してつくられること、こうした例は 1976 ~ 78 年調査時にも 2 箇所確認されていることから、屋敷墓と考えられる。平面形は方形と円形があり、前者は方形木棺墓、後者は円形木棺墓（早桶）と考えられる。それぞれの数は方形 14 基、円形 3 基である。このうち、縄文時代の陥し穴や古代の住居跡と重複する ST35・36・39 は精査を行っており、3 基について記述を行う。

#### 【ST35 墓跡】(図版 29・96)

方形木棺墓で、SI11 住居跡より新しい。規模は東西 0.8 m 以上、南北 1.2 m、深さは 0.6 m で、棺の規模は東西 0.7 m 以上、南北 1.1 m とみられる。埋土から銭貨「寛永通宝」6 枚と鉄釘が出土した（図版 97-1 ~ 6・14 ~ 17）。

#### 【ST36 墓跡】(図版 29・96)

円形木棺墓で、SI11 住居跡より新しい。規模は径が 1.3 m、深さは 0.8 m で、棺の規模は径が 0.7 m ほどとみられる。埋土から銭貨「寛永通宝」7 枚と鉄釘が出土した（図版 97-7 ~ 13・18）。



No.	土色	土性	鉱人物など	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山小ブロックを少額含む	
2	褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロック1本、黒色土を微量含む	初期跡
3	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山ブロックを多額に含む	
4	褐褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロックをやや多く含む	
5	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山ブロックを多額に含む	後方埋土

No.	土色	土性	鉱人物など	備考
1	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山ブロックを微量含む	
2	褐褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを小量含む	初期跡
3	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山ブロックを小量含む	
4	褐褐色(10YR2/3)	シルト	地山ブロックを多額に含む	後方埋土

No.	土色	土性	鉱人物など	備考
1	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山ブロックを微量含む	
2	褐褐色(10YR1/1)	粘土	地山ブロックを多く含む	

No.	土色	土性	鉱人物など	備考
1	黒褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロックを含む	



ST35 断面写真（東から）



ST35 完掘写真（東から）



ST36 断面写真（南から）



ST36 完掘写真（北から）

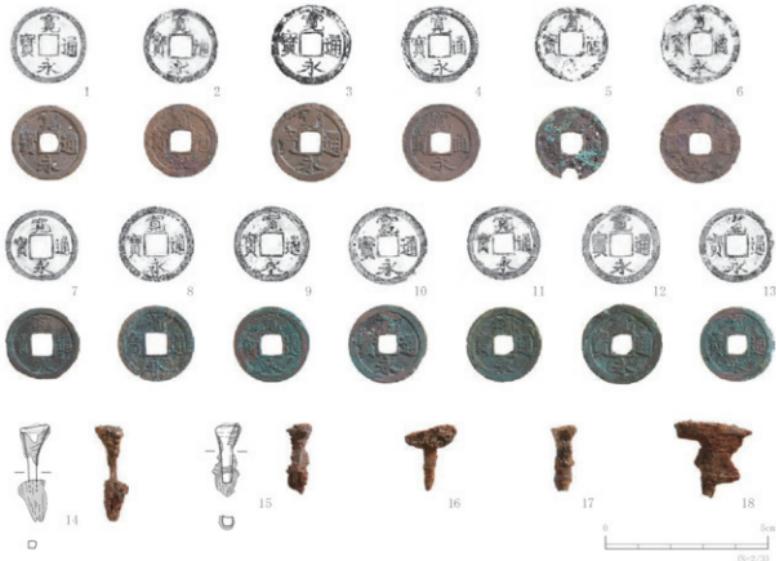


ST36 完掘写真（東から）



ST39 断面写真（南から）

図版 96 ST35・36・39 墓跡



(法量:cm)									
No.	種別	道柄	部構・特徴	登録	No.	種別	道柄	部構・特徴	登録
1	円筒・寶永通宝	ST35		153	10	円筒・寶永通宝	ST36		142
2	円筒・寶永通宝	ST35		154	11	円筒・寶永通宝	ST36		143
3	円筒・寶永通宝	ST35		155	12	円筒・寶永通宝	ST36		144
4	円筒・寶永通宝	ST35		156	13	円筒・寶永通宝	ST36		145
5	円筒・寶永通宝	ST35		157	14	鉄製品・針	ST35	幅:(2.9) 幅:0.8 厚:0.2	150
6	円筒・寶永通宝	ST35		158	15	鉄製品・針	ST35	幅:(2.4) 幅:(0.4) 厚:(0.4)	151
7	円筒・寶永通宝	ST36		159	16	鉄製品・針	ST35	幅:2.0 幅:0.4 厚:0.3	156
8	円筒・寶永通宝	ST36		140	17	鉄製品・針	ST35	幅:(2.0) 幅:0.8 厚:0.8	149
9	円筒・寶永通宝	ST36		141	18	鉄製品・針	ST36	幅:(2.3) 幅:(2.3) 厚:(0.7)	151

図版 97 ST35・36 墓跡出土遺物

#### 【ST39 墓跡】(図版 29・96)

方形木棺墓で、SK38 土坑より新しい。規模は東西・南北とも 0.8 m、深さは 0.5 m で、棺の規模は一辺が 0.5 m とみられる。埋土から染付小皿と鉄銭、鉄釘が出土した(図版 98-1~8)。

#### (4) その他の遺構

土塁跡や空堀跡のほかビット・土坑・溝跡・性格不明遺構などがあり、その堆積土や第 I 層から遺物が出土した。ここでは、ある程度遺構の性格が判明した SD42・43 溝跡、SA13 土塁跡と SD14 空堀跡の概要を述べ、他については主な断面や遺物を図版 99 に示した。

#### 【SD42・43 溝跡】(図版 24・30)

SD42 は C 区北西部で確認した東西溝跡で、16.8 m 分を検出した。規模は幅が 0.9 m、深さ 0.1 m で、堆積土はしまりのない黒褐色シルトや暗褐色シルトである。SD43 は SD42 に接続する南北溝跡



図版 98 ST39・44 墓跡出土遺物

番号	種類	道柄	器種・特徴	登録	年	種類	道柄	器種・特徴	登録
1	染付・小皿	ST39	口径:10.2 高さ:2.9 残存:2/3	135	6	鉄製品・釘	ST39	長:(3.1) 幅:0.9 厚:0.7	1671
2	鉄製	ST39		159	7	鉄製品・釘	ST39	長:(2.6) 幅:0.9 厚:0.6	1672
3	鉄製	ST39	サビで5枚剥落	160	8	鉄製品・釘	ST39	長:(3.5) 幅:1.0 厚:0.7	1673
4	鉄製品・釘	ST39	長:(8.1) 幅:(0.5) 厚:(0.3)	165	9	鉄製品・キセル	ST44	長:6.9 締目:1.0	168
5	鉄製品・釘	ST39	長:(5.3) 幅:(1.0) 厚:(0.8)	166					

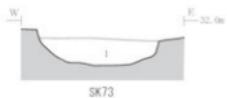
表10 墓跡属性表

で、16.7 m分を検出した。SK46 土坑より新しい。規模は幅が 0.3 ~ 0.4 m、深さ 0.1 m で、堆積土は SD42 と共通する。SD42 は現在の畑と山林の境と一致しており、耕作域と山林を分かつ地境の溝と考えられる。一方、これに接続する SD43 の西には近世墓が集中しており、山林を切り開いた墓域の東限溝とみられる。

#### 【SA13 土壙跡と SD14 空堀跡】(図版 23・100)

遺跡北端の段丘裾部で確認した土壙跡と空堀跡である。栗原市教委の安達氏によれば、両者は併行して東北自動車道付近まで認められるとのことであるから、総長は 1 km 以上ある。SA13 は斜面下位側に設けられた。基底幅は 4 m 以上、高さが 1.1 m 前後ある。基底を水平にすることなく、旧表土（第 IV 層）の上に SD14 挖削で生じた第 V・VI 層主体の土を直接積んでおり、積土自体もしまりがなかつた。積土の残存高は 0.7 m ほどである。SD14 は上幅 2.6 m 前後、下幅 1.2 m 前後、深さが 0.7 m ある。断面形は逆台形であるが、底面を水平にすることなく、傾斜に合わせている。

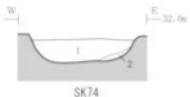
遺物が出土しなかったことから年代は不明であるが、空堀が斜面の上側につくられていること、傾



No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山ブロックを多く含む	



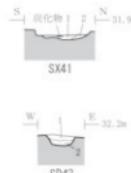
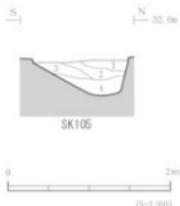
SK73 断面写真 (南から)



No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山大・中ブロックを多く含む	
2	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山大・中ブロックを多く含む	



SK74 断面写真 (南から)



No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山を含む	
2	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山ブロックを含む	
3	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山ブロックを含む	
4	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山ブロックを少し含む	

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	焼けた地山の小・中ブロックを含む	自然堆积
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト	焼けた地山の中・大ブロックを含む	

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	焼けた地山の中・大ブロックを含む	
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを含む	



0 10cm  
(1 : 2 : 3=1/20)

0 5cm  
(1 : 2 : 3=1/20)

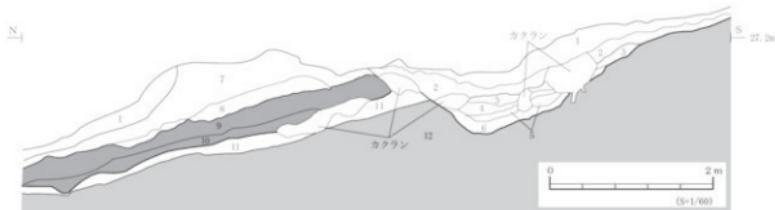
(比例:10)

No.	種別	出土地	器種・特徴	登録
1	染付・小皿	SP4	平底水甕。径18.2 高14.3 厚高2.4	54
2	鉢残	1T	内:平行タタキ 外:3列心内アラ貝	21

No.	種別	出土地	器種・特徴	登録
3	鉢	質水道宮	1T	55

図版 99 その他の遺構と第1層出土遺物

斜に合わせて構築されていること、土壌の積み方が丁寧でないこと、下位段丘面は近世以降、水田として利用されたことから、耕作地と山林(上位段丘斜面)の境に設けられた獸よけの施設と考えられる。



No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR2/3)	粘土質シルト		基本第1a層
2	褐褐色(10YR3/3)	粘土質シルト		基本第1b層
3	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト		
4	にじい黄褐色(10YR4/3)	粘土質シルト	砂を含む	SD14堆積土
5	褐色(10YR4/4)	粘土		
6	黒褐色(10YR2/3)	粘土質シルト	地山ブロックを含む	
7	褐色(10YR4/4)	粘土		
8	褐色(10YR4/4)	粘土		旧表土ブロックを含む SA13土壌
9	黒褐色(10YR2/3)	粘土質シルト		基本第Vb層
10	褐褐色(10YR3/3)	粘土質シルト		基本第Va層
11	褐色(10YR4/4)	粘土質シルト		基本第V層
12	褐色(10YR4/6)	粘土質シルト		基本第VI層

No.	土色	土性	混入物など	備考
7	褐色(10YR4/4)	粘土		
8	褐色(10YR4/4)	粘土		旧表土ブロックを含む SA13土壌
9	黒褐色(10YR2/3)	粘土質シルト		基本第Vb層
10	褐褐色(10YR3/3)	粘土質シルト		基本第Va層
11	褐色(10YR4/4)	粘土質シルト		基本第V層
12	褐色(10YR4/6)	粘土質シルト		基本第VI層



発掘調査前（東から）



断削部分の断面（南西から）

図版 100 SA13 土壌跡と SD14 空堀跡

## D. 総 括

築館バイパス工事に伴う発掘調査は、平成 21 年度から平成 27 年度まで行った。その結果、旧石器時代から縄文時代の遺物包含層 1、縄文時代晚期の遺物包含層 1、縄文時代の陥し穴 22、飛鳥時代から平安時代の竪穴住居 9、掘立柱建物跡 1 のほか、江戸時代以降は掘立柱建物跡 7（建替えを含む）、井戸跡 7、墓 17、溝跡 2 に加え、獣除けとみられる併行する土塁跡と空堀跡を発見した。これらの遺構や基本層からは土器や陶磁器、鉄製品、石製品などが出土している。

以下、旧石器時代と飛鳥時代から平安時代の遺構・遺物について検討を行うが、その際、何度も出てくる教育委員会は教委とし、さらに、過去に行った本遺跡の調査は、1976～1978 年に実施した東北自動車道調査（宮城県 1982）を自動車道調査、2001～2002 年に実施した旧志波姫町教委調査（志波姫町教委 2005）を浄水場調査と略すことにする。

### 1. 旧石器時代から縄文時代

平成 26 年度の本発掘調査区北西部で、縄文時代以降の遺構確認面（V 層上面）よりも下層（VI 層）で石器集中地点 1 箇所を検出し、2,772 点の石器が出土した。その内訳は楔形石器 2 点、二次加工ある剥片 3 点、石刃 4 点、剥片 19 点、碎片 2,744 点（目視 27 点、水洗篩回収 2,717 点）である。碎片が非常に多く出土していることから、遺跡内で何らかの石器製作が行われたものと推定できる。ここでは、遺跡内における石器製作活動を中心に本石器群の様相を把握するとともに、出土層位も踏まえて石器群の時期について検討する。また、周辺遺跡との比較検討から、本石器群の地域的な位置づけについて検討を行う。

#### （1）遺跡内における石器製作活動

本遺跡における石器製作活動について、石材の獲得から使用に至るまで、本石器群で確認される各要素から検討を行うこととする。

本石器群の石材は、珪質頁岩 50 点、珪質凝灰岩 4 点、玉髓 1 点である。このうち珪質凝灰岩としたものは色調に差異が認められるものの、細粒緻密で光沢を帯びる質感が非常に近似していることから、同一の範疇の石材として認識が可能である。したがって、本石器群は、ほぼ単一の石材を利用したものとして捉えることができる。

これらの石材は遺跡内の地層では産出されないことから、石器石材は遺跡外で獲得したものである。獲得した石器石材について遺跡内への搬入形態を検討するにあたって、本遺跡で出土した個々の石器の自然面の残存状況を確認すると、いずれも部分的であるという状況が確認される。このことから、原石や粗割り段階の分割礫のような搬入形態はあまり想定されず、調整がある程度行われた段階での搬入形態が考えられる。剥片の形態を見ると、数は少ないながらも石核調整剥片が出土していることから、石核段階での搬入があったものと推定される。また、目的剥片や石核調整剥片の出土が少ない

ことから、トゥールの素材剥片の段階での搬入も推定され、遺跡内でトゥールの製作や調整が行われたと考えられる。

本石器群は遺跡内で石器集中地点を形成する。石器集中地点は、Z4 グリッドを中心に南北約 5.5m、東西約 10m 以上に分布するとみられる。Z4 グリッドを中心とした密な分布状況を示す西側ではほとんどが剥片や碎片で構成され、やや散漫な分布状況を示す東側ではトゥールや石刃も含まれる。碎片の分布状況では西側を中心に東側でも広く分布していることから、西側では剥片生産やトゥールの製作、東側ではトゥールの使用・調整といった行動が想定される。特に西側では剥片生産に特化した場の機能が考えられる。ただし、大型のトゥールや剥片類が残されていないことから、大型剥片素材のトゥールに関連する石器製作やその使用はあまり想定されず、中～小型の石器製作や使用が主体であったと考えられる。

### (2) 出土石器群の時期

本石器群は、浅間板鼻黄色輕石（As-YP）と十和田八戸テフラ（To-H）の上位の黄褐色シルト質粘土層から出土している。県内において、これらの火山灰と石器群との層位的な関係が良好に捉えられる発掘調査資料はこれまで発見されていないが、十和田八戸テフラの噴出源である青森県内に目を向けると、十和田八戸テフラをキーテフラとして、旧石器時代終末期から縄文時代草創期にかけての遺跡の変遷が捉えられている（川口 2011）。これによると、十和田八戸テフラの下位から無文土器を作りうる長者久保・神子柴石器群が出土し、旧石器時代から縄文時代への移行期の段階に位置づけられ、十和田八戸テフラの上位では、縄文時代草創期に位置づけられる隆起線文系土器の出土が確認される。この層位的出土事例に照らし合わせると、本遺跡の石器群は縄文時代草創期に位置づけることが可能である。

ところで、本遺跡における石器群の出土層位は黄褐色シルト質粘土層であり、黒色や黒褐色を呈する土壤が形成される前の堆積層である。同じ縄文時代草創期に位置づけられる仙台市野川遺跡では、下位の黄褐色シルト層と上位の黒褐色シルト層の漸移層で遺構・遺物を検出している（仙台市教委 1996、鹿又・川口 2015）。本遺跡では漸移層直下が遺物包含層として捉えられることから、黒色土の形成という観点では、縄文時代草創期以前と推定される。

以上における層位的な関係から、本遺跡の石器群は縄文時代草創期の可能性が最も高いと言える。しかしながら石器の様相は、後期旧石器時代の形式技術的特徴のみが認められ、尖頭器などの両面加工石器や石斧など、当該期に特徴的な石器の存在が認められず、また、剥片や碎片の観察においても両面加工石器の製作や調整の痕跡が認められない。このことから、縄文時代草創期の石器群である可能性は高いものの、現時点では後期旧石器時代終末から縄文時代草創期までのある程度幅をもたせた時期の石器群として位置づけるのが妥当であると考える。

### (3) 遺跡周辺の旧石器時代石器群

本遺跡は、北側を流れる一迫川によって形成された緩やかに東へ傾斜する河岸段丘上に位置する。

これまでに発掘調査が行われた周辺の旧石器時代遺跡として、同一段丘上に栗原市淀遺跡（宮城県教委 2001）があり、一迫川を挟んでさらに北側の段丘上には同市伊治城跡がある。また、これらの段丘の西には築館丘陵が隣接し、この丘陵上に同市大久保遺跡（栗原市教委 2010b）が所在する（表 11）。大久保遺跡と同一丘陵上では、同市佐野原遺跡（興野 1976、鈴木ほか 2003）で大型局部磨製石斧が、同市小田裏 A 遺跡で有舌尖頭器（築館町史編纂委員会 1976）がそれぞれ採集され、いずれも縄文時代草創期に位置づけられている。

これらの石器群のうち、後期旧石器時代前半に位置づけられる石器群として、伊治城跡第 29 次調査出土資料（築館町教委 2004、図版 101-1～9）と大久保遺跡 3 区出土資料があげられる。前者には、縦長剥片素材のナイフ形石器（2）や石斧に類似する礫器（4）のほか、当該期に特徴的な台形剥片生産の様子がうががえる接合資料や石核、剥片類がある（5～8）。なかでも、石刃と台形剥片が同一個体から剥離された接合資料（9）はこの時期の剥片生産の特徴を捉えた良好な利用である。石材は碧玉や玉髓、瑪瑙が主体であり、他に珪質頁岩や珪化凝灰岩、黒曜石など多様な石材利用が認められる。また、大久保遺跡 3 区でも玉髓や碧玉製の剥片を主体とする石器群が出土している。この石器群は AT 下位から出土しており、層位的に時期が裏付けられた良好な資料である。

後期旧石器時代後半の資料としては、大久保遺跡 5 区出土資料があげられる。AT 降下層準に近接した層から珪質頁岩製の石刃が 4 点出土しており、両設打面石核や石核調整の存在を加味して、この時期の資料として位置づけられている。また、伊治城跡第 20 次調査（図版 101-12・13、築館町教委 1995）では半両面加工の尖頭器（13）と石刃（12）が出土しており、型式学的特徴からこの時期以降の石器群の可能性が考えられる。これらの石器群はすべて珪質頁岩を利用している点で、碧玉や玉髓が主体となる後期旧石器時代前半の石器群と石材利用のあり方において大きな差異が認められる。なお、上記以外の伊治城跡出土石器群（図版 101-10・11・14～18、築館町教委 1992・1993・1994・2001、栗原市教委 2009・2013・2015b）や淀遺跡出土石器群もまた、すべてが珪質頁岩製であり、これら石器群も後期旧石器時代後半以降の石器群の可能性が考えられる。

本遺跡から出土した石器群の石材は、玉髓 1 点を除きすべて珪質頁岩や珪質凝灰岩であり、本遺跡周辺の後期旧石器時代後半以降における石器群の石材利用のあり方に共通する。しかしながら、県

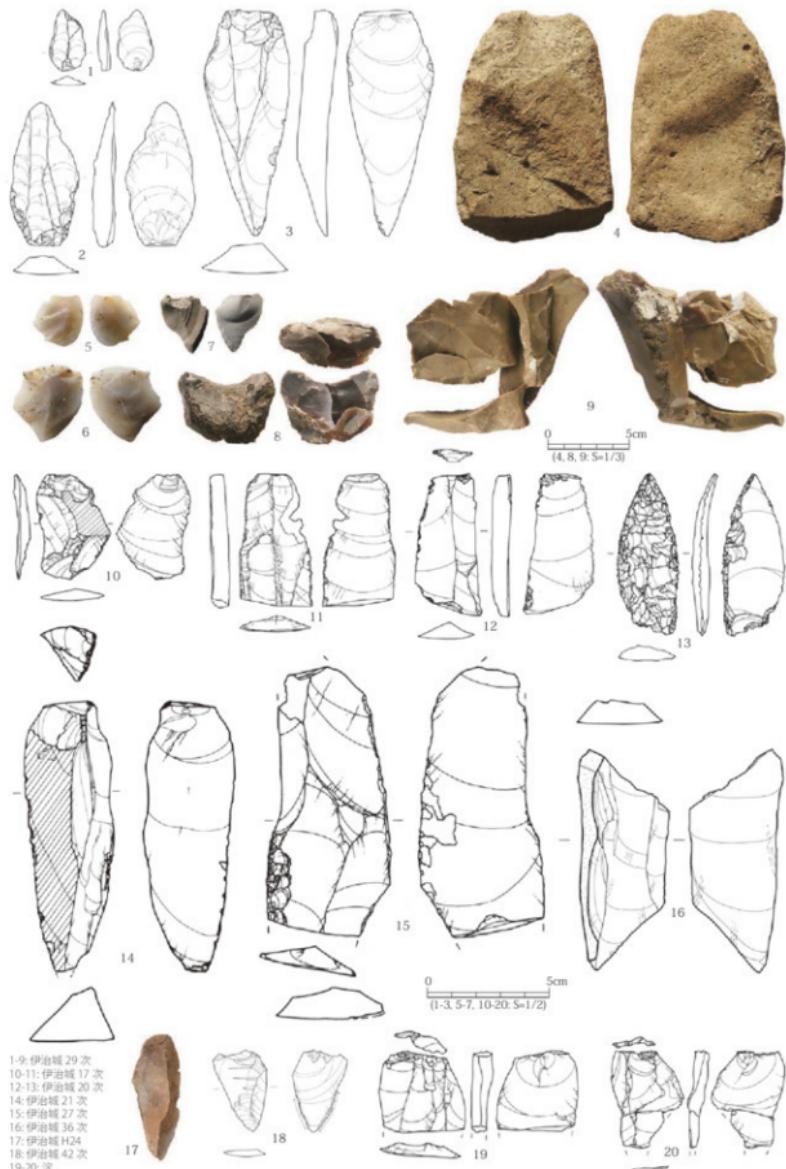
遺跡	立地	調査年度	器種	石材	発掘原因	文献	参考
伊治城 17 次	段丘	1991	石刃 1、剥片 1	珪質頁岩 2	保存目的の調査	町 17 集	
伊治城 19 次	段丘	1992	スクレイバー、剥片	不明	保存目的の調査	町 19 集	
伊治城 20 次	段丘	1993	未確認 1、石刃 1	珪質頁岩 2	保存目的の調査	町 20 集	
伊治城 21 次	段丘	1994	石刃 1	不明	保存目的の調査	町 21 集	
伊治城 22 次	段丘	2000	サイドスクレイバー 1	珪質頁岩 1	保存目的の調査	町 14 集	
伊治城 29 次	段丘	2003	ナイフ形石器 1、二次加工ある剥片 1、剥離 1、石核 14、剥片 146、剥片 243	碧玉 1、玉髓、瑪瑙 1 体 碧玉 2 件、石核 2 件、珪質凝灰岩、珪質シルト岩、朱化木、黒曜石など	保存目的の調査	町 17 集	後期旧石器時代前半
伊治城 36 次	段丘	2008	石刃 2、剥片 1	珪質頁岩 3	活用目的の調査	山 9 集	
伊治城 H24	段丘	2012	石刃 1	珪質頁岩 1	工事による	山 17 集	
伊治城 42 次	段丘	2014	二次加工ある剥片 1	珪質頁岩 1	活用目的の調査	山 19 集	
淀	段丘	2000	剥片 2	珪質頁岩 2	試験・確認調査	見 182 集	
大久保 3 区	丘陵	2008	*二次加工ある剥片 1、石核 2、剥片・碎片 23 *フルイ検出資料を除く	玉髓 17、碧玉 8、頁岩 1	記録保存調査	市 12 集	出土順位は AT 下位
大久保 5 区	丘陵	2008	石刃 4	珪質頁岩 4	記録保存調査	市 12 集	出土順位は AT 上位下限
御胸堂	段丘	2014	珪形石器 2、*二次加工ある剥片 3、石刃 4、剥片 19、剥片 2744	珪質頁岩 50、珪質凝灰岩 4、玉髓 1 *未洗浄の検出資料を除く	記録保存調査 本書	出土順位は As-Yp、To-H 上位	

表 11 御胸堂遺跡周辺の旧石器時代遺跡一覧

内の当該期石器群は必ずしも同様の石材利用状況ではなく（大場ほか 2006）、当該地域における特徴的な様相であると考える。

#### (4) まとめ

1. 平成 26 年度の本発掘調査区の北西部で、石器集中地点 1箇所を検出し、石器が 2,772 点出土した。その内訳は、楔形石器 2 点、二次加工ある剥片 3 点、石刃 4 点、剥片 19 点、碎片 2,744 点（目視取り上げ 27 点、水洗篩回収 2,717 点）である。
2. 本遺跡における石器石材は、珪質頁岩とこれに類似する珪質凝灰岩がほとんどである。珪質頁岩主体の石材利用は、本遺跡周辺の後期旧石器時代後半以降の石器群の石材利用のあり方と共通する。
3. 石器群は、浅間板鼻黄色軽石（As-YP）と十和田八戸テフラ（To-H）の上位、黒色土形成以前の堆積層から出土しており、後期旧石器時代終末から縄文時代草創期までの石器群として位置づけられる。



図版 101 周辺遺跡出土の旧石器

## 2. 飛鳥～平安時代

### (1) 土器と竪穴住居跡の年代

9軒の竪穴住居跡（SI01・02・03・06・07・11・15・50・51）を中心に土師器や須恵器が出土した。それらは自動車道調査区の成果を参考にすると、A群土器とB群土器に分けられる。

#### 【A群土器】（図版 102）

関東系土師器（註 15）を主体として在地土師器が組み合い、これに少量の須恵器が伴う。代表例は SI01・06 住居跡で、ほかに SI03・07・11・15・50 から出土している。関東系土師器には壺・塊・小形広口壺・長胴甕があり、長胴甕は器高から中形（17）と大形（19～23・25）に分かれる（註 16）。壺はいずれも丸底で、外傾して口縁にいたるもの（4）、口縁部で軽く屈曲するもの（5・8）、体部中位に稜があり、口縁部で外傾もしくは外反するもの（6・7）がある。塊（10）は 8 を大形化したものである。小形広口壺は胴部に最大径がある（13～15）（註 17）。甕の胴部は最大径が上半にあり小さな底部に向けてすぼまる。口縁部は「く」字状に強く屈曲して外反するもの（17・19～23・25）と、外傾するもの（20）がある。壺や甕の外面調整はヘラケズリで、後者の方向はヨコナデと接する上部が横方向、胴部は斜め、もしくは縦方向である。

在地土師器は壺・鉢・小形甕・長胴甕・ミニチュアがある。長胴甕には中形（18）と大形（24）がある。壺は有段丸底で内面は黒色処理が施される（以下、内黒とする）。いずれも段は体部中位にあるが、扁平で皿状になるもの（3）と底部の丸味が強いもの（1・2）とがある。鉢は甕または広口壺の下半を製作したのち、その上端をヨコナデして鉢としたものである（12）。大形の長胴甕は口縁端部が四角で、頸部に軽い段を持つ。胴部の最大径は中位にあり、外面は縦方向のハケメが施される（24）。中形（18）と小形（16）の甕の胴部調整は、縦方向や斜方向のナデである。ミニチュアは鉢形である（11）。

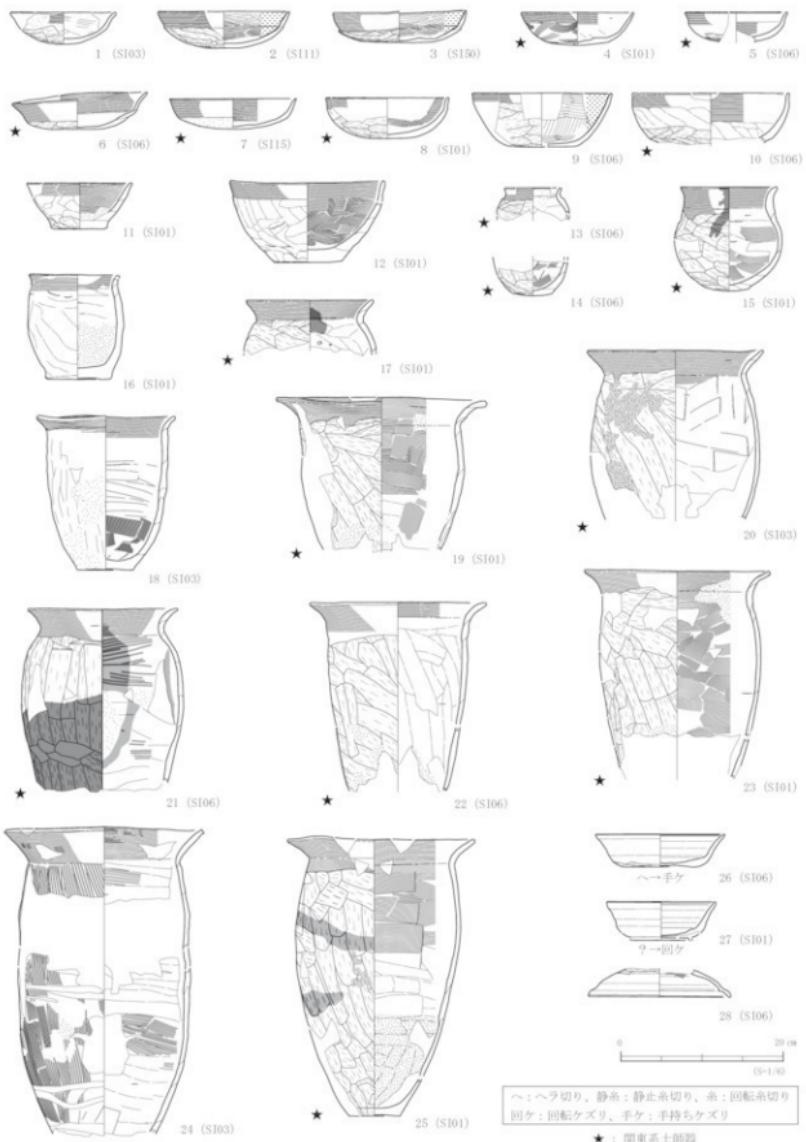
須恵器は壺・高台壺・蓋がある。壺は扁平で口縁内面に沈線が巡り、底部から体部下端にヘラケズリが施される（26）。高台壺もまた口縁内面に沈線が巡り、高台が低い（27）。蓋には弱いカエリが認められる（28）。

こうした特徴は、自動車道調査区の第 2 群土器（宮城県教委 1982）や浄水場調査区の SI1001 住居跡（註 18）、本遺跡南側に隣接する山ノ上遺跡 1・2 号住居跡（宮城県教委 1980g）などに類例が求められる（図版 103）。また、宮城県北部・沿岸部の 6～8 世紀の土器をまとめた佐藤敏幸氏の六段階にあたり、A 群土器の年代は 8 世紀前葉と考えられる（佐藤 2007）。

#### 【B群土器】（図版 104）

非口クロ調整の土師器を主体とし、少量のロクロ土師器食器と須恵器で構成される。SI51 に代表され、ほかに SI02 からも出土している。非口クロ土師器には壺・塊・鉢・広口壺・長胴甕・ミニチュアがあり、長胴甕には中形（16）と大形（17・18）がある。

壺は有段と無段（8～10）に分けられ、さらに前者は段の位置から中位（5～7）、下位（3・4）、下端（1・2）に細分できる。段の位置によって底部の形状も異なり、中位は丸底、下位は平底底、下端は平底である。このうち、1 と 3 は底部中央に静止糸切り痕が認められた。また、9 の土師器壺



1~8: 土師器壺、9・10: 土師器壺、11: 土師器ミニチュア、12: 土師器鉢、13~15: 土師器小形広口壺、16: 土師器小形壺。

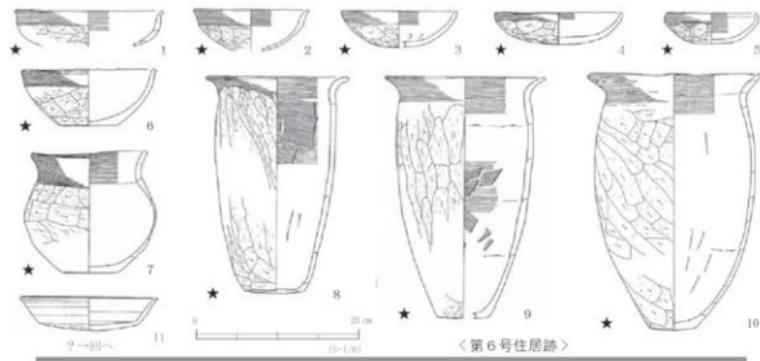
17~18: 土師器長胴壺(中形)、19~25: 土師器長胴壺(大形)、26: 須恵器壺、27: 須恵器高台壺、28: 須恵器蓋

図版 102 A 群 土 器

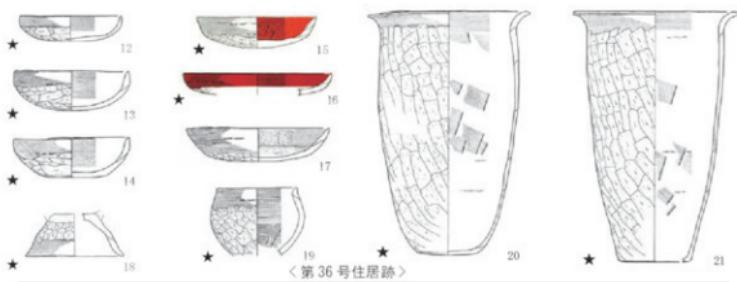
～: ヘラ切り、静糸: 静止糸切り、糸: 回転糸切り  
回ケ: 回転ケズリ、手ケ: 手持ちケズリ

★: 関東系土師器

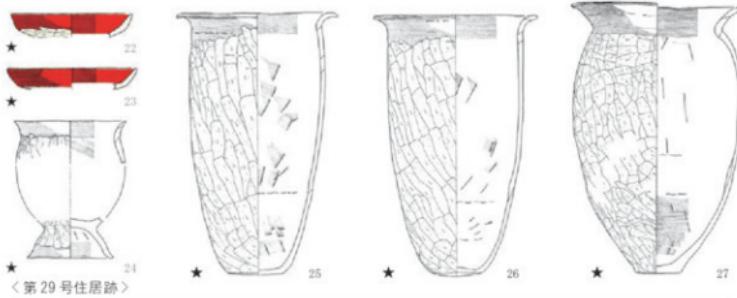
0 20 cm  
(S=1/6)



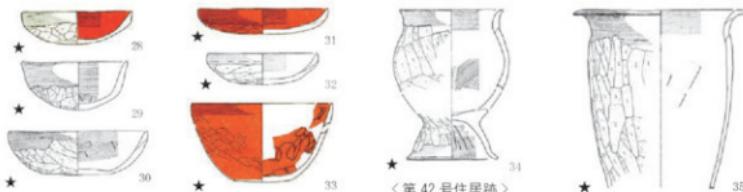
〈第6号住居跡〉



〈第36号住居跡〉



〈第29号住居跡〉

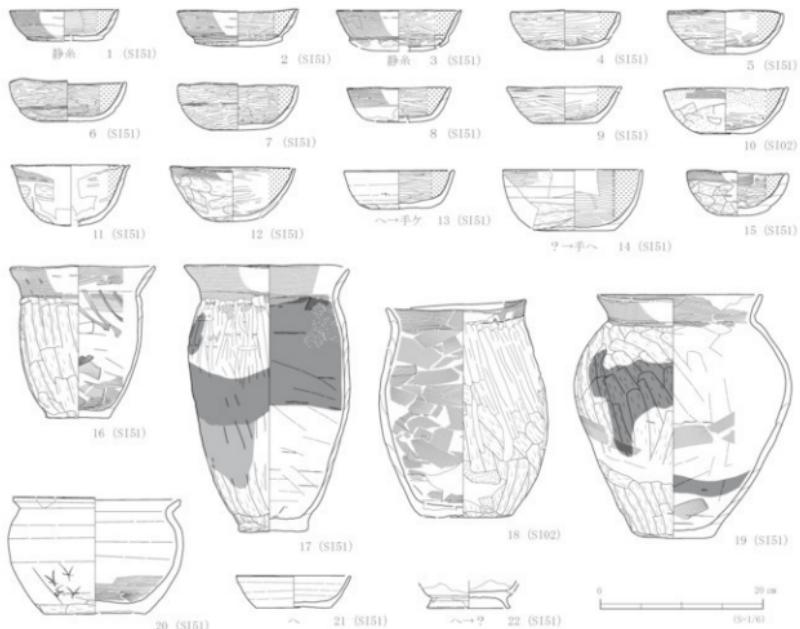


〈第42号住居跡〉

1~6・12~17・22・23・28~32: 土師器坏。33: 土師器塗。7: 土師器小形広口壺。19: 土師器鉢。  
18・24・34: 土師器台付壺。8~10・20・21・25~27・35: 土師器長胴甕(大形)。11: 頸壺器坏。

★: 開東系土師器

図版 103 A群土器の類例—自動車道調査区第2群土器

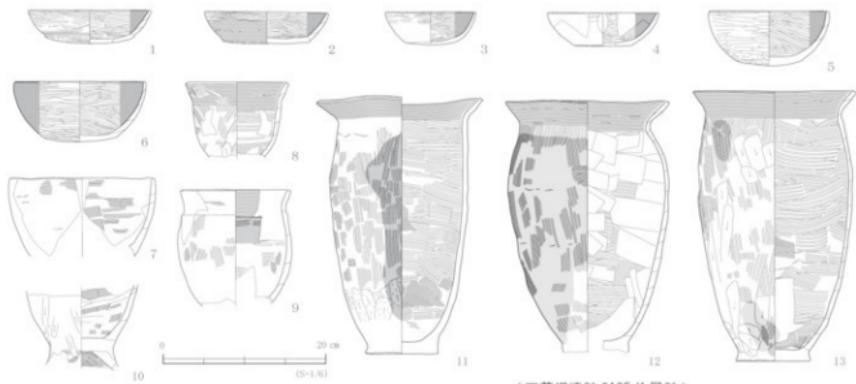


図版 104 B 群 土 器

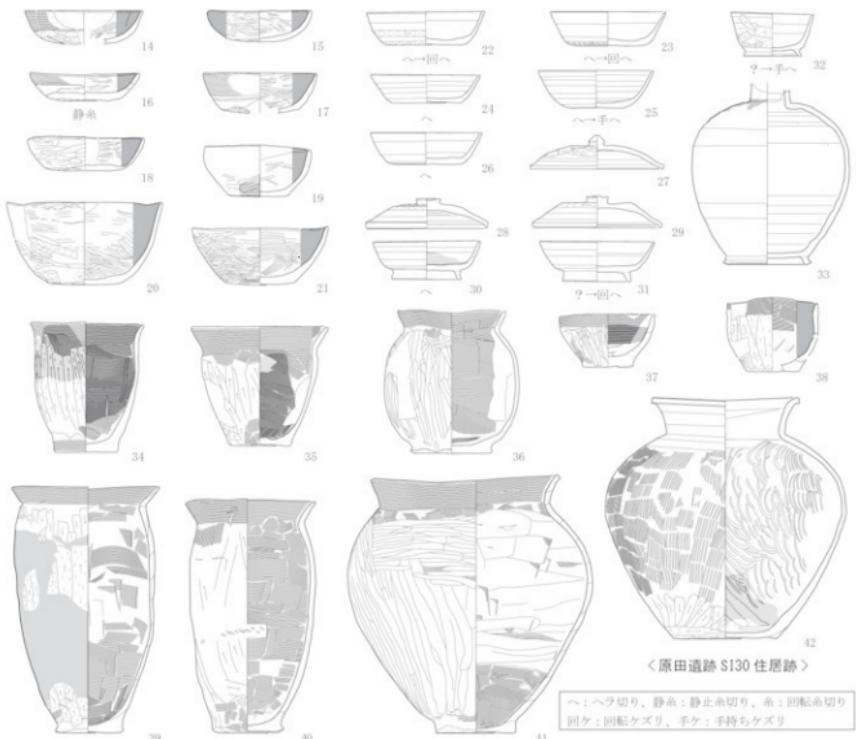
底部には、ヘラや刀子などの工具の先端を利用した刻画が認められた。体部下端にも文様があることから、鞍を装着した馬が描かれたとみられる(図版 83-9)。塊は平底状丸底で、体部から底部にかけてヘラケズリが施される(11・12)。長胴甕や広口甕は頸部の段がなくなり、胴部調整がヘラケズリやミガキとなる(16~19)。特に、17は胴部最大径が上半にあり、器形や胴部調整がA群土器の関東系土師器長胴甕(大形)に近い。ミニチュアは壺形で、内面に黒色処理が施される(15)。

ロクロ土師器は壺(13)・塊(14)の食器のみ認められ、前者は非ロクロ土師器無段壺と器形や法量が似る。塊の口縁部外面にはミガキがみられる。須恵器は壺が皿形でヘラ切りであり(21)、高台壺はA群土器に較べて高台が高くなる(22)。また、有段土師器壺や須恵器壺には墨書き(図版 83-1・84-1)、ロクロ土師器壺や須恵器鉢には刻書きが認められるものがある(図版 83-12・86-22)。

こうした特徴は、自動車道調査区の第4群土器(宮城県教委 1982)や原田・下萩沢遺跡 I B群土器(宮城県教委 2009)、城下遺跡 SI16 B住(栗原市教委 2014)などに類例が求められる(図版 105)。また、前述した佐藤編年の七段階にあたり、B群土器の年代は8世紀中葉~後半と考えられる(佐藤 前出)。



〈下萩沢遺跡 S105 住居跡〉



1~4・14~19: 土師器壺。5・6・20・21: 土師器壺。7・37・38: 土師器鉢。8・9・34・35: 土師器小形壺。  
10: 土師器台付壺。11~13・39・40: 土師器長胴壺(大形)、36: 土師器小形広口壺。41: 土師器広口壺。  
22~26: 須恵器壺。27~29: 須恵器蓋。30~32: 須恵器高台壺。33: 須恵器長頸壺。42: 須恵器中壺。

図版 105 B群土器の類例—原田・下萩沢遺跡 I B群土器

### (2) 壴穴住居跡

土器群ごとに竪穴住居について検討を行う。このうち、規模は本調査がバイパス路線敷きとなり、全体が判明するのが9軒中6軒であることから、他の3軒については一邊の長さをもとに考えることとする。

#### 【A群土器段階】

7軒あり、平面形は方形が5軒 (SI01・03・06・07・50)、長方形が1軒 (SI15)、不明が1軒 (SI11) である（註 19）。いずれもコーナーは丸くならず、直角に近い。住居の方向は1軒 (SI15) を除いて真北から東西に5°以内に収まる。こうした傾向は自動車道調査区でも認められ、カマドが判明した22軒のうち、北壁に設けられた15軒のカマドの方向は東西10°以内に集中することから（宮城県教委 1982）、本段階の住居は齊一性が高い（註 20）。

つぎに規模・主柱配置・入口ピット・周溝・壁材痕についてみてみたい。規模は一邊6m前後が2軒 (SI01・03)、5m弱が1軒 (SI06) で、他の4軒 (SI07・11・15・50) は4m前後とみられる。主柱や入口ピット・周溝・壁材痕は、一邊5m以上の3軒がいずれも主柱が住居対角線上に4本で、入口ピットはカマドに対面する南壁中央内側にあり、カマド部分を除いて壁材痕が巡る。これに対し、一邊4m前後のものは主柱が4本とみられるのが1軒 (SI07)、中央1本が1軒 (SI50)、主柱なしで1軒 (SI15)、不明が1軒 (SI11) とバラエティに富む。このうち、SI07は周溝が巡るのにに対し、SI15とSI50は入口ピットや周溝は認められない（図版 106）。こうしたことから、一邊5mを超える住居は主柱4本でカマド対面に入口ピットを有し、壁材が巡るといった高い規格性が認められるが、一邊4m前後以下の小さな住居は多様なあり方を示している。

#### 【B群土器段階】

2軒 (SI02・51) あり、平面形は方形とみられる。いずれもコーナーは丸くならず、直角に近い。住居の方向はSI02がN 1°Wと真北に近いが、SI51はN 12°Wと西に傾く。規模はSI51が一邊5m以上に対し、SI02は一邊が4m未満である。規模の違いはA群土器段階と同じく主柱配置や入口ピット・壁材痕に反映しており、前者は主柱4本でカマド対面の南壁中央内側に入口ピットがあり、カマドを除いて壁材が巡るのにに対し、後者は主柱や壁材は認められない（図版 106）。

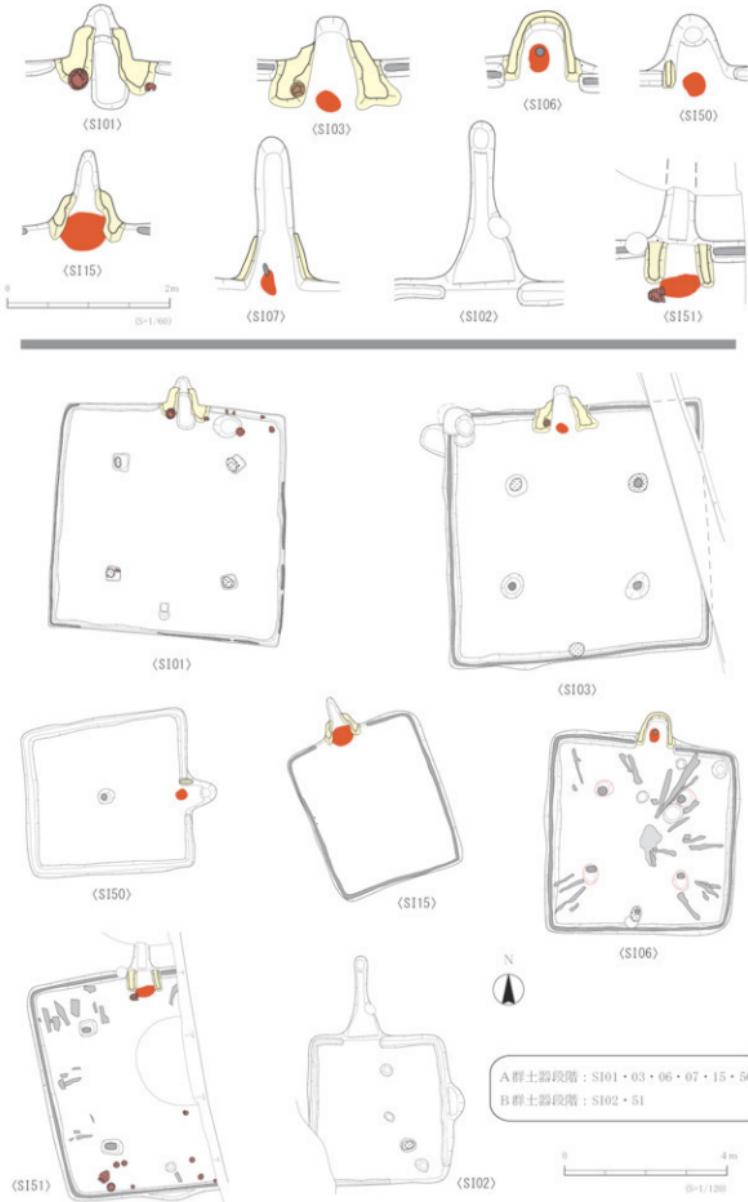
### (3) カマド

カマド構造が検討できる住居はSI11を除く8軒で、土器群ごとに検討を行う。

#### 【A群土器段階】

カマドの位置は、北壁中央が5軒 (SI01・03・06・07・15)、東壁中央が1軒 (SI50) である。いずれも本体は住居壁を外側に掘り込んで内壁に白色粘土を貼付けており、その一部が住居内まで延びるものがある。煙道は、掘込みの最奥部が煙道奥壁となるものと0.6m以下の短煙道もしくは1.2mの長煙道が付くものがある。カマドの置替えは認められない（註 21）。これらをまとめると、以下のようになる（図版 106）。

- ・カマドは住居壁を掘り込み、白色粘土でつくられ、奥は煙道奥壁と一致する……SI06



図版106 バイバス調査区のカマド（上）と竪穴住居跡（下）

- ・カマドは住居壁を掘り込み、白色粘土でつくられるが、本体の一部は住居内まで延び、短煙道が付く……SI01・03・15・50
- ・カマドは住居壁を掘り込み、白色粘土でつくられるが、本体の一部は住居内まで延び、長煙道が付く。掘り込んだ本体と煙道の下部は地山削出しで、上部が白色粘土となる。煙道は半地下式である……SI07

#### 【B群土器段階】

カマドの位置は、2軒（SI02・51）とも北壁中央とみられる。本体と住居壁との関係や煙道のあり方は、以下のとおりである（図版 106）。

- ・カマドは住居壁を掘り込み、白色粘土でつくられ、長煙道が付く……SI02
- ・カマドは住居内にあり、白色粘土でつくられ、長煙道が付く……SI51

### 3. 江戸時代以降

掘立柱建物跡 7 棟（建替えを含む）、井戸跡 7 基、墓 17 基を検出した。掘立柱建物跡や井戸跡の多くは、C 区中央から東側にするものが多く、墓はそれらから離れた C 区北西隅の D 区との境に集中していた。こうした例は、自動車道調査区でも確認されている。掘立柱建物や井戸で構成された施設群は、現在の国道 398 号線寄りにあり、そこから離れた山林との境に墓が営まれている。国道近辺には、若柳宿や石森宿を経て狼河原村にいたる「薬館・狼河原道」が通っていたことから（仙台郷土研究会 2002）、道側に建物・小屋（雜舎）・井戸で構成された農家が点在し、周りの遺構がない部分は畠などの耕作域、敷地奥の山際に屋敷墓が営まれたという景観が想定できる。

### 4. 飛鳥～平安時代の御駒堂遺跡

#### （1）土器変遷・竪穴住居跡の年代・集落の様相

御駒堂遺跡の発掘調査は、1976～1978 年に実施した東北自動車道調査（宮城県教委 1982）、2001～2002 年に実施した浄水場調査（志波姫町教委 2005）、2009 年～2015 年の築館バイパス調査（本書）と栗原市教委による小規模開発に伴う数箇所の調査が行われている。ここでは、これまでの調査成果から飛鳥～平安時代における集落の様相をまとめ、さらに、そこから派生した古代栗原郡をめぐるいくつかの問題について考えてみたい。

発掘調査が行われた自動車道調査区・浄水場調査区・バイパス調査区における飛鳥～平安時代の土器は 5 つの土器群（I～V 群土器）に分けられ、竪穴住居跡の年代は表 12 のようにまとめられる。バイパス調査の A 群は II 群土器、B 群土器は III 群土器に含まれる。また、自動車道調査区の第 3 群土器と第 5 群土器について再検討を行った結果、第 3 群土器は土師器環・甕の様相が第 4 群土器（B 群土器）と共にすると判断できたことから、III 群土器に含めている。

さらに、第 5 群土器は資料数が少ないためロクロ土師器を主体とする土器として一括されていたが、ロクロ土師器環・須恵器環の様相から第 17・18 号住居跡、第 16・21 号住居跡、第 33 号住居跡の 3 つに分けることができた。それらの中で古い第 17・18 号住居跡出土土器を IV 群土器、新しい

土器群の名稱 全体の名稱	年代 自動車道調査区 バイパス調査	浄水場調査区 道路北側	バイパス調査区 道路南側	東部市調査区 道路北側	自動車道調査区 道路北側	数 割合 (%)
I群土器 第1群土器	— 7世紀末～8世紀初頭				12・14・20E	3 5
II群土器 第2群土器	A群土器 8世紀前葉	SI1001	SI01・03・06・ 07・11・15・50	SI1016	1・2・3・4・5・6・7・13・15・24・27・ 28・29・30・34・35・36・37・38・ 39・41・42E	31 55
III群土器 第3・4群土器	B群土器 8世紀小要～後半	—	SI02・51	10・11・22・40E	6 11	
V群土器 第5群土器	— 9世紀前葉	—	—	17・18E	2 4	
V群土器 —	— 9世紀小要	—	—	16・21E	2 4	
未確認用不明	—	SI1002～1006(確認の有り)	—	8・9・23・25・26・31・33E	12 21	

\*表中の調査区の番号は道路内での位置を示しており、西端の浄水場調査区を左、東端付近のバイパス調査区を右とした。

表 12 土器群の併行関係と竪穴住居跡の年代 一飛鳥・奈良・平安時代

第 16・21 号住居跡を V 群土器とする。第 33 号住居跡は資料数が少なく、時期は特定できない。

### 【I 群土器】

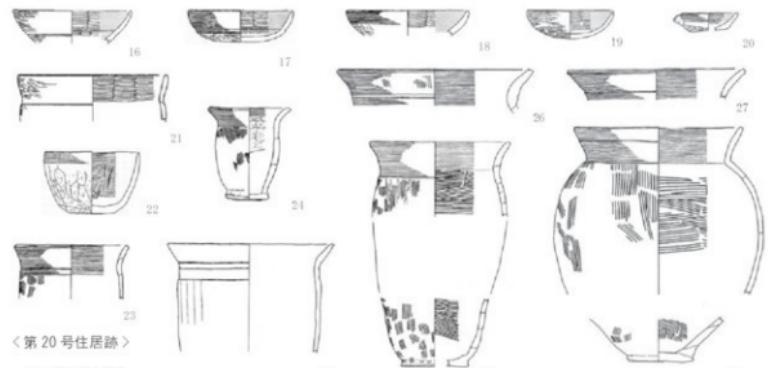
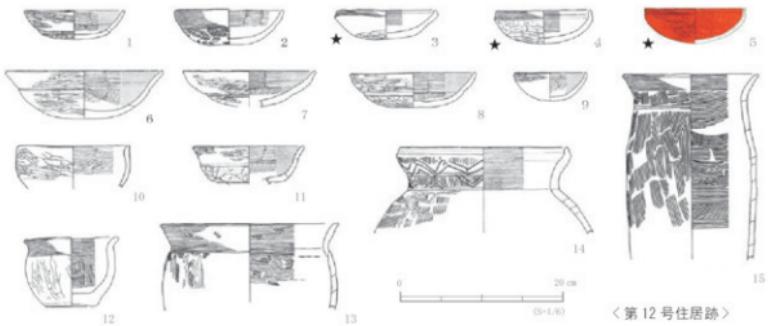
自動車道調査区の第 12・20 号住居跡に代表され、非口クロ調整の在地土師器と少量の関東系土師器で構成される（図版 107）。須恵器は認められない。年代は 7 世紀末から 8 世紀初頭である（佐藤 2007）。在地土師器は壺・高壺・塊・大形環（鉢）・鉢・片口・広口壺・小形甕・長胴甕（中形・大形）がある。环は有段丸底を主体とし、無段丸底が少量伴い、いずれも内面が黒色処理（以下、内黒といふ）されている。広口壺や長胴甕は頸部に段を持ち、胴部調整は縱方向のハケメが主体である。壺や甕類に特徴的な段は、成形時に体部・胴部の内側にすらして口縁部を巻き上げる、もしくは積み上げることで段を形成しており（辻 2007）、こうした製作技法は II 群土器期まで継承される。

これらの中には、東北南部の土師器とは異なる特徴を持つものが含まれる。口縁部が内轉して外面上にミガキまたは外面の段以下にハケメが施される环（2・7・8・16）、口縁部が外反して外面にミガキが施される大形环（鉢）（6）に加え、甕や広口壺は口縁端部が四角いもの（13・23・26・27）、口縁部に段や沈線が巡るもの（26・27・29）、口縁部に沈線で鋸歯文が描かれるもの（14）があり、こうした特徴は東北北部系土師器と考えられている（佐藤 前出）。関東系土師器は环のみ認められ、口縁部が弱く屈曲するもの（5）と直立するもの（3・4）があり、器形は前者が北武藏型暗文环、後者は北武藏型环に類似する。

本段階の竪穴住居跡は遺跡北東部で 3 軒確認され、それぞれ 11 ～ 15 m 離れている。

### 【II 群土器】

自動車道調査区の第 1・2・6・15・24・28・29・35・36・41・42 号住居跡、浄水場調査区の SI1 住居跡、本調査 SI01・06 住居跡に代表される（図版 108）。関東系土師器を主体とし、少量の在地土師器と須恵器で構成される。年代は 8 世紀前葉である（佐藤 前出）。関東系土師器は环のみ認められ、口縁部が弱く屈曲するもの（5）と直立するもの（3・4）があり、器形は前者が北武藏型暗文环、後者は北武藏型环に類似する。



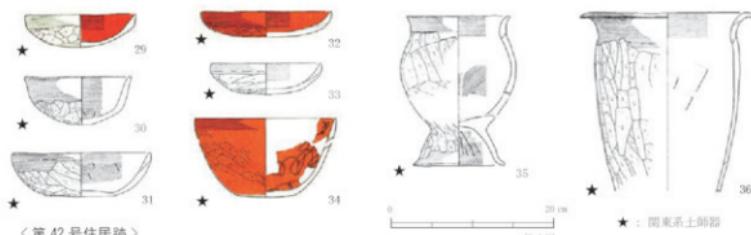
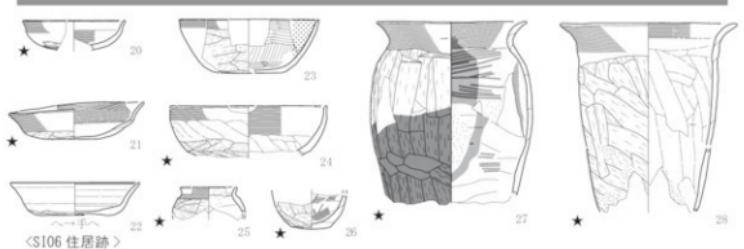
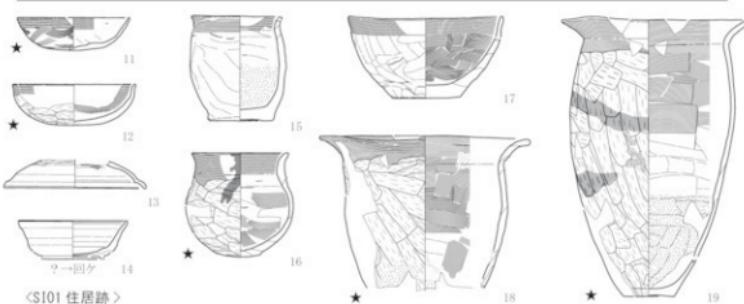
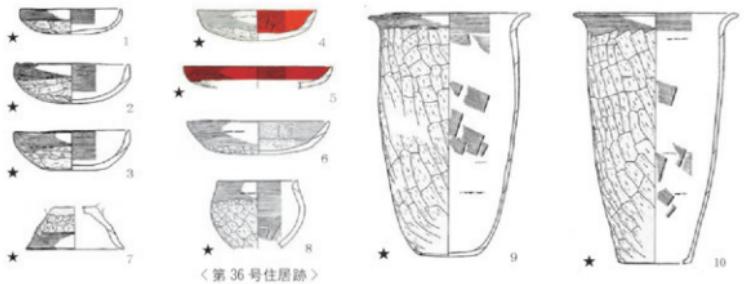
1～5・7・8・16～18：土師器環、6：土師器大形環、9・19：土師器ミニチュア、10：土師器塊、11：土師器高环、  
21・22：土師器鉢、12・23・24：土師器小形甕、13・15・25・28：土師器長胴甕（大形）、14・26・27・29：土師器広口甕

図版 107 御駒堂遺跡出土土器の変遷（1）－1群土器－

ところで、図版 109 は第 18・27 号住居跡から出土した甕で、底部中央部分が下方に突出する。これらは本来、平底でつくられたのち突出部分をケズリとばして丸底に仕上げるものが、何らかの理由で突出部を残したまま焼成されたと考えられる。こうした技法は栗田式期の丸底甕と共に通しており（註 前出）、関東系土師器環の製作工程を知ることができる貴重な資料である。

在地土師器は甕・高甕・広口甕・長胴甕がある。甕は有段丸底で内黒であるが、前代より器高が低くなる。広口甕や大形甕の特徴は前代と同じである。須恵器は丸底で回転ヘラケズリの甕、弱いカエリを有する蓋のほか、平底で手持ちヘラケズリの甕（22）などの新しい様相を示すものも認められる。

本段階の竪穴住居跡は 31 軒あり、全体の 55%（31/56）を占める。集落は 3～4 軒の住居がそれぞれ 10～15 m 離れて 1 ブロック（以下、住居小群とする）を形成し、東西 1,500 m、南北 400



1・6・11・12・20・21・29～33：土師器塙、34：土師器壇、8・17：土師器鉢、7・35：土師器台甕、15：土師器小形甕、9・10・18・19・27・28・36：土師器長脚甕（大形）、16・25・26：土師器小形広口甕、13：須恵器蓋、14：須恵器高台甕、22：須恵器環

図版 108 御駒堂遺跡出土土器の変遷（2）－II群土器－



図版 109 成形段階の台を残す関東系土師器壺

mの遺跡全域に展開したと考えられる。土器は関東系土師器を主体としており、在地の要素は客体的に認められるに過ぎない。

### 【III群土器】

自動車道調査区第 22 号住居跡、本調査 SI51 住居跡に代表される（図版 110）。在地土師器と須恵器からなり、前者は非クロロ調整の土師器を主体とするが、少量のクロロ土師器食器が伴う。年代は 8 世紀中葉から後半である（佐藤 前出）（註 22）。

非クロロ土師器には壺・塊・鉢・広口壺・小形甕・長胴甕（中形・大形）がある。壺は有段と無段があり、前者は前段階ほど明瞭でなくなるものや、段の位置が下がって底部が平底状や平底となるものの割合が増える（2・19～23）。塊は平底もしくは平底状丸底で、後者はミガキ調整が省略されヘラケズリだけが認められる（31・32）。長胴甕や広口壺は頸部に段が付くものとないものがあるが、胴部最大径は上半にあるものが多く（16・17・35・36）、外面調整はヘラケズリやミガキが増える。こうした器形や胴部調整の変化は、関東系土師器の影響と考えられる。また、本段階の特徴として壺塊類の段や甕甕類の頸部の段が不明瞭、もしくはないものが増える。これは、口縁部の成形技法が異なるためで、前段階までの体部や胴部の内側にずらして巻き上げる、もしくは積み上げる方法を止めたためと考えられる。

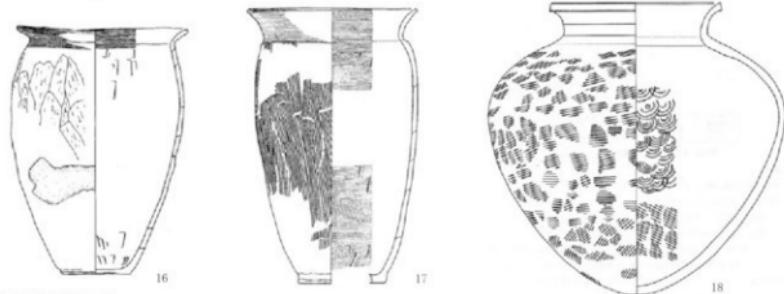
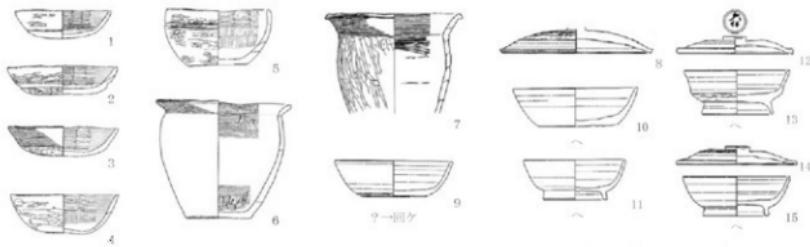
クロロ土師器は食器のみ認められ、非クロロ土師器の同器種と器形や法量が似る（30・31）。須恵器には壺・高台壺・蓋・鉢・中甕がある。壺は皿形でヘラ切りが多く（10・33）、高台壺もまた皿形・ヘラ切りであるが、前代より高台が高くなる（11・13・15）。蓋は天井が低く扁平で、擬宝珠つまりが付く（12・14）。中甕は丸底である（18）。

本段階の竪穴住居跡は 6 軒ある（註 23）。遺跡西側 2 軒と東側 4 軒あり、東西に認められるものの、前代に較べて数は著しく減る。

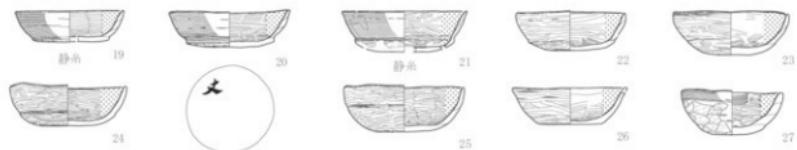
### 【IV群土器】

自動車道調査区の第 17・18 号住居跡に代表される（図版 111）。クロロ土師器と非クロロ土師器、須恵器で構成される。クロロ土師器壺は皿形で体部下端から底部が回転ヘラケズリされる（1・2）。1 は口縁部外面にヘラミガキが認められる。非クロロ土師器には小形甕と長胴甕があり、後者の器形や調整は前代と共に通する（5）。須恵器壺は皿形・ヘラ切りである（3）。

こうした特徴は、佐藤編年の八段階に後続し（佐藤 前出）、色麻町上新田遺跡出土土器（宮城県教委 1981a）や大衡村亀岡遺跡出土土器（東北学院大学考古学研究部 1979、大衡村教委 1995）に類例があることから、9 世紀前葉と考えられる（註 24）。

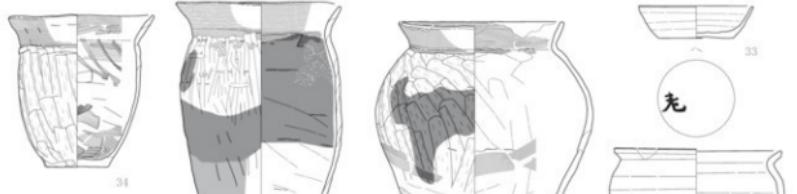


〈第22号住居跡〉



～→手ケ

9→手ケ

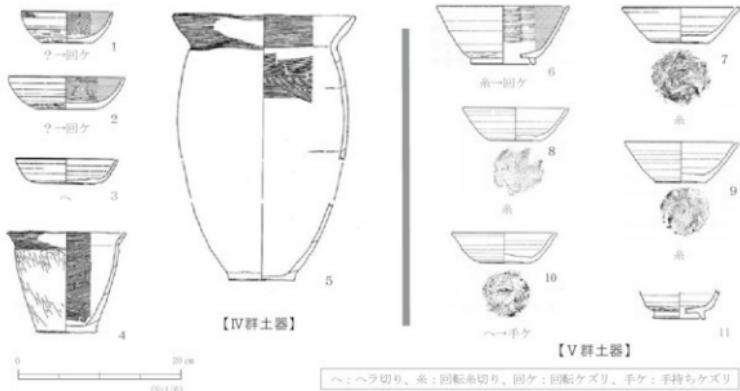


〈S151住居跡〉



1 ~ 4 • 19 ~ 26: 土器壺、5 • 28 • 29: 土器縁、6 • 7: 土器小形甕、34: 土器長胴甕(中形)、  
16 • 17 • 35: 土器長胴甕(大形)、36: 土器器広口甕、27: 土器器ミニチュア、30: ロクロ土器壺、31: ロクロ土器壺、  
9 • 10 • 33: 猛患器壺、11 • 13 • 15 • 35: 猛患器高台壺、8 • 12 • 14: 猛患器蓋、37: 猛患器鉢、18: 猛患器中甕

図版 110 御駒堂遺跡出土土器の変遷(3) - III群土器-



1～5：第17号住居跡、6・7：第21号住居跡、8～11：第16号住居跡

1・2：ロクロ土師器坏、6：ロクロ土師器高台坏

4：土師器小形甕、5：土師器長胴甕（大形）、3・7～10：須恵器坏、11：須恵器高台坏

図版 111 御駒堂遺跡出土土器の変遷（4）—IV・V群土器—

本段階の竪穴住居跡は遺跡北東部で2軒確認された。両住居は東西に2.4mほど離れる。集落は北東部に限定され住居数も少ないとみられる。

#### 【V群土器】

自動車道調査区の第16・21号住居跡に代表される（図版111）。資料数は少ないもののIV群土器とは土師器や須恵器の器形や製作技法が異なることから、新たに設定した。ロクロ土師器と須恵器で構成される。ロクロ土師器高台坏は逆台形で回転糸切りのうち、体部下端から底部に回転ヘラケズリが施される（6）。須恵器には坏・高台坏・大甕がある。坏は逆台形でヘラ切りや回転糸切りがあり、後者が多い（7～9）。前者には再調整で手持ちヘラケズリが認められるものがある（10）。こうした特徴は、多賀城跡SE2101B井戸跡出土土器（多賀研1992）などに類例があり、9世紀中葉と考えられる。

本段階の竪穴住居跡は遺跡北東部で2軒確認された。集落の位置や規模は前代とほぼ同じとみられる。

#### （2）竪穴住居跡の検討

これまでの調査で確認された古代の竪穴住居跡は55軒で、うち50軒を精査し、その結果、33軒の所属時期が判明した。これらの属性は表13にまとめている。集落の開始は7世紀末～8世紀初頭で9世紀中葉まで続くが、8世紀末～9世紀初頭の住居は確認されていない。ここでは、住居の規模や主柱配置、周溝・壁材、入口について検討する（図版112・113）。

その際、何度も出てくる自動車道調査区の第○号住居跡は○住とする。また、浄水場調査区とバイバス調査区の遺構名は、前者をSI1001～1006、後者はSI01～51と呼んで区別する。

各推定値は( )を付けて表した。

筆者居の範囲は、木氏の分類、超大(60ml以上)・特大(40~60ml未満)・大型(25~40ml未満)・中型(15~25ml未満)・小形(15ml未満)に従った(八木1998)。

表 13 御駒堂遺跡の竪穴住居跡属性表

## 【規模】

住居面積から超大形(60m<sup>2</sup>以上)、特大形(40m<sup>2</sup>以上 60m<sup>2</sup>未満)、大形(25m<sup>2</sup>以上 40m<sup>2</sup>未満)、中形(15m<sup>2</sup>以上 25m<sup>2</sup>未満)、小形(15m<sup>2</sup>未満)に分けると(八木光則 1998)、I群土器期は特大形1・中形2、II群土器期は特大形4・大形7・中形8・小形8、III群土器期は大形1・中形3・小形1、IV群土器期は小形2、V群土器期は特大形1・中形1である。

数が多いII群土器期についてみると、自動車道調査区は中形以上の3~4軒が10~15m離れて一つのグループを形成しており(以下、住居小群とする)、小形住居は南東部で5軒まとまっていた。一方、バイパス調査区では小形住居を含めた3~4軒の住居小群が認められる。

## 【主柱配置】

主柱配置は、a) 4本が住居の対角線上に配置され、それらを結んだ線は正方形に近いもの、b) 4本のうち2本が住居内部、2本は壁際に配置され、それらを結んだ線は長方形となるもの、c) 6本のうち4本が住居の対角線上、2本は壁間に配置され、それらを結んだ線は長方形となるもの、d) 住居中央に2本配置されるもの、e) 住居中央に1本配置されるもの、f) 主柱がないものの6類に分けられる。柱は丸柱が多いが、角柱も認められる(SI01・06・51)。

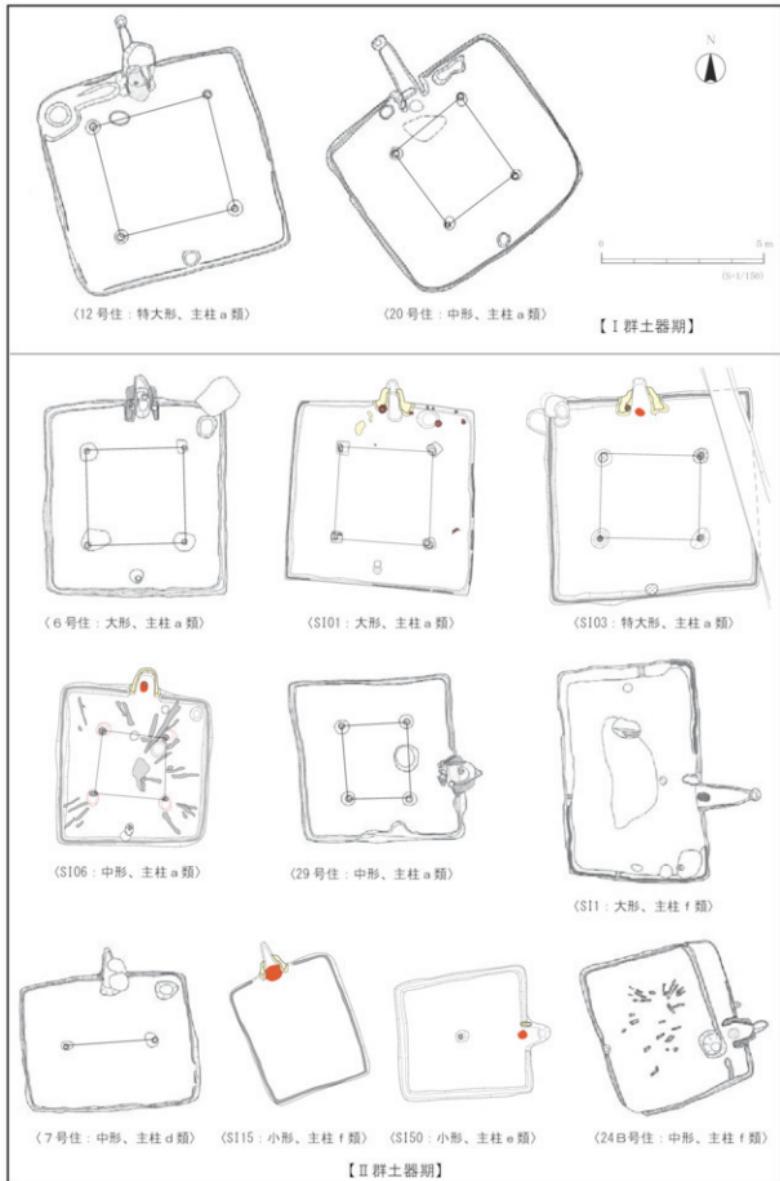
中形以上の28軒はa類が19軒と多い。この傾向は、面積を算出できないもののうち、一辺4mを超える住居を加えるとさらに数が増えることから、時期に関係なく中形以上の住居のスタンダードといえる。それらの中にはIII群土器期の22住のように、柱を結んだ線が歪んだ方形になるものがある(図版113)。b・c類は主柱の片側が壁際に寄り、それらを結んだ線が長方形となる。b類はII群土器期に1軒(36B住)認められるが、他の2軒(b:16B住、c:33住)はIV群土器期以降である。d類は中形の平面長方形で1軒(7住)、e・f類は、時期にかかわらず小形住居でのみ認められる。

## 【周溝・壁材】

周溝は面積のわかる46軒のうち、38軒でカマド部分を除いて認められ、住居規模に関係なく全周する傾向が高い。また、浄水場調査区やバイパス調査区では、周溝を持つ住居10軒のうち、7軒で壁材が確認できたことから、周溝を有する住居の7割ほどは壁材が巡っていたとみられる(註25)。

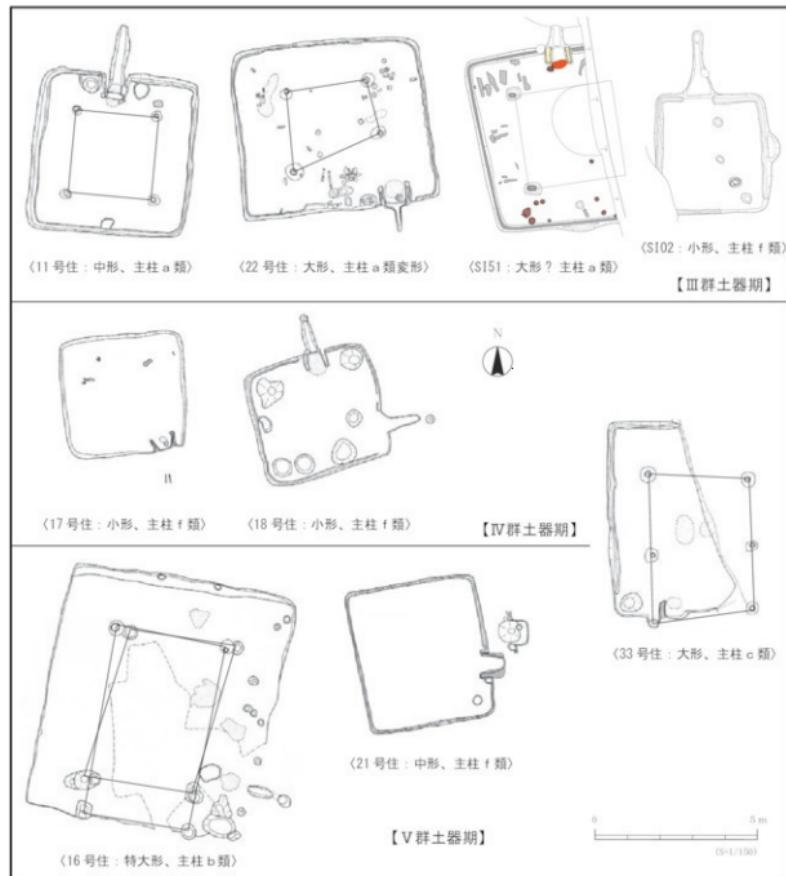
## 【入口】

住居の入口が検討できる45軒うち、15軒で入口ピットを確認した。位置はカマド反対側の壁際中央付近である。その中で、13軒は主柱配置がa類である。また、主柱配置b・c類は柱2本が壁際にあるため、aタイプとは上屋構造が異なる。具体的には、住居内に柱のある側が入母屋もしくは寄棟で、壁際に柱を立てた側が切妻となり、入口もそちらに設けられた可能性が高い。この場合、16B・36B住はカマドに対して入口が右に位置することになり、入口ピットが一様にカマド反対辺に設けられたのとは大きく異なる。一方、33住は南壁に柱を設けており、カマド側の住居外へも空間を拡張して入口を設けたと考えられる(註26)。



〈 〉内は住居No: 規模、主柱配置それぞれの類型を示す

図版 112 積穴住居の変遷 (1) - I群・II群土器期



（ ）内は住居No: 規模、主柱配置それぞれの類型を示す

図版 113 積穴住居の変遷 (2) - III群～V群土器期

### (3) カマドの検討

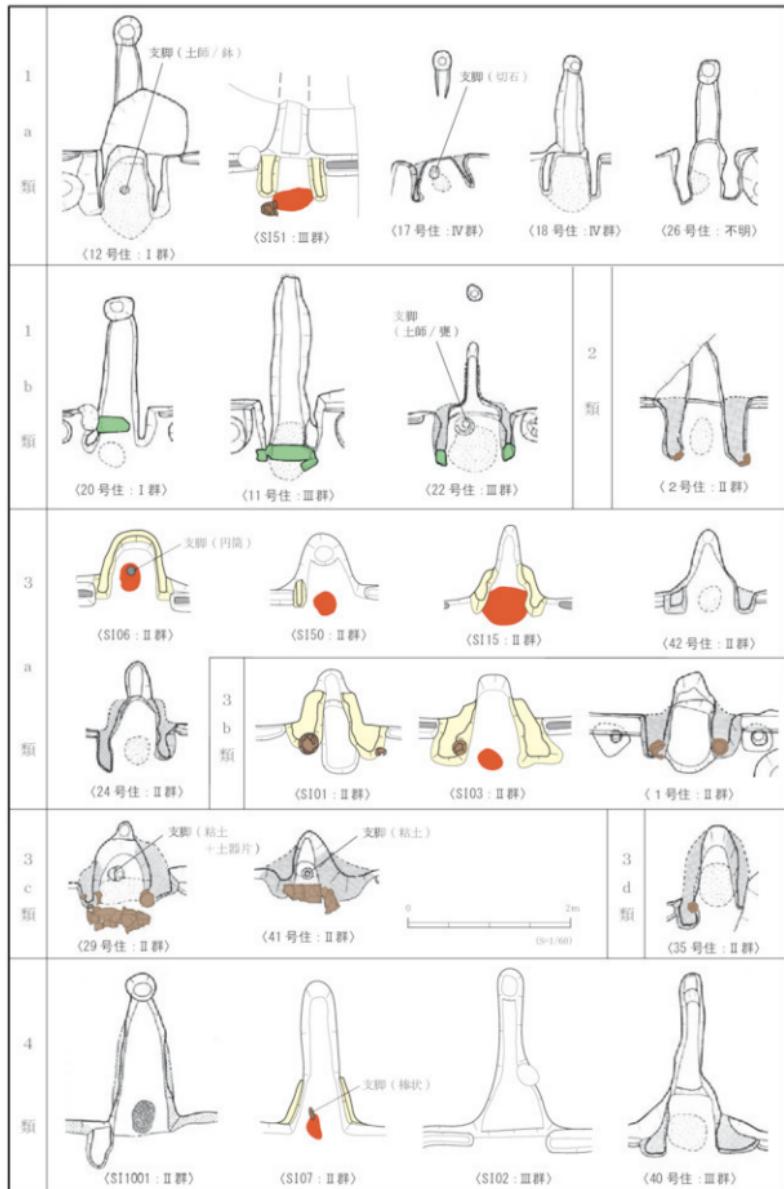
カマドが確認できた住居跡は 44 軒ある（自動車道 36、町 1、バイパス 7）。これらを本体と煙道の構造から分類し、時期別に構造や支脚、貯蔵穴の検討を行う（図版 114）。

#### 【分類】

##### 〈1類カマド〉

本体が住居内につくられ、長煙道が付く。12 軒ある。

- ・ 1 a 類：本体は全体が黄褐色粘土や白色粘土でつくられる。下部のみ地山削出しどなるものがある  
… 9・10・12・16B・17・18・26住、SI51



図版 114 カマドの分類と所属時期

- ・1 b 類：本体は 1 a 類と同じだが、焚口は凝灰岩切石で補強される…11・14・20・22住

#### 〈2 類カマド〉

本体が住居内につくられ、短煙道が付く。1軒ある（2住）。本体は白色粘土で、焚口が土器で補強される。

#### 〈3 類カマド〉

本体は住居壁を掘り込み白色粘土でつくられ、その奥が煙道奥壁と一致する、もしくは長さが0.7m以下の短煙道が付く。27軒ある。

- ・3 a 類：本体全体が住居外につくられるものと、焚口付近が住居内につくられるものとがある…3・4・5・7・8・13・15・21・24B・27・28B・30・34・37・38・42住、SI06・15・50
- ・3 b 類：本体は 3 a 類と同じだが、焚口は土器で補強される…1住・SI01・03
- ・3 c 類：3 b 類に加え、焚口天井材として胴下半部と口縁部を入子状に接続した土師器鉢が使われる…6・29・36B・41住
- ・3 d 類：本体は 3 a 類と同じだが、その芯を土器で補強されるもの…35住

#### 〈4 類カマド〉

本体は住居壁を掘り込み白色粘土でつくられ、その奥に長さが0.9m以上の長煙道が付く。本体全体が住居外につくられるものと、焚口付近が住居内につくられるものとがある。4軒ある（40住、SI1001、SI02・07）。本類は煙道部が、側壁や天井部が白色粘土でつくられていることから半地下式と考えられる。

カマド本体は2～4類が白色粘土、1類が白色粘土もしくは基本層位第VI層の黄褐色シルト質粘土である。白色粘土は第VI層の0.9mほど下層にあるため、素材を得るのに手間や労力が必要となる。それでも使われた理由としては、2～4類カマドは本体が住居外に構築されたり、煙道が煙突状となるなど1類に較べて地上での露出部分が多いため、第VI層より粘度が高いという特性を持っていたためと考えられる。

#### 【各期の様相】

##### 〈I 群土器期〉

1 a 類が1例（12住）と1 b 類が2例（14・20住）認められる。本体は 1 a 類が黄褐色粘土、1 b 類は下部が地山削出しで上部は白色粘土で構築される。これらはすべて北壁中央に設けられる。支脚がわかるのは1例（12住）で、中央に土師器鉢が倒壊に据えられており、一つ掛けと判断できる。貯蔵穴は2例（14・20住）ともカマド右に設けられた。

##### 〈II 群土器期〉

構造がわかるのは28例と最も多い。2類が1例（2住）、3 a 類は18例（3・4・5・7・13・15・24B・27・28B・30・34・37・38・42住、SI03・06・15・50）、3 b 類が2例（1住・SI01）、3 c 類が4例（6・29・36B・41住）、3 d 類が1例（35住）、4類が2例（SI07・1001）

認められる。本体はすべて白色粘土が使われている。カマドの位置は北壁中央が19例、北壁東側が1例、東壁中央が2例、東壁北側が1例、東壁南側が4例、東壁南端が1例であり、北壁中央が7割近くを占める。1類は認められず、3類が25例と突出して多い。また、3類のうち5例（1・13・15・27・28B住）でカマド両脇にピットが認められた。

支脚がわかるのは4例あり、中央が1例（円筒状：41住）、左側が3例（棒状：SI03・07、円筒状：SI06）で、前者は一つ掛け、後者は横二つ掛けと考えられる。ほかに3例（円筒状：1住・SI01、棒状：SI15）は、支脚のみ出土した。貯蔵穴は13例ともカマド右で、うち、11例は住居隅に設けられた。

#### 〈Ⅲ群土器期〉

6例あり、内訳は1a類が2例（10住、SI51）、1b類が2例（11・22住）、4類が2例（40住、SI02）である。前代になかった1類が再び認められるようになり、6例中4例と主体を占める。本体は5例が白色粘土で、1例のみ下部が地山削出しで上部は黄褐色粘土である（11住）。カマドの位置は北壁中央が3例、東壁中央・東壁南側・南壁東側が1例ずつで、前代に較べて北壁以外につくられる割合が増える。支脚がわかるのは1例で、左側に土師器小形甕を倒位で据えており、横二つ掛けと考えられる。貯蔵穴は3例認められ、2例がカマド右、1例はカマド右の住居隅に設けられた。

#### 〈Ⅳ群土器期〉

1a類が2例（17・18住）あり、本体は17住が白色粘土、18住は北壁の下部が地山削出しだある。カマドの位置は17住が南壁東側で、18住は当初、東壁南側と北壁中央が併存しており、のちに前者が廃された。支脚は17住で切石を左側に据えており、横二つ掛けと考えられる。

#### 〈Ⅴ群土器期〉

1a類（16B住）と3a類（21住）がある。本体は前者が不明で、後者は白色粘土である。ともに東壁南側につくられた。支脚の位置は不明で、貯蔵穴はカマド右にあり、16B住は住居隅に位置する。

本遺跡では、I～V群土器期をとおしてカマドの代替えは少ない。カマドの位置はⅡ群土器期まで北壁中央が多いが、Ⅲ群土器期以降は東壁や南壁につくられる割合が増える。

1類カマドは、Ⅱ群を除く各土器群で認められる。一方、Ⅱ群土器期の周辺集落跡では、在土地師器を主体とする佐内屋敷遺跡6～8住（宮城県教委1983）で1類カマドが確認できる。さらに、栗原郡域では7世紀後半以前のカマドの様相が不明であるが、隣接する桃生郡域の角山遺跡（宮城県教委2005）や黒川以北十郡西部の地蔵車遺跡（加美町教委2005）をみると、6世紀中葉から7世紀前半のカマドは1a・1b類である。こうしたことから、1類は古墳時代後期以来の伝統的な形態と考えられ、1類を在地型カマドと呼びたい（村田2000・2004）。

3類や4類はⅡ群土器期に突如出現してカマドの主体を占めるが、Ⅲ群土器期以降は急減する。最大の特徴は本体が住居外に突出する点で、類例は関東地方に求められるため、関東型カマドと呼ぶ（村田・前出）。Ⅱ群土器期は集落が急激に拡大し、そのカマドは関東型、土器も関東系土師器が主体を占める。こうしたあり方は、Ⅰ群土器期とは明確に異なり、関東地方からの移民が戸単位で行われたことを示唆する。2類については、本体が住居内にある点が1類に、短煙道である点は3類に共通す

ることから、両者の要素を取り入れた折衷型カマドと考えられる。

#### (4) 集落の変遷

発掘調査で確認された竪穴住居跡の年代は、表 12 のようにまとめられた。集落の開始は 7 世紀末～8 世紀初頭（I 群土器期）で、遺跡東端に 3 軒を一単位とする小規模なムラが営まれた。その構成員は在地民（蝦夷）であるが、関東系土師器の食器が少量共伴することから、同地域とある程度の交流があったと想定できる。

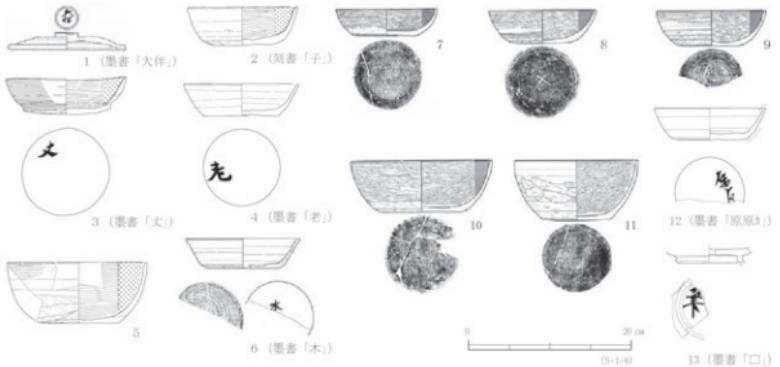
8 世紀前葉（II 群土器期）は本遺跡の最盛期で、他時期に較べて遺構や遺物量が圧倒的に多い。カマドは関東型と少数の折衷型で占められ、土器もまた食膳具・貯蔵具・煮炊具を含めて関東系土師器が主体となり、在地の要素は土師器の一部にみられるに過ぎない。こうした集落が短期間かつ遺跡全体に形成されたのは、関東地方（坂東）からの大規模かつ直接的な移住があったことを示している（宮城県教委 1982）、その故地は、関東系土師器のあり方から、上野から北武藏を中心とする坂東北西部と南武藏を中心とする坂東南部と考えられる。

当期の集落は、3～4 軒の住居が一つの単位を構成する住居小群が遺跡全体に展開したとみられる。その内容をみると、東側の自動車道調査区と西側のバイパス調査区・浄水場調査区では、後者のカマドに 3 c・d 類や両脇ピットがなくバリエーションが少ない、南武藏型壺が出土していない、といった違いが認められる。こうした点は、移民の出身地や移配時期の違いを示す可能性が考えられる。

8 世紀中葉～後半（III 群土器期）は、遺跡東西で住居跡が認められるものの、数は前代より著しく減り、次の段階（8 世紀末～9 世紀初頭）の住居は確認されていない。関東系土師器は姿を消し、カマドもまた関東型が急減し在地型が復活する。本段階の SI51 は、ロクロ土師器や墨書き土器が共伴する。伊治城周辺集落では、前者が本遺跡 SI51 のほかに城下遺跡 SI16 B があるのみで出土例がきわめて少ない。後者もまた、本遺跡の 3 例のほかに大天馬遺跡で 1 例、原田遺跡で 2 例認められるだけである（図版 115）。さらに、自動車道調査区の 22 住のように多様な器種で構成される須恵器は当期から認められる。

栗原郡におけるロクロ土師器や須恵器の生産は、神護景雲元年（767）の伊治城造営を契機として開始しており、墨書き土器も伊治城から広まったと考えられる。それとほぼ同時期にこれらを保有した集落は、伊治城との結びつきが強く、そこからもたらされた、あるいはムラの中に識字者がいるといった、他に較べて特別な性格を有した可能性が考えられる（註 27）。そして、22 住・SI51 とも火災に遭っていることは、時期的にみてきわめて示唆的であり、この点については後述したい。

9 世紀前葉（IV 群土器期）と中葉（V 群土器期）の住居跡は、遺跡北東部で 2 軒ずつ認められたのみであり、集落は III 群土器期よりもいっそう縮小した。集落は 9 世紀中葉のうちに廃絶したとみられる。



1: 須恵器蓋、4・6・12: 須恵器坪、13: 須恵器高台坪、3: 土師器坪、2・7~9: ロクロ土師器坪、5・10・11: ロクロ土師器塙  
1~5: 御駒堂遺跡 22 住、2~5: 御駒堂遺跡 S151、6: 大天馬遺跡 S16、7~11: 城下遺跡 S116B、12・13: 原田遺跡 S130

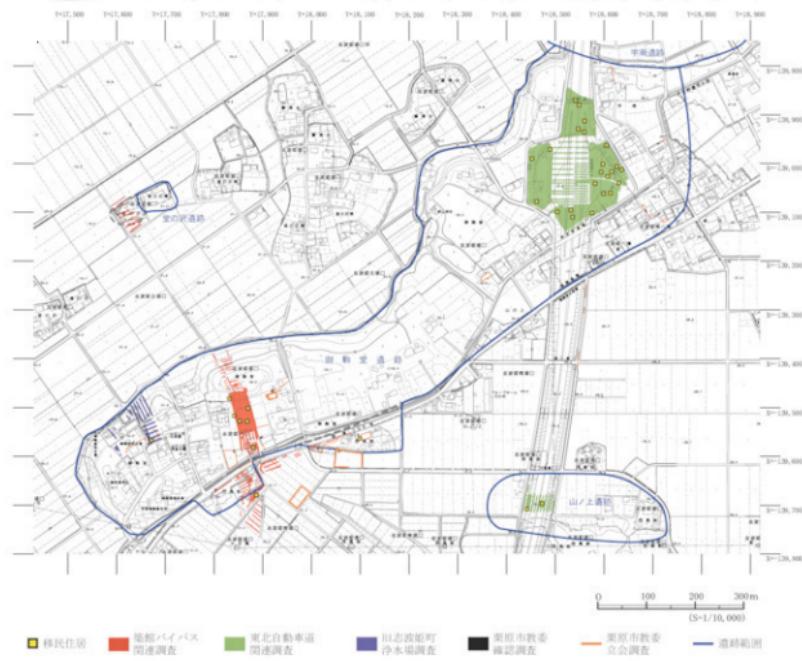
図版 115 伊治城周辺集落跡から出土したロクロ土師器と文字資料

### (5) 8世紀前葉の移民集落とその意義

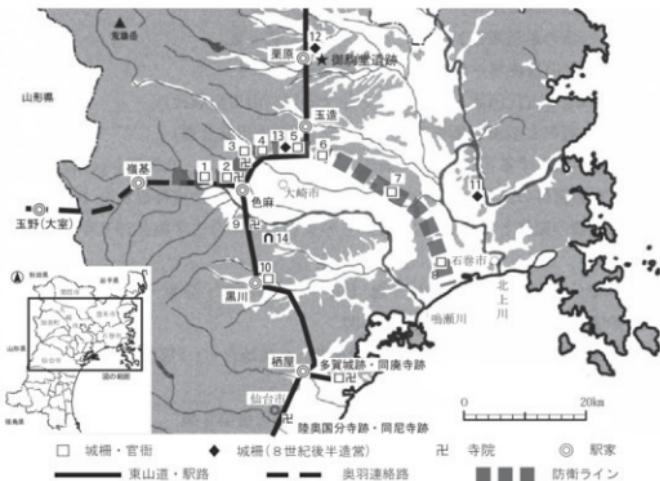
8世紀前葉(Ⅱ群土器期)の集落は、東西 1,500 m、南北 400 m の遺跡全域に形成された。移民にかかわる住居や土器は、隣接する山ノ上遺跡(宮城県教委 1980g)やその南の下萩沢遺跡(栗原市教委 2016)、源光遺跡(栗原市教委 2015a)まで認められる。本遺跡周辺における集落の消長をみると、在地集落が 7世紀末～8世紀初頭の 1 遺跡 3 住居(御駒堂)から 8世紀前葉の 2 遺跡(原田・佐内屋敷)5 住居と微増であるのに対し、移民集落は 8世紀前葉に突如出現するとともに、本遺跡を含む 4 遺跡(御駒堂・山ノ上・下萩沢・源光)で 35 住居と激増する(表 14)。仮に、御駒堂遺跡全体に自動車道調査区とバイパス調査区と同じ密度で住居が分布したとすると、その数は 350軒を超えるとみられる。未調査部分が多いためこの数値の確度は低いが、関東地方(坂東)からのかなりまとまった移住が行われたことは確かである(図版 116)(註 28)。

これらの遺跡は、御駒堂や山ノ上のように関東型カマドを持つ竪穴住居と関東系土師器が主体となる集落(②類集落)と、下萩沢や源光のように掘立柱建物と竪穴住居が計画的に配置され、住居から関東系土師器が出土する集落(③類集落)に分けられる。一方、周辺にはカマド・土師器とともに地型で構成される集落(①類集落: 木戸遺跡、佐内屋敷遺跡、原田遺跡など)も存在した。こうした状況は、律令支配の前段階から初期に集落型城柵(ブロック連結構造城柵 B 類)を構築し、その内部に在地民や移民を収容したため、集落様相がわかりにくくなる(村田 2016a)黒川以北十郡以南とは明確に異なる。

この時期は、南の黒川以北十郡域まで建郡が進んだが、養老 4 年(720)の蝦夷反乱によって邊郡支配体制が見直され(熊谷 2000a)、同郡域の北縁に東西に並んだ城柵群による「防衛ライン」(=可視化された国境)もまた、城柵の移動や大改修などの再整備が行われた(図版 117)(村田



図版116 8世紀前葉の移民集落



図版117 8世紀前半の防衛ラインと御駄堂遺跡（村田2010に加筆）

2010)。②類・③類集落の存在は、国境を越えた北の地域に対して坂東からの直接的な大量移民が行われた（②類）だけでなく、それらを統轄するかのような計画性の高い建物群で構成された官衙的な施設群（③類）がセットとなっていたことを示している。こうした方法は黒川以北十郡以南では認められない。古墳時代以来、南との繋がりが希薄であった（＝蝦夷の力が強かった）栗原郡域に対する律令制支配の新方式（田村 2009）と考えられるが、③類集落である下萩沢遺跡や源光遺跡は、この時期の遺構の全容がつかめておらず、より詳細な検討は今後の課題である。

#### （6）伊治城と周辺集落

8世紀中葉～後半（Ⅲ群土器期）は、遺跡の東西で住居跡が検出されたものの、数は前代より著しく減り、次の段階（8世紀末～9世紀初頭）の住居跡は認められないことから、集落は8世紀中葉以降、大きく縮小したと考えられる。関東系土師器は姿を消し、カマドもまた関東型が急減する一方で、在地型が再び認められるようになる。

Ⅲ群土器期には、ロクロ土師器や多様な須恵器、墨書き土器が認められる。これらは、神護景雲元年（767）、本遺跡とは迫川低地や一迫川を挟んだ北側の河岸段丘につくられた伊治城創建を契機として生産を開始、もしくは導入されたものである。以下、伊治城と周辺集落の比較を通して栗原郡の在地社会をめぐる諸問題について考えてみたい（註29）。

##### 〈集落の消長〉

伊治城周辺集落の消長をみると、8世紀前葉の4遺跡35住居から8世紀中葉～後半の14遺跡44住居、8世紀末～9世紀初頭の11遺跡35住居、9世紀前葉の5遺跡6住居となり、8世紀中葉～後半に遺跡数が急増する一方、住居数の伸びは少ない。8世紀末～9世紀初頭にかけてほぼ横ばいで推移したのち、9世紀前葉に遺跡数・住居数ともに急減する（表14）。また、6遺跡は8世紀末～9世紀初頭に廃絶する（鰐沢・大門・嘉倉・入の沢・長者原・青野）（註30）。

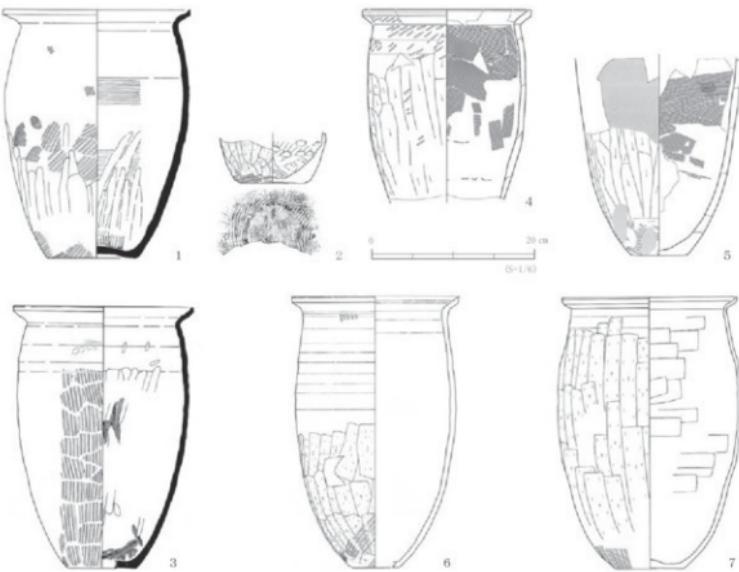
こうした集落数の増加と急減、住居数の変化は767年創建、9世紀前葉に廃絶した伊治城と連動するもので、栗原郡をめぐる人やモノの移動と密接に関わる。集落数の増加については、A）御駒堂の移民集落が廃絶したこと、B）関東系土師器の食器は急減するが、長胴甕の器形（胴部上半に最大径）や調整（ケズリ・ナデ）が在地土師器に受容されること、C）関東型カマドは減少するものの継承されること、D）文献に伊治城の造営前後から8世紀後半代を通して柵戸（移民）の移配が行われたこと（表18）、E）栗原郡に会津郷があり、伊治城や原田遺跡で同地方特有の長胴甕が出土したことなどから（図版118）（註31）、8世紀前葉の移民集落群が縮小・廃絶して、その構成員が郡内や他地域に拠散したこと、新たな移民が行われたこと、さらには移民や移民系住民が伊治城外郭北半の広大な住居域に収容されたことなどが同時に進行した結果と考えられる。

新たな移民は、それまでみられたような関東型カマドや関東系土師器が認められず、坂東の要素が非常に薄い。これは、前代の移民系住民が蝦夷系住民と融合したことや、移民自体がそれまでの「戸」単位から犯罪人や浮浪人などの「人」単位に変質したためと考えられる（註32）。

	7c末～8c初頭	8c前葉	8c中葉～後半	8c末～9c初頭	9c前葉	9c中葉	9c後葉	10c前葉	計
御町空	3	31	6	1	2	2	2		43
山ノト		2	1						3
大天馬			2						2
猪羽			1						1
下森沢	1	16							17
源光		1		1	1				2
源山		2	3		1				3
鶴穴			1	2					4
佐内屋敷		3	1	2	1	7	12	2	28
木戸			3						3
宇南			1			6	2		8
大門			1	1					2
鍍錆				13		3			16
通食口塀				4					4
入の沢		1	1					3	5
城下			3						3
佐野		4	1	1		4			10
右賀峰				1		1	1		3
長者原		3	7						10
吉野			2						2
計	3	40	44	35	6	19	20	5	171
	—	—	8c後半	8c末～9c初頭	—	—	—	—	計
伊治城	—	—		22 伊治城跡 127	—	—	—	—	162

■長期的統計値

表 14 伊治城と周辺集落における竪穴住居の消長



1 : 伊治城跡 SI04 住居跡（多賀城関連 3） 2 : 伊治城跡表採（栗原市 19） 3 : 伊治城跡 SK18 土塙（多賀城関連 4）  
4・5 : 原田遺跡 SI31 住居跡（宮城県 219） 6 : 角山遺跡 SI1013 住居跡（宮城県 206） 7 : 山居遺跡 SI105 住居跡（宮城県 206）

図版 118 栗原・桃生郡域で出土した会津型長胴甕

### 〈城内と集落の住居構成〉

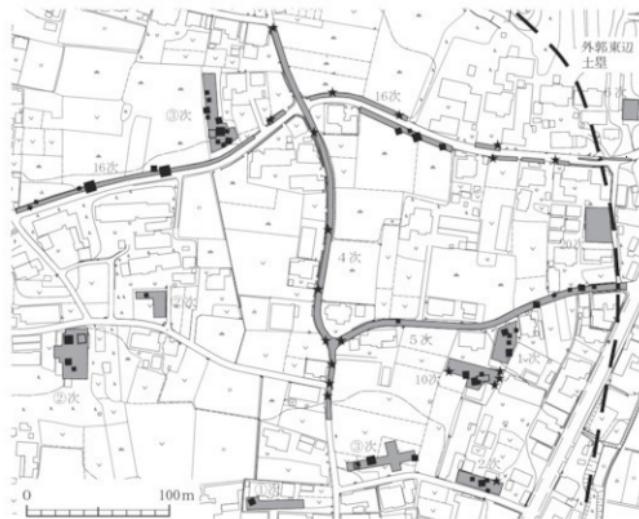
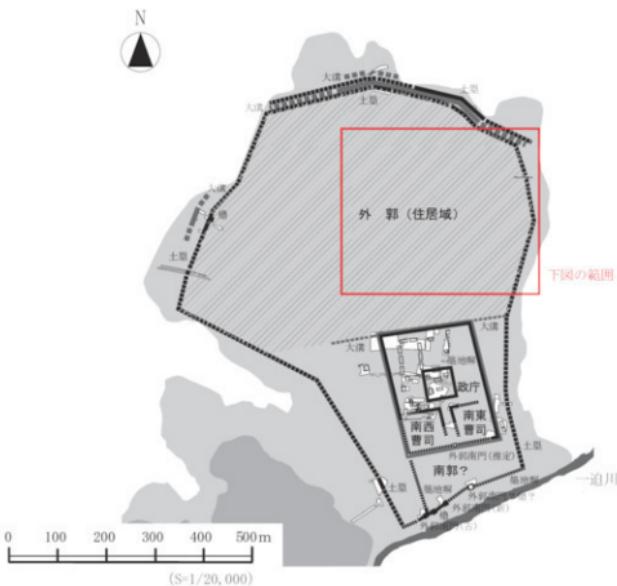
伊治城の外郭は、内郭の西・北・東を囲んでおり、多数の竪穴住居跡が検出されている。最大の特徴は住居が密集し、その半数を小形住居が占める点である（図版 119）。これに対し、同時期の伊治城周辺集落は小形・中形・大形住居がそれぞれ3割ほどを占め、それらが3～4軒を一単位とするグループを形成して集落内に点在する（表 15）（註 33）。散村形態は、一部の集落を除いて7世紀末～10世紀前葉まで主体的に認められ、栗原郡における古代集落のスタンダードである。その結果、住居どうしの重複は少ない（註 34）。こうした違いは、居住した構成員の違いにもとづくもので、伊治城内の竪穴住居は騎兵や鎮兵、軍団兵、柵戸らが一時的に住んだ建物であったことに由来する（村田 2004）。

### 〈火災住居の検討〉

伊治城周辺集落の時期別住居数をみると、8世紀中葉から後半代に火災住居が44軒中14軒と3割を超える。同時期の城内の住居でも13軒中2軒のみであることから、突出して多い（表 16）（註 35）。このうち、原田・下萩沢遺跡の報告書では、火災の原因が宝亀11年（780）の伊治公皆麻呂の乱にあった可能性が指摘されている（宮城県教委 2009）。本遺跡でも22住とSI51が火災に遭っており、これらについては須恵器の多様な器種構成（22住）や墨書き土器・ロクロ土師器の保有（SI51）といった、一般集落とは異なる特徴が指摘できた。

こうした火災住居と出土遺物についてまとめたのが表 17 である。火災住居には、床面の遺物の出土状況から、大きく分けて多量の遺物が出土するものと少量もしくは偏って出土するものとがあり、表中では前者をA、後者をBとしている。そして、Aは突発的な火災、Bはある程度道具を持ち出せた、あるいは必要なものを持ち出した後に意図的に火を付けたとの解釈が示された（宮城県教委 2009）。

伊治城周辺集落の火災住居の内訳はAが6軒、Bは8軒である。このうち、遺物が少ない下萩沢遺跡の3軒（SI01・02・07）を除く11軒についてみると、8軒で墨書き土器・ロクロ土師器・須恵器・金属製品のうち、3つ以上の組合せが認められた。このことは、前述したとおり伊治城（=律令国家）との結びつきが強く、それゆえ、伊治公皆麻呂の乱で蝦夷の襲撃対象になった可能性を示すと考えられる。この想定が正しいとすると、同じ遺跡で火災住居Aが認められる場合は、Bについても突発的な火災であったと考えられる（註 36）。また、遺物が多く出土したが伊治城との関係性を示す遺物が少ない3軒のうち2軒（SI05・62）や床面からの遺物が少ない3軒は、いずれも下萩沢遺跡であり、原田遺跡に近いことから、伊治公皆麻呂の乱でともに（事故的に？）襲撃された可能性を考えたい（註 37）。さらに、こうした集落のうち、御駒堂・下萩沢・原田遺跡は、8世紀前葉に坂東からの直接的な大量移民が行われ②類・③類集落が形成された場所と重なっており、前代から律令国家側とのつながりが強い人々が居住するエリアとして、蝦夷側から意識されていた可能性も指摘しておきたい。



※①次から⑬次は多賀城跡調査研究所、他は栗原町or栗原市教育委員会の調査次数

図版119 伊賀城跡と外郭北東部で密集する壁穴住居跡（村田2015に加筆・編集）

### 【伊治城周辺集落跡】

(全体)

7世紀末～8世紀初頭(住居数3)		面積	小形	中形	大形	特大	超大
数	0	2	0	1	1	0	
割合	0	0.67	0	0.33	0		
8世紀後葉(住居数35)		面積	小形	中形	大形	特大	超大
数	9	12	9	6	6	0	
割合	0.25	0.33	0.25	0.17	0.17	0	
8世紀中央～後半(住居数35)		面積	小形	中形	大形	特大	超大
数	11	12	8	3	1		
割合	0.31	0.34	0.23	0.09	0.03		
8世紀末～9世紀初頭(住居数27)		面積	小形	中形	大形	特大	超大
数	8	6	8	2	3		
割合	0.30	0.22	0.30	0.07	0.11		
9世紀前葉(住居数16)		面積	小形	中形	大形	特大	超大
数	3	1	2	0	0		
割合	0.50	0.17	0.33	0	0		
9世紀小葉(住居数16)		面積	小形	中形	大形	特大	超大
数	1	9	3	3	0		
割合	0.06	0.56	0.19	0.19	0		
9世紀後葉(住居数15)		面積	小形	中形	大形	特大	超大
数	6	4	4	1	1		
割合	0.40	0.27	0.27	0.07	0		
10世紀前葉(住居数5)		面積	小形	中形	大形	特大	超大
数	4	0	1	0	0		
割合	0.80	0	0.20	0	0		

(主な集落跡)

御馳空道跡(住居数3)		面積	小形	中形	大形	特大	超大
7世紀末～8世紀初頭(住居数3)	面積	數	0	2	0	1	0
割合	0	0.67	0	0.33	0		
御馳空道跡(住居数27)		面積	小形	中形	大形	特大	超大
7世紀前葉(住居数27)	面積	數	8	8	7	4	0
割合	0.30	0.30	0.26	0.15	0		
佐内深敷跡(住居数3)		面積	小形	中形	大形	特大	超大
8世紀前葉(住居数3)	面積	數	1	1	1	0	0
割合	0.33	0.33	0.33	0	0		
御馳空道跡(住居数5)		面積	小形	中形	大形	特大	超大
8世紀小葉～後半(住居数5)	面積	數	1	3	1	0	0
割合	0.20	0.60	0.20	0	0		
下森跡(住居数13)		面積	小形	中形	大形	特大	超大
8世紀小葉～後半(住居数13)	面積	數	5	4	1	2	1
割合	0.38	0.31	0.08	0.15	0.08		
御馳道跡(住居数11)		面積	小形	中形	大形	特大	超大
8世紀末～9世紀初頭(住居数11)	面積	數	3	0	3	2	3
割合	0.27	0	0.27	0.18	0.27		
長者原跡(住居数5)		面積	小形	中形	大形	特大	超大
8世紀末～9世紀初頭(住居数5)	面積	數	2	2	1	0	0
割合	0.40	0.40	0.20	0	0		
御馳空道跡(住居数2)		面積	小形	中形	大形	特大	超大
9世紀前葉(住居数2)	面積	數	1	0	0	0	0
割合	0	0	0	0	0		
御馳空道跡(住居数2)		面積	小形	中形	大形	特大	超大
9世紀中葉(住居数7)	面積	數	0	1	0	1	0
割合	0	0.50	0	0.50	0		
佐内深敷跡(住居数7)		面積	小形	中形	大形	特大	超大
9世紀中葉(住居数7)	面積	數	0	4	2	1	0
割合	0	0.57	0.29	0.14	0		
宇摩道跡(住居数5)		面積	小形	中形	大形	特大	超大
9世紀小葉(住居数5)	面積	數	1	3	1	0	0
割合	0.20	0.60	0.20	0	0		
佐内深敷跡(住居数12)		面積	小形	中形	大形	特大	超大
9世紀後葉(住居数12)	面積	數	6	3	3	0	0
割合	0.50	0.25	0.25	0	0		

### 【伊治城存続期の城内と城外】

(伊治城跡)

8世紀後葉～9世紀初頭(住居数64)		面積	小形	中形	大形	特大	超大
数	32	22	5	3	2		
割合	0.50	0.34	0.08	0.05	0.03		

(伊治城周辺集落)

御馳空道跡(住居数2)		面積	小形	中形	大形	特大	超大
9世紀中葉(住居数2)	面積	數	1	18	16	5	4
割合	0.31	0.29	0.26	0.08	0.06		

\*住居規模は、面積から小形(15m未満)、中形(15m以上25m未満)、大形(25m以上40m未満)、特大形(40m以上60m未満)、超大形(60m以上)に分けた(元木1998)

表15 伊治城と周辺集落における竪穴住居跡の時期別構成

7c c～8c 初頭		8c 中葉～後半		8c 末～9c 初頭		9c 初頭		9c 中葉		9c 後葉		10c 後葉	
道路数	1	道路数	6	道路数	14	道路数	12	道路数	4	道路数	5	道路数	5
住居数	3	住居数	39	住居数	44	住居数	35	住居数	6	住居数	19	住居数	20
数	0	数	6	数	14	数	2	数	1	数	4	数	1
火災 割合	0	火災 割合	0.15	火災 割合	0.32	火災 割合	0.06	火災 割合	0.17	火災 割合	0.05	火災 割合	0.20
A B	A B	住居	A B	住居	A B	住居	A B	住居	A B	住居	A B	住居	A B
A B	A B	6	B 8	B 8	B 2	B 1	B 1	B 1	B 3	B 1	B 1	B 1	B 1

※火災住居は床面の遺物出土状況から、(A)多量の遺物が残されていたものと(B)少額もしくは出土に能力が認められるものに分けた。(A)は突然的な火災で道具を持ち出せなかかったケース、(B)は完発的であるが、道具を持ち出したケースあるいは道具を片付けたのち火を付けたケースと考えられる(宮城県教委2009)。

表16 伊治城周辺集落の時期別住居数と火災住居

遺跡名	住居名	平面形	掘溝		水汲	玉和配器主柱	カマド		文字資料	食器の構成		呑器類の構成		土師器 ミニチュア	金屬製品	備考	
			m	分類			位置	分類		非クロ	クロ	須恵器	非クロ	須恵器			
調査空	10F	方型	4.7×4.2	小中	×	4/7	東壁南側	1a	×	○	×	○	○	×	×	×	
調査空	11F	方型	4.7×4.5	小中	×	4/9	北壁中央	1b	×	●	1/4	×	×	○	×	×	
調査空	22F	真方型	5.8×5.1	大形	○(A)	4/丸	南壁東側	1b	墨書き「大作」	●5/12	×	●1/12	●4/6	○2/6	×	×	墨書きは居棧が曾前、土製鉢津半出土
調査空	40F	方型	4.1×4.0	小中	×	4/8	東壁中央	4a	×	○	×	○	○	○	×	×	
調査空	2002	方型	3.7×3.6	小中	×	4/8	東壁中央	4a	×	○	×	○	○	×	×	刀子	
調査空	351	方型	5.3×?	~	○(B)	4/7/角	北壁中央?	1a	墨書き「大作」、別書き「子」、大人	●12/16	○2/12	○2/12	●6/7	○1/7	○	×	土師杯環に馬のへら模様
山ノ下	2F	方型	3.0×2.7	小中	×	4/8	東壁中央	1or2	×	○	×	○	○	○	×	×	須恵器底質類は2点とも大盤
天大路	S6	方型	4.6×4.4	中郎	×	4/丸	北壁中央~ 東壁南側	1a	墨書き「木」	○	×	○	●6/6	×	○	×	長財袋の外墨はヘラケズリ
天大路	S21	方型	5.0×4.9	中郎	~	4/7/7	北壁中央	4b	×	○	×	○	○	×	×	×	8c中郎?、土師器底質類はすべてカマド周辺
後浜	S1	方型	5.0×4.9	中郎	~	4?/R	北壁中央	1or2	×	×	×	○	○	×	×	×	8c中郎?
下蔵沢	S01	方型	3.3×3.3	小郎	○(B)	×	北壁中央	1a	×	○	×	○	○	×	×	×	墨書き跡は古い
下蔵沢	S02	方型	4.5×3.8	中郎	○(B)	×	北壁中央	1a	×	○	×	○	○	○	×	×	
下蔵沢	S04A	満丸方型	3.8×3.4	小郎	~	4/8?	北壁中央	~	~	~	~	~	~	~	~	~	
下蔵沢	S04B	満丸方型	5.1×4.7	中郎	~	~	北壁中央	~	~	~	~	~	~	~	~	~	
下蔵沢	S04C	満丸方型	6.1×6.0	大郎	~	4/丸	北壁中央	1a	~	~	~	~	~	~	~	~	墨書き跡は古い
下蔵沢	S05	満丸方型	6.5×6.5	特大	○(A)	4/丸	北壁中央	1c	~	●2/7	~	~	●8/8	~	~	~	薪クロク・土師器が主体
下蔵沢	S06A	満丸方型	7.2×7.1	特大	~	4/丸	北壁中央	~	~	~	~	~	~	~	~	~	
下蔵沢	S06B	方型?	~	~	○?/R	北壁中央	~	~	~	~	~	~	~	~	~	~	
下蔵沢	S06C	方型	8.3×8.0	超大	○(B)	4/丸	北壁中央	1c	~	○	○	○	●3/6	○	○	○	墨書き・刀子・鉄製粘液非
下蔵沢	S07	満丸方型	6.5×?	~	○(B)	4/8?	東壁南側?	~	~	○	~	~	○	~	~	~	
下蔵沢	S08A	満丸方型	~	~	~	~	北壁中央	~	~	~	~	~	~	~	~	~	
下蔵沢	S08B	満丸方型	4.7×4.3	中郎	~	壁板/R	北壁中央	1c	~	~	~	~	~	~	~	~	墨書き・鉄製粘液
下蔵沢	S362	満丸方型	3.3×3.2	小郎	○(B)	~	北壁中央	~b	~	●4/4	~	~	~	~	~	~	墨書き跡は食器のみで、3点とも古い墨。ミガキ・墨書き
下蔵沢	S363	満丸方型	3.5×3.1	小郎	~	~	北壁中央	4a	~	~	~	~	~	~	~	~	土師器底質類はカマド周辺が多い、須恵器は食器のみで古い。ミガキ・墨書き
下蔵沢	S364A	満丸方型	3.8×3.7	小郎	~	~	~	~	~	~	~	~	~	~	~	~	
下蔵沢	S364B	満丸方型	4.5×3.8	中郎	○(B)	~	東壁南側	4b	~	○	~	~	~	~	~	~	員製鉢津非
横山	S30	満丸方型	7.2×7.0	特大	○(A)	4/丸+壁 柱	北壁中央→ 柱	1b	墨書き「原村カ」、『』 □	●10/22	~	●12/22	●25/29	○4/29	○	○	小瓶・鉢・瓦・鐵製粘液非・須恵器・鉄打・鉄鋸
横山	S70	満丸方型	3.6×3.5	小郎	○(A)	~	北壁中央	1b	~	○	~	○	●4/16	○2/16	○	○	小瓶・鉢・瓦・鐵打・鉄鋸
横山	S91	満丸方型	5.4×5.4	大郎	~	4/丸	北壁中央	1a	~	●4/5	~	~	●5/5	~	~	~	墨書き跡は食器のみで古い墨。ミガキ・墨書き
桜井	S1	方型	5.0×4.7	中郎	~	4/丸+四 隅/1丸	北壁中央	~	~	○	~	~	○	~	~	カマド縁	
街内N	9住	方型	3.7×3.5	小郎	○(A)	~	北壁中央	1b	~	●3/6	~	○	○	○	~	~	東北地方系土器。墨書き跡・赤・中世
木戸	2住	方型	4.4×4.4	中郎	~	4/丸	東壁南側	1a	~	○	~	~	●3/7	~	~	~	土師器のみ
天門	1住	満丸方型	6.5×5.5	大郎	~	4/丸	北壁中央	3a	~	○	~	~	○	~	~	~	先山田美術・利根道典美
人の家	37	方型+張出 ～5.5× 5.5	~	~	~	~	北壁中央	1a	~	~	~	~	~	~	~	カマド・洗済・塗し出しを解説	
城下	S16B	満丸方型	5.7×5.0	大形	○(A)	4/丸	北壁中央	2b	朱書き「X」	○3/22	●13/22	●6/22	●7/11	○4/11	~	~	墨書き・刀子・瓦・須恵器・鉄製粘液非・鉄鋸・鉄打・鉄鋸・金具
城下	S17	方型	5.8×3.7	大形	~	4/丸	東壁中央	1a	~	~	~	○	~	○	~	~	S17～S25
城下	S05	満丸方型	4.5×3.2	小郎	~	~	北壁中央	1b	~	~	~	~	~	~	~	~	S17～S25、カマド縁
佐野	2住	満丸方型	5.5×4.9	大郎	~	~	北壁中央	1c	~	~	~	~	~	~	~	~	2住→S01→4住→16住
佐野	9住	方型	5.8×?	~	~	4/7	北壁中央	1a	~	○	~	~	~	~	~	~	カマドから土師環2個
佐野	14住	満丸方型?	5.0×?	~	~	~	北壁	1a	~	○	~	~	~	~	~	~	カマドから土師環2個
佐野	15F	方型?	~	~	~	~	北壁	1a	~	~	~	~	~	~	~	カマド・墨書き・土師環2個	
長者原	4住	方型	~	~	~	~	北壁	1c	~	~	~	~	~	~	~	~	
長者原	20F	方型	5.4×5.3	大形	○(B)	4/角	北壁中央	1e	~	○	~	○	●6/6	~	~	~	土瓶?
長者原	25F	方型	3.9×3.8	小郎	~	~	北壁中央	1a	~	~	~	~	~	~	~	~	

大穴住居 ●出土量多い ○出土なし

\*火葬住居は床面の遺物出土状況から、(A)多量の遺物が残っていたものと(B)少額もしくは出土に腐りが認められるものに分けた。(A)は突発的な火葬で道具が持ち出せなかったケース、(B)は突発的であるが、道具を持ち出したケース、あるいは道具を持ち出さない(宮城県教委2009)。

表17 伊治城周辺集落における8世紀中葉から後半の竪穴住居跡と出土遺物

（文 献）				文献	
西暦	和暦	天皇	記事		
715	垂亀 1	元正	5. 扱束 6 国の富民1000戸を陸奥国に移住する	続日本紀	
767	神護景雲 1	稱德	10. 陸奥國伊治城の造営が完了する 11. 陸奥国に栗原郡を設置する	続日本紀	
768	神護景雲 2	稱德	12. 陸奥国および他國から桃生・伊治 2 城に移住を希望する者の課役を免ずる	続日本紀	
769	神護景雲 3	稱德	1. 桃生・伊治 2 城への移民を確保するため優遇することを定める 2. 扱束 8 国から桃生・伊治城へ移住する人々を募集する 6. 陸奥国伊治城に浮浪人2500余人在移住させる	続日本紀	
774	宝亀 5	光仁	7. 陸奥國の海道駿歴が桃生城を攻撃する→38年戦争が勃発する	続日本紀	
778	宝亀 9	光仁	6. 征夷に功績があった陸奥・出羽の領司以下2267人に位階・勲位を授ける。伊治公皆・麻呂は外臣五位下を割りう	続日本紀	
780	宝亀11	光仁	2. 陸奥國の申請により、胆沢の地を制すため覚驚城を造営することとする 3. 陸奥国伊治城に浮浪人2500余人在移住させる	続日本紀	
789	延暦 8	桓武	8. 陸奥國の軍士の田畠・課役を免除し、黒川以北十都についてはさらに課役の免除を延長するまでに成っていた道田・桃生・栗原郡の名が見えない	続日本紀	
792	延暦11	桓武	1. 栗波村の栗原・阿奴志己らは帰服したいが、伊治村の傍に妨げられて栗たせないと訴える	類聚御史	
796	延暦15	桓武	11. 陸奥國の伊治城と玉造寒の間に駅を置く	日本後紀	
			11. 扱束 6 国と出羽・越後国の人々9000人を陸奥国伊治城に移住させる	日本後紀	
804	延暦23	桓武	11. 陸奥國栗原郡に3駅を置く	日本後紀	
805	延暦24	桓武	12. 藤原經嗣の意見により、貳夷征討と平安京造営を中止する	日本後紀	
811	弘仁 2	嵯峨	12. 文室卿麻呂が征夷の終了を報告する→38年戦争の終了	日本後紀	
837	承和 4	仁明	4. 時年春より百姓の嘆言に栗原の民が鬱屈し、栗原・賀美内郡の百姓が多く逃亡する。 また、栗原・桃生以北の作団は、反覆して定まらないので、援兵1000人を勤員して非常に備える	続日本後紀	
859	天安 3	清和	1. 陸奥國の志波磐神などに位を授ける	日本三代実録	
			延喜式		
			○神名式 陸奥國100座 栗原郡 7 座 大1座 志波磐神社 小6座 表刀神社 雄鷹神社 駒形祖神社 駒形根神社 ○民部式 東山道・陸奥國大國 ……志太、栗原、磐井…… ○兵部式 陸奥國磐馬 ……玉造、栗原、磐井……各5社	延喜式	
905	延喜 5 (着手)	桓武	和名類聚抄 ○卷5 国都部 陸奥國管36 栗原郡(久利波直) ○卷7 国都部 栗原郡(磐舟栗原・清水・神村・会津(安郡))	和名類聚抄	
931～938	承平年間	桓武～朱雀	陸奥守藤原登任と出羽介平繁成が安倍賴を攻めるが、鬼切郡で破れる→鬼切郡=鬼攻郡(鬼首)の凱り?	陸奥語記	
1050・ 1051	永承 5・6	後冷泉	7. 義高義の説教に応じ、出羽山止存囚内清原光頼の弟武則が一万余の兵を率いて陸奥・栗原郡を宮前に到着する	陸奥語記・扶桑略記	
1062	康平 5	後冷泉	7. 義高義の説教に応じ、出羽山止存囚内清原光頼の弟武則が一万余の兵を率いて陸奥・栗原郡を宮前に到着し、清原武則の軍と合流する	陸奥語記・扶桑略記	
1062	康平 5	後冷泉	8. 義高義が栗原郡宮前に到着し、清原武則の軍と合流する	陸奥語記・扶桑略記	
1070	延久 2	後三条	10. これ以前に陸奥國栗原郡・出羽国寒河江町が豪族殿頭として成立する	近衛家文書	
1103	康和 5	珊瑚	6. 鉄体御トの結果、謀りをなしているとされた陸奥國志波磐神らに対して裁えを行なう朝野叢書		
（出土文字資料）					
西暦	和暦		内容	遺跡名/遺構名 資料名	報告書等
8世紀後半		栗口		伊治城/13次層地跡 墨書き土器	栗原町教委 1990
8世紀末～ 9世紀前葉		此治城		多賀城/30次 SK981-5号 漆紙文書	多賀研 1978

表 18 栗原郡に関する古代史年表

第IV章 堂のさわ 沢遺跡



堂の沢遺跡と御駒堂遺跡

## 調査要項

遺跡名：堂の沢遺跡（宮城県遺跡登録番号 49024）

遺跡記号：Y I

所在地：宮城県栗原市志波姫塚口堂の沢

調査対象面積：2,446m<sup>2</sup>

発掘面積：550m<sup>2</sup>

調査期間：平成 25 年 11 月 5 日～ 11 月 14 日

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査員：村田晃一・大友邦彦

## A. 調査の方法と経過

発掘対象地は、遺跡の西端にある。調査前の状況は東へ延びる自然堤防部分が宅地や畠地で、その縁辺は水田として利用されていた。また、事前に周辺を確認したところ、遺物が表探できなかつたことから、対象地の遺構はあったとしても数は少ないと予想できた。このため、遺跡範囲内と隣接地について幅2~3mの東西トレンチを任意に7本設けて遺構確認調査を実施した（図版120）。

その結果、1・2トレンチで水田耕作土、3~5・6トレンチ東側で旧表土や土坑・溝跡を確認した。いずれも比較的新しい盛土で覆われており、西と南にいくほど厚くなっていた。また、これらより一段低い6トレンチ西側や7トレンチは、水田耕作土の下が湿地となっており、特に7トレンチ中央から西側では10世紀前葉に降下した灰白色火山灰層が厚く堆積していた（図版122）。一方、古記録には遺跡周辺の開田は近世以降に行われたと記されている。このため、1・2トレンチで確認した水田や3~6トレンチ東側で確認した土坑・溝跡は近世以降で、その後、宅地を拡張するため盛土が行われたこと、遺跡の北側は近世に至るまで湿地であったことが考えられた。特に、溝跡は自然堤防の縁辺に認められることから、屋敷地と水田を画した溝の可能性がある。



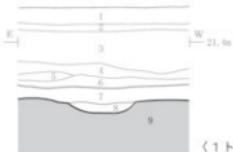
図版120 遺跡範囲とトレンチの位置



遺跡遠景（北西から） 右手の段丘は御駒堂遺跡



作業風景

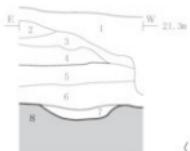


〈1 レンチ西側断面〉

層	土色	土性	混入物など	備考
1	褐色(10YR4/4)	シルト	鐵を多く含む	
2	褐褐色(10YR5/4)	シルト	鐵を多く含む	
3	褐褐色(10YR4/2)	シルト	地山小ブロックを含む	基本第Ⅰ層
4	明褐色(10YR4/3)	シルト	砂礫を含む	
5	黒褐色(10YR3/2)	砂質シルト	砂礫を含む	
6	明褐色(10YR6/4)	シルト	鐵を多く含む	
7	黒色(10YR2/1)	粘土	地山小ブロックを含む	基本第Ⅱ層
8	褐褐色(10YR3/1)	粘土	SDO3堆積土	
9	灰褐色(10YR6/1)	粘土	地山小ブロックを少し含む	基本第V層



1 レンチ西側、SDO1周辺断面（北から）



〈2 レンチ西側断面〉

層	土色	土性	混入物など	備考
1	灰褐色(10YR4/4)	シルト	鐵を多く含む	
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	鐵を多く含む	基本第Ⅰ層
3	褐褐色(10YR3/3)	シルト	鐵を多く含む	
4	褐色(10YR4/4)	シルト	鐵を多く含む	
5	褐褐色(10YR4/1)	砂質シルト	鐵を多く含む	基本第Ⅱb層
6	黒褐色(10YR2/2)	シルト	鐵を多く含む	基本第Ⅱa層
7	黒色(10YR2/1)	粘土	地山小ブロックを含む	SDO3堆積土
8	褐褐色(10YR4/6)	粘土		基本第V層



2 レンチ全景（西から）



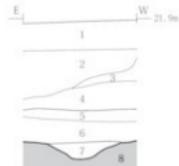
〈3 レンチ東壁断面〉

層	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	鐵を多く含む	
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト		基本第Ⅰ層
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト		
4	黒褐色(10YR2/3)	シルト		SDO3堆積土
5	黒褐色(10YR2/2)	砂質シルト	地山小ブロックを含む	基本第Ⅱb層
6	褐褐色(10YR4/6)	シルト		基本第V層

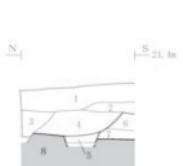


3 レンチ全景（東から）

図版 121 遠景・レンチ・基本層序（1）



4 レンチ西側断面



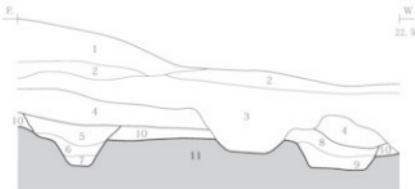
6 レンチ東側断面

(左) 国土概観図

No.	土色	土性	固人物など	備考
1	褐色(10YR4/4)	シルト	礫を含む	
2	褐色(10YR6/4)	砂質シルト		基本第Ⅰ層
3	明黄色(10YR6/6)	砂		
4	灰褐色(10YR4/4)	シルト	礫を多く含む	
5	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト		基本第Ⅱb層
6	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト		基本第Ⅱa層
7	黒褐色(10YR3/2)	シルト		SD02堆積土
8	黄褐色(10YR5/8)	シルト		基本第V層

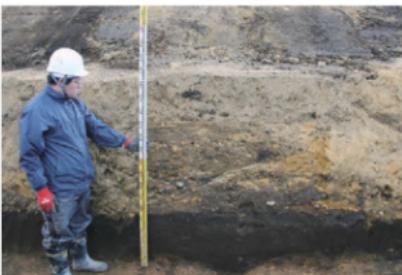
(右) 国土概観図

No.	土色	土性	固人物など	備考
1	灰黃褐色(10YR4/4)	シルト	礫を多く含む	
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト	砂を多く含む	基本第Ⅰ層
3	灰褐色(10YR4/4)	シルト	炭化物を含む	
4	褐褐色(10YR3/2)	シルト	礫を多く含む	
5	褐灰色(10YR4/1)	粘土	地山ブロックを含む	SD03堆積土
6	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト		基本第Ⅱb層
7	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト		基本第Ⅱa層
8	黄褐色(10YR5/8)	シルト		基本第V層



5 レンチ西側、SD04・5周辺断面

No.	土色	土性	固人物など	備考
1	灰黃褐色(10YR4/4)	シルト		
2	褐褐色(10YR3/3)	シルト		基本第Ⅰ層
3	黒褐色(10YR2/2)	粘土	砂を多く含む	
4	褐褐色(10YR2/2)	粘土質シルト		基本第Ⅱ層
5	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト		
6	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	地山小ブロックを含む	SD04堆積土
7	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	粘性強。	
8	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト		
9	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	地山ブロックを含む	SD05堆積土
10	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト		第IV層
11	黄褐色(10YR5/8)	シルト		第V層



5 レンチ西側、SD03周辺断面（北から）



5 レンチ全景（西から）



6 レンチ東側全景（東から）



7 レンチ中央～西側断面（北から）



7 レンチ中央断面（北から）

図版 122 遠景・レンチ・基本層序（2）

こうしたことから、対象地には中世以前の遺構が存在しないと考えられ、本発掘調査の必要はないとした。また、今回の成果で遺跡の範囲は東へ縮小すると考えられたため、栗原市教育委員会とはかって遺跡の範囲変更を行うこととした。

トレーナーの土層断面図は、随時手実測で作成した（縮尺 1/20）。平面図は、調査区の近くに設定された工事用の測量原点（世界測地系第X系）を基準とし、（株）CUBIC 製発掘調査関連測量専用ソフト「電子平板 遺構くん」と（株）ソキア・トブコン製の自動追尾トータルステーションを用いて作成した。また、遺構の写真撮影は 1,200 万画素のデジタルカメラを使用している。

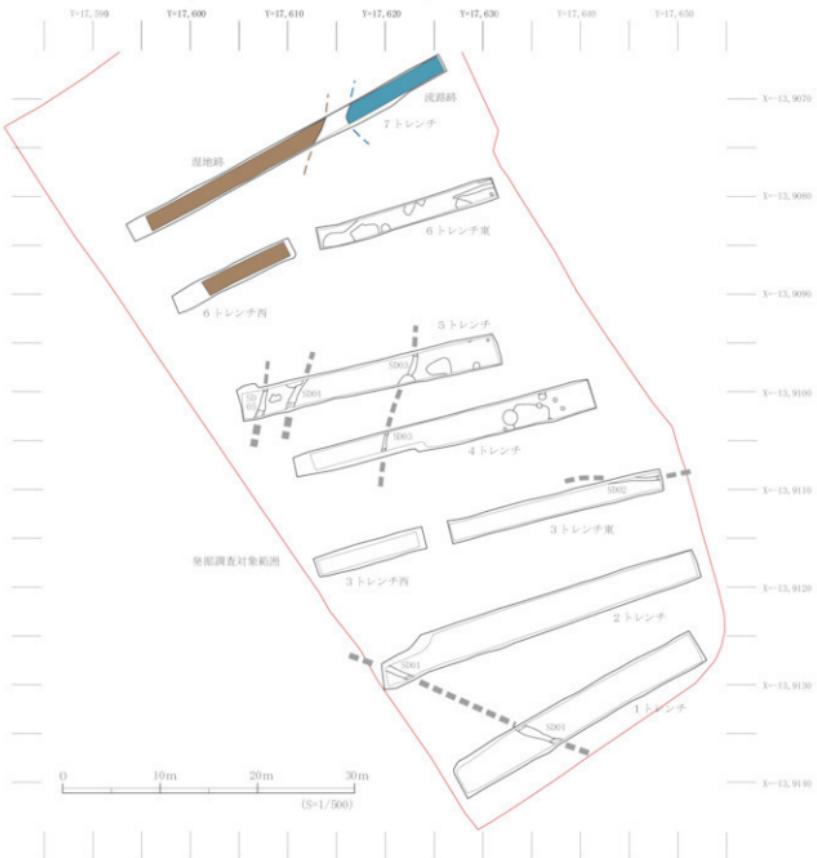
## B. 基本層序

本遺跡は迫川低地の自然堤防に立地しており、御駒堂遺跡より 10 ~ 15 m 低い（図版 2）。標高は自然堤防が 21 m 前後、北側の低地が 20 m 前後である。基本層は自然堤防と隣接地で 5 層（第 I ~ V 層）、その外側は 4 層（第 II ~ VI ~ VII 層）に大別できる（図版 121・122）。

第 I 層は、現代に宅地を拡張した際の盛土である。第 II 層は近世以降の水田耕作土で、1・2 トレーナーは厚い第 I 層下で認められた。第 III 層は近世以降の旧表土、第 IV 層はこれより古い近世の旧表土で、3~5・6 トレーナー東側の土坑や溝は第 IV 層から掘り込まれ、第 III 層に覆われた。これらより 1 段低い 6 トレーナー西側や 7 トレーナーでは、第 II 層下に湿地堆積土が 2 枚あり、第 VII 層の灰白色火山灰層をはさんで第 VI 層と第 VII 層に分けられる。灰白色火山灰は純堆積層と再堆積層が認められ、その上は第 VI 層が覆うことから、遺跡北側は古代から中世を通して湿地であったと考えられる。

## C. 発見した遺構と遺物

確認調査を行った結果、中央から南側の 1~6 トレーナー東で近世以降の水田跡や溝跡などを検出し、北側の 6 トレーナー西から北は湿地土壤の中に灰白色火山灰が厚く堆積していた（図版 123）。中世までの遺構がないこと、北側は湿地であったことから、本発掘調査は必要なしと判断した。また、今回の成果より遺跡の範囲は東へ縮小する（東西 75 m、南北 40 ~ 60 m）と考えられたため、市教育委員会とはかって遺跡の範囲変更を行うこととした。



図版123 検出構造

## 第V章　まとめ

### 〈御駒堂遺跡〉

1. 御駒堂遺跡は、栗原市志波姫堀口字御駒堂にあり、追川低地を望む上位段丘に立地する。両者の比高差は 10 ~ 20 m である。
2. 御駒堂遺跡の範囲は東西約 1,500 m、南北約 400 m と東西に細長い。
3. 発見した遺構は、旧石器時代から縄文時代の石器集中地点 1 箇所、遺物包含層 1 箇所、縄文時代の陥し穴 22 基、遺物包含層 1 箇所、奈良時代の竪穴住居跡 9 軒、古代の掘立柱建物跡 1 棟、江戸時代以降の掘立柱建物跡 7 棟、井戸跡 7 基、墓跡 17 基、土塁 1 条、空堀 1 条のほか、溝跡や小溝状遺構群である。
4. 石器集中地点からは 2,772 点の石器が出土した。石器や層位的特徴より後期旧石器時代末から縄文時代草創期に位置付けられる。また、石器のほとんどが碎片であることから、石器製作の場と考えられる。
5. 縄文時代の陥し穴は、A：平面が円形で底中央に逆茂木が 1 本立てられるもの、B：平面が梢円形で穴底の長軸に合わせて逆茂木が 2 本立てられるもの、C：平面が溝状に細長いものの 3 タイプがある。A 類は 14 基、B 類が 5 基、C 類は 3 基検出した。このうち A 類は、1 基を除いて 4 ~ 10 m 離れて南北に並ぶ。
6. 奈良時代の竪穴住居跡の年代は 8 世紀前葉が 7 軒、8 世紀中葉～後半が 2 軒である。
7. 江戸時代より新しい遺構は、掘立柱建物や井戸が現在の国道 398 号線寄りにあり、そこから離れた山林との境で墓を検出した。国道近辺には「築館・狼河原道」が通っていたことから、道側に建物・小屋（雑舎）・井戸で構成された農家が点在し、その周囲は畑などの耕作地で、山林との間に屋敷墓が営まれたという景観が想定できる。
8. これまでの調査成果を併せると、他時期に較べて遺構や遺物量が圧倒的に多い 8 世紀前葉が本遺跡の最盛期と考えられる。住居は、3 ~ 4 軒を単位とする小群が遺跡全体に展開しており、総数は 300 軒を超える。そのほとんどが関東型カマドや関東系土師器を有するとみられる。これは、坂東からの大規模かつ直接的な移住があったことを示しており、移民の故地は、上野から北武藏を中心とする坂東北西部と南武藏を中心とする坂東南部と考えられる。
9. 8 世紀中葉～後半の住居跡は遺跡東端と西側で認められたが、その数は前代より大幅に減る。本段階には、ロクロ土師器や多様な器種構成を持つ須恵器のほか、墨書き土器が認められる。栗原郡におけるロクロ土師器や須恵器は、神護景雲元年（767）の伊治城造営を契機として生産を開始しており、墨書き土器もまた、伊治城から広まった。本集落は、早い段階からこれらを保有しており、他に較べて伊治城との関係が深かったと考えられる。

### 〈堂の沢遺跡〉

1. 堂の沢遺跡は栗原市志波姫堀口堂の沢にあり、一迫川沿いの下位段丘に立地する。標高は21m前後で、周囲の低地より1mほど高い。
2. 遺跡範囲の西側について確認調査を行った結果、近世以降の水田跡や溝跡などを検出したが、中世以前の遺構・遺物は確認できなかった。このため、遺跡の範囲は東へ縮小し東西75m、南北40~60mと考えられた。

### 註

註1 灰白色火山灰の下年代は、『扶桑略記』に記された延喜15年(915)とする見方が強まっている。

註2 藤沢敦氏は、鶴ノ丸遺跡や伊治城跡の円墳もしくは円形の低墳丘墓について前期と考えているが、確実に共存する遺物がないことから、中期もしくは後期に下る可能性も捨てきれないと指摘した(藤沢2000)。しかし、伊治城跡は長年調査しており、その成果からみて、藤沢氏が指摘した前期の可能性が高いと考えられる。

註3 6世紀代に仙台平野以北で古墳や集落形成が低調となり、古墳文化と続縄文文化の折衷型の墓がつくられた理由としては、5世紀から続く古墳寒冷期の影響が大きいと考えられる(坂口1984a・b)。

註4 カマドの分類については、村田晃一の指摘に基づく(村田2000)。

註5 3類型への仕分けは発掘調査成果に基づくが、いずれも遺跡の一部を調査したにとどまることから、見直しが必要である。

また、栗原郡における7・8世紀の集落は、広い範囲に竪穴住居が散在する形態が一般的であったが、近年、下萩沢遺跡南部で2~3が直列型配置をとる建物群(8世紀後半以前、宮城県教委2009)、同遺跡北部で北と西を溝で区切られた内部に掘立柱建物や竪穴住居、竪穴遺構つくられた例(8世紀前葉、栗原市教委2016)、源光遺跡で掘立柱建物と竪穴住居がセットとなる例(8世紀前葉、栗原市教委2015a)などがあり、集落への掘立柱建物の導入がかなり早い段階から認められるようになった。特に源光遺跡は、7世紀まで遡る可能性が指摘されている。

註6 佐内屋敷遺跡の土器は第I群と第II群に大別し、それぞれa~cグループに細分している。本稿では第I群土器aグループを第Ia土器群というように、大別と細別を組み合わせて表現している。

註7 栗原郡の建郡が遅れた理由は、7世紀以降、古墳や在土師器にみられたように中央政権との結びつきが弱い反面、伝統的に北上川中流域以北との結びつきが強かったためである。さらに、8世紀前半代は養老4年(720)の蝦夷の反乱に代表されるように、黒川以北郡域の律令支配が安定していなかったことも大きな原因と考えられる。

註8 8世紀後半以降の移民政策は、1)民・百姓・富民が戸単位で選ばれていた8世紀前半のあり方から、犯罪人や浮浪人などが戸単位で強制的に移配させられる形に変質した天平宝字年間(757~764)、2)当国他国を問わず希望者を優遇して自主的移住を募った神護景雲元年~宝亀5年(767~774)、3)他国からの移民空白期である宝亀5年~延暦13年(774~794)、4)他国からの強制移住が再開される延暦14年~21年(795~802)、の4段階に分けて理解されている(鈴木1998)。いずれも浮浪人や希望者を戸単位で移住させた点で共通する。

註9 原田遺跡SI31の年代は、9世紀前半と報告されている(宮城県教委2009a)。

註10 8世紀後半に閑東系土師器がみられなくなる理由としては、天平宝字元年(757)以降、移民が民・百姓・富民から犯罪人や浮浪人などが中心となり、しかも戸単位の移配となつたためと考えられている(今泉1992)。

註11 糸塚遺跡からは、蝦夷集団の祭祀用儀器と指摘された赤彩広口壺(杉本1998)が出土している。糸塚の年代は伊治城Ⅲ期と考えられることから、伊治公暨麻呂の乱後も古墳時代後期から続く北上川中流域以北とのつながりは続いていると考えられる(宮城県教委1978、村田1997)。

註12 八木光則氏は、800年前後の陸奥・出羽両国では新城柵造営による版図拡大、両国府の整備による支配基盤の安定が認められたが、徳政相論に代表される東北経営の軌道修正によって、城柵の統合による郡制や移民政策の変更・中止が行われた結果、650年頃以降20数ヶ所に設置された城柵が、延暦期の再

配置を経て、承和年間に6城柵に再編された（＝6城柵体制）と指摘している（八木 2001）。その一方、陸奥国の桃生・栗原郡以北では明確な郡家は認められていない。当地における律令支配の実態究明は、今後の大きな研究課題である。

註 13 第3群土器期の年代について、報告書では第2群土器期に対応するとしているが、総括で再検討したところ、第4群土器期に含まれ、その中でも古い様相を示すと考えられることから、第3群土器の年代は8世紀中葉～後半とする。

註 14 厳密には、同一噴火輪廻のテフラの可能性がある浅間草津テフラ（As-K）とも考えられる（早田勉氏による）。

註 15 関東系土師器は、器形や器面調整が在地土師器と異なり関東地方と類似するものである。6世紀末以降顕在化し、8世紀中頃まで認められる。搬入品は少なく、基本的に東北で生産されたが、器形や器面調整のほか胎土に鉄分を多く入れて赤く発色させる、ケズリを多用することによって薄手に仕上がるなどの違いが認められる。関東系土器とも呼ばれるが、東北における古墳時代後期から飛鳥時代の須恵器在地生産再開にあたっても、関東地方との結びつきが強く認められることから、それと区別する意味で「関東系土師器」と呼んでおきたい。

註 16 土師器甕は、器高から大形（25cm以上）・中形（17cm以上 25cm未満）・小形（17cm未満）に分けられる（村田 2007a）。

註 17 広口壺は球胴甕と呼ばれることもあるが、長胴甕とは器形が異なり煮炊具としての使用痕が認められないことから貯蔵具であり、器種名は「広口壺」がふさわしい（村田 2007a）。

註 18 本遺構の遺構番号は、県教委調査との重複を避けるため栗原市教育委員会調査（Ⅲ町分を含む）で発見されたものは 1001 から附すこととした。このため、市教委で最も古い旧志波姫町調査分は、報告書（志波姫町教委 2005）の番号に 1000 を加えて呼ぶこととする。

註 19 短辺と長辺の差が 60cm 以上を長方形、60cm 未満を方形と判断した。

註 20 これに対し、東壁にカマドをもつ場合、カマドの方向は南へ 15°、北へ 20° と北壁に較べてばらつきが大きい（宮城県教委 1982）。

註 21 SI07・50 はカマド本体の一部が撤去されているが、支脚や焼面の位置から本体の一部（焚口部）は住居内にあったと判断した。また、煙道は後述する伊治城周辺集落のカマドのあり方から長さが 0.9 m 以上のものを長煙道、0.7 m 未満のものを短煙道と判断した。

註 22 これまでの調査で、Ⅲ群土器に關東系土師器は認められない。しかし、宮城県北部における 8 世紀中葉から後半の土器群では、その前半（8世紀中葉）に在地化が進んだ關東系土師器が認められること（村田 2000）、栗原郡域でも、伊治城跡採集遺物の中にⅡ群土器期より型式変遷した關東系土師器環の存在が指摘されていることから（栗原市教委 2015a）、今後の発掘調査でⅢ群土器段階の關東系土師器が出土する可能性がある。

註 23 Ⅲ群土器期の 40 号住は、自動車道の報告書で第2群土器期の可能性を考えていたが、出土した須恵器環は 8 世紀中葉であることから、Ⅲ群土器期と判断した。

註 24 自動車道の報告書でも、第 17 号住跡出土土器は胆沢城跡の中でも最も古い SD114 溝跡出土土器に類似すると指摘している（宮城県教委 1982）。

註 25 自動車道調査時は、壁材痕を認識していなかった。このため、報告書に記載がないが、最近の調査事例をみると、本来は壁材を巡らせた住居が多かったと考えられる。

註 26 壁際に主柱を立てる住居は、そちらへ空間を抵張して入口を設けたと考えられる。大衡村亀岡遺跡 SI11 住跡はカマド右側の住居外にも柱を立てた例である（大衡村教委 1995）。こうした住居と振立柱を併用する建物は、日本海側に類例が多い（高橋学 2015）。b・c タイプの主柱を持つ住居は、外部の柱穴の有無も注意して調査する必要がある。

註 27 ロクロ土師器や墨書き土器はモノであることから、2 次的に移動することもあるためその出土が即、官との結びつきを示さない可能性もある。このため、遺構を含めた総合的な分析を行い、考察の確度を高める必要がある。

註 28 単純に計算すると、遺跡面積 600,000（1,500 × 400）÷自動車道調査区・バイパス調査区の面積 50,816（36,000 + 14,816）× 30（両調査のⅡ群土器期住居数）= 354,219…となる。

註 29 伊治城周辺集落とは、発掘調査で古代の竪穴住居跡が確認されたもののうち、伊治城から 5 km 以内のを目安としており、その大部分は図版 2 の中に収まる。また、城柵の竪穴住居群を含めたのは、集落と

比較することで、城柵が地域社会に与えた影響など、より多角的な分析が可能と考えたからである。

- 註30 原田・糠塚・多賀研遺跡でも9世紀前葉の住居跡は「0」であるが、その前後の時期には住居があることから、未調査部分にこの時期の住居が存在した可能性もあることから、カウントしていない。
- 註31 会津型長胴甕は、伊治城跡SI04（多賀研 1978）、SK18（多賀研 1979）、要害地区表採（栗原市19）のほか、原田遺跡SI31（県219）に認められる。さらに、旧桃生郡の石巻市角山遺跡SI1013や同市山居遺跡SI105（ともに宮城県2006）からも出土している。
- 註32 こうした見解については、関東系土師器と在土師器の融合や関東型カマドの変遷など、伊治城内と周辺集落との遺構・遺物両面からの検証が必要である。
- 註33 住居規模は八木光則氏の論考にもとづいて、面積から小形(15m<sup>2</sup>未満)、中形(15m<sup>2</sup>以上25m<sup>2</sup>未満)、大形(25m<sup>2</sup>以上40m<sup>2</sup>未満)、特大形(40m<sup>2</sup>以上60m<sup>2</sup>未満)、超大形(60m<sup>2</sup>以上)に分けている（八木1998）。
- 註34 散村形態と異なる集落が糠塚遺跡である（宮城県教委1978）。8世紀末～9世紀初頭に出現し、住居の重複が多い。土師器は古墳後期以来の伝統的器種である高杯や巻有し、東北北部系の土器を持つ一方、須恵器食器が多く認められる。集落形態や土器様相が異なることから、移住した蝦夷が住んだ集落といった、特別なムラとみられる。
- 註35 伊治城跡は、堅穴住居について造構確認でとどめたものが多く、所属時期が明らかなものはない。
- 註36 御駒堂遺跡SI51は火災後のつぶれたカマドの上から、ミニチュア土器が出土した。突発的な火災のうち、居住者が住居に戻りて廃絶祭祀を行ったと考えられる。
- 註37 桃生城の東郭とみられる新田東遺跡（村田2004）でも、8世紀後半の堅穴住居が火災に遭っており、その原因は宝亀5年（774）の海道蝦夷の襲撃と指摘されている（宮城県教委2003a）。

#### 図版出典

- 図版5：横浜市歴史博物館2002、村田晃一2000、宮城県教委1982より編集。
- 図版102：宮城県教委1982より編集。図版104：宮城県教委2009より編集。
- 図版105：宮城県教委1982・2012、栗原市教委2014より編集。
- 図版101：各報告書より転載（表10参照）。ただし、石器写真は栗原市教育委員会提供。
- 図版106～114：宮城県教委2009より編集。
- 図版116：村田晃一2010に加筆。図版118：村田晃一2015に加筆・編集。
- 図版117：宮城県教委2006・2009、多賀研1978・1979、栗原市教委2015b

#### 引用・参考文献

- 青森県史編さん古代部会編 2001『青森県史 資料編 古代1 文献史料』青森県  
池田敏宏 2009『栃木県における6・7世紀の土器様相—地域間交流を中心視座にすえて—』『古代社会と地域間交流』 国立大学考古学会編 六一書房 pp.93～110
- 今泉隆雄 1992『律令国家とエミシ』『古代の日本』第9巻 東北・北海道 角川書店 pp.163～198
- 今泉隆雄・藤沢敦 2006『古代史の舞台 東北』『列島の古代史1』 岩波書店 pp.63～110
- 大場正善・小野章太郎・安倍奈々子 2006『宮城・福島の石刃石器群』『東北日本の石刃石器群』『東北日本の石刃石器群』第20回東北日本の旧石器文化を語る会 pp.92～121
- 大衡村教育委員会 1995『亀岡遺跡』 大衡村文化財調査報告書第1集
- 押切・多田・西田 2003『渡江遺跡検出の墓域について—特に近代墓に関する報告—』『研究紀要』創刊号 山形県埋蔵文化財センター pp.146～153
- 鹿又喜隆・川口亮 2015『宮城県仙台市野川遺跡 2015年度発掘調査の概要』『第29回東北日本の旧石器文化を語る会 予稿集』 pp.59～66
- 加美町教育委員会 2005『地蔵車遺跡』 加美町文化財調査報告書第4集
- 川口潤 2011『大平山元遺跡群の位置付け』『大平山元』青森県津軽郡外ヶ浜町教育委員会 pp.92～100
- 北東北古代集落遺跡研究会 2014『9～11世紀の土器編年構築と集落遺跡の特質からみた、北東北世界の実際的研究』

- 興野義一 1976 「原始期」『一迫町史』pp.45-100
- 熊谷公男 1992 「古代東北の豪族」『新版古代の日本』第9巻 東北・北海道 角川書店 pp.261～288
- 熊谷公男 2000a 「養老四年の蝦夷の反乱と多賀城の創建」『国立歴史民俗博物館研究報告』第84集 pp.61～90
- 熊谷公男 2000b 「第Ⅲ章 律令社会と変貌」『仙台市史 通史編2古代中世』 pp.140～174
- 熊谷公男 2004 『古代の蝦夷と城柵』 吉川弘文館
- 熊谷公男 2007 「多賀城創建再考」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』平成15年度～平成18年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書 pp.418～442
- 熊谷公男 2009 「律令国家形成期における柵戸と閑東系土師器」『古代社会と地域間交流』 国立大学考古学会編 六一書房 pp.163～191
- 熊谷公男 2015 「蝦夷支配体制の強化と戦乱の時代への序曲」『蝦夷と城柵の時代』吉川弘文館 pp.218～250
- 熊谷公男 2016 「古代国家北縁の二つの世界—栗原市入の沢遺跡の発見によせてー」『日中韓周縁域の宗教文化II』 pp.33～51
- 熊田亮介 1983 「宮城の式内社をめぐる諸問題」『宮城の研究』第2巻 古代篇 中世篇I pp.181～215
- 熊田亮介 1992 「奥羽の神々」『新版古代の日本』第9巻 東北・北海道 角川書店 pp.311～332
- 栗原町教育委員会 1972 『宮城県栗原郡島矢崎古墳調査概報』
- 栗駒町教育委員会 1995 「長者原遺跡」栗駒町文化財調査報告書第3集
- 栗原市教育委員会 2006 「四ッ壇遺跡」「四ッ壇遺跡ほか」栗原市文化財調査報告書第3集 pp.1～29
- 栗原市教育委員会 2009 『伊治城跡』栗原市文化財調査報告書第9集
- 栗原市教育委員会 2010a 『伊治城跡』栗原市文化財調査報告書第11集
- 栗原市教育委員会 2010b 『大久保遺跡』栗原市文化財調査報告書第12集
- 栗原市教育委員会 2012 『源光遺跡』栗原市文化財調査報告書第15集
- 栗原市教育委員会 2013 『伊治城跡』栗原市文化財調査報告書第17集
- 栗原市教育委員会 2014 『城下遺跡』栗原市文化財調査報告書第18集
- 栗原市教育委員会 2015a 「平成26年度史跡伊治城跡・源光遺跡発掘調査の概要」『第41回古代城柵官衙遺跡検討会資料』 pp.117～124
- 栗原市教育委員会 2015b 『伊治城跡』栗原市文化財調査報告書第19集
- 栗原市教育委員会 2016 『下萩沢遺跡』栗原市文化財調査報告書第20集
- 小井川和夫・村田晃一 1994 「古代東北地方南部の集落と生業」『北日本の考古学』吉川弘文館 pp.175～200
- 坂口豊 1984a 「寒冷地域の気候変化」「寒冷地域の自然環境」北大図書刊行会
- 坂口豊 1984b 「日本の先史・歴史時代の気候」『自然』5月号
- 桜岡正信 2009 「古代東北と上野」『古代社会と地域間交流』 国立大学考古学会編 六一書房 pp.77～92
- 佐藤敏幸 2007 「宮城県北部・沿岸部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』平成15年度～平成18年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書 pp.164～209
- 進藤秋輝 2010 「多賀城研究の現段階—東北城柵の変遷と課題ー」『考古学ジャーナル』604号 ニューサイエンス社 pp.3～7
- 志波姫町教育委員会 2005 『御駒堂遺跡』志波姫町文化財調査報告書第1集
- 菅原祥夫 2015 「律令国家形成期の移民と集落」「蝦夷と城柵の時代」吉川弘文館 pp.64～86
- 杉井健 1993 「竈の地域性とその背景」『考古学研究』第40巻第1号 考古学研究会 pp.33～59
- 杉本良 1998 「岩手県北上盆地における蝦夷集団の動態」『考古学研究』第45巻第1号 pp.71～89
- 鈴木隆・大場亜弥・須藤隆 2003 「宮城県一迫町採集の大型局部磨製石斧2例」『宮城考古学』第5号 pp.241～254
- 鈴木拓也 1998 『古代東北の支配構造』吉川弘文館
- 鈴木拓也 2008 『蝦夷と東北戦争』吉川弘文館
- 瀬峰町教育委員会 1983 『大境山遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第4集
- 瀬峰町教育委員会 1987 『瀬峰町泉谷館跡・清水山1遺跡発掘調査略報』『瀬峰町の文化財』第6集 pp.12～23

- 瀬峰町教育委員会 1988『下藤沢II遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第6集
- 瀬峰町教育委員会 2000『桃生田前遺跡』『桃生田前遺跡 下富前遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第19集
- 瀬峰町教育委員会 2003『長根遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第21集
- 仙台郷土研究会 2002『仙台藩歴史事典』
- 仙台市教育委員会 1996『野川遺跡』仙台市文化財調査報告書第205集
- 仙台市教育委員会 2011『大野田古墳群』『下ノ内遺跡・春日社古墳・大野田官衙遺跡ほか』仙台市文化財調査報告書第390集 pp.490～614
- 外山政子 1990a「羽田倉遺跡の煮沸具の観察から—古墳時代を中心として—」『長根羽田倉遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第99集 pp.500～509
- 外山政子 1990b「矢田遺跡の平安時代のカマドと煮沸具—煮沸具の使用痕跡の観察結果から—」『矢田遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第99集 pp.263～273
- 外山政子 1991『三ッ寺II遺跡のカマドと煮炊』『三ッ寺II遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第93集 pp.173～204
- 外山政子 1998『関東北西部地域の平安時代住居とカマド—群馬県矢田遺跡の検討から—』『法政考古学』第24集 法政考古学会 pp.41～62
- 高清水町教育委員会 2000『経ヶ崎遺跡』『経ヶ崎遺跡 観音沢遺跡』高清水町文化財調査報告書第2集 pp.4～68
- 高清水町教育委員会 2000『観音沢遺跡』『経ヶ崎遺跡 観音沢遺跡』高清水町文化財調査報告書第2集 pp.69～108
- 多賀城跡調査研究所 1978『伊治城跡I』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第3冊
- 多賀城跡調査研究所 1979『伊治城跡II』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第4冊
- 多賀城跡調査研究所 1980『伊治城跡III』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第5冊
- 多賀城跡調査研究所 1992『年報 1991』
- 多賀城市教育委員会 1998『大日北遺跡』多賀城市文化財調査報告書第49集
- 高橋一夫 2011『カマド掛け口考』『埼玉考古』第46号 埼玉考古学会 pp.85～94
- 高橋千晶 2007『岩手県南部』『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』平成15年度～平成18年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書 pp.210～244
- 高橋誠明 2009『古代社会と地域間交流—土器からみた関東系土器と東北の様相—』『古代社会と地域間交流』六一書房 pp.209～218
- 高橋誠明 2015『古墳時代前期の倭国北緯社会—宮城県北部の様相—』『古代倭国北緯の軋轢と交流 栗原市人の沢遺跡で何が起きたか』東北学院大学アジア流域文化研究所 pp.46～63
- 高橋学 1984『奈良・平安時代の堅穴住居跡復原—カマドの類型化作業を通して—』『秋田考古学』第38号 pp.1～17
- 高橋学 2015『堅穴・掘立柱併用建物』『季刊考古学』第131号 雄山閣 pp.77～79
- 谷句 1982『古代東國のカマド』『研究紀要7』千葉県文化財センター pp.223～248
- 谷句 1990『所謂「F類カマド」型の集落(上総西部編)』『研究連絡誌』第29号 千葉県文化財センター pp.1～5
- 千葉長彦・後藤秀一 2001『伊治城跡発掘調査の成果』『第27回古代城柵官衙遺跡検討会資料』pp.101～128
- 築館町教育委員会 1991『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第4集
- 築館町教育委員会 1992『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第5集
- 築館町教育委員会 1993『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第6集
- 築館町教育委員会 1994『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第7集
- 築館町教育委員会 1995『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第8集
- 築館町教育委員会 1998『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第11集
- 築館町教育委員会 2001『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第14集
- 築館町教育委員会 2003『嘉倉貝塚』築館町文化財調査報告書第16集
- 築館町教育委員会 2004『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第17集
- 築館町教育委員会 2005『般沢遺跡』築館町文化財調査報告書第18集

- 築館町史編纂委員会 1976『築館町史』pp.138
- 辻秀人 2007『栗団式土師器の製作技法』『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』平成15年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書 pp.411～417
- 辻秀人ほか 2007『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』平成15年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書
- 辻秀人ほか 2015『鳥矢ヶ崎古墳群測量調査報告』『東北学院大学論集 歴史と文化』第53号 pp.59～102
- 鶴間正昭 2004『関東にみる新型土師器环の出現』『研究論集』XX 東京都埋蔵文化財センター pp.1～22
- 鶴間正昭 2009『南武藏・相模の土器様相と地域間交流』『古代社会と地域間交流』国士館大学考古学会編 六一書房 pp.7～34
- 東北学院大学考古学研究部 1972『鳥矢ヶ崎古墳群発掘調査概報』『温故』第7号
- 東北学院大学考古学研究部 1979『亀岡遺跡発掘調査報告』『温故』第12号 pp.1～141
- 東北学院大学アジア流域文化研究所 2015『古代倭国北縁の軋轢と交流 栗原市入の沢遺跡で何が起きたか』東北歴史博物館 2004『東北発掘ものがたり』
- 富田和夫 2009『移民の携えた土器－北武藏・上野由来の「関東系土師器」をめぐって』『古代社会と地域間交流』国士館大学考古学会編 六一書房 pp.55～76
- 登米市教育委員会 2011『塙塚・滝遺跡』登米市文化財調査報告書第2集
- 永田英明 2016『古代東北の軍事と交通－城柵をめぐる交通関係－』『日本古代の交通・交流・情報』1 吉川弘文館 pp.206～232
- 永田英明 2015『城柵の設置と新たな蝦夷支配』『蝦夷と城柵の時代』吉川弘文館 pp.15～58
- 奈良・平安時代研究プロジェクトチーム 1997～1999『神奈川県におけるカマド構造の基礎的研究（1）～（3）』『研究紀要2～4 かながわの考古学』神奈川県立埋蔵文化財センター・財団法人神奈川考古学財団
- 迫町教育委員会 2005『坂戸遺跡』迫町文化財調査報告書第4集
- 樋口知志 2013『阿豆流為』ミネルヴァ書房
- 藤沢敦 2000『栗原・桃生・本吉地方の古墳墓』『阿部正光君追悼集』阿部正光君追悼集刊会 pp.69～80
- 古川一明 1996『北辺に分布する横穴墓について』『考古学と遺跡の保護』甘粕健先生退官記念論集刊行会 pp.255～272
- 古川市教育委員会 2003『塙塚B遺跡』宮城県古川市文化財調査報告書第34集
- 松本太郎 2009『鬼高系の系譜と歴史的背景』『古代社会と地域間交流』国士館大学考古学会編 六一書房 pp.35～54
- 松本太郎 2013『東國の土器と官衙遺跡』六一書房
- 宮城県教育委員会 1978『塙塚遺跡』宮城県文化財発掘調査略報（昭和52年度分）宮城県文化財調査報告書第53集 pp.44～198
- 宮城県教育委員会 1979a『宇南遺跡』宮城県文化財調査報告書第59集
- 宮城県教育委員会 1979b『五輪C遺跡』宮城県文化財調査報告書第61集
- 宮城県教育委員会 1980a『大門遺跡』東北新幹線関係遺跡調査報告書II 宮城県文化財調査報告書第62集 pp.273～306
- 宮城県教育委員会 1980b『藤屋敷遺跡』東北自動車道遺跡調査報告書II 宮城県文化財調査報告書第63集 pp.119～251
- 宮城県教育委員会 1980c『西手取・手取遺跡』東北自動車道遺跡調査報告書II 宮城県文化財調査報告書第63集 pp.252～408
- 宮城県教育委員会 1980d『原田遺跡』東北自動車道遺跡調査報告書II 宮城県文化財調査報告書第63集 pp.409～423
- 宮城県教育委員会 1980e『佐野遺跡』東北自動車道遺跡調査報告書II 宮城県文化財調査報告書第63集 pp.425～546
- 宮城県教育委員会 1980f『木戸遺跡』東北自動車道遺跡調査報告書III 宮城県文化財調査報告書第69集 pp.423～460
- 宮城県教育委員会 1980g『山ノ上遺跡』東北自動車道遺跡調査報告書III 宮城県文化財調査報告書第69集 pp.461～499

- 宮城県教育委員会 1980h「宇南遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第69集 pp.501～556
- 宮城県教育委員会 1980i「有賀峰遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第69集 pp.557～589
- 宮城県教育委員会 1980j「観音沢遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第72集 pp.131～349
- 宮城県教育委員会 1980k「八沢要害遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第72集 pp.351～398
- 宮城県教育委員会 1981a『上新田遺跡』宮城県文化財調査報告書第78集
- 宮城県教育委員会 1981b『鶴ノ丸遺跡』『東北新幹線関係遺跡調査報告書V』宮城県文化財調査報告書第81集 pp.353～500
- 宮城県教育委員会 1982「御駒堂遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書VI』宮城県文化財調査報告書第83集 pp.307～584
- 宮城県教育委員会 1983「佐内屋敷遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書VII』宮城県文化財調査報告書第93集 pp.289～546
- 宮城県教育委員会 2001「淀遺跡」『名生館遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第187集 pp.151～154
- 宮城県教育委員会 2003a『新田東遺跡』宮城県文化財調査報告書第191集
- 宮城県教育委員会 2003b『嘉倉貝塚』宮城県文化財調査報告書第192集
- 宮城県教育委員会 2005『角山遺跡』宮城県文化財調査報告書第200集
- 宮城県教育委員会 2006『角山遺跡・山居遺跡』宮城県文化財調査報告書第206集
- 宮城県教育委員会 2009a『原田遺跡』『原田遺跡・下萩沢遺跡』宮城県文化財調査報告書第219集 pp.1～109
- 宮城県教育委員会 2009b『下萩沢遺跡』『原田遺跡・下萩沢遺跡』宮城県文化財調査報告書第219集 pp.109～272
- 宮城県教育委員会 2012『大天馬遺跡』宮城県文化財調査報告書第231集
- 宮城県教育委員会 2016『大天馬遺跡』宮城県文化財調査報告書第240集
- 宮崎町教育委員会 1996『米泉駁跡』宮崎町文化財調査報告書第5集
- 村上裕次 2015a「人の沢遺跡の調査成果」『古代後国北緯の軋轍と交流 栗原市入の沢遺跡で何が起きたか』東北学院大学アジア流域文化研究所 pp.11～22
- 村上裕次 2015b「古墳時代前期北緯の拠点的な集落—栗原市入の沢遺跡」『季刊考古学』第133号 pp.89～90
- 村田晃一 1997「陸奥中部における北との交流」『蝦夷・律令国家・日本海』日本考古学協会 1997年度秋田大会資料 pp.243～271
- 村田晃一 2000「飛鳥・奈良時代の陸奥北辺」『宮城考古学』第2号 宮城県考古学会 pp.45～80
- 村田晃一 2004「三重構造城柵論」『宮城考古学』第6号 宮城県考古学会 pp.159～186
- 村田晃一 2007a「宮城県中部から南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』平成15年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書 pp.119～163
- 村田晃一 2007b「陸奥北辺の城柵と郡家」『宮城考古学』第9号 宮城県考古学会 pp.85～110
- 村田晃一 2009「律令国家形成期の陸奥北辺経営と坂東一在地土師器・関東系土師器・團郭集落の検討から」『古代社会と地域間交流』 国土館大学考古学会編 六一書房 pp.141～162
- 村田晃一 2010「黒川以北十郡における城柵・官衙群」『考古学ジャーナル』604号 ニューサイエンス社 pp.21～26
- 村田晃一 2015「版図の拡大と城柵」『蝦夷と城柵の時代』 吉川弘文館 pp.87～118
- 村田晃一 2016a「日本古代城柵の検討（3）—飛鳥時代の城柵—」『日本古代考古学論集』 同成舎 pp.638～652
- 村田晃一 2016b「律令国家の拡大と城柵—伊治城跡と桃生城跡の成果を中心に—」『栗原市伊治城跡から読み解く東北古代史』東北学院大学アジア流域文化研究所 pp.47～64
- 八木光則 1998「馬瀬川流域の様相」『第24回古代城柵官衙遺跡調査会資料』 pp.77～90
- 八木光則 1999「東北北部の終末期古墳」『北海道考古学』第35輯 北海道考古学会 pp.89～100

- 八木光則 2001「城柵の再編」「日本考古学』第12号 日本考古学協会 pp.55～68
- 柳澤和明 2001「桃生城跡発掘調査の成果」「第27回古代城柵官衙遺跡検討会資料』 pp.77～100
- 柳澤和明 2010「桃生城跡と伊治城跡」『考古学ジャーナル』604号 ニューサイエンス社 pp.27～30
- 柳田俊雄 2003「東北地方中南部地域の「暗色帶」とそれに対応する層から出土する石器群の特徴について」『Bulletin of the Tohoku University Museum』3 pp.69～89
- 山中雄志 2003「古代会津地方の長胴表にみる特質について」『行政社会論集』第15卷第3号 福島大学 行政社会学会 pp.217～236
- 横浜市歴史博物館 2002『東へ西へ 一律令国家を支えた古代東国の人々ー』
- 横浜市歴史博物館 2006『諸國五十戸』木簡と横浜 一大宝律令以前の支配システムを探るー』
- 横浜市歴史博物館 2007『ヒトが移るモノが動く ー古代の東国にその痕跡を探るー』

## 附章 栗原市御駒堂遺跡における火山灰分析

株式会社 火山灰考古学研究所

### 1. はじめに

東北地方宮城県北部に位置する栗原市とその周辺の地層や土壌の中には、鳴子、肘折、栗駒、十和田など東北地方の火山のほか、洞爺、浅間、御岳、三瓶、阿蘇、姶良、鬼界など遠方の火山に由来するテフラ（火山碎屑物、いわゆる火山灰）が数多く認められる。とくに、後期更新世以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代さらに岩石記載的な特徴がテフラ・カタログ（町田・新井 1992・2003・2011）などに収録されており、考古遺跡などで調査分析を行い年代や層位が明らかな指標テフラを検出することで、地形や地層の形成年代さらには考古遺物や遺構の年代などに関する研究を実施できるようになっている。

栗原市御駒堂遺跡における発掘調査でも、層位や年代が不明な石器や遺構などが検出されたことから、地質調査を行って上層やテフラ層の記載を行うとともに、高純度の分析試料を採取し、実験室内でテフラ分析（火山ガラス比分析、火山ガラスの屈折率測定、火山ガラスのEPMA分析）を実施して、すでに年代が明らかにされている指標テフラの検出同定を行うことになった。調査分析の対象は、A5 グリッド西壁、SI11 住居跡、SK40 土坑（壁面）、第 19 トレンチ南壁の 4 地点である。

### 2. 土層層序

#### (1) A5 グリッド西壁

御駒堂遺跡の基本的土層断面である A5 グリッド西壁では、下位より白色粘土質シルト層（層厚 20cm 以上、XIV 層）、黄褐色風化軽石層（層厚 19cm、XIII 層）、黄色凝灰質砂層（層厚 12cm、XII 層）、黄白色粘土質シルト層（層厚 14cm、XI 層）、やや黄色がかかった褐色土（層厚 14cm、IX 層）、砂混じり黄色土（層厚 8cm、VII 層）、砂混じりでやや褐色がかかった黄色土（層厚 12cm、VII 層）、砂混じり黄色土（層厚 12cm、VI 層）、砂混じり黄色土（層厚 7cm、V b 層）、暗褐色土（層厚 10cm、Va 層）、暗灰褐色土（層厚 5cm、I 層）、暗灰色土（層厚 17cm、表土）が認められる（図 1）。これらのうち、VI 層が旧石器時代から縄文時代の遺物包含層である。

#### (2) SI11 住居跡

奈良時代の堅穴住居跡と推定されている SI11 住居跡は、下位より黄色土ブロックを多く含みやや灰色がかかった暗褐色土の上面に床面がつくられている（図 2）。床面は、下位より黄色土粒子や炭化物を含みやや灰色がかかった暗褐色土（層厚 10cm）、色調がとくに暗い暗灰褐色土（層厚 15cm）、テフラ層（層厚 13cm）、暗灰色土（層厚 4cm）、暗灰褐色土（層厚 19cm）で覆われている（図 2）。

#### (3) SK40 土坑（壁面）

SK40 土坑壁面では、下位より褐色土（層厚 20cm 以上）、褐灰色土（層厚 7cm）、亜円～亜角礫からなる礫層（層厚 4cm、礫の最大径 14mm）、灰色シルト層（層厚 6cm）、亜円～亜角礫からなる礫

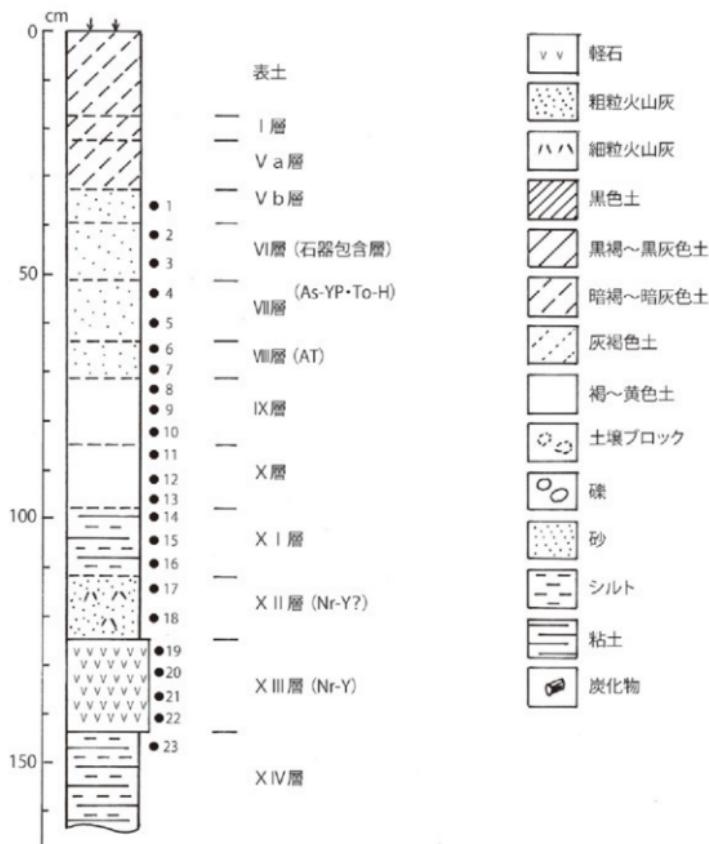


図1 A5 グリッド西壁の土層柱状図 ●: テフラ分析試料の層位. 数字: テフラ分析試料番号

層（層厚3cm、礫の最大径8mm）、黄灰色シルト層（層厚14cm）、亜円礫層（層厚1cm、礫の最大径11mm）、黄灰色シルト層（層厚6cm）、黄灰色砂層（層厚8cm）、基底に亜角礫を含む褐色土（層厚18cm、礫の最大径24mm）が認められる（図3）。最上位の土層の上面がSI6住居跡の床面に相当する。

#### (4) 第19トレーニング南壁

第19トレーニングでは、下位より黄灰色砂層（層厚10cm以上）、黄灰色砂質土（層厚15cm）、黄色土（層厚21cm）、やや灰色がかかった黄色土（層厚17cm、IX層）、炭化物混じり灰黄色土（層厚16cm、VII層）が認められる（図4）。

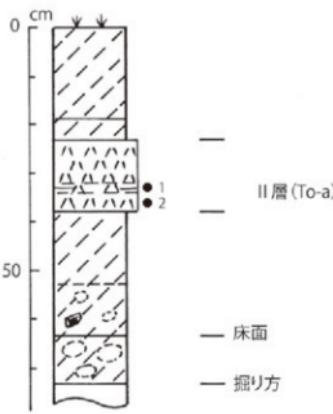


図2 SI11住居跡の土層柱状図

●: テフラ分析試料の層位  
数字: テフラ分析試料番号

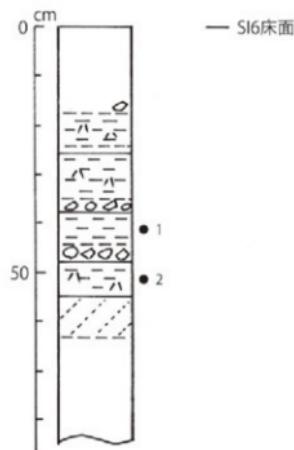


図3 SK40 土坑壁面の土層柱状図

●: テフラ分析試料の層位  
数字: テフラ分析試料番号

### 3. 火山ガラス比分析

#### (1) 分析試料と分析方法

御駒堂遺跡の構造・遺物の層位や形成年代を明らかにするため、基本的に厚さ 5cm ごとに設定採取された試料あるいは土層ごとに採取された試料のうちの 15 試料を対象に、火山ガラスの形態色調別含有率と、重鉱物や軽鉱物の含有率を合わせて求める火山ガラス比分析を実施して、ガラス質テフラの検出ならびにテフラ層に含まれる火山ガラスの特徴の把握を行った。分析の手順は次のとおりである。

- 1) 砂分の量に合わせて試料 6 ~ 10g を秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の相対的な量や特徴を観察。
- 5) 分析篩により、1/4 ~ 1/8mm と 1/8 ~ 1/16mm の粒子を篩別。

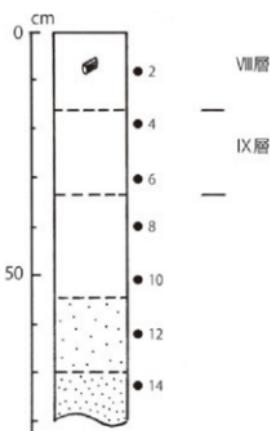


図4 第19グリッド南壁の土層柱状図

●: テフラ分析試料の層位  
数字: テフラ分析試料番号

6) 偏光顕微鏡下で 1/4 ~ 1/8mm 粒径の 250 粒子を観察し、火山ガラスの色調・形態別含有率ならびに軽鉱物や重鉱物の含有率を求める。

## (2) 分析結果

火山ガラス比分析の結果を、ダイヤグラムにして図 5 に、またその内訳を表 1 に示す。A5 グリッド西壁では、試料 21 に火山ガラスが多く含まれている (36.4%)。火山ガラスは、含有率が高い順に纖維束状軽石型 (28.0%)、分厚い中間型 (6.4%)、スponジ状軽石型 (2.0%) である。軽鉱物と重鉱物の含有率は、それぞれ 52.0% と 6.0% で後者の含有率が低い。不透明鉱物以外に含まれる重鉱物は、斜方輝石や角閃石である。

ほかには、試料 13 にやや多くの火山ガラスが認められる (24.4%)。火山ガラスは、含有率が高い順に纖維束状軽石型 (14.4%)、中間型 (7.6%)、スponジ状軽石型 (1.6%)、そして無色透明のバブル型 (0.8%) である。このうち、バブル型ガラスはやや厚手のものである。軽鉱物と重鉱物の含有率は、それぞれ 37.2% と 3.2% で、やはり後者の含有率が低い。不透明鉱物以外に含まれる重鉱物も、斜方輝石や角閃石で、試料 21 の傾向と似ている。

それより上位では火山ガラスの含有率は高くないものの、試料 7 より上位で、無色透明のバブル型ガラスが少量ながら連続的に検出される。また、試料 3 より上位では、スponジ状軽石型ガラスが、やはり少量ながら検出される。さらに、試料 2 では、前後の試料と比較して、やや多くの火山ガラスが認められる (12.8%)。この試料に含まれる火山ガラスは、含有率が高い順に中間型 (6.4%)、纖維束状軽石型 (5.2%)、無色透明のバブル型 (0.8%)、スponジ状軽石型 (0.4%) である。なお、中間型ガラスは、試料 4 より上位でやや含有率が高い傾向にある。下位の試料と比較すると、斜方輝石や角閃石など重鉱物の含有率が高い。

以上のことから、テフラ層をのぞけば、A5 グリッド西壁では、試料 7 付近にバブル型ガラス、試料 4 付近に中間型ガラス、そして試料 2 付近に、中間型、纖維束状軽石型、そしてスponジ状軽石型などの火山ガラスで特徴づけられるテフラの降灰層準のある可能性が指摘される。

同じようにローム層について分析を実施した第 19 トレンチ南壁では、A5 グリッド西壁より火山ガラスの含有率がやや高い傾向が伺えるが、テフラの有意な層位の変化はほとんど認められない。

表 1 火山ガラス比分析結果

地点	試料	buc (cl)	buc (ph)	buc (br)	mb	pm (sp)	pm (tb)	軽鉱物	重鉱物	その他	合計
A5 グリッド西壁	1	1	0	0	9	2	11	132	10	85	250
	2	2	0	0	16	1	13	132	19	67	250
	3	2	0	0	8	1	8	149	22	60	250
	4	1	0	0	10	0	9	159	18	53	250
	5	1	0	0	6	0	10	157	19	57	250
	7	1	0	0	8	1	15	139	19	67	250
	9	0	0	0	8	3	14	142	23	60	250
	13	2	0	0	19	4	36	93	8	88	250
	15	1	0	0	12	1	17	110	41	68	250
	17	0	0	0	9	7	24	109	11	90	250
	21	0	0	0	16	5	70	130	15	14	250
第 19 トレンチ南壁	2	1	0	0	23	2	11	109	23	81	250
	4	3	0	0	14	1	9	131	21	71	250
	6	1	0	0	18	0	12	120	24	75	250
SL11 住居跡	2	1	0	0	10	5	24	75	10	125	250

buc: バブル型, mb: 中間型, pm: 軽石型, cl: 無色透明, ph: 淡褐色, br: 黄色, sp: スポンジ状, tb: 繊維束状, 数字は粒子数。

SI11 住居跡の試料 2 には、やや多くの火山ガラスが含まれている（16%）。この試料に含まれる火山ガラスは、含有率が高い順に繊維束状軽石型（9.6%）、中間型（4.0%）、スポンジ状軽石型（2.0%）、無色透明のバブル型（0.4%）である。軽鉱物と重鉱物の含有率は、それぞれ 30.0% と 4.0% で後者の含有率が低い。不透明鉱物以外に含まれる重鉱物は、斜方輝石や単斜輝石である。

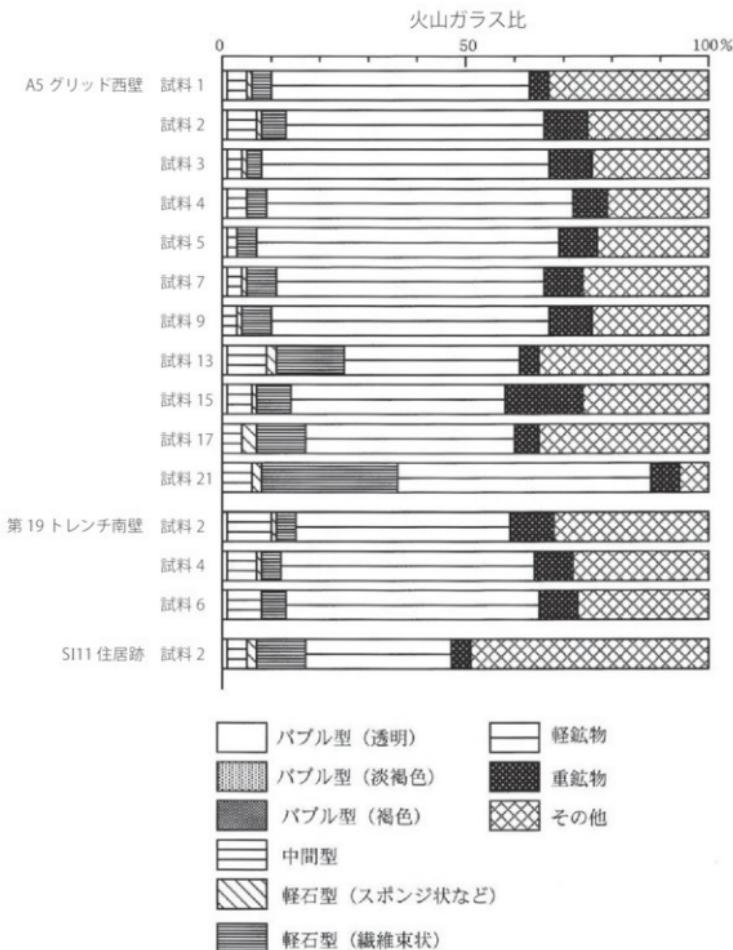


図 5 御駒堂遺跡テフラ試料の火山ガラス比ダイヤグラム

## 4. 屈折率測定（火山ガラス）

### (1) 測定試料と測定方法

火山ガラス比分析の対象試料のうち、A5 グリッド西壁およびSI11 住居跡の 5 試料に含まれる火山ガラスについて、指標テフラとの同定精度を向上させるために含まれる火山ガラス (n) の屈折率測定を行った。測定に用いた機器は温度変化型屈折率測定装置（京都フィッシュン・トラック社製 RIMS2000）で、1/8 ~ 1/16mm 粒子の中の火山ガラスを測定対象とした。

### (2) 測定結果

屈折率の測定結果を表 2 に示す。この表には、宮城県北部周辺の後期更新世以降の代表的な指標テフラの火山ガラスの屈折率特性も合わせて示した。A5 グリッド西壁の試料 21 に含まれる火山ガラス (32 粒子) の屈折率 (n) は、1.501-1.503 である。試料 7 に含まれる火山ガラス (34 粒子) の屈折率 (n) は、1.499-1.504 である。試料 4 に含まれる火山ガラス (30 粒子) の屈折率 (n) も、1.499-1.504 である。試料 2 に含まれる火山ガラス (33 粒子) の屈折率 (n) は、1.501-1.506 である。一方、SI11 住居跡の試料 2 に含まれる火山ガラス (30 粒子) の屈折率 (n) は、1.500-1.506 である。

表 2 屈折率測定結果

地点・テフラ	試料	火山ガラス		文献
		屈折率 (n)	測定点数	
A5 グリッド西壁	2	1.501-1.506	33	本報告
	4	1.499-1.504	30	本報告
	7	1.499-1.504	34	本報告
	21	1.501-1.503	32	本報告
SI11 住居跡	2	1.500-1.506	30	本報告
指標テフラ				
十和田 a (To-a)	岩手海辺	1.500-1.508		町田・新井 (2011)
	宮城南辺	1.503-1.507		町田・新井 (2011)
十和田山中腹 (To-Cu)		1.508-1.512		町田・新井 (2011)
對馬花沢 (To-O)		1.499-1.504		町田・新井 (2011)
十和田八ヶ (To-H)		1.502-1.509		町田・新井 (2011)
茂原板井御崎 (As-TP)		1.501-1.505		町田・新井 (2011)
第1加賀平原 (Nk-U)		1.492-1.500		早田 (2001)
第1山 (AT)		1.498-1.501		町田・新井 (2011)
十和田人久動 (To-Of)		1.505-1.511		町田・新井 (2011)
クマチャロ巣路 (Kc-Sr)		1.502-1.505		町田・新井 (2011)
支那 1 (Spa-1)		1.501-1.505		町田・新井 (2011)
猿桂山 (Yk-Y)		1.500-1.503		町田・新井 (2011)
猪之郷沢 (No-Y)		1.500-1.503		町田・新井 (2011)
阿蘇 4 (Aso-4)		1.506-1.510		町田・新井 (2011)
猪子荷坂 (No-N)		1.500-1.502		町田・新井 (2011)
対馬北原 (Hk-Kh)		1.499-1.502		町田・新井 (2011)
一塊木次 (Sk)		1.496-1.498		町田・新井 (2011)
剣淵 (Toya)		1.494-1.498		町田・新井 (2011)

本報告における屈折率の測定は、温度変化型屈折率測定装置による。

## 5. 火山ガラスの EPMA 分析（主成分化学組成分析）

### (1) 分析試料と分析方法

指標テフラとの同定精度をさらに向上させるため、屈折率測定試料のうち、A5 グリッド西壁の 4 試料に含まれる火山ガラスを対象に、電子線マイクロアナライザ (EPMA) により、1/4-1/8mm 粒径の火山ガラスの主成分化学組成を明らかにした。分析に使用した分析機器は、山形大学理学部の日

本電子JXA8600MWDS型EPMAである。加速電圧15kV、照射電流0.01 μA、ビーム径10 μmの条件で行った。また、補正にはOxide ZAF法を用いた。

## (2) 分析結果

分析結果を表3～6に示す。さらに指標テフラとの比較のために、従来の東北地方中南部に分布する後期更新世後半以降の指標テフラの主成分化学組成データ（八木・早田1989）を加えて表7を作成した。なお、分析結果はいざれも無水に換算して表示している。

4試料では、下位の2試料と、上位の2試料でそれぞれ同じような傾向が認められた。

## 6. 考察

A5グリッド西壁における火山ガラスの屈折率測定対象試料のうち、試料21（XⅢ層）が採取された軽石層は、層相、火山ガラスの形態や色調、火山ガラスの屈折率特性や主成分化学組成から、約4.1～6.3万年前に鳴子カルデラから噴出した鳴子柳沢テフラ（Nr-Y, 早田1989, 町田・新井2003など）のうちの降下テフラ層と思われる。その上位に堆積する凝灰質砂層（XⅡ層）が、柳沢火碎流に関係するとすれば、Y1降下軽石（早田1989）の可能性が指摘される。

試料7（VⅢ層）に含まれる火山ガラスの多くも、主成分組成化学組成からNr-Yに由来すると考えられる。ただし、無色透明のバブル型ガラスが含まれていること、Nr-Yと比較してやや低い屈折率特性をもつ火山ガラスが含まれていることなどから、このVⅢ層中に約2.8～3.0万年前に始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰（AT, 町田・新井1976・1992, 松本ほか1987, 村山ほか1993, 池田ほか1995）の降灰層準のある可能性が考えられる。ATがEPMA分析で検出されなかったことには、屈折率測定とEPMA分析での対象粒径の違いが関係しているのかも知れない。

試料4（VⅦ層）も火山ガラスの屈折率特性が試料7（VⅢ層）と類似していることから、Nr-YやATが混在していると考えられる。ただ、この試料に含まれる火山ガラスの主成分組成は、十和田系テフラの特徴を示唆している。本地域に降灰している十和田系テフラとしては、約3.2万年前以前に十和田火山から噴出した十和田大不動テフラ（To-Of, 中川ほか1972, Hayakawa, 1985, 大池・中川1979, 松山・大池1986, 町田・新井2003, 古環境研究所2004, 小岩ほか2007）や、約1.5万年前に十和田火山から噴出した十和田八戸テフラ（To-H, 中川ほか1972, 早川1983, Hayakawa, 1995, 町田・新井2003）が考えられる。すぐ下位のVⅨ層から採取された試料7で、この主成分組成タイプの火山ガラスが検出されていないことは、後者の可能性がより高いことを示唆すると思われる。

また、試料2に含まれる火山ガラスについても、主成分化学組成から、To-Hが混在する可能性が考えられるが、屈折率特性がやや高いことを考慮すると、この試料には、ほかに、約1.5～1.65万年前に浅間火山から噴出した浅間草津黄色軽石（As-K, 新井1979, 町田・新井1992）を含む浅間板鼻黄色軽石（As-YP, 新井1962, 町田・新井1992など）が混在していると推定される。このテフラに特徴的な中間型ガラスは、試料4でも比較的多いことから、総合的にみると、VⅨ層からVI層にかけて、As-YPが含まれていると考えられよう。

表3 A5グリッド西壁・試料2に含まれる火山ガラスの主成分化学組成

試料	SiO <sub>2</sub>	TiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	total
1	77.95	0.36	13.17	1.56	0.10	0.40	2.10	3.19	1.12	0.04	100.00
2	78.56	0.30	12.64	1.66	0.04	0.36	1.90	3.31	1.17	0.06	100.00
3	76.11	0.35	13.46	2.33	0.12	0.53	2.36	3.46	1.16	0.12	100.00
4	78.50	0.30	12.80	1.67	0.08	0.38	2.00	3.03	1.26	0.00	100.00
5	78.86	0.33	12.51	1.62	0.10	0.36	1.92	3.02	1.14	0.14	100.00
6	78.17	0.34	12.76	1.65	0.07	0.39	2.01	3.32	1.17	0.13	100.00
7	77.58	0.33	12.83	2.01	0.22	0.42	2.04	3.39	1.14	0.09	100.00
8	78.62	0.32	12.68	1.64	0.00	0.31	1.80	3.33	1.18	0.11	100.00
9	78.05	0.34	12.66	1.66	0.17	0.39	2.01	3.49	1.23	0.00	100.00
10	78.88	0.25	12.17	1.37	0.06	0.21	1.44	3.76	1.83	0.02	100.00
11	77.73	0.35	12.93	1.72	0.19	0.38	1.97	3.33	1.31	0.11	100.00
12	78.19	0.32	13.33	1.49	0.10	0.40	1.98	2.87	1.28	0.04	100.00
av.	78.10	0.32	12.83	1.70	0.10	0.38	1.96	3.29	1.25	0.07	100.00

表4 A5グリッド西壁・試料4に含まれる火山ガラスの主成分化学組成

試料	SiO <sub>2</sub>	TiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	total
1	79.16	0.21	11.89	1.28	0.04	0.18	1.56	3.86	1.80	0.02	100.00
2	75.80	0.43	13.36	2.10	0.03	0.67	2.70	3.75	1.05	0.13	100.00
3	78.75	0.22	12.45	1.54	0.08	0.36	1.97	3.40	1.14	0.07	100.00
4	76.46	0.41	13.33	2.31	0.14	0.56	2.49	3.20	1.04	0.06	100.00
5	79.26	0.22	11.80	1.35	0.23	0.21	1.53	3.41	1.96	0.03	100.00
6	77.97	0.35	12.84	1.82	0.09	0.46	2.08	2.93	1.35	0.10	100.00
7	77.79	0.43	12.86	2.16	0.09	0.47	2.19	2.73	1.24	0.04	100.00
8	78.72	0.23	12.05	1.38	0.07	0.15	1.23	4.27	1.88	0.02	100.00
9	78.78	0.20	11.84	1.39	0.13	0.20	1.37	4.00	2.00	0.09	100.00
10	79.12	0.21	11.89	1.39	0.00	0.23	1.58	3.38	2.08	0.12	100.00
11	80.19	0.10	12.01	1.24	0.01	0.22	1.60	2.69	1.93	0.02	100.00
12	79.04	0.23	11.75	1.34	0.00	0.20	1.36	4.02	2.03	0.03	100.00
av.	78.42	0.27	12.34	1.61	0.08	0.33	1.80	3.47	1.63	0.06	100.00

表5 A5グリッド西壁・試料7に含まれる火山ガラスの主成分化学組成

試料	SiO <sub>2</sub>	TiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	total
1	79.52	0.13	11.78	1.54	0.07	0.18	1.30	3.15	2.30	0.04	100.00
2	79.34	0.25	12.07	1.17	0.06	0.22	1.28	3.69	1.93	0.00	100.00
3	78.77	0.13	11.86	1.38	0.14	0.21	1.31	3.99	2.30	0.00	100.00
4	79.23	0.17	11.93	1.24	0.07	0.18	1.49	3.56	2.12	0.01	100.00
5	80.95	0.16	10.97	1.20	0.02	0.16	1.43	3.44	1.66	0.00	100.00
6	79.53	0.17	11.95	1.18	0.02	0.21	1.29	3.39	2.25	0.00	100.00
7	79.35	0.15	12.14	1.22	0.08	0.22	1.30	3.35	2.17	0.02	100.00
8	79.08	0.16	11.95	1.18	0.07	0.25	1.36	3.97	1.95	0.02	100.00
9	79.19	0.16	11.89	1.22	0.07	0.17	1.25	3.93	2.13	0.00	100.00
10	79.23	0.21	11.89	1.29	0.10	0.22	1.31	3.67	2.08	0.00	100.00
11	79.34	0.15	11.89	1.25	0.12	0.17	1.28	3.75	2.03	0.02	100.00
av.	79.41	0.17	11.85	1.26	0.07	0.20	1.33	3.62	2.08	0.01	100.00

表6 A5グリッド西壁・試料21に含まれる火山ガラスの主成分化学組成

試料	SiO <sub>2</sub>	TiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	total
1	80.30	0.21	11.84	1.31	0.05	0.23	1.34	2.95	1.72	0.04	100.00
2	79.95	0.26	11.82	1.18	0.00	0.18	1.27	3.42	1.90	0.03	100.00
3	79.40	0.20	11.76	1.41	0.07	0.22	1.53	3.55	1.83	0.05	100.00
4	79.96	0.26	12.12	1.17	0.17	0.22	1.50	2.92	1.68	0.00	100.00
5	79.57	0.25	11.88	1.22	0.06	0.19	1.40	3.50	1.91	0.03	100.00
6	79.87	0.18	11.95	1.31	0.13	0.24	1.35	3.08	1.83	0.05	100.00
7	79.95	0.23	11.91	1.37	0.09	0.24	1.52	3.02	1.66	0.02	100.00
8	80.08	0.18	11.92	1.34	0.11	0.29	1.48	2.95	1.72	0.00	100.00
9	79.69	0.23	11.94	1.40	0.07	0.18	1.54	3.15	1.77	0.02	100.00
10	79.53	0.21	11.99	1.29	0.09	0.21	1.46	3.29	1.84	0.09	100.00
av.	79.83	0.22	11.91	1.30	0.08	0.21	1.44	3.18	1.79	0.03	100.00

表7 御駒堂遺跡テフラ試料と約5万年前以降の指標テフラに含まれる火山ガラスの主成分組成比較

地点・試料	SiO <sub>2</sub>	TiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	備考
A5 グリッド内壁・試料2	78.10	0.32	12.83	1.70	0.10	0.38	1.96	3.29	1.25	0.07	12粒子
A5 グリッド内壁・試料4	78.42	0.27	12.34	1.61	0.08	0.33	1.80	3.47	1.63	0.06	12粒子
A5 グリッド内壁・試料7	79.41	0.17	11.85	1.26	0.07	0.20	1.33	3.62	2.08	0.01	11粒子
A5 グリッド内壁・試料21	79.83	0.22	11.91	1.30	0.08	0.21	1.44	3.18	1.79	0.03	10粒子
地熱テフラ											
To-a	77.87	0.37	12.81	1.75	0.10	0.42	2.00	3.29	1.34		1)
Nm-N	78.10	0.24	12.10	1.14	0.09	0.19	1.34	3.35	3.45		2)
To-Cu	75.08	0.44	13.28	2.46	0.08	0.63	2.63	4.04	1.29		1)
K-Ah	75.24	0.53	12.85	2.42	0.08	0.47	2.02	3.32	3.00		1)
H <sub>2</sub> O	77.79	0.16	12.76	1.05	0.05	0.44	1.09	3.61	3.10		2)
To-H (pH) 上部	78.30	0.29	12.67	1.52	0.06	0.29	1.73	3.84	1.30		2)
To-H (pH) 下部	76.38	0.40	13.45	1.90	0.11	0.44	2.22	3.88	1.24		2)
As-YP	78.15	0.27	11.99	1.33	0.04	0.26	1.30	3.72	2.89		1)
Nr-KU	77.98	0.22	12.28	1.22	0.05	0.19	1.59	4.23	1.47		2)
AT	78.25	0.13	12.14	1.26	0.04	0.11	1.09	3.41	3.56	0.02	1)
To-OF (pH)	77.82	0.36	12.45	1.88	0.08	0.33	1.87	3.97	1.25		2)
Nr-Y	79.93	0.17	12.07	1.34	0.11	0.21	1.40	2.87	1.88	0.02	1)

無水に換算。1) 八木 (未公表)、2) 吉木・新井 (2000)。

以上のことから、遺物包含層であるVI層は、ATより上位でAs-YPやTo-Hが含まれる土層、厳密には、To-H 降灰後に最終的に形成された土層の可能性が高い。

また、SI11 住居跡堆積土中に認められたテフラ層は、層相や火山ガラスの形態色調組成や屈折率特性、さらに重鉱物の組み合わせから、915 年に十和田火山から噴出した十和田 a 火山灰 (To-a, 大池 1972, 町田ほか 1981) に同定される。このことは、SI11 住居跡が考古学的に奈良時代と推定されていることと矛盾しない。

本遺跡周辺には、ほかにも、AT のすぐ上位にある鳴子潟沼上原テフラ (Nr-KU, 早田 1989)、約 1.1 ~ 1.2 万年前に肘折火山から噴出した肘折尾花沢テフラ (Hj-O, 米地・菊池 1966, 早田 1989, 町田・新井 1992, 2003 など)、約 6,000 年前に十和田火山から噴出した十和田中擴テフラ (To-Cu, 大池 ほか 1966, 早川 1983, 町田・新井 1992・2003 など) など多くのテフラが降灰している。今後も詳細なテフラの調査分析を実施して、層位学的、編年学的資料を蓄積する必要がある。

## 7.まとめ

栗原市御駒堂遺跡において、地質調査、火山ガラス比分析、火山ガラスの屈折率測定、火山ガラスのEPMA 分析を実施した。その結果、鳴子潟沼テフラ (Nr-Y, 約 4.1 ~ 6.3 万年前) や十和田 a テフラ (To-a, 915 年) の一次堆積層のほか、始良 Tn 火山灰 (AT, 約 2.8 ~ 3.0 万年前)、浅間板鼻 黄色軽石 (As-YP, 約 1.5 ~ 1.65 万年前)、十和田八戸テフラ (To-H, 約 1.5 万年前) に由来する可能性の高い火山ガラスを検出できた。その結果、遺物包含層は、To-H より上位の旧石器時代から縄文時代にかけて形成された土層と推定された。また、SI11 住居跡は To-a より下位にあることが判明した。

## 文献

- 新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀編年、群馬大学紀要自然科学編、10, p.1-79.
- 新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層、考古学ジャーナル、no.53, p.41-52.
- 早川由紀夫（1983a）火山豆石として降下堆積した十和田火山八戸火山灰、火山、28, p.25-40.
- 早川由紀夫（1983b）十和田中振テフラ層の分布、粒度、組成、年代、火山、28, p.263-273.
- Hayakawa, Y. (1985) Pyroclastic geology of Towada volcano. Bull. Earthq. Res. Inst. Univ. Tokyo, 60, p.507-592.
- 池田晃子・奥野 充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫（1995）南九州、姶良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火碎流中の炭化樹木の加速器質量分析法による<sup>14</sup>C年代、第四紀研究、34, p.377-379.
- 小岩直人・柴 正俊・葛西優貴（2007）十和田大不動テフラのAMS<sup>14</sup>C年代、第四紀研究、46, p.437-441.
- 古環境研究所（2004）早坂平遺跡出土の放射性炭素年代測定、岩手県久慈地方振興局土木部・（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター編「早坂平遺跡発掘調査報告書 第1分冊」p.581-583.
- 町田 洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰—姶良Tn火山灰の発見とその意義—、科学、46, p.339-347.
- 町田 洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス、東京大学出版会、276p.
- 町田 洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス、東京大学出版会、336p.
- 町田 洋・新井房夫（2011）新編火山灰アトラス（第2刷）、東京大学出版会、336p.
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広（1981）日本海を渡ってきたテフラ、科学、51, p.562-569.
- 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗（1987）姶良Tn火山灰(AT) の<sup>14</sup>C年代、第四紀研究、26, p.79-83.
- 村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 朝彦（1993）四国沖ビストンコア試料を用いたAT火山灰噴出年代の再検討—タンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の<sup>14</sup>C年代、地質雑誌、99, p.787-798.
- 中川久夫・中馬教充・石田琢二・松山 力・七崎 修（1972）十和田火山発達史概要、岩井淳一教授記念論文集、p.7-17.
- 大池昭二（1972）十和田火山東麓における完新世テフラの編年、第四紀研究、11, p.232-233.
- 大池昭二・中川久夫（1979）地形並びに表層地質調査、「三戸地域広域農業開発基本調査報告書」、東北農政局、103p.
- 大池昭・中川久夫・七崎 修・松山 力・米倉伸之（1966）馬淵川中・下流沿岸の段丘と火山灰、第四紀研究、5, p.29-35.
- 早田 勉（1989）テフロクロノロジーによる前期旧石器時代遺物包含層の検討、第四紀研究、28, p.269-282.
- 早田 勉（2010）更新世堆積物とテフラ、稻田孝司・佐藤宏之編「講座日本の考古学1 旧石器時代上」、青木書店、p.77-102.
- 豊島正幸・石田琢二（1983）座敷乱木遺跡周辺の地形地質および火山灰、石器文化談話会編「宮城

県岩出山町座敷乱木遺跡発掘調査報告書Ⅲ」, p.72-79.

八木浩司・早田 勉(1989)宮城県中部および北部に分布する後期更新世広域テフラとその層位.

地学雑, 98, p.871-885.

米地文夫・菊池強一(1966)尾花沢軽石について, 東北地理, 18, p.23-27.

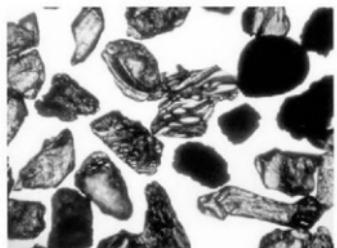


写真 1 5A 区深掘トレンチ・試料 2  
中央：繊維束状軽石型ガラス。

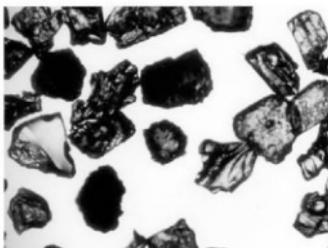


写真 2 5A 区深掘トレンチ・試料 4  
中央・中央右：中間型ガラス。

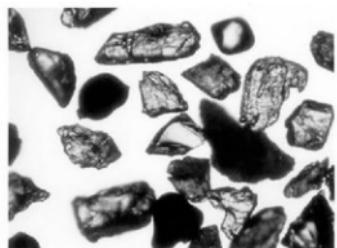


写真 3 5A 区深掘トレンチ・試料 7  
中央：無色透明バブル型ガラス  
中央右上：ベータ石英。

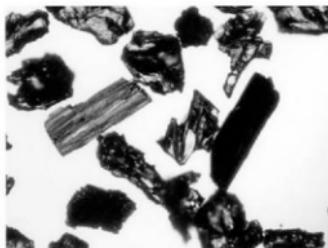


写真 4 5A 区深掘トレンチ・試料 21  
中央・中央左：繊維束状軽石型  
ガラス

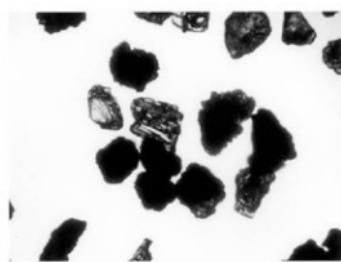


写真 5 5A 区 SHI・試料 2 (To-a)  
中央左：繊維束状軽石型ガラス。  
中央右：スポンジ状軽石型ガラス。

# 報 告 書 抄 錄

ふりがな	おこまどういせき・どうのさわいせき							
書名	御胸堂遺跡・堂の沢遺跡							
副書名	一般国道4号線築館バイパス関連遺跡調査報告書							
巻次								
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第244集							
編著者名	村田晃一、小野章太郎							
編集機関	宮城県教育委員会							
所在地	〒980-8423 宮城県仙台市青葉区本町3丁目8-1 Tel 022-211-3684							
発行年月日	西暦 2016年12月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	世界測地系 遺跡番号	北緯	東経	調査期間 調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因	
御胸堂遺跡	宮城県栗原市志波姫堂の堀口御胸堂	042137	49014	38度 44分 36秒	141度 2分 19秒	20090525～ 20090603	300	試掘・確認調査
						20101020～ 20101026	900	試掘・確認調査
						20120904～ 20120918	470	記録保存調査、 試掘・確認調査
						20131111～ 20131128、 20140121～ 20140130	2,350	記録保存調査、 試掘・確認調査
						20140707～ 20141003	3,530	記録保存調査、 試掘・確認調査
						20150420～ 20150602	460	記録保存調査
堂の堀口御胸堂遺跡	宮城県栗原市志波姫堂の堀	042137	49024	38度 44分 49秒	141度 2分 10秒	20131105～ 20131114	620	試掘・確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
御胸堂遺跡	集落	旧石器時代～縄文時代、縄文時代、奈良時代、江戸時代以降	旧石器時代から縄文時代の石器集中地点1、遺物包含層1、縄文時代の陥し穴22、遺物包含層1、奈良時代の堅穴住居跡9、古代の掘立柱建物跡1、江戸時代以降の掘立柱建物跡7、井戸跡7、墓跡17、土塁1、空堀1	旧石器、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、鉄製品	8世紀前葉に形成された坂東からの移民集落を調査し、同時代の住居が東西1,500 m、南北400 mの遺跡全体に分布することを確認。また、8世紀中葉から後半の火災住居1軒から集落への普及段階の墨書き土器やロクロ土師器が出土した。			
堂の堀口御胸堂遺跡	集落	古代	近世以降の水田跡や溝跡	なし	遺跡範囲の西側を調査した結果、近世以降の水田跡や溝跡などを検出したが、中世以前の遺構・遺物は確認できなかった。このため、遺跡の範囲は東へ縮小すると考えられた。			
要約	国道4号線築館バイパス工事に先立ち、平成21～27年度に実施した御胸堂遺跡と堀口御胸堂遺跡調査報告書である。後者は、中世以前の遺構・遺物が出土しなかったことから、本発掘調査の必要なしと判断した。前者では8世紀前葉の移民集落跡を発見し、坂東西北部と南部から移民が行われたこと、集落は東西1,500 m、南北400 mの遺跡全体で営まれたことを確認した。住居の総数は300軒を超えるとみられる。また、8世紀中葉から後半の火災住居跡から、同時期の一般集落で数が少ない墨書き土器やロクロ土師器が出土した。こうした遺物は、伊治城との関係性の深さを示しており、住居は宝亀11年(780)の伊治公哲麻呂の乱で襲撃され、焼失した可能性が考えられた。							



SI 51 住居跡出土土器

---

宮城県文化財調査報告書第244集

## 御駒堂遺跡・堂の沢遺跡

—一般国道4号線楽館バイパス関連遺跡調査報告書Ⅲ—

平成28年12月15日印刷

平成28年12月22日発行

発行 宮城県教育委員会

〒980-8423 宮城県仙台市青葉区本町三丁目8番1号

印刷 株式会社 東北プリント

〒980-0822 仙台市青葉区立町24-24

---



